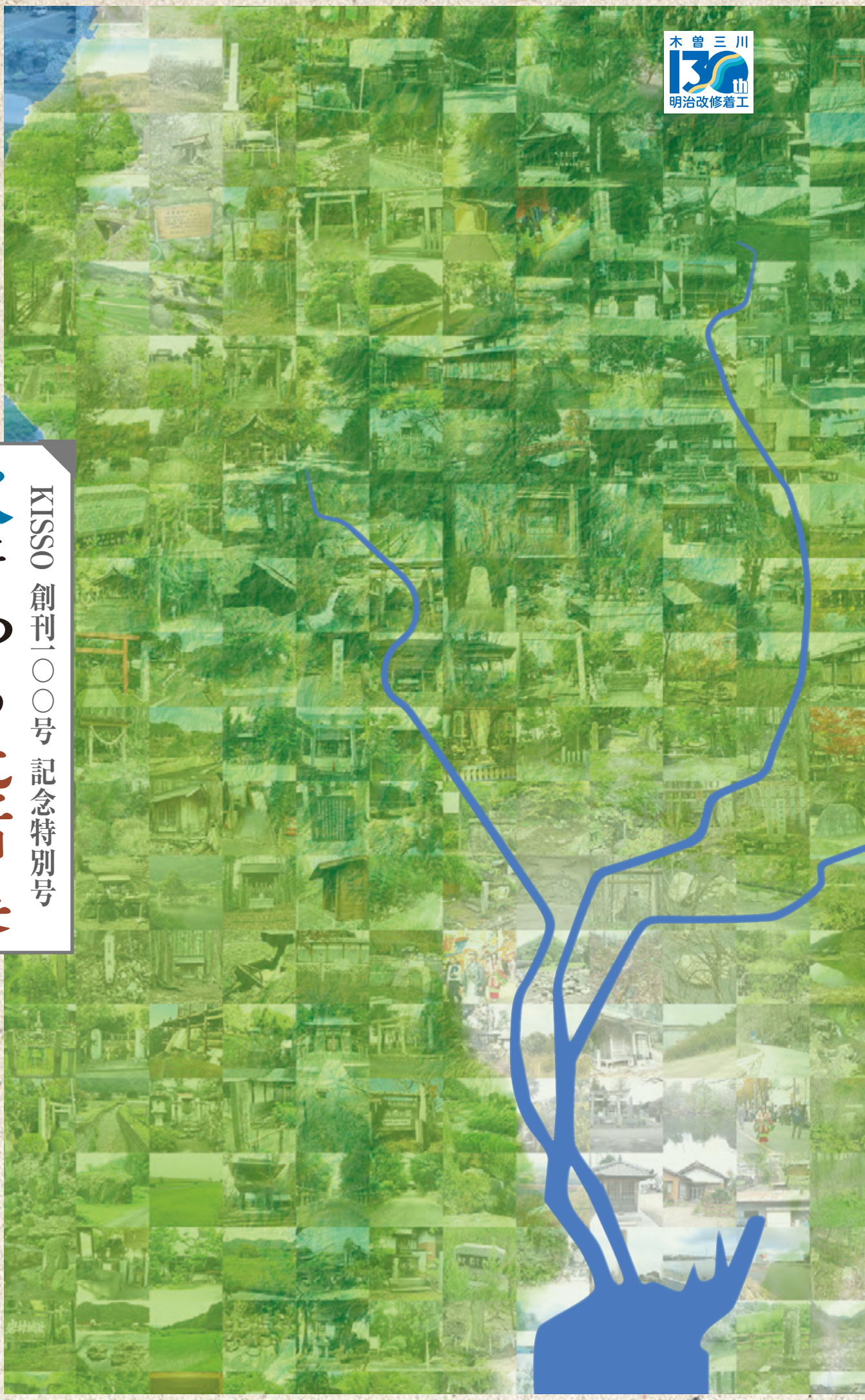


木曽三川 130th 明治改修着工

KISSO 創刊一〇〇号 記念特別号

水にまつわる民話集

KISSO創刊100号記念特別号
「水にまつわる民話集」

はじめに

”KISSO”（きっそ）は平成3年12月、木曽三川の歴史・文化の研究成果を，流域の皆様にご紹介する季刊誌として発行を開始し、本号で節目となる100号を迎えました。

KISSOのネーミングは、「SAVE　THE　KISO」の意味を込められて名付けられたものです。ではそもそもなぜ「木曽（キソ）川」と呼ばれるのか。6月に赴任した私に疑問が沸いてきましたので早速調べてみました。

木曽谷を流れている川ということで、上流域の「木曽」と呼ばれる地名に由来するようですが、「木曽」という地名の語源については諸説あり、①木曽川上流域の山岳地の厳しい地形を表現した言葉に由来する、「キソ」は渓谷を意味する地形語、あるいは「キヅ(傷)」あるいは「キサ（刻）」という語からの転化で、深く刻まれた渓谷を示す説。②ヒノキをはじめとする美林地帯であり「ヒソ（檜生）」からの転化という説。③古代の豪族「キソ（吉蘇、木襲）」族がいた国または地方の地名する説。などいろいろあるようです。なんとなくスッキリしないのですが、読者の皆様で他に情報をお持ちの方がいらっしゃったら是非ご教示いただければと思います。

本号は創刊100号を記念し、これまでに掲載させていただいた木曽川流域の民話98題を「水にまつわる民話集」と題して、纏めて再掲させていただきました。これに加え98題を抽出する段階で収集した1000題を超える民話について、その内容を「雨乞い」「河童伝説」「蛇抜け」など11のテーマ別に分類し、木曽川流域の中における民話の地域性や特徴について把握していただけるようにとりまとめました。

平成26年7月9日長野県南木曽町で土石流災害が発生し、甚大な被害が発生しました。南木曽町では幾度も土石流災害に襲われたことから、土石流災害を「蛇抜け」と呼んで恐れており、そのことはKISSO第35号の民話「白蛇のお告げ」でも紹介させていただきました。文字を解せない庶民が子孫に必死に伝承しようとして民話になったと考えると、改めてその意味が感慨深く感じます。

ご愛読いただいた読者の皆様や成果等を提供いただいた研究者の皆様のおかげで四半世紀を迎えましたことに深く感謝するとともに、次の四半世紀に向け新たな”KISSO”に関しても引き続きご愛読いただきますようお願い申し上げます。

国土交通省中部地方整備局
木曽川下流河川事務所長　飯野　光則

川の美しさや怖さ、水の大切さなどを共有する手段としての昔話が流域の至る所で語り継がれ、先人の川への畏怖の念や水への感謝の気持ちを伝えています。

そこで、先人の川や水への想いを振り返るために、KISSO　創刊１００号の記念として、創刊以来、裏表紙に掲載してきた木曽三川流域市町村における「水にまつわる民話」を再編集し、特別号(別冊)として発行するものです。

第１景は、KISSOに掲載されてきた民話の登場場所などを写真で示しつつ、新たに書き起こしたイラストを用いて再編集しました。なお. 第１景で掲載した民話は、民話を掲載しなかった第51号と84号を除く98編です。

第２景では、先の第１景に加え、さらに木曽三川流域内と三川流域以外の岐阜県内を対象に民話を収集し、それぞれの民話を「雨乞い」・「弘法水」・「河童」等のジャンル毎に整理しています。整理に当たっては、個々の民話を単に羅列するのではなく、各ジャンルの民話を類似の内容で「民話群」に分類・整理し、さらに、各「民話群」の分布領域を図示しています。

掲載内容説明

もくじ

KISSO 創刊100号記念特別 水にまつわる民話集特別号

■はじめに

第１景　木曽三川流域の民話 ― KISSO 第１号から第 100 号まで ―
民話の小箱（Vol.1～Vol.70）…… 2
水にまつわる民話（Vol.71～Vol.100）…… 36

第２景　川と水に関わる伝説 ― 木曽三川流域を中心に ―
第１章　雨乞い伝説 …… 55
第２章　竜伝説 …… 63
第３章　木地師と椀貸し伝説 …… 71
第４章　弘法水と清水伝説 …… 75
第５章　雷伝説 …… 84
第６章　河童伝説 …… 87
第７章　流れ仏伝説 …… 94
第８章　治山治水利水伝説 ……101
第９章　人柱伝説 ……106
第10章　魚と獣の伝説 ……109
第11章　歴史上の人物伝説 ……114

■あとがき

第1景

1 燈明さん祭り

海津市

今から百四十年も前のこと。その当時は、今のようにしっかりとした堤防がなかったため、海津町で何度も洪水がありました。

万寿新田では、堤防が切れないことを祈って、伊勢神宮からお札をもらい・大きな石で燈明台をつくり、樋門の上にお祀りをしました。村の人たちは、樋門を開いて水を入れる度、お祈りをしました。

ある大雨の夜、樋門の横の堤防に切れ目ができ、水が漏れ始めました。

その時です。燈明さんが切れ目にすっぽり落ちました。すると水漏れは見事になくなり、堤防は無事でした。次の朝、堤防の様子を見にいった村人たちは、堤防の切れ目に燈明さんが落ちているのを見つけました。「ありがたいことだ。燈明さんが村を守ってくれたのだ」と村人たちは大喜びでした。そのことがあってから、この村では、村中の人が集まってお祭りをするようになったとか。たくさんの赤や白のちょうちんをつり、藁で作った大きな鯛や松茸、お菓子などを供えていました。しかし現在では空の澄みきった満月のころに赤や白のちょうちんをつり、藁で作った五〇センチぐらいの鯉を二本笹の先につけて供え、お祭りをするようになりました。大きい石で造られた燈明さんは、排水機場や堤防の工事で何回も動かされ、今では『大神宮』と書かれた石碑が残っているだけです。

海津郡のあちらこちらの堤防の上にある燈明さんは、昔、堤防が切れたところに建てられていることが多いそうです。そして、どの村でも同じようなお祭りが行われています。

【参考図書】『海津のむかし話』海津郡教育振興『海津のむかし話』編集委員　一九八七年

万寿新田の燈明さん

2 七里の渡しに咲いた千姫ロマン

桑名市

燃えさかる炎、炎上する天守閣…。栄華を極めた大阪城は、今まさに落城するばかり。赤い炎は夜空を焦がし、暗雲たる時代を染め上げていました。そんな時、一人の美しい姫君が助けだされました。

名は千姫。二代将軍徳川秀忠の長女、そして家康の孫に生まれながら、時代の波にもて遊ばれるかのように、慶長八(一六〇三)年、七歳で大阪城の豊臣秀頼へ嫁いだのでした。

元和元(一六一五)年・大阪夏の陣、幸か不幸か危うく生命をとりとめた美しい千姫は、江戸城へ。失意を抱えて旅に出たのです。

気の遠くなるような道中。見るもの聞くものすべてが色褪せて、疲れきった千姫は、桑名に立ち寄り、手厚いもてなしを受けました。桑名藩主本多忠政は、徳川四天王の一人忠勝の子で、妻の熊姫(ゆうひめ)は千姫のいとこ。彼等の温かい歓待ぶりに、千姫は久し振りに笑顔を取り戻したのでした。そして数日後、再び江戸城を目指して旅路についた千姫は、七里の渡に向かいます。この時、御座船の指揮をとったのは、忠政の嫡男忠刻(ただとき)。武勇に優れ、円明流の奥義を授けられた忠刻は、美しい剣士。頬を撫でる風、光りが揺れる川面。熱田の宮に向かう御座船で、二人は恋に落ち、熱い心を通わせたのでした。

久方振りに江戸に戻った千姫は、「忠刻と結婚したい」と祖父家康に懇願したそうです。やがて忠刻に結婚の下命がくだり、千姫は思い出深い七里の渡しを通り、桑名へ嫁いできたのです。

元和三(一六一七)年、本多家は加増され、姫路へ本拠を移すまで約一〇カ月。千姫と忠刻は桑名で幸せな日々を過ごしたとか。この間千姫は東照宮を桑名神社に勧請し、家康の木像を奉納しているそうです。しかし、その幸せもつかの間のこと。忠刻は若くして亡くなり、尼となった千姫は天樹院と称して、その冥福を折り続けたと伝えられています。

【参考図書】『桑名の伝説・昔話』近藤杢、平岡潤　桑名市教育委員会　一九七六年

千姫折鶴行列

徳川2代将軍秀忠の長女で本多忠勝の孫・忠刻の室「千姫」と「桑名の千羽鶴」の「千」とに因み「千姫折鶴行列」が10月に行われている。

3 川立ち地蔵の不思議な夢

桑名市

昔の昔、まだ江戸に幕府が開かれる前のお話です。

木曽川や長良川、揖斐川の下流には、小さな輪中がいくつもありました。村の人たちは堤防を作り、木を植え、自分たちの家や田畑を守ってきました。そんな輪中の一つに西川輪中がありました。

いつの頃かはわかりませんが、この西川輪中に一体のお地蔵様が安置されていました。この土地は、低いところでたびたび洪水が起こり、浸水しました。そのためこのお地蔵様も、その度ごとに水浸しになることが多く、村の人たちは「尻冷やし地蔵」とか「川立ち地蔵」とか呼んでいました。

ある時、百姓喜助という人は、お地蔵様が長い間、沼田の中に立っているのを気の毒に思いました。そこで少しでも水につからないところを探し、近くの堤の上に安置しました。するとその夜、喜助はうわ言をいい、この世のものとも思えない行動をとりました。喜助の奇妙な行動は、その日から幾日も続きました。家族は、どうして喜助がこのようになったのかわからず、途方に暮れ、嘆き悲しみました。何日も過ぎた夜、喜助の夢に突然、お地蔵様が現われました。お地蔵様は、「我は水に溺れて死する衆生を助けんために、水に浮かんで立っているのである。急いで元のところに帰らせよ」喜助は突然夢からさめたようになり、夢の中での出来事を、家族に話しました。家族はたいへん驚き、お地蔵様をすぐに元の沼田に返しました。その日から喜助は、元気な喜助に戻り、二度と気がふれることはなくなりました。

寛文年間（一六六〇年頃）には、お地蔵様は沼田から一丁あまり北にある八十河原に移され、松の木の根元にお堂が建てられて、安置されるようになりました。

【参考図書】『長島町誌上巻』長島町教育委員会　一九七八年

川立ち地蔵

『長島町誌上巻』は、「西川村八幡宮（「西川の八幡様（94号）」参照）に祀ってあった地蔵尊が、慶長年間（1610年頃）に藩主菅沼氏の庇護により、八幡杜から一町ばかり北の、八十河原に移転した」と記している。

4 福崎の大池に住む大蛇

木曽岬町

昔の昔、木曽岬町の福崎には大池がありました。今でこそ、黄金色の稲穂が波打つ肥沃な田園地帯も、その昔は、深く不気味な池だったとか。

そもそもこの池は、堤防が決壊してできたもので、村の古老でさえ、その深さを知らないという約三〇〇〇㎡がほどの大きな池。三ｍ余りの大蛇が住んでいると伝えられていました。

ある日のことです。村の農民で竹内甚九郎という人が、池のほとりの田んぼで草取りをしていました。あまりの暑さに木陰に横たわっていた枯れ木に腰をかけ、一服たばこをくわえて休んでいたところ、突然、雷鳴がとどろき、突風が吹き荒れました。

恐れおののいた甚九郎は、枯れ木にしがみつき神仏に助けを求めたそうです。ところが、その枯れ木も大きな地ひびきとともに動きだし、すさまじい音を立て、水けむりをあげて大池に沈んでいきました。これは長年この池に住む大蛇の仕業だったとか。

甚九郎は恐怖のあまり気を失い、その場に倒れてしまいましたが、夕方、家人に助けられ、十日ほど高熱でうなされたそうです。

それからこの池は「魔の池」として村人に恐れられ、ここに集まる魚には、誰も綱を入れることがなかったそうです。

時代は移り明治末期には、巡査が博徒を追ってこの池に飛び込み、翌日には死体となって発見されたこともありました。

「魔の池」の伝説は、誰もが知ることとなり、昭和三一年、木曽川の土砂を吹き込んで干拓されるまで、人々はこの池に決して近寄ることがなかったそうです。

【参考図書】『木曽岬町史（木曽岬村史改訂版）』木曽岬役場　一九九八年

「福崎の大池」跡に造られた木曽岬神社

「福崎の大池」のその後　大池は昔からある「雁ヶ地（がんがじ）四ヶ字社」の東側に広がっていたが、昭和31年に木曽川の土砂で埋められ、小さくなった池が残っていた。その後、昭和34年の伊勢湾台風で多数の犠牲者が出たため、残っていた池を埋め、木曽岬神社が建てられた。

5 葦原で命を救われた願証寺の幼子　桑名市

昔、昔、今から四百年ほど前のお話です。

夕暮れ時に、香取川の河原近くを二隻の田船に乗った村人がおりました。黄金色の稲穂を垂れる田園で農作業を終えた村人は、多度山に沈む夕日の美しさに見とれておりました。

そんな時、遠くからかすかな泣き声が聞こえてきました。不思議に思った村人があたりを見渡すと、中州の葦原に高貴な身なりをした中年の女性と、少年の亡き骸が流されているではありませんか。驚いた村人がそばに近づくと、女性の手にはしっかりと紐がにぎりしめられ、その紐は長く伸びて、葦原の浅瀬に漂う白い包みにつながっていました。かすかな泣き声は、この白い包みから聞こえてきたのでした。

上等のふとんと葦の束にくるまった幼子。「とにかく助けなくては」と村人は包みを解いて抱き上げると、幼子の着ていた絹の衣には、長島の願証寺の御堂の紋がしるされていました。

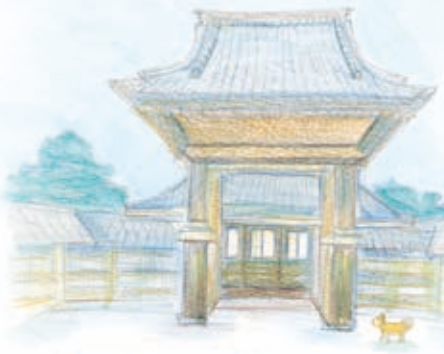
その日は、長島城落城の日。時の権力者織田信長と苦しい戦いを続けた一向宗が無念の敗北をとげたその日なのでした。門徒を率いた願証寺の寺主・顕忍は討死。村人の手によって救われた幼子は、顕忍の弟君である准恵であったのです。

「これはえらい事じゃ。早くお隠しせねば」と、二人の亡き骸をねんごろに葬ってから、御子を抱きかかえてそこを立ち去り、孫右衛門（多度町正覚寺・初代賢智）の寺にかくまって、手厚く介抱したのでした。

数日後、孫右衛門は大阪石山本願寺へ准恵をお連れしたところ、顕如上人はことのほかお喜びになり、御褒美として阿弥陀如来の絵像をつかわされました。

その阿弥陀如来の絵像は今でも正覚寺の家宝として保存されているそうです。

【参考図書】『長島風土記』金森勝　二〇〇〇年



正覚寺

6 桜のような短い命おくわさまの哀しい伝説　岐阜市

昔、昔、まれに見ぬ大雨の年のことでした。激しい雨は、長良川を恐ろしいほどに荒れ狂わせ、ついに堤防が破れてしまいました。長良の村々は、あっという間に、多くの家や田畑、そして尊い人の命までもが濁流に呑み込まれていったのです。多くのものを失った村人達は、なす術もなくただ途方に暮れるばかり。

そんなとき、この村を一人の不思議な旅人が通り掛かりました。村人の悲しみを見兼ねた旅人は、『今度、堤防を築くときは、村で一番美しい娘を人柱にお立てなさい。そうすれば、堤防が切れることはなくなるでしょう』と言い残して立ち去ったのです。

はじめは『そんなかわいそうなことはできない』といっていた村人たちでしたが、ほかに良い策もなく、ついに人柱を立てることが決められたのです。

ちょうど村には、村一番の器量良しと評判の娘がおりました。若く、美しいその娘の名は、〝おくわ〟。村人達は断腸の思いで、おくわに人柱になってくれることを願い上げました。

突然の話に、両親は嘆き悲しみ、おくわも泣き暮らす毎日が続きました。

悩みあぐねたおくわは、ついに決心したのです。

『私が人柱になることで、多くの人の命とこの村が助かるのなら、喜んで人柱になりましょう』おくわは、静かに、きっぱりとこう言いました。

こうして、深い哀しみの中、新しい堤防が築かれたのです。

花びらを淡いピンクに染め、その短い命を惜しむことなく数週間で潔く散らす桜。その花言葉は〝純潔〟です。『さくらづつみ』の桜は、これからも毎年きれいな花を咲かせることでしょう。まるで、おくわの清く、美しい心の気高さを象徴するかのように。

【参考図書】『岐阜のつたえ話』岐阜のつたえ話編集委員会
公益財団法人岐阜市教育文化振興事業団　一九九六年

おくわを供養する桜堤の祠

7 神祇様の霊水

木祖村

時は元禄一四年、この京都では疫病が大流行しました。

ちょうどこの頃、一風変わった一人の男がおりました。この人は神祇様と呼ばれ町民を集めては「今、京の町に疫病が流行するのは山々の木を乱伐したためである。乱伐は洪水を招き、飲み水も汚染した。これは天の恩、地の恩を忘れ、神々に背いた罰。今こそ自然を大切にせねばならぬ」と説法を繰り返し、病人には薬草を煎じて与え、たいそう敬われておりました。

ある日のこと、住吉神社の石段に腰を下ろして休んでいるうち、神祇様は、いつの間にかとうとう眠り込んでしまいました。すると、夢の中に住吉神が現れて『お前の行いは、大変感心だ。しかし、困っているのは京の人だけではないぞ。遠く信州木曽の人々は、山中に住みながら地形が悪いため飲み水にも事欠き、川の水を飲み、病人が続出している。この境内にある柳の枝を折って杖とするが良い。木曽川に沿って上れば、必ずその村に行き着くことができるだろう。そして、そこに杖を差し込んでみるのじゃ。念ずればたちまち法水が湧き出し、村人たちを助けることができるだろう』と告げました。

夢から覚めた神祇様は、早速お告げに従って旅に出ました。そしてたどり着いたのが、鳥居峠の麓・薮原。神祇様は早速クズ沢の下流、木曽川に合流する地点の南側の崖っぷちに、柳の枝を差し、穴を開けてお経を唱えました。しばらくすると不思議なことに温泉のように暖かく、飲めば素晴らしい味わいの水が湧き出したのです。村人たちは躍り上がって喜びました。

その後、神祇様はその清水の脇に庵を作り、薬草をその清水で煎じた薬を与え、村の病人を救って暮らしたそうです。

薮原にクズ沢の下流、木曽川との合流点の南側には、現在でも、美しい清水がこんこんと湧き出ています。

神祇様を祀っている祠

【参考図書】『木祖村誌民俗編』木祖村誌編纂委員会　一九九八年

8 山の神

海津市

むかし、むかしのお話です。そのころは、今のようにしっかりとした堤防ではなかったため、洪水の度に、海津町のいたるところで、何度も被害を受けました。

ある日のこと、いつものように大水がでました。その時、秋江・大和田のお宮さんから、石でできた立派なご神体が札野一色に流れつきました。

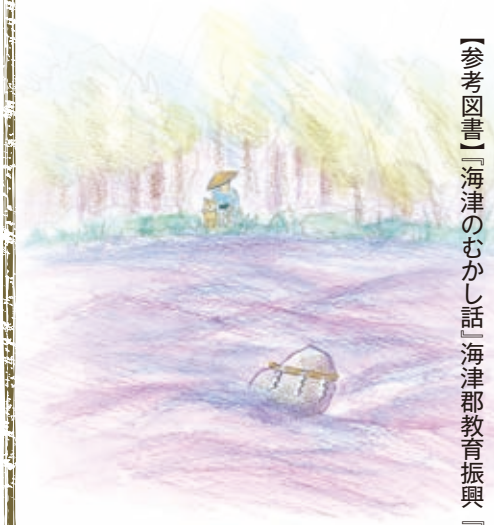
村人たちは、「これはもったいないことじゃ。このままにしておいてはばちがあたるぞ」と、もとのお宮さんに、おそるおそるお返ししました。それから数年たって、また大水がありました。

水が引いてからよく見ると、なんと不思議なことに、以前お返ししたご神体が前と同じところに流されているではありませんか。村人びっくりして、手を合わせながら、「これは、本当に不思議なことじゃ。二回もここへ来なさるということは、ここにまつられたいと願っておられるのじゃろ。皆の衆、どうじゃろう」と言って、その場所にまつる相談をしました。

ところが、新しく神社にまつるには、お殿様の許可がいりました。そこで、村の中でも力があった佐藤仙右衛門さんを総代にして、お殿様にお願いをしました。信心深いお殿様は、「よかろう」と、木のお札をくださいました（今でも佐藤さんの家にあります）。村人たちは、このお社を『山の神』と呼び、「どうか村が安全でありますように、家内が安全でありますように、作物がよく取れますように」という願いを込めて、おまつりするようになりました。

今でも、年の暮れになると、かがり火をたき、お神酒やお供えをして、「今年も豊作でありがとうございました。今年一年、村が無事に過ごさせていただいたのも、山の神様のお陰です。新しい年も、どうか良い年でありますように」と、感謝の気持ちでおまいりしています。

『山の神』は、今でも、村人たちの暮らしの中に生き続けています。



山の神

主に山での各種仕事に関わる人々に信仰される山の神が、春の稲作開始時期になると里へ下って田の神になる、と伝承されてきた（田の神・山の神の春秋去来）。海津市海津町札野一色の民家駐車場側に『山の神』は祀られ、毎年、1月1日に村人が山の神に寄り集まる。「女は御神体には触っていけない」と伝わっている。

【参考図書】『海津のむかし話』海津郡教育振興『海津のむかし話』編集委員会　一九八七年

9 たろべの滝

揖斐川町

むかし、むかしのお話です。

藤橋村から板内村へ行く人々は、もっぱら西横山の「くろがね峠」を越えていきました。切り立った崖に沿いながら、曲がりくねったその道は、時折り、猪や狐が出没する獣道。昼なお薄暗く、悪魔がでてくるような、あやしげな妖気が漂っていました。そんな獣道にも、清々しい滝が美しい飛沫をあげて流れ落ちています。たろべの滝です。

この滝は、村人や旅人たちにとつて大切なくつろぎの場所。炭や薪を背負い、歩き疲れた村人たちは、急な崖をおりて、美しい滝の水を口に含むと、体の芯から元気がみなぎってくるから不思議なものです。

日照り続きのある夏の日のことです。ひとりの炭焼きが、いつものように滝のほとりで休んでいると、一匹の河童が、滝壺の中から突然現れました。

「この村の稗も粟も日照りですっかりやられ、幾日もなんにも食べていません。どうかその瓜を一切れ、分けてください」と、今にも泣かんばかりに頼むのです。

食べることにも事欠いていたのは、村人だけではなく、たろべの滝に住む河童も同じこと。

痩せきった河童を可哀想に思った炭焼きは、「わかったこの瓜を一切れ恵んでやろう。しかしこの瓜は私にとつても、残りの一切れ。これを恵んでやる代わり、おまえもこの美しい滝の水を永遠に絶やさないことを、私に約束してくれないか」と河童に言いました。

「約束します、約束します。この滝の水を永久に絶やさないことを約束します」、瓜をもらった河童は、うれしそうに滝壺奥深くに消えていきました。

その夏の日から、たろべの美しい滝は決して絶えることがありません。まろやかで清々しいその水は、町の茶人にも愛されて、水を汲みにくる風流人もあとを絶ちません。

【参考図書】現地の案内板

たろべの滝(『藤橋村史上巻』より)
揖斐川町西横山の奥の北ノ谷川にある落差10mの滝であるが、数年前から道路補修がされず、現在は行くことが困難。

10 入鹿切れ ～天に昇った二頭の馬～

犬山市

春には美しい桜並木を映し出し、夏には水面がキラキラと輝く入鹿池。その入鹿池が造られたのは寛永一〇(一六三三)年のこと。

人々は、堤防が切れないことを祈って、彫刻の名人・左甚五郎に池の主を作ってもらうことを決めました。

甚五郎が掘りあげたのは、見事な二頭の馬。それは人々が見守る中、ゆっくりと池に沈んでいきました。しかし、江戸時代から明治時代に変わろうとした年のこと。四月下旬から続く長雨が降り止まず、池の水は増える一方だったのです。

「おい。大丈夫だろうか」、「こう、雨が降り続いては、堤防の土もゆるんでしまうなあ～」。人々は口々に、入鹿池を心配しあいました。

そしてあるとき、池の様子を見ると、なんと、馬が水を飲んでいるではありませんか。

しかも、馬のひとのみするごとにグングンと、水面は2m近くも減っていきます。

「ああ、あれはきっと、あの時入れた池の主のおかげじゃな」、「本当に、ありがたい、ありがたい」。

しかし、その後も雨は容赦なく降り続き、ついにある日のこと。突然、ゴロゴロッ、シューッという音が鳴り響いたかと思うと、大きなおなかをした二頭の馬が天高く昇っていくではありませんか。

入鹿他の堤が切れてしまったのは、その瞬間のことでした。この災害は、とてつもなく大きなものとなり、池の水は名古屋にまで流れていったということです。

【参考図書】『犬山こぼれ話』市橋鐸　一九六七年

入鹿池の百間堤

11 大池の人柱 ～勝賀の水書を救った若宮さま～

海津市

今から一七〇年ほど昔、文化十二(一八一五)年七月のことです。

暴れ狂う大嵐が勝賀の堤防を壊し、大水が辺り一帯の村すべてを呑み込んでしまいました。

堤防は何度堰き止めてもすぐに押し流されてしまいます。進まぬ工事、水浸しの田畑。途方に暮れる村人達の中から、「堤防が崩れるのは川の神様がお怒りになっとるからじゃ」と言う不安気な声がこぼれます。

こうしている間も川はどんどん水を増してゆきます。川の神様の怒りを沈めるために、とうとう人柱をたてることになったのです。しかし、誰一人として人柱になろうとする人はいません。

困り果てる村人達をみかねて、庄屋の伊藤佐平治は口を開きました。

「この中でつぎのあたった袴を履いている者が、人柱になることにしましょう・・・」

全員の袴を調べてみると、つぎがあてある袴を履いていたのは佐平治ただひとりだけ。

人柱になることを密かに決意していた佐平治は、村を救うため、工事の完成を祈りながら、うずまく川の中へ消えて行きました。

やがて、川はもとの穏やかさを取り戻し、村の田畑は豊かな恵みを受けたといいます。

その後、この災害によってできた「大池」のそばに、村人たちの手で佐平治を祀ったお社が造られました。

平田町勝賀の神明神社境内に建てられた『若宮さま』。

この小さなお社には今も、村人達の平穏への願いと感謝が息づいています。

【参考図書】『海津のむかし話』海津郡教育振興『海津のむかし話』編集委員会　一九八七年

『若宮さま』と伊藤佐平次翁遺徳碑

12 石引神社と大垣神社の長刀岩

大垣市

今からおよそ三六〇年前のこと。寛永年間(一六三四)の出来事です。

時の城主松平定綱は大垣城を修築しようと、沢山の石垣石を赤坂北之端にある金生山から切り出しました。しかし、車も鉄道もない時代のこと。一m以上の石を城まで運ぶのは、一苦労。

人々は知恵をしぼって、田んぼに青竹を敷きつめて竹の道を作り、大勢の人夫を狩りだし、大きな石をゴロゴロ転がして、杭瀬川まで運び、ここからは筏を組んで、船町川から外堀の水門川を経て、城内へ運びました。

お殿様は立派な石垣が出来上がっていくのをことのほか喜び、毎日毎日、工事を見守っていました。ところがある日のことです。たいそう大きな石がどうしても動きません。

人夫たちはみんな困り果てていたところ、お殿様は大変お怒りになり、「ここは若者はおらぬか…」と怒鳴り散らし、自ら長刀を払って、人夫たちを叱咤激励されました。

若者たち勢ぞろいして一生懸命力を合わせたところ、さすがに大きな石も無事運ぶことができ、立派な石垣ができあがりました。

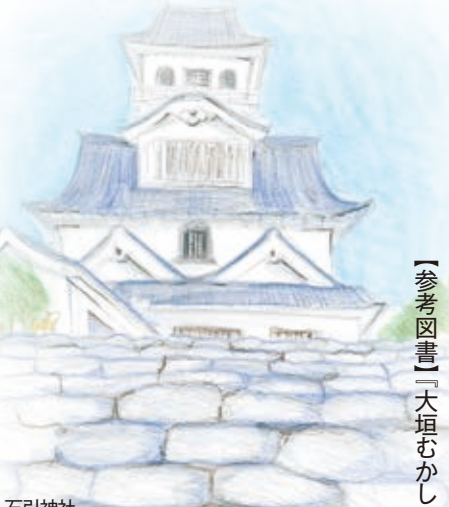
お殿様はたいそうな喜びようで上機嫌のあまり、幕府へ願い出て、当時幕府領であった赤坂宿を大垣領に組み替えてもらいましたが、桑名にお処替え(転任)になりました。

これを残念に思われた殿様は、桑名へ転任後、桑名祭りを石取り祭りとされて、大垣を偲ぶ記念にされたということです。

また、それ以来、赤坂権現宮の名を石引神社と改称し、大垣城内の大石を「長刀岩」と呼ぶようになりました。

石を運んだ船町通りでは、工事を記念して、石車を形どり、大垣祭りの山車にしたといわれています。

【参考図書】『大垣むかし話一〇〇話』大垣市企画広報課　一九八三年



石引神社

この神社は金生山に祀られている明星輪寺の鎮守として「蔵王権現宮」とか「石引大明神」等と呼ばれていたが、明治の神仏分離令によって「石引神社」と改められた。なお、文中では「桑名の石取り祭りの起源」と記しているが、桑名の祭りの起源は、江戸時代初期に神社の祭場へ町屋川(員弁川)の石を奉納したのが起源とも伝わっている。

13 深瀬用水と水争い

恵那市

むかし、むかしの話です。

恵那の深瀬という集落は山深き里。川はあるものの畑よりうんと下を流れていて、とうてい田や畑に水をひくことはできぬ。その日の飲み水にさえ事欠く暮らしであったという。

「白いご飯が食べたい、思う存分食べたいものじゃ」。思いあまった村人は談合を開き、用水を作ることにした。「佐々良木川をせきとめて、長い水路を築けば、きっと米がたくさんとれるにちがいない」。しかし、ブルドーザーもショベルカーもないむかしのこと。ツルハシ一本、人力だけの土木工事は想像を超えるほどの難工事。たいへんな苦労の末にやっと用水が完成し、黄金色の田んぼから、なんと八〇俵の米が収穫できるようになったという。

ところが大雨が降ったある年のこと。深瀬の上流、上平という集落のため池の堤が切れて、田の水はすっかりなくなり、干上がってしまったという。困った上平の村人はみんなを集めて相談をした。「深瀬用水の水はどんどん流れとる、あの土手こわいて、こっちへ水を引こまいか」。全員一致で談合がまとまると、早速、深瀬用水の土手をこわし、上平へ水を引いてしまったという。これを怒ったのは深瀬の村人たち。「こともあろうに先祖様の用水をこわすとは、上平のやつらは泥棒じゃ」、いえるかぎりの悪口ざんまい。「なにをこいとる。好きで泥棒したわけじゃないぞ。水がのうなったもんで水をもらったまでじゃわ。同じ佐々良木の水飲んどって、深瀬のやつらは不人情者ばっかりそろたもんじゃ」。

おたがいに悪口をいいあっている間はまだしも、手に手に鎌をもち、今にも血の雨が降るような騒ぎになったという。これを心配した大井村、竹折村の村長があいだにはいって、ようやくけんかがおさまったという。

こうした水争いはかんばつや大雨の度に続いた。かんばつが続いた明治三〇年、深瀬用水が干上がった際には、上平のため池の堤が壊されるという騒動も起きているという。

こうした騒動は昭和に入り、用水が整備されるまでおさまることはなかったという。

【参考図書】『恵那市史～恵那の昔ばなしとうた～』恵那市史編纂委員会　一九七四年

深瀬用水の取水口

14 蛇池と一本松

安八町

むかし、むかし。人々が、水との闘いにあけくれていたときのこと。

洪水に幾度となく堤防は切れ、安八町の北の集落、入方あたりも度々水浸しになったそうです。

そんなある日、一人の村人が川べりを歩いていたときのことです。堤防のそばの大きな松の木の下に腰を下ろし、一服していた村人がふと空を見上げると、不思議なことに、ツツジの葉っぱが出ていたそうです。

「なんと、おかしなことか。松にツツジの葉っぱが出ておるぞ」。気になった村人は、会う人、会う人に、この松のことを知らせてまわりました。

「へんじゃのう。こんな松みたことないぞ」、「何かの前ぶれじゃろうか。」不思議だ、不思議だと首をひねる村人たちをしりめに、ツツジの葉っぱはついに数えきれないほどになりました。

やがて夏が過ぎ、秋の長雨がやってきたころ。降り続く雨に川の水は増し、村人たちは再び、洪水の恐怖にさらされることになりました。

「堤が切れるぞーう、ツツジの松の堤防が切れるぞーう」うずまく水の流れは入方の堤防を押し流し、とうとうあの不思議な松を飲み込んでしまいました。

その洪水の際でできた池を眺めながら、村人たちは、「きっとあの松は、自分が洪水で流されることを知っておったんじゃの」、「最後の力を振り絞ったんじゃろうなあ。」と口々に語りあったそうです。

その後村人たちは、松が眠るその池を『蛇池』と呼び、自然の不思議を教えてくれた一本松を、丁寧におまつりしたといいます。

【参考図書】『安八町史通史編』安八町史通史編 安八町　一九七五年

鎌倉街道に面した津島神社と正明寺

この話は、『安八町史通史編』の「ことわざ・いいつたえ」（第6節）をもとに創作したようである。安八郡安八町東結の土地改良前の地図には、旧地名「蛇池」の西側に津島神社と正明寺が描かれ、これら寺社の前が鎌倉街道で、寺社東側の旧「蛇池」は現在田んぼとなってい

15 明神のおいかり

一宮市

むかし、むかしのこと。

木曽川町の田んぼは、黒田川に支えられておった。しかし、河道定まらぬ暴れ川のこと。幾度もの大氾濫の後、とうとう堤が造られ、黒田川は完全に締め切られたそうな。

この御囲堤とよばれる大きな堤防のおかげで、洪水は減ったもののこれまでのように、川から田んぼへ水を引くことはできぬ。それからというもの、わずかな用水をめぐって水争いが絶えず、用水や圦(取水口)を壊し、無理やりに自分の田へ水を引く者さえあったという。

そんなある年、五〇日あまりにもわたる大かんばつが村々を襲った。

照りつける太陽、痩せ細る稲…、用水や井戸は底を露あらわに枯れ始め、人々の心までを田の水のように干上がらせてしもうた。

「あの村には、まだちいっと水が残っとる」、「あの堤壊して、水引こまいか」水をめぐった醜い争いは、日毎に勢いを増していったそうな。

そんな村人の前に、ある日白髪の老人が現れた。老人は「この争いをすぐに止めねば、村の土地一面は焦土と化し、コメはおろか農作物一切が不作になるであろう」と厳しい表情で言い放ち、驚く村人を背に神前でふっと消えてしまったという。

「う…氏神大明神が、老人に姿を変えておいでになさったぞ」、「大明神のお告げじゃ」、「氏神様が怒っておられるぞ」。

このできごとに大層恐れをなした村人は、さっそく争いをやめ、雨乞いおどりや百度参りをして、ただひたすら雨が降るのを願ったという。

その翌年、全国的な飢僅が農民を苦しめたが、不思議なことにこの一帯の村々にはさほどの影響はなかったそうな。

「これもすべて氏神大明神のお告げのお陰じゃ」と村人は語り合い、以来、毎年三月五日は村中が仕事を休んで、神社に参拝するようになったと言い伝えられています。

【参考図書】『木曽川町史』木曽川町史編集委員会　一九八一年

神明社

16 かき上げ堤と半兵衛どん

羽島市

むかし、むかしのこと。かつてないほどの大雨が幾日も幾日も続き、ついに木曽川の流れも変えてしまうほどの洪水が美濃の村々を襲った。

この大水の後、羽島市竹ケ鼻の東にできたのが逆川。木曽川と長良川を結ぶこの川は、水量が多く、雨が降る度に水があふれだし、川岸の正木輪中の百姓たちはほとほと困り果てていたそうな。「雨が降らねば米はとれぬが、こう大水が続けば、わしらいずれは干上がってしまう」。

そこで百姓衆は手を取り合って堤防を築き、洪水の危険に備えるようになったとか。ところが、正木輪中の加納新田(現在の羽島市正木町)の堤の堤防を築こうとした時、上流の足近輪中の百姓衆の猛反対を受けたという。

ここに堤防を築かれると足近輪中に水が停滞して下流へ流れなくなるからである。しかし逆に正木輪中の百姓衆は、毎年洪水で苦労ばかりしていたから、洪水を防ぐためにはどうしても堤防を築かねばならぬ。

お互い、命をかけての水争い…。

ついには、手に手に竹槍をもっての争いにまで発展してしまったそうな。この時、目覚ましい活躍をしたのが正木輪中に住む半兵衛どん。半兵衛どんは天狗に剣術を習ったという剣の達人で、竹槍一本で、足近輪中の百姓衆の竹槍を全部取り上げてしまったという。正本野中の百姓衆は、この戦いの間に一生懸命に土をかき上げ、かき上げ、ついに堤防を築くことに成功したそうな。

それからというもの、この辺りの堤防をかき上げ堤と呼ぶようになったとか。正本輪中には、この他にも天狗にまつわる話が、数多く残されているという。

【参考図書】『羽島市の伝説と史談前編』並河晴夫　一九七七年

貴布禰神社(南貴船神社)
正木町の輪中堤は昭和30年代初頭に取り壊され、現在は残っていないが、貴船神社(正木町森字村中)は堤外神社、貴布禰神社(正木町曲利)は堤内神社とも言うので、昔の「かき上げ堤」跡は、両神社で挟まれた細い道であると考えられる。

かき上げ堤(『正木の民話』より)

17 星降る村のとうもろこし畑

八百津町

ある夏の午後です。ボロボロの袈裟をまとった虚無僧が、美濃の山奥にやって来ました。ちょうど、現在の星ケ崎集落のあたりです。

むかしむかしの星ケ崎は、それこそ人馬も通わぬひなびた山村。谷間にわずかな田や畑があるだけで、村人たちは、その日、その日の飢えをしのぐだけで精一杯。

虚無僧にわけてあげるだけの食べ物はありませんでした。疲れ果て、空腹を抱えた虚無僧…。その姿を見た村の伊兵衛はなんとかしてやりたいと思いました。

「わしの畑にとうもろこしが出来ている。それでも食べてかんにんなされ」、その畑は、小高い山の頂上にありました。はいずるように、やっととうもろこし畑にたどりついた虚無僧は、とうもろこしを食べ元気になると、今度は木の枝を集めて小屋を造りました。吹けば飛ぶような小屋ですが、それでも雨や風はしのげます。

ひと眠りした虚無僧が、山頂から村を見下ろすと、娘も年寄りも汗を流して働いています。夜は夜で遅くまで藁を打つ姿が見え、村の貧しさは手に取るようにわかりました。

「このとうもろこしも、村人の大切な食べ物に違いない。それを私に分けてくれた。どうか、やさしい村人に幸運を授けてくだされ」。

そして七日目の夜のこと。伊兵衛は虚無僧のことが気にかかり外に出てみると、真っ暗な夜空に突然、数え切れないほどの星が現れて、山の畑に降り注ぎました。驚いた伊兵衛は、山の畑にかけつけましたが、虚無僧の姿はどこにも見当たりません。

そのあくる年のことです。山の畑には、まるで星のようにきらめくとうもろこしが実りました。その翌年も、とうもろこしは大収穫。村人たちは、やっと飢えから解放されたのでした。

「これはあの虚無僧さんのお陰だ」、そのことがあってから、村人はこの山を星ケ崎とよぶようになりました。そして、日本一おいしいとうもろこしのとれる畑の上には今も、満天の星がきらめいています。

【参考図書】『読みがたり岐阜のむかし話』（題「星が崎のはなし」）岐阜児童文学研究会　二〇〇四年

星ケ崎

18 ヤロカの大水

各務原市

むかし、むかしのことです。

連日の大雨続きで昼なお暗く、村の人々は憎々しげに空を見上げながらつぶやいていました。

「困ったことじゃ。いつになったら雨は降りやむんやろ。このぶんやと、また堤防が切れるかもしれん」、「この前の大水で床の上まで水浸しになったばかりなのに、神様はわしらをみはなしたんやろか」。

雨足はますます激しくなるばかりです。村中の道は、まるで小さい川のように水があふれかえり、畑のうねも水浸し。

木曽川の本流では赤く濁った水が狂ったように波涛をたてて流れています。「カン、カン、カン、カン…」そんな夜、洪水を知らせる半鐘が村中に鳴り響きました。村人はみのかさに身をかため、降りしきる雨の中、堤防に向かいます。濁流が堤防を越えたら、畑も田も生命さえ失われてしまう。

駆けつけた村人は、俵に土をつめ、それを縄でくくって、次々と堤防に積み上げていきます。牙をむいて襲いかかる大水から村を守るため、必死になって土のうをつくります。と、そのうち暗黒の雲の中から激しい雨音とともに、不気味な声が聞こえてきました。

「ヤロカー、ヤロカー、水ヤロカー」

あたりに響きわたるその声は、まるで地獄のうめき声。「俺も聞いた」、「わしにも聞こえた」。村人たちは小声でささやきながら、恐ろしさにうち震えていました。

あまりの恐怖から、気の小さな村人は大声で叫び始めました。

「ヨコサバヨコセー」。すると、恐ろしい雷鳴とともに、それこそ盆をひっくり返したような大豪雨が降りしきり、川水は津波のようにふくれあがって、たちどころに堤防を押しながしてしまいました。

まるで竜の化身のように暴れ狂う大水、濁流は田や畑はもちろんのこと、人や馬、人さえもあっという間に呑み込んでしまい、あたり一面は泥海と化したのでした。

この「ヤロカの大水」は木曽川流域に伝わる伝説で、江戸時代の初期、貞享四年（一六八七）八月の大洪水と言われています。

「ヤロカ」とは恐ろしい洪水に対するうめきの声、

「水ヤロカ」の声は人間が恐怖に直面した極限の言葉といわれています。

【参考図書】『川島町史通史編』岐阜県羽島郡川島町　一九八二年

やろか大神

慶安3（1650）年9月の「ヤロカの大水」では、木曽川沿いの尾張国丹羽郡上般若村（現愛知県江南市の一部）が完全に流出し、現在も、中般若町、般若町（旧：下般若村）は存在するが、上般若の地名は無くなっている。
貞享4（1687）年の「ヤロカの大水」で、木曽川を流れてきたと伝わる「吉野社（犬山市大字犬山字西古券）」

19 滝壺の柳の老木

瑞穂市

むかし、むかしのお話です。

中山道を挟んだ生津と馬場という集落がありました。この二つの集落には不思議な地名が残されています。

滝坪…。山も丘もない平坦な土地なのに、なぜこのような名前が残されているのでしょう。それは、もともとこの辺りが糸貫川の扇状地で、豊かな伏流水がゴボゴボと沸き出し、滝坪のような淵だったから。

そんな滝坪に柳の老木がありました。その昔、この辺りは家もまばらで、柳の根本から、美しい水が滝のように沸き出していました。

ある日のことです。お婆さんがその水でふんどしを洗ってしまったとか。すると驚いたことに、一晩のうちに、その滝は養老へいってしまって、あの孝行息子の話で有名な養老の滝になってしまいました。

この柳の老木伝説を今に伝えるお寺が二つ。一つは馬場前畑町にある超誓寺。もう一つは岐阜県養老町にある養老寺です。

この二つのお寺には、一本の柳で造られたと言われる阿弥陀如来が残されています。超誓寺は、建設当時、滝のそばにあり、滝の守りをしていたと伝えられるところ。また、養老寺にある滝守護不動尊も、その昔は、生津の里にあったものを移し替えたと伝えられています。この口承ついては、何の文献も残されてはいません。

しかし、ひょっとしたら、宗派も異なり、何の関連もない二つのお寺をそれが一本の柳の老木だったのかもしれません。

この柳の老木は近年まで立っていましたが、昭和三十六年の室戸台風で倒れてしまいました。現在、ここは、土地区画整理事業が行われ、土地が高くなり、滝坪公園がつくられました。昭和五十七年七月、公園には滝坪の伝説を記した「郷土の伝承」碑が建てられました。

【参考図書】『本巣郡昔ばなし～ふるさとの伝記～』安藤善市
本巣郡文化財審議会委員連絡協議会　一九八四年

滝坪公園の「郷土の伝承」

20 田代池の龍神伝説

海津市

昔むかしのこと。伊勢の中津原に太四郎という庄屋がおりました。ある年の夏、ひどい日照りが続き、大切な作物や田畑は目も当てられないほどに荒れてしまいました。困り果てた村人たちの様子に心を痛めた太四郎は、多度の山奥の他に住むといわれる「片眼の龍」のもとへ、たったひとりで、雨乞いにいくことにしたのです。

蝉時雨の山道を登って池へたどり着き、一心に念じていると、一陣の風がサッと太四郎の頬をかすめました。と同時に竜巻が巻き起こり、あたり一面は漆黒の闇。驚いて目をこすると、そこにはあの片眼の龍が浮かび上がっていました。

「龍神様、村人が困っています。どうぞ雨を降らせてください」。

拝むようにつぶやく太四郎へ、龍は鋭く片眼を光らせながら、「雨が欲しかったら、おまえの二人の娘のどちらかを差し出せ。そうすれば、必ず三日のうちに雨を降らせてやろう」と言い放ちました。しばらくうなだれていた太四朗でしたが、やがて腹を決め、三日のうちに雨を降らせれば、娘を差し出すことを確約して山をおりたのでした。

村が救われる安堵、娘を失う悲しみー。呆然と村へ戻った太四郎は、涙ながらに家族へこの話を打ち明けました。娘たちはただ泣くばかりでしたが、翌朝、龍の化身と名乗る武士が迎えに現われると、はた織りをしていた次女がいさぎよく進み出て、武士とともに音もなく消え去りました。すると、空はにわかにかき曇り、雷鳴とともに大粒の雨が村を潤し始めたのです。

三日三晩振り続けた大雨に村中は大喜びでしたが、ただ一軒、太四郎の家だけが、主のないはた織り機を見ては悲しみにくれているのでした。

しばらくして太四郎は次女を慰めようと、はたをあの池に沈めにいきました。五色の糸を通したはたは、渦巻きながら池の底に吸い込まれていきます。すると太四郎の耳に、「チャカラン、チャカラン…」あの懐かしいはた織りの音が聞こえてきたのです。

後にこの池は「太四郎池」（＝田代池）と呼ばれるようになり、毎年、村人が雨乞いに訪れるようになったといいます。そして今でも夜中になると、チャカラン、チャカラン…とはた織りの音が聞こえてくるということです。

【参考図書】『海津のむかし話』海津郡教育振興『海津のむかし話』編集委員会　一九八七年

田代池
海津市南濃町の盤若谷から石津御岳（629.4m）を経て田代池まで16.5Kmで、片道約3時間の行程であった。

21 ぞうすい祭り

輪之内町

五百年ほど昔のお話です。

毎日降り続く雨に村人たちは、「大水にならんけりやいいが」と黒雲をにらみ、雨が止むように祈りました。

しかし、大榑川の水かさは増すばかり。増水した水は堤防を乗り越えんばかりに、盛り上がって流れていきます。

濁流は上流の村を呑み込んでしまったのでしょうか。大きな立木をものすごい勢いで押し流し。牛も馬も人間も容赦なく呑み込んでいきます。

堤防に立つ村人も、助ける手だてさえなく、ただ、呆然と見つめているより仕方がありませんでした。

「あれはなんじやろう」突然の男の声に、村人は川面に視線を走らせました。「あれは、お社じゃなかろうか」「ひょっとしたら、上郷の神様が流れてござったんじゃなかろうか」「もったいないことじゃなあ」目をこらせば、小さなお社が濁流に流されていきます。

その晩村人は、堤防の上の仮小屋で過ごしました。交代で見張り番にたち、残った人々は冷えきった体をお互いに寄せあって仮眠しました。

その翌朝のこと。見張り番の大声で人々は目を覚しました。昨日のお社が逆流で押し戻されて、堤防に流れついているのです。

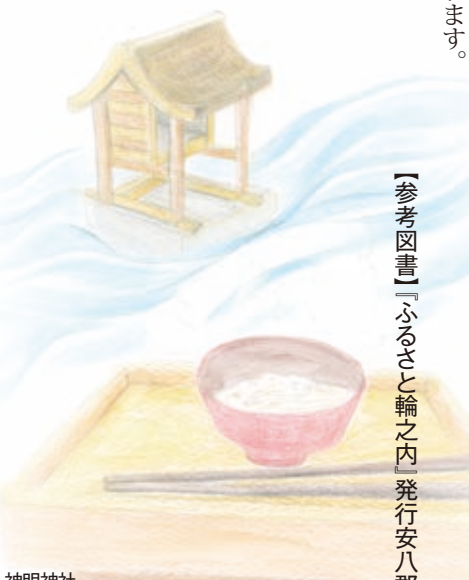
村人は神様が流れつかれたことをことのほか喜び、疲れていた者も、神様をお迎えするのだと勇みたちました。

長老がうやうやしく堤防を掃き清め、お社を移しました。しかし、洪水の最中のこと。神様にお供えるものは、何もありません。とりあえず、わずかばかりの米をといでぞうすいを炊き、お供えしました。

それ以来、この神様を堤防の守護神として、大切に祀ってきました。

このお社が上大榑の神明神社で、毎年七月十六日には、「ぞうすい祭り」がおこなわれています。

【参考図書】『ふるさと輪之内』発行安八郡輪之内町 片野知二 一九八九年



神明神社

神明神社の創建は永正2(1505)年で、助命壇に祀られており、増水と雑炊をかけて、ぞうすい祭が行われる。

22 猿尾のつつみ

笠松町

むかし、むかしのこと。

源太は、おっとうとおっかあと幸せに暮らしていた。源太の家は、美濃国の木曽川堤防沿いの集落・笠町。小さい頃から、川は源太の遊び場だった。ところが、ある晩のこと。恐ろしい大水が村を襲った。このままでは、家が流されてしまう。そう、決意したおっとうは、源太とおっかあを連れ、舟に乗って逃げ出した。

しかし暴れ狂う川は、あっという間に舟を呑み込んでしまい、源太は必死で水の中を抜け出てきたが、おっとうやおっかあはそれっきり帰ってこなかった。源太の家があったあたりは、渦を巻いて流れ、川底になってしまった。

この洪水の後、木曽川の対岸である尾張藩には、「お囲堤」と呼ばれる頑丈な堤防が造られた。しかし、美濃国にはそれより高い堤防を造ることは許されぬ。「大雨で堤防が切れたりしないか」つつみ切れは源太をはじめ、村人たちの悩みの種だった。

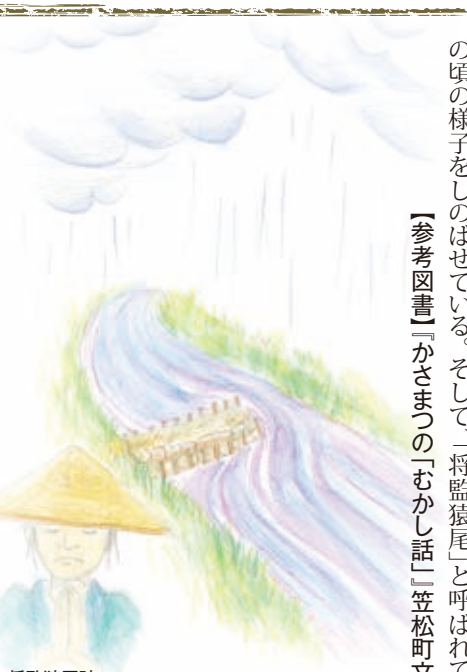
そんな時のことである。岡田将監善政が、美濃国の代官として、源太の住む村に赴任した。「今度の代官様は、前に可児郡に住んでござったが、そのときにも、えろう大水のことを心配してくださったげな」だが、代官様とて、大水はどうすることもできない。

意を決した源太は、代官様のところへお願いに行った。「川に猿のしっぽのようなつつみを突き出せば、水の勢いを弱めることができます。ぜひとも、このつつみの許可をください」前々から、揖斐川などの堤防を見て回っていた源太は、丈夫な堤防とは、猿尾のつつみしかないと考えていたのである。「ほう、猿のしっぽのところに水があたって、流れをやわらげるんじゃな。それはいい考えじゃ。材料やお金もぎょうさんかかるけど、わしが手配しよう」源太の考えを聞き入れた代官様は、次の日からさっそく仕事にとりかかり、代官様みずから、工事を指揮した。

もうちょっとで工事が完成するという日。二日も続いた大雨で川は、また大水となった。新しくつくった猿のしっぽのように突き出たつつみに水があたり、白い水けむりをあげた。「猿尾のつつみをたのむぞ」源太も村人も代管様も、みんなが神に折った。

そして、猿尾は立派に川の流れを防いだ。この猿尾のつつみは、今も笠松町の川岸に、その頃の様子をしのばせている。そして、「将監猿尾」と呼ばれている。

【参考図書】『かさまつの「むかし話」』笠松町文化財保護審議会 一九七九年



将監猿尾跡

23 郡上谷

郡上市

むかし、むかしの夏のことじゃ。

六月の中頃からかんかんした日照りが続いてのし。村の衆がいくら真剣に雨乞いしても雲ひとつわかず、田んぼは言うにおよばんことじゃが野山の草木までしなびてしまってのし、川まで枯れてしまうありさまじゃ。

そんなあんばいじゃったもんでのし、長良川の真中へんやずっと下の仰山人の住んでござるところでは、水飢饉を通り越してそりゃひどい大騒動じゃったということじゃがのし。それでも川上の方からちょろちょろ水が流れてきょうもんじゃで、「何処から流れてくるんじゃろうえ」「山の何処かに水が湧いて出る所があるに違いない」村の衆は暑い暑い、はくらんのせるようなかんかん照りの中をぞろぞろ手桶をひっさげて川づたいに　飲み水探しにのぼってござったんじゃげな。「まんだ上じゃ。まんだ奥じゃ」そう言ってのぼってきよるうちにのし、長良川本流と切立川の出会いの所までござったんじゃ。

どうも、本流より切立川の方が余計にじめっとようなふうに見えたもんじゃで「間違いのうこっちの方じゃ」そしたら案の定、槍ケ淵と手斧ケ淵にのし、そりゃ手の切れるような清水がこんこんと湧きながらたまったんじゃそうじゃ。「こりゃありがたいこっちゃ。これも神仏のお導き。やれやれ、おかげさまで救われた。助かった」村の衆はがぶがぶがぶがぶ、それこそ胃袋がはちきれるほど飲まっせたということじゃがのし。

その話が、ぱあっと郡上じゅうに広がったもんじゃで、「おりもおりも」と、みんな連んだって谷まで水を飲みにござったげな。

干せ死ぬ所を助けてもらったということじゃが、そんなわけで、この谷を郡上谷と呼ぶようになったんじゃということを聞いているがのし。

【参考図書】『ふる里高鷲　辛夷の記』上村彰隆　一九九九年

郡上橋から下流を望む

24 いたずらきつねのお話

愛西市

伝説や民話には、よくきつねに化かされるという話がでてきます。

きつねがコンとひと鳴きすれば、水もしたたるような美女に。農夫の女房におさまって、子までもうけるくだりは全国各地に残されています。悪賢く、人をだましながらも、きつねは、どこかで人々に愛される存在だったのでしょう。

「きつねの嫁入り」「きつねびより」「きつね火」「きつねに包まれる」「きつねとたぬきの化かしあい」など、きつねにちなんだ言葉は、たくさん残されています。では、立田の残されたきつね伝説をご紹介しましょう。

〈小茂井の女ぎつね〉

青田が稲穂をなびかせ、ハス田は収穫の時を迎える…。立田村の中央部に位置する小茂井集落は、緑鮮やかな農業地域。立田村総合体育館、立田農協ライスセンターなどが立ち並び、豊かな実りの時を、今か今かと待ち受けているようです。

そんな小茂井集落も、かつては人もまばらな寒村。村の若者は、嫁とりには苦労を重ねていました。そんな時代のこと。

女ぎつねは目も覚めるような美しい娘に化けて、村の若者が通るたび、気を引いたとか。あまりの美しさに目がくらんだ若者は、女ぎつねのいたずらと知りながらも、娘の小屋までついていったのだとか。おいしいご馳走や酒をふるまわれた若者は、いい気持ちになって、眠ってしまったのだという。しかし、目が覚めれば、そこは、津島の下新田の火屋（火葬場）。若者の嫁とりの苦労を伝えるきつねの伝説です。

〈葛木の渡しに住む腹ぺこぎつね〉

むかし、むかしの渡船場は、たいそうにぎわっていたそうです。しかし、木曽川の改修をした時に、みな他へ移ってしまい、たった一軒だけ、家が残ったとか。

この家の縁の下に一匹のきつねが住み着くようになりました。そのきつねは夕方になると舟を待つ小屋に出てきて、舟を待つ人がお年寄りならお年寄りに、若い娘なら若い娘に化けて、なれなれしく近よって声をかけたのだとか。なんといってもきつねは腹ぺこで、人々のもつ弁当だけが命綱。何かご馳走でもっていれば、うまくだましてすっかり中身を食べ、折り箱だけにしてしまったとか。

しかし、この腹ぺこきつねもいつのまにか姿を消してしまいました。葛木渡船の昔をしのぶ、もの悲しいきつね伝説です。

【参考図書】『立田村史』海部郡立田村教育委員会　一九六五年

葛城の渡し付近の河原

25 八穂地蔵

弥富市

八穂新田は現在の鍋田干拓の一部にあたるところ。

開拓の始まりは、江戸末期の天保年間（一八三〇～四四）、木曽郡代山村甚兵衛が、中山道木曽谷十一宿の財政難を救うために、尾張藩の協力を得ての新田開拓を思いたったのでした。

しかし、尊王攘夷に揺れる幕末のこと。尾張藩には開拓するだけの資金力はありません。そこで工事を近在庄屋の大河内庄五郎や服部弥兵衛に依頼し、尾張藩の豪商からも出資させ、工事は始まりました。

ところが、八穂は海面に孤立した葦に覆われた中洲です。工事期間中にも暴風高潮でせっかくの堤防も流され、多くの犠牲者をだしながらも、二年の歳月をかけついに完成。新田の安全と五穀豊穣を願った服部弥兵衛は、津島社を勧請し、地蔵堂も堤防近くに建立しました。

そんな願いも空しく、幾度もの大洪水に見舞われ、安政元（一八五四）年の大地震では、堤防や田んぼが沈下、応急復旧工事のかいもなく、翌年の暴風高潮で、ほぼ全農家が海に呑まれ、三〇人の死者をだしました。そう思いながらも、網を引きあげると、全身傷だらけのお地蔵様ではありませんか。「これは、きっと八穂新田のお地蔵様にちがいない。あの高潮に呑まれながらも、よくぞご無事で。これも神様のご加護のおかげだろう。ありがたいことだ」お地蔵様を急いで引き上げた漁師は、村の庄屋様と相談して、富島新田の鍋田川の堤防沿いに、地蔵堂を建立し、大切に供養しました。

この地蔵堂は、八穂新田の地蔵として長らく安置されていましたが、伊勢湾台風後の鍋田干拓復旧工事完了も近い昭和三八年、鍋田の氏神である鍋田神明社の一隅に建立した地蔵堂に移り、やっと、ふるさとに戻ることができたのです。

幾度もの水難をくぐり抜けてきたお地蔵様の供花は、今日も絶えることがありません。

【参考図書】『弥富町誌』弥富町誌併修委員会　一九九四年

八穂地蔵

26 釜段のさいかち

養老町

養老町の南端にある釜段輪中は、釜段と駒野新田の二村からなる輪中です。

輪中の開発は江戸初期の明暦四（一六五八）年のこと。尾張藩士藤田大学の子、藤田半入（別名、半斎）が高須藩に願い出て、開発は始められたのでした。

しかし、釜段は津屋川と揖斐川の合流点に近く、この地方でも最も低いところ。池や沼も多いことから、工事は難儀をきわめました。

中でも、津屋川堤防の一ヶ所は、幾度堤防を築いても洪水に流されてしまう始末。これでは、多額の費用と人々の苦労をかけた工事も、水の泡になりかねません。

困った人々は、村の古老に相談したところ、「この場所は、昔から白竜さまが住む神聖な場所じゃ。堤防の工事が失敗ばかりするのは、白竜さまのたたりにちがいない。工事をすみやかに進めたくば、神仏のご加護にすがるほかはあるまい」と、話してくれました。

そこで人々は、この地が生んだ刀匠、志津三郎の名刀と経本を川に沈めて工事を始めたところ、立派な堤防が完成し、大雨で川が暴れても、洪水は堤防を越えることはありませんでした。「これも神仏のご加護にちがいない。ありがたいことじゃ。白竜さまの祠をたてて、霊を祀らなければ、きっと罰があたろうぞ」輪中の完成を喜んだ人々は、堤防の付近に「白竜神社」を建てて、白竜さまの霊をなぐさめました。

またこの堤防の場所には、さいかちの木と大きな松の木がありましたので、人々はいつからとなくこの地を「さいかちさん」と呼ぶようになりました。

かつての釜段輪中の水田のほとんどは堀上田。農作業は船を使って行われ、農家一軒に三～四艘の笹舟をもっていました。しかし、今日では土地改良の結果、一面の美田となりました。

【参考図書】『のびゆく養老町』養老町教育委員会　一九八四年

さいかち経塚と白竜神社

27 橋杭笑地蔵

大垣市

むかし、むかしのこと。

墨俣川には大きな中州が二つあって、そこに三つの橋が架けてありました。この橋も長い年月風雨にさらされて、いつの間にか朽ち落ち、その面影だけが残っていました。

嵯峨天皇の時代(八一〇～八二三)、橋のあったあたりが暗やみの空に向かって金色の光を放っているのを村人が見つけ、大騒ぎになりました。

不思議に思った村人が恐る恐る調べてみると、金色に輝く朽ちた橋杭が見つかり、その橋杭は、なんとお地蔵さんの形をしているではありませんか。

これを見た村人は早速その橋杭を掘り出し、お堂を建立し、お祀りをしたのですが、長い間、砂に埋もれていたため、完全な姿ではありませんでした。

都でこの話を聞き墨俣へかけつけた歌人の小野篁公は、心願を込め立派なお姿の地蔵菩薩様を完成させました。

時代は下り天慶二(九三九)年のこと。朱雀天皇の勅使がこの墨俣の地蔵堂で雨やどりをした際、その霊験あらたかなることを聞かされ、和歌を一首、献詠されました。

朽ち残る真砂の下の橋ばしら　また道かへて人渡すなり

すると、地蔵菩薩は口元に微笑を浮かべました。

この尊いお姿を拝した勅使は「橋杭笑地蔵大菩薩」と名づけられました。

以後村人は、「橋杭笑地蔵様」と申し上げ手厚くお祀りし、現在は明台寺本堂に安置されています。

【参考図書】『墨俣町史』墨俣町史編纂委員会　一九五六年

明台寺

明台寺の橋杭笑地蔵
(『すのまたのあゆみ』より)

28 赤壁城

中津川市

むかしむかしのお話です。

木曽川の深い、淵をのぞむ高森山に、赤壁の苗木城が建っていました。苗木のお城は、昔から白い色を嫌うならわしがありました。というのも、お城の祖先が戦に負け、ほら穴に隠れていたとき、飼っていた白い犬がご主人を見つけてうれしそうにほえ、それを敵が見つけて殺されたことから、この戒めが生まれたのです。

苗木城は、山道を行く旅人たちやいかだ流しの人夫たちの、旅の道標。全国的にも珍しい赤壁は、旅人たちの心をなごませていたのですが、殿様をはじめ、苗木に住む村人たちは、赤壁をいつも引け目に思っていました。

やがて時代は下り、平和がおとずれて戒めは、ただの言い伝えにすぎなくなっていたのでしょう。ついに人々は古くからのならわしを破り、城壁を白く塗りかえてしまったのです。「これで、苗木の自慢がひとつ増えた」殿様も村人たちもそういってたいそう喜びました。が、その時。黒雲がまたたく間に空をおおい、突風とともに激しい雨が降りだしました。とどーん、とどーんと山から山へひびきたわたる雷。

人々が慌てふためいていると、突然、木曽川の水が大きな水柱となって吹き上げ、お城の天守閣をいく重にもとり巻いた水柱は、恐ろしい銀色の竜に、その姿に変えたのです。竜は大きな目玉をくわっと見開き、するどい爪で自壁をはがし始めました。

殿様は、怒りに満ちた竜の顔を見てはっとしました。「あの竜は、私たちに白い色の戒めを思い出させようとしている、ご先祖様の姿に違いない」みるみる間に白壁ははがされ、お城はもとの赤壁にもどってしまいました。銀色の竜は光とともに空に昇り、黒雲は四方に流れ散っていきます。殿様たちは、しばらくぼんやりと赤壁のお城を見つめながら、ご先祖様の苦しかった時代を忘れている、今の自分たちのことを思いました。それからはもう、苗木城が白壁に塗りかえられることはありません。

お城は赤壁城と呼ばれ、苗木の人々も誇りに思うようになったそうです。

お城を失った今、苗木城跡は国の史跡とされるとともに、長い歴史の面影を伝える、中津川市の文化スポットとして親しまれています。

【参考図書】「中津川のむかし話」
社団法人中津川青年会議所発行
恵那児童文学の会編集　一九八四年

苗木城跡

29 下島の弘法清水

王滝村

むかし、むかしのこと。

暑い夏の盛りに、墨染の破れ衣を着け、見るからにみすぼらしい風態をした一人の旅僧が、鞍馬峡の景色に見ほれていました。

ちょうどその時、まぐさを背負って下の川原の方から村人が一人、汗水流して登ってきました。村人を見つけた旅僧は、「これから御嶽山へ登ろうと思っているのだが、道がわからなくて困っているところ。どうか道を教えてほしい」と、尋ねました。

「アイアイ」と快く返事をしたお百姓は、旅僧の先へたって案内する道すがら、いろんな話をしました。旅僧のいうことには、「こんなに平坦な土地があるのに、なぜ、水田としないのか。そうすれば、他所から馬に苦労をかけてお米を運ばずにすむであろうに」「ウラアの祖父も、父親も大分やってはみたが、用水が引けんので、途中で止めてしまったが、惜しいことをしたもんだ」と、百姓は答えました。

すると旅僧は、「よし。では、早速、水を出してやる」といって、もっていた錫杖を二～三回、地中に突き刺すと、不思議なことにみるみる清水があふれんばかりに湧きだしてきました。「田植えになれば、もっと出るようにしておいてやる」小躍りをして喜んだ百姓は、旅僧にていねいに礼を言ってわかれました。

それからは、村人みんなで開田に努めどんな日照り続きでも、ここばかりは決して涸れることがなく、水が冷えて青立つこともありませんでした。もともと、米作には不適な山村に生まれた稲田。

それもこれも、こんこんと湧きでる清水のおかげです。この不思議なできごとに村人たちは、「あの旅僧は、弘法様にちがいない」と話しあうようになり、「弘法清水」と呼ぶようになりました。

【参考図書】参考文献『長野県史民俗編』第3巻(3)中信地方　長野県　一九九〇年(王滝村の民話より)

崩越の王滝川右岸

30 祖父江の竿鷹

稲沢市

横井作左衛門時久は祖父江横井家の祖。

大阪の陣で勇敢に戦い、その武功により尾張藩士にとりたてられました。血気盛んな作左衛門は、大の狩猟好き。若い頃から、馬を走らせ、鷹をこぶしにすえて、カモやウズラを捕獲していました。

元和三(一六一七)年初冬。いつものように名古屋城の西方、江川のほとりを鷹をすえて歩いていると、老婆が、竿の先に布をつけ、川でさらしているのを見かけました。

そんな時のこと老婆の竿に驚いた水辺のカモが飛び立つと、どこからともなく隼が舞い降りてきて、カモをさっと捕らえて、飛び去っていったのです。「かようなことが、あるものか。これは狩猟に役に立つのかもしれない」と考えた作左衛門は、早速、隼を捕らえ、ならしはじめました。

ちょうど、一年が過ぎた頃。老婆のように竿の先に布をつけ、「それゆけ」と隼を放すがはやいか、隼は飛び立つと同時に舞い降りて、水辺のカモをつかまえたのでした。「作左衛門、おもしろい放鷹をするそうだのう。見せい」尾張の初代藩主義直に命じられた作左衛門は、御前にて新式放鷹術を披露。「おもしろい。今日からそちを鷹匠頭にしよう」と命じました。ところが作左衛門は、「お待ちください。わたくしめはもはや老体。息子にこの術を伝授し、完成したところでお申しつけください」と、辞退してしまったのです。

放鷹という遊びが尾張に流行しはじめたのは　延歴年間(七二八～八〇〇)のこと。この遊びが徳川時代になると形式化され、美しさ、勇壮さが尊ばれるようになっていました。

こうした時代にあって、作左衛門は、誰にも負けることのない完成された型をつくろうと思い立ったのでした。この術はさらに二年の歳月をかけ、美しい一つの型になりました。

白い布を長さ三mほどの竿の先につけ、カモやウズラのひそむあたりでふりおろすと、羽をすぼめるように舞い降りてきた隼が、飛び立ったカモをしとめるのです。

百発百中でした。これに自信をつけた作左衛門は、「わが子時有でございます。竿鷹の術、すべて伝授しました」と藩主義直に息子を紹介。時有は鷹匠頭となり、その職は世襲となりました。ちなみに、尾張で放鷹が領主の専売特許みたいになったのは、正保二(一六四五)年のこと。

以来、藩主から許可された者以外は、放鷹できなくなりました。

【参考図書】『祖父江町誌』祖父江町教育会　一九八八年

横井家の鷹場であった広口池(広口川)

31 アマツボさん

愛西市

暑い夏のことでした。

その年は、梅雨になっても雨ひとつふらず、かんかん照りの暑い日が続いておりました。田んぼはもちろんのこと、野山の草木までしなびてしまい、村の人々はほとほと困り果ててしまいました。「このまま雨が降らなければ稲は全滅じゃ」「飲む水だって、そのうちに干あがってしまうぞ」村人たちは心配そうに空を見上げますが、青く晴れわたった空には、雲の姿すらありません。

「そうだ。　雨乞いをしよう」「みんなでお祈りして、雨の神さまにごきげんをなおしてもらおう」村人はそう思い立つと鉦や太鼓を打ち鳴らし、一　生懸命お祈りをしました。しかし、何日お祈りをしても、雨雲が湧く気配はありません。

そんな時のことです。白い髭のおじいさんがあらわれて、「村のはずれの木の下にアマツボという四つの石がある。それを川に沈めるといい」というと、どこやら姿を消してしまいました。「ひょっとして、これは神様のお告げなのかもしれない」「ともかく、アマツボさんを川に沈めてみよう」そう口々に叫んだ村人は、村のはずれでお人形さんのような力タチをした四つの石を見つけました。

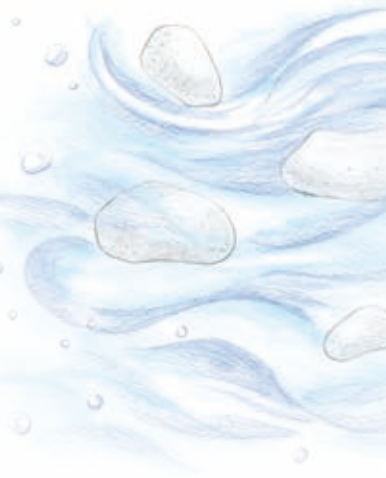
「これがきっとアマツボさんじゃ。さっそく、川に沈めてみよう」するとたちどころに黒い雨雲があらわれて、大粒の雨が降り出したではありませんか。「雨じゃ。雨じゃ」うれしさのあまり、男も女も、犬も猫もおどりだしました。しかし、雨は何日たっても上がる気配がありません。むしろ、川の水はふくれあがり、堤防を越すほどの勢いです。困り果てた村人達は、相談の末、アマツボさんを川のなかから 拾いあげることにしました。

すると、どうでしょう。あれほど降っていた雨はピタリとやんでしまいました。

アマツボさんはそれほど霊験あらたかな石と評判となり、村人は大切にお祀りしたそうです。

アマツボさんの伝説が伝わる町野の集落は、木曽川改修のおり、川底に水没しています。

【参考図書】『八開村史民俗編』八開村史編さん委員会　一九九四年



個人所蔵のアマツボさん（『八開村史民俗編』より）

32 杣ヶ池の恋物語

高山市

その昔、高根村には原家という長者屋敷がありました。

室町時代からの金持ちで、村人は親方と呼んでいました。この屋家に奉公していたのが「ちんま」という美しい娘でした。

ちんまはとてもお料理上手。優しく、愛敬もありみんなから好かれていましたが、恐ろしいほどの力持ち。魔性の女のようでした。

ある時、露店に風呂を炊いて原の旦那が入っていたところ、急に雷雨にみまわれました。その時、ちんまは茶碗を持つように軽々と風呂を庇の中に運んだそうです。そんなちんまには、ふるような縁談がありましたが、決して首を縦には振りません。出稼ぎで原家に勤めていた杣（木こり）の小三郎に恋していたのです。

ある日、ちんまは小三郎に逢いたい一心で山に行き、イワナに姿を変えて弁当の中に入っておりました。昼食時、腹をすかせた小三郎は「これはうまそうなイワナ」だと一息に呑み込んでしまいました。

するとどうでしょう。たちまちのどが渇き、川の水を飲み続けている間に、身体にキバや角、ウロコが生えてくるではありませんか。

小三郎はあっという間に、巨大な白竜に変身し、大山鳴動して地が割れ、美しい池が生まれました。

この美しい池は杣ヶ池と呼ばれ、雨乞いの池として知られています。

杣ヶ池から東方七〇〇ｍのところに湿原と化した「ちんまが池」があります。

【参考図書】『開田村誌上巻』村誌編纂委員会　一九八〇年

杣ヶ池

33 雨ごいの竜

一宮市

今から千年以上昔のお話です。

毎年のように洪水を起こすこの地では、とても珍しいことに、まったく雨が降る気配が見えませんでした。晴天続きに最初は喜んでいた村の人々も、次第に顔を曇らせるようになりました。

そんな折り、弘法大師が真清田神社に訪れました。干ばつを心配した村の人々が弘法大師に相談すると、弘法大師は、茅で竜をつくり、一心に祈りました。すると不思議なことに竜が動き出し、

「あなたがどんなに祈ってもだめです。天下の竜はすべて竜王によって閉じ込められています。もし、雨を降らせたら、どんな竜でも殺されてしまいます」といいました。

竜の悲しげな声を聞いた弘法大師は竜に向かって、「この村の人みんなを助けるのだ。なんとかおまえの力で雨を降らせてくれたら、真清田神社の境内に祀ってやろう」と呼びかけました。

「そんなにいわれるのなら、やってみましょう。水の種を少しください」と竜は弱々しげな声で答えました。

それを聞いた弘法大師が硯の水を大地に注ぐと、たちまち黒雲を呼んで大雨を降らせたのです。

ところが竜王の怒りに触れた竜は、ずたずたにされ、天から落ちてきました。弘法大師はその竜を丁寧に弔い、約束通り、竜神としてお祀りしたそうです。

この竜神様は今も真清田神社の境内に祀られています。

【参考図書】『愛知県伝説集』愛知県教育会編　一九三七年

吐水龍

34 竜の怒りで大洪水

郡上市

長い日照りが続いたある年の夏のことです。

長良川の段々畑を二段も三段も登ったところに　五町、今の八幡町五町はありました。眼下に川を見下ろしながらも、五町では川の水を引くことができず、作物を作るのは、観音山から流れる谷水と、雨のみ。その頼みの水も、長い日照りで枯れてしまい、飲み水さえも事欠くありさまでした。困り果てた村人が話し合っていると庄屋さんが、

「竜は雨を呼ぶというこっちゃ。藁で竜を作って諏訪神社へお祈りしてみたらどうじゃ」

「そうじゃ。そうしまいか。それはええ考えじゃ」村人はこういうと、早速、竜を作り始めました。まる一日がかりで仕上げた竜は、長さ五m、胴回り一mという堂々たる体躯。それを丸く輪にして、諏訪神社の拝殿へ奉納しました。

次の朝、お神酒を三升背負って諏訪神社へ行くと、輪にしていた竜は首を拝殿に向け、突っ立っているではありませんか。驚いた村人は、お神酒を竜の口に流し込み、雨乞いの式をそそくさと終えると、竜をかついで村の道へ出ていきました。

すると竜は突然暴れだし、大矢淵に飛び込むではありませんか。それを見て腰を抜かした村人の一人が、「雲じゃー雨がいただけるぞ」と叫びました。

あれほどぎらついていた太陽を覆い隠すように黒雲がたちこめ、カメをひっくり返したような大雨が降ってきたのです。「雨じゃあ、雨じゃあ、ありがたい」しかしどうでしょう。雨はやむことなく、雨足はますます激しくなるばかり。「大水じゃあ。村が流されるぞ」夜が明けるころにはついに、村は大水につかってしまったのです。それで村人は「竜に汚れを入れたかもしれん」といって、汚れを払いに諏訪神社を再び訪れました。

すると、どうでしょう。祝詞が終わるころには、雨はこやみになり、竜が跳ね上がって雲に乗り移るのが見えました。

それから、五町の空は晴れ上がり、大水でつかった段々畑は広い平地に変わって、大根の名所になったということです。

【参考図書】『郡上の昔話・昔の話』和田昌三　一九九一年

諏訪神社が合祀された神明神社
昔話の諏訪神社は、5年に1度春祭りをする神明神社（八幡町五町字観音前284）に合祀されている。

35 白蛇のお告げ

南木曽町

むかし、むかしのお話です。

与川をさかのぼった山では、貴族の家をたてるために、大勢の木こりが集められ、役人のもとでたくさんの木が切られていました。その木こりのなかに、正直者の与平という男がいました。

ある雨の激しい夜のこと。与平はトントンと小屋を叩く音に目を覚ましました。おそるおそる戸を開けると、白い着物をきた美しい女の人が悲しげに立っているではありませんか。そして女の人は「これ以上木を切り倒すと、必ず悪いことが起こるでしょう」と言い残して、雨のなかにスーつと消えてしまいました。

あくる日与平はこのことを仲間に話しました。木こりたちはこの言葉を恐れて、仕事を続けることを拒みましたが、役人は聞き入れてくれません。

とうとう与平は、「腹が痛い」と嘘をついて仕事を休んでしまいました。その夜、いつかの女の人が現れて、「明日、雨が降り始めたら、山の頂へ必ず逃げてください」といつて、夕闇のなかに消えていきました。

翌日、女の人がいった通り大雨が降り始めたかと思う間もなく、土石流は牙をむいて村に襲いかかり、里の家々は跡かたもなくつぶされ、中山道もくずれさってしまいました。この時、与平は土砂に流されていく白蛇を見ました。

実は、あの女の人は、白蛇の仮の姿だったのです。このことが起きてから、与平は木こりをやめて馬方になり、尾張の国から食物を運んだということです。

木曽谷一　帯を襲う恐ろしい蛇抜け。この災害を少しでも静めるために、南木曽町には、石碑や地蔵様が多く建てられています。

【参考図書】『私たちが調べた木曾の伝説』長野県木曾西高等学校地歴部　一九八〇年

与川渡しのお地蔵様
右が与川渡しのお地蔵様で、左の巨石は明治37年建「地蔵尊供養記念碑」、横に南無阿弥陀佛が祀られている。

36 長者平の金鶏伝説

揖斐川町

その昔、春日村の美束という集落に長者の一族が住んでいたげな。

なんでも都から落ちのびてきた身分の高い人の子孫だったという話じゃ。

土地を開いて粟やひえをぎょうさん作り、その上に米まで作るようになったげな。

米のとぎ汁が毎日毎日川に流されたので、この川を粕川と呼ぶようになったわけじゃ。

長者の一族がどんどん栄えるようになったのはなあ、米作りや狩りをしただけじゃなしに、砂金といってな、砂のなかから金を選びだして、金の鶏のような置き物を作っとったらしい。

長者は賢い頭と金の力で村の長となり、長い間、ぜいたくな暮らしをしとったげな。

栄枯盛衰も世のならいというが、この長者一族の盛りもそう長いこと続かんかった。

そのころ、熊坂長範という大泥棒が村の長国寺に住み、この寺を根城に金持ちを襲っては、稼ぎまくっていたということじゃ。

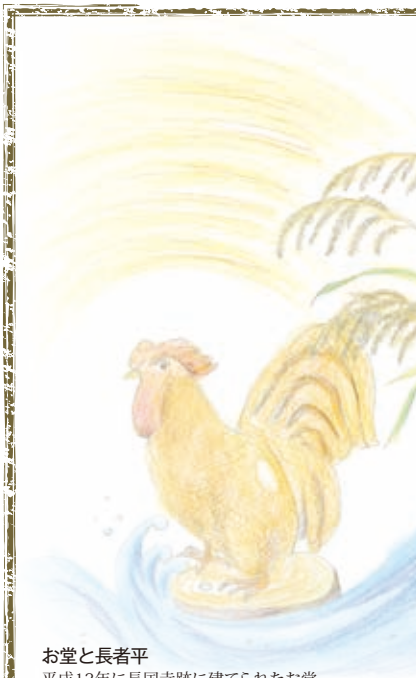
しかし、ついには捕らえられ討ち取られてしまったそうな。

この大泥棒をここまでほっといたというかどで、長者はとうとうこの村におれんようになった。

それから一族もちりちりばらばらになってしまったが、この土地を追われるときに長者は、ぎょうさんためこんだ宝物と金の鶏をどっかにうまいこと隠してしまったげな。

隠された鶏は、ようとして行方が知れぬが、毎年、元旦の朝早く、朝日を浴びてコケコッコーと、ただ三声だけ鳴くそうじゃ。

【参考図書】『春日村史』春日村史編纂委員会　一九八三年



お堂と長者平
平成12年に長国寺跡に建てられたお堂

37 おがせ池の宝刀

各務原市

むかし、おがせ池に、大蛇がいてな。みんなこわがっていたと。

ある年の夏、たいへんな日照りがつづいてな。おがせ池の水も枯れてしまい、百姓しゅうはとんと困り果て、毎日、毎日、みんなで雨ごいをしたと。けれども、ちっとも雨は降らん。とうとう惣八郎という百姓頭が、大事な馬一〇頭と、牛一〇頭を大蛇に食わせよと、池の真ん中に連れ出した。「蛇神様、これを受け取ってくだせえ。そのかわり、雨をくだせえ」と、一心に祈ったと。

すると、どうじゃ。大粒の雨がぶちゃけるように降り始めた。池の水はみるみる内に増えて渦を巻き、惣八郎は馬もろとも、あっという間に沈んでしまったと。

三年の歳月が過ぎた。百姓しゅうが惣八郎の法要を営むために、お経をあげてもらっている時だった、池のなかから、誰やら顔をだし、こちらへ泳いでくるではないか。「惣八郎だ、ありがたや、惣八郎が生きておった」ぽかんとしている百姓しゅうの前で、惣八郎はこんな話を始めた。「おらあ、あの日。池に引きずりこまれ、気を失っていたんや。『いたい、いたい』とうめく声にふっと気がつくと、のたうち回っている大蛇が、『ここをさすってくれ』とふくれ上がった腹を見せたんや。こわごわさすってやると、大蛇は、大きな口をあけて、苦しげに太刀を吐き出した。

そして静かになり、『わしは、この池に千年も住んでいる主じゃ。むかしは、ずいぶん村で悪事を重ねてきたので、なかなか往生できん。お前が村へ帰ったら、坊さんになってな。わしが大往生できるよう、祈ってくれないか。この太刀は、わしのただ一つの宝じゃが、もっていけ。もし、大往生できたなら、この太刀はきっと村を守ってくれるだろう』というので、受け取ると、もう身体が浮きあがり、この通り、無事に帰ってこれたのじゃ」そういいながら、立派な太刀をみせたそうな。

今も、この宝刀は、池の近くの祠に祭られ、村の守り神として、お祈りがたえないそうじゃ。名前が惣八郎や太左衛門と違う場合がある。

【参考図書】『かがみがはらのむかし話』各務原市小学校国語同好会　一九七八年

おがせの池

38 海水山権現

関市

むかし、むかしのことです。

光山上人という天台宗のお坊さまが、白谷の山中にこもって石の上に座り、一身に修業をしていました。すると、北の方の空がさぁっと輝き、不思議な気配がたちこめました。

「これは神さまのお告げかもしれない。　北の山に登ってみよう」さっそく北の山へ登った光山上人は、條が橋というところの近くに平らな石があったので、その上に座り、一心不乱に祈りを捧げました。

すると、あら不思議。合掌している手から水がほとばしりでて川に注いだと思うと、川の瀬が変わって上流へ水が流れ出しました。

そこで、ここを上ヶ瀬と名づけました。上人はさらに湯屋というところまで登り山を仰ぎ見ると、空いっぱいに神々しい光が輝くではありませんか。

驚いた上人が山の頂上から北を見ると、海のように大きな池が満々と水をたたえていました。

その池に近づくと池の中から大蛇が現れたので「こら化け物！正体を現せ!!」と叫んだ上人が、数珠を投げつけました。

この数珠はなんと大蛇の目に命中。すると大蛇の姿は消えて神さまが現れ、「私は海水山権現である。この山にお宮を建てて私を祀れば、どんな願いでも叶えてあげよう」というお告げを残し、山の中にかき消えました。

そこで光山上人はお宮を建てて海水山権現をお祀りしました。板取村の川や谷の水が澄んで美しいのもこの権現さまのおかげなのでしょうか。

板取村には光山上人が座って修業をしたと伝えられる光山石が白谷区の観音洞、門出洞のオオイオ、上ヶ瀬区の北はずれの文助林、岩本区の藤巻、杉原ばきのヨコワタりに残されています。

【参考図書】『板取むかし話第三集』（題「光山上人の話」）板取村教育委員会　一九八四年

大悲山円教寺（通称白谷観音堂）

関市板取白谷地区の大悲山円教寺（通称白谷観音堂）の秘仏十一面観音像は、平安時代の作といわれ（作者不明）、七年に一度しか公開されない。なお、関市板取杉原の新宮神社には「海水権現」と書いた狂俳額が掲げてある。

39 平群池の不思議な伝説

桑名市

むかしむかしのお話です。

日本武尊が美濃国から鈴鹿郡へ赴く時、桑名の平群神社でご休息をされました。平群神社の裏山は、全山に椎の木が生い茂る神秘的なところ。あまりの美しさにみとれた日本武尊は裏山を歩き回っていると、それは美しい池を見つけました。「少し疲れた。足でも洗っていこう」と、冷たく澄みきった池に足をひたしてくつろがれたそうです。この池には片目の魚が棲んでいて、この魚を捕ると神罰があたるといわれていました。

いつのころか不明ですが、こんな話が残されています。松右衛門という漁師が内緒で「大なまず」を生け捕り、背負い籠にいれ帰りかけたところ、池の方から「オーイ!松右衛門やーい」と呼ぶ声がしました。そしたら驚くことに、背中の籠から「オーイ」となまずが返事をしたではありませんか。漁師は驚いてなまずを池に放して帰りましたが、その漁師は間もなく病気になって死んだそうです。

この平群池では魚の放流が盛んに行なわれていました。そのため、魚を求める多くの白サギが池に舞い降りていました。

ある日のことです。九左衛門という猟師が、白サギを撃とうとして誤って池に落ちてしまいました。このとき、ずぶぬれになった九左衛門のふんどしに入っていたのが、たくさんの「もろこ」。懐の中にも「鯉」が数匹入っていました。おまけに木の株だと思ってつかんだのが兎の足。思わぬ収穫にうれしいやら恐ろしいやら。

九左衛門は以後感謝の気持ちを込めて、殺生をつつしみ、白サギを大切にしたので、白サギはその後、たくさん繁殖しました。

この平群池とその周辺は平成一〇年に整備され、自然と調和のとれた公園となりました。

【参考図書】『桑名の伝説・昔話』近藤圭、平岡潤 桑名市教育委員会 一九七六年

平群池

40 龍宮さまの淵

美濃加茂市

川浦川は長良川に合流する美しい川です。

碧色に輝く水面では銀鱗が輝き、川辺の竹やぶは風に揺れる。

まるで、桃源郷のような美しい風景です。

この川浦川には龍宮の淵と呼ばれるところがありました。

淵をのぞくと、乙姫さまの足跡が見えたことから、村人はこう呼んでいたそうです。

また、秋の宵には、水の中から太鼓をたたく音が聞え、実りの季節を祝うかのように、ドロン、ドロン、と鳴り響いたそうです。

この、淵には、不思議な言い伝えが残されていました。

むかし、お椀などの器を貸してほしい人たちが、ここで乙姫さまにお願いすると、翌朝には、そこにきちんとそろうのです。

ですから、法事やお祭りでたくさんの人々を招く家庭では、たびたび、この淵へ借りにいっていたそうです。

ところが、ある若い男が、乙姫さまを一目みたいと思い、借りたお椀を返した後で、竹やぶのかげに隠れて見ていると、美しいお姫さまが現れたそうです。

その美しさはこの世のものとは思えないほど。

「ああ見えた、なんと美しいことだろう」

あまりの美しさに若い男が思わず叫んでしまいました。

すると、どうでしょう。

乙姫さまは、すっと水の中に姿を消してしまいました。

人に姿を見られたのが、きっと恥ずかしかったのでしょう。

それからは誰が器を借りにいってどんなお願いをしても貸してはもらえなくなりました。

【参考図書】『美濃加茂市史民俗編』美濃加茂市 一九七八年

龍宮の淵

41 弥太郎用水

大垣市

西山は、山に囲まれた小さな村です。

むかし村人は、火をかけて山を焼き、そこへ粟や稗、蕎麦などをつくり、谷田では米をつくっていました。しかし、年貢をおさめてしまうと、手元に残る穀物はごくわずか。「いつかは白い米を食いたい」人々はささやかな夢を語り合っていました。

ある年のことです。村の世話役をしていた弥太郎は村の衆に、「みなの衆や、たんと米がとれるように荒地に水を引こうじゃないか。そうすれば日照りや長雨でも困らんぞ」弥太郎の意見に納得した村人はさっそく水路の工事を開始。谷川から水を引くための頑丈な溝を築きました。今でもこの用水を「弥太郎用水」と呼んでいます。

みんなの努力で水不足はなくなりましたが、せっかく作った田んぼは猪に荒らされてしまいます。またしても弥太郎は、猪を防ぐための猪垣を約四キロ、汗と泥にまみれて作り上げました。

しかし山里のこと。収穫も思うように増えず、猪の害も減ったとはいえなくなりません。そこで弥太郎はみんなの代表となってお役所に行き、「お米がとれなくてみんな困っています。どうか三年間、年貢を取らないでください」と頼み、無年貢にしてもらいました。

でも魔がさしたというか、弥太郎の気持ちは変わり、村へ戻ると年貢を今まで通り取り立てて、ぜいたくな暮らしをしていました。

これが後にわかると、村人たちは弥太郎を村から追放してしまいました。

しかし弥太郎が死ぬと、用水を作った努力に感謝してその罪を許し、脇差しを添えて丁重に裏山に葬ったといわれています。

【参考図書】『上石津ふる里噺』上石津教育委員会　一九八三年

弥太郎用水の流末

42 清水のお菊

江南市

風雲急を告げる幕末のころ

前野という集落では、年中こんこんと清水が湧き出していました。

澄みきった清水は、「前野の清水」とか「井出の清水」とか呼ばれていました。このころの清水の辺りは、一面をススキやアシが埋め尽くし、昼でさえ恐ろしいようなところ。さやさやと野を渡る風に入り交じるように、女のかぼそい泣き声が聞こえてくると、人々は恐ろしげに語り合っていました。

泣き声の主は、お菊という、とても美しい娘でした。りりしい青年武士と恋に落ち、その仲は人もうらやむほどでした。しかし、女心と秋の空。美貌のお菊には、他にも想いを寄せる青年もあり、いつしかお菊は心変わりをしてしまったのです。

そんな心変わりに気づいた青年武士は、お菊の心を自分へ引き寄せようとしましたが、叶いませんでした。

深く心に傷を負った青年武士はやがて悪鬼となり、寂しげなススキ野を行くお菊を待ちぶせてあやめ、前野の清水に投げこんでしまいました。

このことがあってから、清水では哀しげな女の泣き声とともに、お菊の亡霊が現れるという噂がたつようになりました。

「恐ろしいぞ、前野の清水、死んだお菊が化けてでる」人々はこう口々にささやきあい、お菊の物語を伝えてきました。

現在、前野の清水は枯れてしまい、清水の跡には悲恋のお菊を見守るように、お地蔵さまがポツンと立っています。

現在、江南市では「前野の清水」を活用した「しみず公園」が計画されています。

【参考図書】『江南市史資料4文化編』江南市史編纂委員会　一九八三年

井出（前野）の清水

43 遠浅神明神社と大蛇

桑名市

むかし、むかしのこと。

長島の百姓たちは毎年のように襲う洪水に困り果てていました。昨夜の大水も、地を揺るがすほどの恐ろしさ。しかし、夜が明ければ、川はすっかり穏やか表情。お日さまに照らされて、キラキラ輝いていました。

そんなときのこと。上流からプカリ、プカリと何か流れてくるではありませんか。「昨夜の大水で、流されてきたにちがいない」百姓の甚平が川からそろりと引き上げると、なんと神さまをお祀りする祠ではありませんか。「もったいないことじゃ。さっそくお祀りしよう」天文一三(一五四四)年、こうして遠浅という集落の川岸に遠浅神明神社が建立されました。

しかし、長島じゅうを焼きはらった織田信長の長島攻めで、お社も打ち壊されてしまいました。

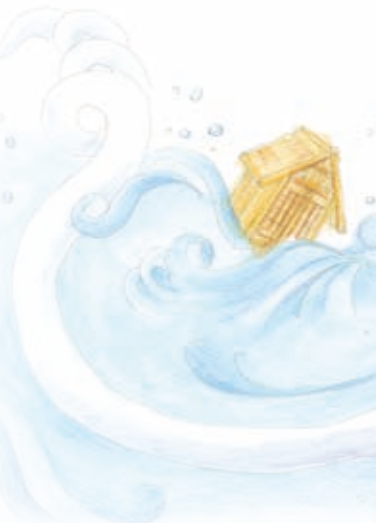
遠浅神明神社が再建されたのは、徳川家康が幕府を開いた慶長八(一六〇三)年のこと。

この社の揖斐川越えの対岸、蛎塚という集落には、蛇の宮というお社があり、大蛇が住んでいました。この大蛇は川をわたり、二つのお社を行き来していたようです。むかしから、揖斐川のこのあたりは、尾張と伊勢を結ぶ水路。船頭さんはここを通るとき、二つのお社を拝まないと、たちまち、川に濁流が渦巻いて、舟を沈めてしまうという言い伝えが古くから語りつがれていました。

揖斐川は明治時代になるまで、この辺りで川幅が急に狭くなったり、於多井川に合流したりと、交通の難所であり、洪水の危険もきわめて高い場所でした。

何もかも奪いとっていく水。そんな恐ろしい水を鎮めようと、村人たちは両岸に水難除けの願いを込めて神社を建て、毎日のようにお参りしたのでした。

遠浅神明神社は今も西外面に残されており、水神さまとして、人々の信仰を集めています。



遠浅神明神社(小田江神崎神社)

【参考図書】『長島町誌上巻』長島町教育委員会　一九七八年

44 水無し八丁と弘法大師

木曽町

むかし、むかし。

末川の上流、小野原という村に、それはそれは親孝行な子どもがいました。木曽馬の世話は、その子どもの仕事。ある日、いつものように赤ん坊を背負い、放牧場まで馬を迎えに行きました。人なつこい木曽馬は、いつもなら「ホーイ、ホーイ」と呼ぶ子どもの声を聞きつけると、ヒヒーンといなないて近よってきます。

ところがその日は、いくら呼んでも近よってきません。馬たちは末川の深い流れを渡り、向こう岸で草を食んでいたのです。大声で馬を呼んでも、声は川の流れにかき消されて、馬の耳には届きません。そうこうするうちに、赤ん坊はおなかが空いたのかむずかりだし、子どもは途方にくれてしくしく泣きだしました。

ちょうどその時、ひとりの旅の僧が通りかかりました。「なぜ泣いてるの」和尚さんは泣いている子どもにたずねました。

子どもは泣きながら馬を指差しその理由を話すと、「それは気の毒に。私が助けてあげましょう」和尚さんは微笑みながらうなずくと、川に向かってお経をよみはじめました。そしてもっていた杖で川をトントンつつくと、不思議なことに、それまで満々と流れていた川の水は、どんどん川底にしみこんでしまい、川原になってしまいました。

子どもは大喜びで向こう岸から馬を連れてきて、和尚さんにお礼をいうと、かけあしで家に帰っていきました。馬の群れと子どもをじっと見送っていた旅の僧は、夕暮れの道を月夜沢峠に向かって歩いていきました。

このときから、末川の水は地底を流れるようになり、村人たちはここを「水無し八丁」と呼ぶようになりました。

この旅の僧は、日本各地を歩いて百姓を救ってくれた弘法大師であったと伝えられています。

馬を放牧した牧草地に植えたカラ松林と「弁財天の岩」

川の中の「弁財天の岩」と言われる「大岩」とその上にある「祠」は、２ｋｍ程下流の「熊野神社」のお祭りの日に、現在もこの大岩にも「御神酒」をあげて、年に一度お祭りをしている。

【参考図書】『開田村誌上巻』村誌編纂委員会　一九八〇年

45 しゅうずと韋駄天走りの大男

本巣市

岩の間からこんこんと湧き出る清水。
あまりの美しさに手をひたせば、思わず声をあげるほどの冷たさです。
よごれものを洗ってはならんとあれほどやかましく言っておいたのに」地が揺れるほどのどなり声にすくみあがったのはこの家で働く下女です。
「もうしわけございません。うっかりして洗濯のための水にしゅうずを使ってしまいました。どうかお許しください」と泣きながらあやまりました。
主人はぷりぷり言いながら、「明朝暗いうちに出かけるから準備をしておけ」と命じました。
翌朝、まだ暗いうちに旅装束をととのえた主人は、さっそく清水寺をめざして出発。一目散に走り出しました。その速いこと、速いこと。胸にあてた笠が京まで落ちなかったほどでした。
清水寺へ到着した主人は、早速お参りしご祈祷をすませました。
帰路についた主人は持参のおむすびをほおばりながらひた走り、夜遅く家にたどりつきました。
それから七日目の朝、しゅうずは再びもとのようにこんこんと湧き出るようになり、村中の人々はたいそう喜び、主人に感謝しました。
昔の人は、水には神様が宿っていると信じ、水を大切に扱ってきました。
物を大切にする事は今も大切です。

【参考図書】『根尾村史』根尾村　一九八〇年

根尾押所の姥ヶ神社で「お姥様の水」が湧き出る

46 沓部の乙姫さま

下呂市

むかし、むかし。
都からきた美しい乙姫さまが、沓部の村を通りかかりました。長旅でたいそう疲れていた姫さまは、川原におりてしばし休憩。「まあ、なんてきれいな川だこと」乙姫さまは、シャワシャワと歌うように流れる水で手を洗うと、ここがどこよりも気に入って、川辺に住むことを決めました。
この川が馬瀬川です。川の水は青く澄み渡り、川底の白い石や黒い石、緑色の大きな石の一つひとつが、宝石のようにきらきら輝いていました。それから、乙姫さまは川の音に合わせて歌いながら洗濯したり、小鳥のさえずりといっしょに、機織りしたり、楽しそうに毎日を過ごしました。
そんな楽しい歳月もあっという間に過ぎて、都へ帰ることになりました。別れを惜しんだ乙姫さまは、「また、ここへ帰りたいから、どうか川を汚さないでね」と頼みました。
村の人々は、乙姫さまが都へ帰ってからも、屋敷や川の岩々をていねいに洗い清め、このあたりを「おとひめ」と呼ぶようになりました。
ある夏の夕暮れのことです。山すその酒屋の若衆が馬に乗っておとひめへやってきました。夕日はチカチカと川面を走り、シャワシャワと水の流れも軽やかに歌っているようでした。
おとひめの一番高い岩に腰をおろした若衆は、うっかり馬のわらじをぽちゃんと川に落としてしまいました。すると、今まで静かだった川面は大波となり、岩淵にぶつかったと思うと、逆巻く波は爆音をたてて竜巻となり、夕焼け雲は一瞬にして黒雲に。雲の中を稲妻は走り、酒屋の屋敷には雷が落ち、白壁土蔵も酒蔵も一夜にして燃え落ちてしまいました。
「ありゃ若い衆がおとひめの川で何かを洗ったか、汚れ物をほうりこんだんやろ」「そりゃ、おとひめのたたりじゃ」「酒屋のだんな、泣くに泣けんじゃろ」と村人はひそかに話し合っていました。
それからというもの、村人はおとひめをいっそう大事に清め、子どもたちには、おとひめの大岩にのぼらないよう、いましめました。

【参考図書】『金山町のむかしの話』金山町のむかしの話・編集委員会　一九八七年

馬瀬川に架かる乙姫橋から上流を望む

47 鎮守さまの竹やぶと清水

海津市

揖斐川沿いに広がる梶屋という集落には、八幡神社という鎮守さまがあります。

この鎮守さまはもともと南濃町の庭田村に祀られていましたが、洪水で本殿が流され、福江村に移されました。

ところがまた流されて宮地に。ここでも洪水がおき、梶屋に流れ着きました。

梶屋八幡神社には、不思議なことがふたつあります。ひとつは、一年中たけのこが生える社叢です。一株が周囲一メートルほどにもなるこの竹は、節と節との間が長く、黒い光を放つみごとな寒竹です。神社が流れ着いたところには必ず自生し、宮地へも梶屋に移ってからも、自然に生え始めたそうです。

この竹は、宮地と梶屋の戸数が増えると、その株数を増やし、戸数が減ると株数を減らす不思議な竹です。

鎮守さまの境内にはもうひとつ、ずっと昔から水が枯れたことのない清水があります。この神社のもとになっている京都の石清水八幡宮にも、同じようにこんこんと湧く清水があります。

美しい清水は万病にきくといわれ毎月一日と一五日には、地元をはじめ、遠く名古屋からもたくさんの人がお参りします。お盆と祭りの夜には、さまざまな絵がかかれた大提灯が、煌々と境内を照らします。

本殿と拝殿は昭和五五年に建て直されました。

不思議な寒竹は昭和五七年に海津町の天然記念物に、その翌年には、岐阜県の特別記念物に指定されました。

【参考図書】『海津のむかし話』海津郡教育振興『海津のむかし話』編集委員会　一九八七年

梶屋八幡神社

48 与三の火

一宮市

今から四百年前のこと。

起村と小信村の境を流れる小信川をせき止めて、大きな一本の川にまとめようという工事が始まりました。

しかし、毎日が失敗の連続。「これはただことではない。きっと水神様のお怒りにふれたのだ」「こうなっては人柱をたてるしかない」

そんな話はささやかれるようになると、小信村の与三という男が、自分から人柱になろうと申し出ました。

堤防の上に座りお経読み終えた与三がざんぶと渦巻く川に姿を消すと、人々は石や俵をいっせいに川に投げ込みました。そして、とうとう流れをせき止めました。

それからいく年かたった梅雨の晩のこと。地面をたたく激しい雨音を破って、堤防の方からお経を唱える声が聞こえてきます。驚いた村人が堤防をかけあがっていくと、月もない暗い堤防の一　点に不思議な青い火はふわりふわりと、浮かんでいました。その青い光の下では、白い水しぶきが、湧き上がっています。

「おや、あそこの堤防が切れるぞ」急を告げる声は村中に伝わり、みんな総出で土のうを積上げ、堤防を守りました。

そして明朝、ようやくわれにかえった村人は、

「あのお経の声は与三さんにちがいない」「あの青い火は、与三さんの魂だったんだ」

人々は、梅雨の晩の不思議な青い火を「与三の火」といつて、子どもたちに伝えるようになりました。

その後、ここの堤防は切れることもなく、村人たちは安心して幸せに暮らせるようになりました。

この川の近くには「人柱与光観音菩薩」建立され、毎年、しめやかに例祭を行い、与三の霊をなぐさめています。

【参考図書】『尾張の民話』小島勝彦　一九八一年

人柱観音

49 覚明さまとどうがん岩

木曽町

むかしのお話です。

岩郷村の鳥居集落は、木曽川のせせらぎの聞こえる美しいところでした。村のなかを中山道が通っており、その名のように街道のそばには大きな鳥居がたっていました。

鳥居の両側にはこれもまた大きな石灯篭が一　対たっていて、村の人々も、中山道を通る旅人もここから御嶽山を遥拝していました。

山は神々が住まうところ。自然を育む神聖な場所でしたから、御嶽信仰という宗教も生まれたのでした。しかし、鳥居の場所からは御嶽山はみえません。

ここから少し上がった山の中腹にどうがん岩と呼ぶ大きな岩があり、裾野まで美しく見えますので、御嶽の姿を拝みたい人は、わざわざそこまで登っていったものだといいます。

どうがん岩の上は平らになっており、まん中が少しくぼんでいました。そしてそこには、きれいな水がたまっており、不思議なことに枯れることはありませんでした。

覚明という立派なお坊さまが御嶽山への登山道を開かれたころ、この岩の上から、御嶽山を拝まれたようで、川合原からこの岩へ来るときは、木曽川にできている大きな渕の長ところを棒を使って自由自在に渡ったといいます。

どうがん岩のくぼみの水で目を洗うと、眼病が治るという信仰があり、村人だけではなく遠く松本や中津川の方からも

ここへお参りにきたものだといいます。

【参考図書】『木曽のでんせつ』生駒勘七　槌馬屋資料館　一九八九年

木曽郡木曽町神戸の御嶽遙拝所

神戸の御嶽遙拝所は寛永２（1625）年に山村良忠が再建し、文政４（1821）年７月に金剛院順明が石の華表（標柱）に建て替えた。
遙拝所は、北に長峰峠、西に三浦山、東に鳥居峠、南に神戸であるが、神戸の遙拝所では御岳山が見えないのでその山の上に「どうがん岩」という岩があり、そこから御岳山が拝めるからそこで拝むようにと言われていた。

50 お姫の井戸

美濃市

庄屋の五兵衛完は、空を見上げてため息をつきました。もう百日余り、雨は一滴も降らず、田畑の作物はほとんど枯れてしまいました。村の雨乞いも、三社百灯奉献、七社千度詣り、はては村をあげて雨乞いをする行事を二回繰り返しても、雨が降る気配はありません。思案にくれる五兵衛さんの頭に、「お姫の井戸」のことが浮かびました。長良川には大巻の淵と呼ばれるところがあります。川の流れが岸の大岩にぶつかり、大きな渦巻きができるためです。その大岩のてっぺんに「お姫の井戸」はありました。丸い井戸のようなくぼみがあり、いつも青い水をたたえていました。

そこには大巻の主の龍神のお姫さまが住んでいるといわれ、どんなに日照りが続いても、水が枯れることはありません。

―「お姫の井戸」を汚せば、龍神の怒りにふれて必ず雨が降る―

村にはこんな言い伝えがありますが、大洪水になる恐れがあるともいわれていました。「最後の手段はこれしかない」五兵衛さんは思いつめた険しい表情でついに決心しました。そしてその夜、「姫の井戸」の水を手桶で汲みほすと、不浄な板切れやごみをかぶせて、火を放ったのでした。

翌朝のことです。突然、黒雲を引きさくような雷鳴がとどろくと、激しい雨が降ってきました。雨は三日間降り続き、止むことはありません。

「大水だ。堤が切れたぞ！」濁流の長良川は、怒り狂う龍神のようです。「雨だけを祈ったのに…」五兵衛完は、ふらふら濁流に、近づいていきました。大雨は六日間降り続いて大洪水を起こし、近郷の村々は家や田畑が流され、大きな被害を受けました。

五兵衛さんが行方知れずになったというわさは、村中に知れわたりました。

五兵衛さんは洪水の見回り中、あやまって川に落ちたのだとみなが思い込んでおり、五兵衛さんのしたことも、その苦しい胸のうちも、誰一人知る者はありませんでした。

【参考図書】『美濃市のむかし話』美濃市読書サークル協議会　一九七七年

旧美濃橋上流のお姫の井戸

52 白竜の昇天

愛西市

立田村のほぼ真ん中、鵜戸川近くの小茂井という集落に「竜池」と呼ばれる池がありました。竜池は朝日が昇るときらきら輝き、夜は月を映し出してとても幻想的に光ります。自分の姿を池に映すとまわりの景色もくっきりと池に映し出されるほど、それはそれは美しい池でした。

しかしいつからか、「竜池で溺れると二度と浮かんでこない」だとか「とてもきれいな池なのに底が見えないのはおかしい」と噂になり、竜池は底なし池だと恐れられるようになりました。

昭和の初めのころです。木曽川の改修工事で砂がたくさん出るようになると、新しい土地を田んぼにするために、村人たち砂で池を埋めてしまうことにしました。ところが工事が始まって七日が経ちましたが、ちっとも池は埋まりません。人々は不思議に思い、お坊さんに相談しました。するとお坊さんはこういいました。「その池には昔から白い竜が住んでおる。今すぐ池のそばに竜を祭った社を建てるんじゃ」それを聞いた村人たち社を建て、「白竜社」と名付けました。

入神式の日のことです。朝早くに村人たちが集まると、さっきまでの晴天はどこへやら、西の方がにわかに曇りはじめ、ものすごい突風が吹き荒れました。突風はいつのまにか竜巻にかわり、鐘は引きちぎられ、竹が縄のようにもつれ、木も草も飛ばされてしまうありさま。村人が恐布におびえた次の瞬間、暴風雨は去り、もとの晴天に戻っていました。まったく不思議なことに村人に被害はありませんでした。

翌日から工事を再開すると思ったとおり工事が進み、村人たちは「白竜様の昇天のおかげだ」と口々に言いました。

当時の村人たちは、白竜のためにわずかに池を残すことにしました。

池の縁に建立された白竜社は今も残っており、そこでは毎年お祭りが行われています。

【参考図書】『立田村史』立田村　一九六五年

龍神社
昭和26年からの「立田地区補助干拓事業」で「平瀬池」と同様に「ひょうたん池」が埋め立てられ、竜神を祀った。三和地区の田代池、石田地区の七石池、さらに松田地区の平瀬池の埋め立てでも、竜神が祀られている

53 庄屋さまの雨乞い神事

岐阜市

来る日も来る日も、真夏の太陽はぎらつき、いつもならまぶしいばかりの青田も、すっかり元気がありません。

空を見上げた人々は、「早く雨が降ればいいのにのう」と、ため息をつくばかりでした。輪中地帯の災害は水害だけではありません。ぐるりを川に囲まれていても、用水という設備がなかったため、雨が降らなければ、作物はたちどころに枯れてしまうのです。

困った村人たちは、「そうだ！お百度参りをしよう」と、村中交代で氏神さまに願をかけました。相撲や浄瑠璃、手踊りも、雨乞いの大切な神事です。色鮮やかな衣装を身にまとい、夜を徹して、降雨を願いました。

しかし、空はますます青く、雨が降る気配はありません。頭を抱えた村人は、村の庄屋さまに相談しました。「こうなったら、もはや、多度神社へお参りするしかあるまい」庄屋さまたちは早速身支度し、多度神社で雨乞いの黒幣をもらい、その黒幣に降雨を祈りました。

すると、どうでしょう。雷鳴はとどろき、大粒の雨が落ちてくるではありませんか。「庄屋さま、ありがとう」「多度神社さま、ありがとう」喜んだ村人たちはそう叫びながら輪になって踊りだしました。

「慈雨とはまさにこのこと。さっそく、皆でお礼に行こう」庄屋さまはそう言い渡すと、多度神社に黒幣を返し、お礼参りをしたそうです。

※柳津町では近代にいたるまで数年毎に干ばつが発生、この民話は、慶応三（一八六七）年の干ばつと雨乞いの実話を元に、創作しました。創作伝説で参考図書は無し。

円城寺の芭蕉踊り
芭蕉踊は、岐阜市柳津町南塚などでも行われていたが、現在は円城寺地区だけで行われ、毎年、8月22日の秋葉神社の祭礼に奉納される雨乞い踊りの1つで江戸時代から行われている。
青竹で作られる芭蕉は、太さ7寸（21cm）、長さ12尺（363cm）で、その上部を1年の月数の12で割り、雨乞祈願には白紙、お礼参りには5色（金銀赤青黒）の色紙を用いる。

54 百文池 ～品又越えの清水～

揖斐川町

揖斐川と姉川との水系を分ける尾根。その峠が品又越えで知られる百池峠です。

品又越えは、美濃から近江への〝紙の道〟であり〝炭の道〟。数百年もの間、江州の炭焼き職人はここの窯で炭を焼き、彦根方面へ運び出したといわれています。

職人や行商の行き来も絶えず、出稼ぎ石工たちが美濃に入るのもまた、この品又越えでした。　品又谷に沿う道は、尾根に近づくと、しだいに川を離れ険しくなります。急な坂を登りつめ、やっと峠が見える頃、一息ついて、水がほしいところです。

しかし、もう踏み越していく沢は見当たりません。あるのは、濡れた麦石（花崗岩）の岩壁だけ。山側の岩盤を伝うように清水が滴り落ちていますが、手拭を浸すことはできず、手にすくって飲むこともできません。

ある日、歩荷が濡れ岩にさしかかると、旅の石工が休んでいるのに行き会いました。並んで腰をおろし話しているうちに、「おまえも石工なら、この岩盤に、清水を受ける池を掘れんか。ここで水が飲めると、みんなも助かるが…」と、話を切り出しました。

ところが、懐をさぐると銭百文、「おまえも職人、ただで仕事を頼むつもりはないが、そうはいっても有り金はたったの百文、それぐらいの池でもよいわいな」峠に程近いこの場所で水がほしいのは、誰もの願い。「よしよし」と掘りあげた池は、銭百文に見合う大きさかというと、なかなかどうして。具合よく流れをつくり、顔を突っ込んで飲む池・手にすくいとって口に運ぶ池、手拭を冷やす池と、三段構えの水溜です。

以後、品又越えの水場として評判を呼び、銭百文でできた池だとの語り伝えから、「百文池」と呼ばれるようになりました。そして品又峠もまた、「それ、あの百池のあるところよ」と、「百池峠」と呼ばれ、旅人の憩いの場所となりました。

世情は変わり昭和五八年春、林道の工事によって、岩盤も壊されてしまう予定でしたが、池の保存を望む声は濃江両国から高まり、百文池は今も変わらず、その姿を残しています。

【参考図書】『坂内のむかし語り』さかうち昔話編集委員会 坂内村　二〇〇四年

百文池
県道40号線で滋賀への峠付近。滋賀県境（奥伊吹スキー場）から岐阜県側に約150m戻った側壁崖面の約４ｍ上に、直径30㎝程の「池」がある。

55 観音寺の和尚の祈祷

海津市

昔、昔のお話です。

青く豊かに広がる濃尾平野の米どころ「平田」にも葦が生い茂る沼地の時代がありました。木曽・長良・揖斐川の三大川が運んだ土砂は徐々に三角州を形成し、その高所に人々が住むようになったのです。

延文五（一三六〇）年八月、この年は長雨が続き、川の水かさは増す一方。村の人々は、黒雲が立ち込める空を見上げ、雨がやむのをただただ祈っているばかりでした。人々の祈りも天には届かなかったのでしょうか。稲妻が暗い夜を駆け抜けると、ついに濁流は堤防を切り裂き、田畑や集落に襲いかかったのです。

怒涛のような夜が明けると、あたり一面は泥の海に。稲田は無残な姿をみせています。昨年も一昨年もその前も、洪水で収穫はごくわずか。絶望した百姓たちは、村を捨てる決意をしたのです。

住み慣れた我が家を捨てる村人たちの心の内には、無念さが渦巻いていたのでしょう。手入れされることもなくなった田も畑も、見る見る間に、荒れ果てていきました。

そんな窮状を嘆き哀しんだのが、観音寺の住職、宥恵です。なんとか堤防を復旧しようと一心不乱に祈りを捧げました。残った村人は、この姿に心を打たれ、堤防の修理工事に力を注ぎました。

堤防は見事に復旧し、長雨にも耐えうる頑強なものになりました。

宥恵の執念にも近い努力を高く評価した領主は、燈明料として土地を寄進、観音寺を神宮寺とする鳩森神社の禰宜、氏貞も社領の一部を寄進しています。

こうして村には平穏な暮らしが戻り、田も畑も実りの季節を迎えることができました。

【参考図書】『平田町史上巻』平田町役場　一九六四年

勝賀の大池神社
この話は、平田町史の「大榑荘勝村郷」で「僧宥恵が堤に入眼したので堤防がようやく完成した」事実を昔話風に書き改めたものである。
天正14（1586）年の洪水以前、古木曽川は南流して勝村（現勝賀）で大榑川に入った後、途中から現平田公園～千代保稲荷神社を南下しており、現勝賀地点は洪水が頻発した。
大榑荘勝村観音寺が何時頃廃絶したか不明で、またその寺跡らしきものも皆無なので、旧勝村の所在地の勝賀の切れ所（堤防決壊場所）に水神を祀った大池神社の写真を用いた。

56 竜宮乙姫岩の伝説

中津川市

雄大な山々に囲まれ、四季ごとに自然の美しさを見せてくれる山口。

木曽川には大小の奇岩怪石が屹立し、大変素晴らしい景観です。中でも一番大きい岩を乙姫岩と呼び、その周囲にはまるで乙姫に仕えるように、殿岩・獅子岩・波切岩・亀岩・振袖岩・伊勢木岩・屏風岩といった岩が川面に浮かび、見る人々の感動を呼んでいます。

ところは変わり、乙姫岩から遥か上流の上松寝覚。木曽川の激流で削られた巨大な花崗岩はとても壮大で、まさに自然の彫刻です。そこには浦島太郎が住んでおり、毎日釣りをしていました。

ところがある日、大雨が降って川が大増水。岩の上で釣りをしていた太郎は、濁流に呑まれてしまいました。すると不思議なことに岩が生きた亀に変わり、浦島太郎を乗せ乙姫岩まで流れてゆきました。流れ着いた太郎を発見し、介抱をしたのは乙姫岩に住む乙姫。いつしか、太郎と乙姫は惹かれあってゆきました。しかし、太郎は次第に姫との身分の差に悩むようになり、乙姫を愛するがゆえに別れることを決心しました。

太郎が寝覚へ帰る日、乙姫は「また会うときまで、この箱を開けずに待っていてください」と玉手箱を手渡しました。

寝覚に帰った太郎は、乙姫のいない淋しさを紛らわすように暮らしていましたが、ついに我慢ができなくなり、玉手箱を開けてしまいました。すると中から白い煙が立ち上り、太郎は白髪のおじいさんになってしまったのです。その後、太郎と乙姫が会うことは二度とありませんでした。

現在の乙姫岩には乙姫の神が祭られており、縁結びの神として信仰されています。

また乙姫岩の岩間から湧き出す鉱泉は乙姫が入浴に使用した湯であり、万病に効果があると言われています。

【参考図書】『山口村誌下巻』山口村誌編纂委員会　一九九五年

乙姫大橋から望む乙姫岩

57 小川の大滝の主

郡上市

弓掛川は、アマゴヤイワナが泳ぐ美しい清流です。

この川は小川集落の下流で白い飛沫をあげて流れ落ちる滝になっています。小川の大滝と呼ばれたこの滝の滝壺はかってはとても深く、川流しの材木が滝壺まで流れて来ると、滝壺の底に住む主に引きずられるかのように深く沈んでしまい、しばらくたってからパシャという大きな水音を立てて、水の上に跳ねあがったそうです。

江戸時代末期のことです。村の翁が滝の尻で投網をしたところ、急にその網が滝壺に向かって動き出してしまいました。驚いた翁は岩角で両足をふんばって踏みこたえようとしましたが、網を持つ手首がちぎれるほど、網はぐいぐいと引っ張られる有様。あまりの強い力に、翁は生きた心地がしなかったとか。

「寝ても起きても、阿弥陀さまと二人連れやで。どうもこうもならんときにはお念仏を唱えるんやな」このとき、とっさに翁は、お寺のお坊さまの言葉を思い出し、「なんまんだぶつ、なんまんだぶつ」とお念仏を唱えました。

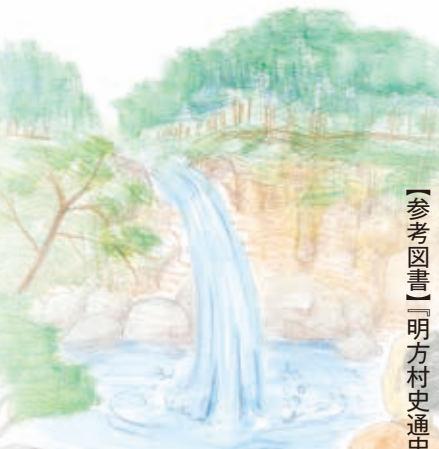
すると、どうでしょう。網が水からずるずると抜け、満身で綱を引っ張っていた翁は、力あまって岩の上にひっくり返ってしまい、しばらく息が止まって動けませんでした。きっと、滝壺の底に住む主がお念仏におじけづき、滝壺に引きずりこもうとしていた網を、放してしまったのでしょう。

恐ろしい目にあった翁は、「大滝にだけは行くでないぞよ。あすこには主がおるでな」といつも言うようになりました。

それから、材木を流す川の衆は、大滝に差し掛かると、お神酒をさしあげるようになりました。

お神酒を差し上げないと、滝壺は荒れ、大切な材木は、呑みこまれてしまうからです。

【参考図書】『明方村史通史編下巻』明方村教育委員会　一九九三年



小川の大滝（雄滝）

この大滝（雄滝）に伝わる椀貸し伝説は、「河童の妙薬の浄福寺（河童伝説参照）に急な客が来た時、大滝に椀を貸してくれるように頼みに行った」と伝わる。なお、右岸側の岩が「阿弥陀様」の顔に似ていると、最近注目されている。

58 船着き観音

可児市

今ではすっかり穏やかな可児川もその音は氾濫し、あたり一面が海のようになることもたびたびでした。

船着き観音さまが、広見地区の山岸という集落においでになったのもそんな大雨の日のことでした。雨粒は激しく川面をたたき、川の水はあふれんばかり。そんな濁流のなか、木の葉のように漂う小舟を、村人は見つけました。「こんな日に、舟を出しておる者がおるぞ。どうもなければええが…」「おい、変やぞ。舟が光っとる」びっくりした村人は大急ぎで船を出し、波間に見え隠れしている小舟をめがけて、力いっぱいこぎ始めました。

どのくいらいたったことでしょう。やっとの思いで小舟に近づき中をのぞいたとたん、村人は両手を合わせ、その場にひれ伏しました。「観音さまや、観音さまがおいでになる」小舟のなかには、金色に光り輝く観音さまが休んでいらっしゃったそうです。

「この観音さまは、わしらを助けにきてくださったにちがいない」「ありがたい、ありがたい、はようお連れしよう」村人は、観音さまの乗った小舟を自分たちの舟にしっかりとくくりつけ、河岸をめざしました。

するとどうでしょう。雨はやみ、風はおさまり、舟は川面をすべるように進みました。そのうえ、太陽まで顔を出し、あたり一面がぱあっと明るくなりました。

なんとも不思議な話です。村人たちはさっそく観音堂を建立し、観音さまをお祀りしました。

この観音さまの手には水かきがついていることから、舟や川で仕事をする人たちがお参りにくるそうです。

そして、水神さまにお参りしても日照りが続いたときに最後の頼みとして雨乞いをお願いするそうです。

古老の話によれば、そんな願いは通じ雨をいただいたそうです。

【参考図書】『可児のむかし話』可児町民話の会　一九八〇年

観音堂
毎月10日の1時から付近の人々が観音堂を開けて集合する。

59 キツネのひっこし

木曽岬町

渡し舟にまつわる、お話です。

ある晩、船頭さんの家に、たいそう美しい女が訪れました。「明日の晩、つたごおりへ船を出してください」

「つたごおり」とは、今で言う、知多半島

ここからは、海を渡らなければなりません。真っ暗な夜に船を出すのは、とても恐ろしいこと。恐れをなす旅人も多かったそうです。

「船賃は、たんと払います。どうぞお願いします」女の熱心な頼みを、船頭さんは二つ返事で引き受けました。

さて翌晩。男女に老人子どもが、ぞろぞろやってきました。みな、不思議と女によく似た顔つきです。

「あの灯りの方へやってください」と女が指す方を見ると、黒々と広がる海のはるか向こうに、灯りが見えました。ところが、どれだけ櫓を漕いでも灯りは近づいてきません。

ようやく岸に着いたのは、東の空が白みはじめた頃でした。着いたとたん、お客たちはいっせいに船から飛び降り、みるみるうちに、一人残らず駆け去ってしまいました。

「こらぁ、船賃よこせえ」すると、後ろに小判が山と積まれて、光っていました。後で見てみると、その小判は全部、ただの木の葉。

あれあれ、どうやらキツネに化かされてしまったようです。

その後、村ではとんとキツネの姿を見かけなくなりました。

【参考図書】『木曽岬町史（木曽岬村史改訂版）』木曽岬町役場　一九九八年

対岸から見た弥富市森津の茂み
場所が不定なので、「森津の藤公園」を鍋田川右岸側から撮影した。

60 白竜退治

池田町

池田町の山洞区に伝わるお話です。

平安時代、山洞村のあるところは池田荘小池村でした。領主は野原常依といって、母は俵藤太の名で知られた藤原秀郷の娘でした。

藤太の近江三上山の百足退治の伝説は有名で、平将門の乱を平定して功績を挙げ、源氏・平家に並ぶ武門の棟梁として、多くの家系を輩出しました。

この頃の小池村には大きな池があり、池を見下ろすように池田山がそびえていました。ところが、その池には白竜が住んでおり、村里へ現われては荒らしまわるので、農民たちは田畑を捨て、村には住む人もいなくなりました。思いあまった野原常依は俵藤太に頼み込み、白竜を退治することにしました。

小池村にやってきた藤太は、山の上に日の丸を描いた六本骨の扇を立て、弓に白羽の矢をつがえて放つと、矢は池の中に落ちました。この矢の鋭さに恐れをなした白竜は、池の堤を破って逃げ出しました。白竜の巨体が体当たりした堤防は無残に崩れ落ち、空を切り裂く激しい雷雨に山は牙を剥き、怒涛のような泥の波は、池も谷も押しつぶしてしまいました。この土砂は平地を作り、新しい村が誕生しました。

これが今の山洞村です。野原常依はその村に城を築き、いつまでも栄えたといいます。

この頃から村の南を流れていた喜助谷は鎌ヶ谷と改められ、時代は下り、鎌ヶ谷一　面を霞のように桜が埋めつくすことから、霞間ヶ渓と呼ばれるようになりました。

池田荘の史料に山洞の名は登場しても、俵藤太の名を見つけることができません。

洪水に苦しむ人々が、平安時代の英雄・俵藤太だったら、池の主を退治してくれるという願いが、こんな民話を生み出したのでしょうか。

【参考図書】『池田町史通史編』池田町　一九七五年

白蛇（春日）神社

地元の古老は山洞の春日神社を「白蛇神社」と教えてくれたが、『池田町史通史編』には「白蛇神社」に関する記述はなかった。

61 美山の雨乞い

山県市

美山の山里に住んでいた人々は、日照りに苦しめられていました。

日照りは、暮らしにひびいてしまう大事です。人々は必死になって、雨を願いましたが、神さまにすがるしか、道はありませんでした。

神崎という集落の雨乞いは、夏坂の谷で行われました。太鼓の合図で村中の男たちが集まると、般若心経を唱えながら淵に行き、塩で清めた白い石を捧げるのが慣わしでした。そして、雨乞い歌をみんなで歌いながら、太鼓を叩き、踊ったりしました。この時、一升瓶いっぱいの水を八合分だけ、淵に注ぐのです。こうすると八合目の雨が授けられるのです。

もし、一升全部注いでしまうと、下流は大洪水になってしまう。下流の村のことまで考え、この慣わしは続けられました。円原と今島の境にあるふじ金という集落も、同じやり方で雨乞いをしました。

雨乞いを行う地点は、深い立穴鍾乳洞。昔から竜王さまが住んでいると信じられていて、雨乞いの時以外は、村人は近づこうとしませんでした。

日照りが続き思いあまって雨乞いを行う日には、河原から持ってきた石に「祈　八大竜王」と書いて、鐘乳洞に投げ込みます。石が落ちていく音がいつまでたっても鳴りやまず、みんな、怖くて動けなかったそうです。

音が消えてしまったら、鍾乳洞を取りまいて般若心経を唱え、天を焦がすほどの大きな焚き火をしたそうです。焚き火の回りで、太鼓を叩き、踊り続ける。蓑と笠をつけたまま、夜になっても、息が続く限り、踊り続けます。すると不思議なことに、三日後には、お恵みの雨が降ってきて、大きな焚き火を消してしまいます。

「雨じゃ、雨じゃ。竜王さまが、雨を恵んでくださった」人々はひざまずき、雨とうれし涙にぬれながら、お神酒がわりの徳利の水を、鍾乳洞のなかにお供えしたそうです。

【参考図書】『美山町史通史編』美山町　一九七五年

「雨乞いの龍」の掛け軸がある
山県市葛原の法幢寺

62 小川入の姫渕悲話

上松町

源氏と平家の争っていた、源平の時代のお話です。

里では田植がはじまった初夏のこと。京都から、美しいお姫様が逃れてきました。

幼いころ別れ別れになった弟が、木曽の山中にかくれ、生活していることを聞き、追手をかわしながら、小川の里までたどりついたのでした。

しかし追っては執拗に追いかけてきます。親切な村人の好意で麻畑にかくれ、追手をやり過ごすことができましたが、またいつ追手が引き返してくるともかぎりません。

お姫様は村人にお礼を言い、疲れた足を引きずるように、山の奥へ奥へと踏み分けていくと、大きな渕があらわれました。数日来の雨で川は増水し、渕はまさにあふれんばかりです。お姫様は川を越すことができず、岩の上で一休みしました。

そのときふと、逃げる途中で見た美しい田園風景を思い出し、美しい声で田植歌を歌いながら、田植えの真似を始めました。追手を忘れた幸せな時間でした。

一方追手は、お姫さまがあわててこぼしていった匂い袋の、じゃ香が点々とこぼれているのをかぎつけて、岩の上で唄うお姫さまを見つけてしまいました。

「いたぞ」「姫がいたぞ！」口々に叫ぶと、わっと襲ってきました。もうどうすることもできません。お姫さまは会えなかった弟の名を叫びながら、増水した深い渕に身を投げました。

このことがあってから、お姫さまが亡くなった渕を、姫渕と呼ぶようになりました。

村人たちは、お姫さまの霊をなぐさめるために、渕のほとりに姫宮と呼ぶ小さな祠を建てました。

小川入のじゃ香沢は、お姫さまが匂い袋を落としたところと伝えられ、また、お姫さまが隠れた麻畑は、麻が良く育つと言われています。

【参考図書】『上松町誌第二巻民俗編』上松町誌編纂委員会　二〇〇〇年

姫淵を渡った奥の姫宮神社
赤沢美林内の姫宮神社は木曽谷御料林内で唯一の神社で、10月15日の祭礼の日には、営林関係の人びとが中心になって祈願しているとのことである。
御料林当時は高倉神社にあり、現在の神社は、帝室林野局が大正10(1921)年10月にこの麝香沢の地に遷宮したものだという。

63 大浦の蛇

羽島市

大浦は木曽川右岸の村です。

ある夏のこと。豪雨が続き、木曽川の水かさは増すばかり、青々と育った作物も危機に瀕していました。村人たちは、打ち続く豪雨のなか、渦巻く川面を不安そうに見つめていました。すると濁流のなか、巨大な一頭の龍が、大浦の川岸に近づいてくるではありませんか。震えながら堤防の陰に隠れる人々。しばらく様子をうかがっていましたが、荒々しい様子はありません。

村人たちは、恐る恐る川岸に近寄ってみました。流れ着いていたのは、木で造られた龍の頭。首から下を切り落とされた、たいそう悲しげな表情だったといいます。

「龍は水の神様のお使いじゃ。お祀りしてやろう」大浦の人々は、村の氏神さまに奉納しました。するとどうでしょう。豪雨はおさまり、空も明るくなりました。なんとも不思議な話です。この年は、田も畑も、実りの秋をむかえたそうです。

「あの龍のおかげじゃ」黄金の穂が豊かに実る稲田を見てたいそう喜んだ村人たちは、傷ついた龍のために、首から下を付け加えることにしました。

誰ひとりとして龍の本当の姿を知りませんでしたが、聞き伝えや想像を加えながら、一年がかりで雄雌の一対を造りました。

翌年も豊作が続きました。村人たちは感謝を込めて総出で龍の中に入り、稲穂が実る村中をねり歩きました。

「大蛇が這っていくようじゃ」いつしかこれを、「大浦の蛇」と呼ぶようになったといいます。

昭和二十九年を最後に、この姿は見られなくなりましたが、昭和六十一年、修築されて見事に復活。

鐘と太鼓の音にのり、空に向かって火を噴く勇壮な龍の姿は、羽島市の行事や運動会で見ることができます。

【参考図書】『はしま市のむかし話』羽島市子ども会育成協議会　一九八一年

大浦の蛇（岩田光弘氏撮影）
大浦地区に伝わる「大浦の蛇」は雌雄2体で、共に長さ15m、胴回り4m、頭の大きさ1.5m、頭の重量20kgで、口に備えられた花火で火を噴く勇壮な龍である。

64 業平寺の大蛇 垂井町表佐

垂井町

在原業平は六歌仙のひとりと称えられた平安時代の歌人です。

権守（国司の長官に準じた官職）として美濃国へ赴任し、垂井町の表佐に御殿を建てました。村人から業平寺と呼ばれたその御殿はとても広く、そのひとすみには、底なし沼があったようです。

ある日のこと、業平が池の近くを散歩していたところ、突然、池の水が、渦を巻きはじめ、目をぎらぎらさせた大蛇が、池の真ん中に姿を見せました。驚いた業平は、一目散に逃げ出しましたが、そんな業平を、美しい女の声が追いかけてきました。

「私はこの池に昔から住んでいる大蛇です。今日、天へ昇ろうしましたが、この姿を見られたら、もう天へ昇ることはできません。私は、もう一度修業をやり直します。今度、天へ昇れるのはいつになるかわかりませんが、その日までこの池に住んでいます。もし、雨などほしいときは、私がお手伝いしましょう」

業平がこわごわ後ろを振り向いたときには、大蛇の姿はなく、池の水面は何もなかったように静かに輝いていました。

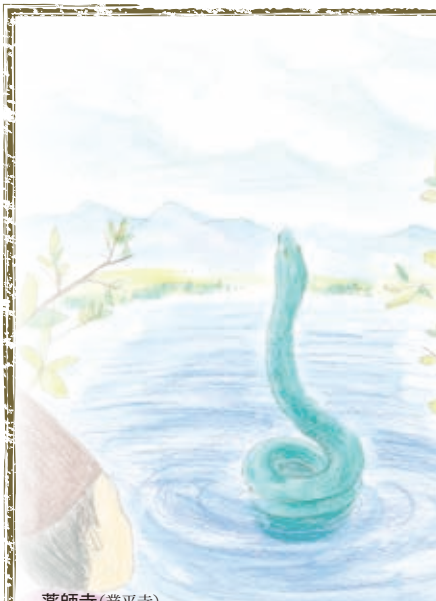
そのあくる年は、大日照り。大蛇の言葉を思い出した業平は、池のまわりにしめ縄を張り、村人たちとともに、雨乞いのお祈りをしました。

すると、どうでしょう。しばらくすると、池の水がさざめきだし、真っ黒な雲が天を走り、大粒の雨が降り出しました。

「雨じゃ、雨じゃ」「なんと、ありがたいことじゃ」村人たちは、喜びのあまり、踊りだしました。それから、日照りになると、村人たちは、業平寺へ集まって、雨乞いをするようになりました。

この業平寺は、江戸時代に薬師寺として再興されました。

【参考図書】『垂井のむかし話』垂井町教育委員会　一九八四年



薬師寺（業平寺）
在原業平は元慶4(880)年美濃権守に任じられ、美濃国府（現垂井町府中）に赴任して垂井の表佐に館を建立。同年に業平が亡くなると、天皇の勅願により館跡に業平寺が開創されたと伝えられている。

65 水のない谷

中津川市

笠置山の中腹のヒノキ林のあたりに、ポツンと一軒だけ家が建っていました。ある暑い夏の日のこと。この家へ旅の坊さんがやってきて、「こりゃ暑くてたまらん。すまぬが水を飲ましてくれないか」と言うのです。

古ぼけた衣をまとった坊さんの顔には汗が噴出して、いかにも疲れた様子です。ところが、水をあげるためには、少し離れた井戸まで行かなければなりません。

「この付近は水が少なくて、差し上げる水もございません」。井戸に行くのが面倒だったこの家の人は、にべもなく断ってしまいました。「ああ、そうかのう」、がっかりした旅の坊さんは、肩を落として足を引きずるように立ち去っていきました。

するとどうでしょう。その夏は、来る日も来る日も一粒の雨さえ降らず、この家の裏の谷は、枯れ果ててしまいました。それから毎年夏になると、この谷の水は石や岩の下をくぐるようになり、まったく水が流れません。ほかの川は水が流れているのに、この谷だけはいつも川底がむき出し。雨が降るとドドッと濁った水が流れますが、あっと言う間に、石の下にもぐってしまいます。

「旅の坊さんに水をやらなかったので、この谷だけ水のない谷になってしもうた」、と村人はささやくようになりました。

今でも天気が良い日が続くと、谷は石ばかり。上流や下流では水が流れているというのに、ここだけは水を見ることができないということです。村の言い伝えによれば、旅の坊さんはそのころ全国を行脚していた弘法大師だったと言われています。

【参考図書】『蛭川村の伝説』蛭川村教育委員会　一九七七年

昔話の場所は和田川左岸の蛭川村奈良井区の大石近くのだんだん畑のある場所である。

66 光明寺流れ

扶桑町

むかし、むかしのお話です。

大雨で木曽川があふれだし、激しい濁流にさらわれて、山那神社のお社が流されたことがありました。

洪水が治まったある日のこと。

一宮の光明寺の住職が頭痛で床についていたところ、住職の枕元に、見たこともない気高い女性があらわれました。

「川上の山那の里のものだ。わたしの化身は流されたままの姿でこの寺の森にある。馬を用意し、早く里へと返してほしい」そう言うと女性は姿を消してしまいました。

住職が寺侍といっしょに森を調べてみると、木の枝に、馬に乗った女性の神像が見つかりました。

その慈悲深い面持ちは、枕元に立った女性に瓜ふたつ。きっと山那神社の神だったのでしょう。

「不思議なことがあるものだなあ」光明寺から知らせを受けた山那の人びとは、驚きつつも御神体の帰還をよろこびました。

洪水の被害を受けて仮のお社のままだった山那神社は、その後しばらくして建てなおされ、里の人びとの手によって後世まで厚く祀られました。

【参考図書】『扶桑町史』扶桑町　一九七六年

山那神社

67 水よぶコイ

下呂市

むかし、雨が降るたびに、益田川が大変荒れました。

荒れ狂う水に削られて、上呂の久津八幡さまの前の川岸も、どんどん八幡さまの方へ押しよせてきました。

「ああ、きょうも雨ふりか」「こんども、また川の水が増えてくるぞ。」村の人たちは、川をながめて相談していました。

「このままでは、田畑も道もほりとられてしまう。」

「そのうち、拝殿までも流されるわい。」

すると、長老の弥作じいが、「ありゃ、拝殿のひさしに彫りこんであるあのコイが水をよぶんやとしか思えん。あのコイを作んなすった和田さま（飛騨の匠）に相談しようと思っとる。」と言い、翌朝、匠の住んでおられる高山へいきました。

弥作じいの話をうなづきながら聞いておられた匠は、「それでは、しばらくこの場でお待ちくだされ。」と立ち上がり、仕事部屋にはいりました。

トントン、トントンーーーと何やら木をきざむ音が聞こえてきます。

しばらく待っていると、匠が彫りきざんだ矢を見せて、「この矢を持ち帰って、あのコイにむけて取りつけてください。」と言いました。そうしてその矢を言われた通りに取り付けたところ、まったく大水の心配がなくなり、村は安らかになりました。

村人たちは、これを『水よぶコイ』と名づけて、語り伝えてきました。

（このコイと矢の作り物は、久津八幡宮の拝殿のひさしに彫り込まれ、現在も大切に保存されています。）

【参考図書】『萩原のむかし話』萩原むかし話・編集委員会　一九七八年

久津八幡宮

68 大ほら貝と白ぬけ

揖斐川町

むかしむかし、西津汲の蟻山と三田倉山の境の尾根に、大きな池があって、そこにはそれはそれは大きなほら貝が住んでおったそうじゃ。

ある大雨の夜、西津汲の庄屋の夢にその大ほら貝があらわれて、「庄屋さん、長くお世話になったが、わたしは今晩、池を出て、川を下って海まで行くことにしました。」と告げました。

これを聞いた庄屋は、「これは、大変なことになったぞ。」と思い、大ほら貝に頼みました。

「もし、西津汲の方から下られるなら、村は全滅してしまいます。どうか三田倉山の谷の方から下ってください。」

まもなく、ドドドッーという大きな音がして、池の水と石が山から落ちていきました。水と石は三田倉山の谷を下っていったので、西津汲の村は、無事でした。

翌朝、村人たちが池に行って見ると、池は白ぬけ（崩壊地）になっていて、あとかたもありません。

そこから三田倉の谷を見下ろすと大ほら貝が通った跡が白い帯のようになっていました。

【参考図書】『久瀬のむかし話上巻』久瀬のむかし話作成実行委員会　一九九八年

平成18年5月揖斐川左岸斜面で発生した東横山地滑り
（『地すべり技術Vol.33、No.2、口絵写真』より）

69 城山の白狐

関市

その年は長い間日照りが続き、津保谷の稲田もすっかり干上がってしまいました。

「こりゃあいよいよ城山の『権現の神』に雨乞いするよりしょうがないぞ」

「しかしあそこは危険な山じゃからなあ」

城山の頂上の小さな池をさらえると『権現の神』が雨を降らせてくれると言われていました白装束の村人たちは組頭を先頭に、足場の悪い山道をたいへん怖い思いをしながら頂上の池にたどりつきました。

「池の水はカラカラだが、とにかく掃除をして祈るとしよう」皆で、一心に念仏を唱えると、あたりが暗くなって、雨粒がポツリポツリと落ちてきました。やがて、雨は横なぐりのどしゃぶりに変わり、稲妻が光ります。村人は、あわてて山をおりましたが、組頭は一人、道に迷ってしまいました。

運よく小屋を見つけた組頭が疲れて寝ていると、やせ細ったとがり口の男が脇に立って言いました。「わしは、『権現の神』じゃ。お前たちの祈りは確かに聞きとどけたぞ。帰りはこの傘を使うがよい。」言い終わると煙のように姿を消してしまいました。

授かった傘をさして組頭が村に戻ると、村人が「その手に持っている里芋の葉はなんだ。」と聞いてきました。

「これはどうしたことか、傘だとばかり思っていたが…」

「どうやら白狐に化かされたようじゃ。」

「とにかく、雨を降らせてくださったのだから、ありがたいことよ。」

村人たちは、城山に手を合わせ、それからは白狐に化かされても怒らなくなりました。

【参考図書】『武儀町のむかし話』武儀町読書サークル協議会　二〇〇三年

城山の白山神社
城山は関市下之保大門側の小山で、頂上に大門城が在った。『濃洲洵行記』によると、交通の要所で問屋も二か所あり、金山からの白木も駅送され、町・大門の名が残る稲葉伝右衛門の城下であったという（『武儀町史』より）。

70 大日石

桑名市

むかし、揖斐川沿いの南之郷には、大水のときに流れてきたという大きな石が祀られていました。村人が「大日さん」と呼んでいた石は、お堂が大水で流されて、石だけが残されました。

明治の中ごろ、たびたび洪水がおこるので、堤防を改修して、川幅を広げることになりました。村の家や田畑が川底に沈むことになり、このままでは大日さんも川底に取り残されてしまいます。

「大日さんが川底に沈むのは不憫このうえない」村の人たちは、大日さんを新しくできた堤防の下の道ばたに置きました。

ある夜、ひとりの村人が、大日さんのある辺りを歩いていると、急に背中がずしりと重くなりました。前々から、「大日さんが人の背中におぶさってくる」という噂がありましたから、「こりゃ、大日さんをしょってきたな」と思い怖くなって逃げだしました。

それからは、子供たちも、大日さんの前を通るときは、立ち止まらないでいっきに走るようになりました。

昭和四四年、また堤防の改修をすることになりましたが、この話を聞いた工事の人達は、「そんなおそろしい石は動かせない」と困ってしまいました。そこで、専光坊の住職にお経をあげてもらって、石をお寺に運びました。毎日、読経する声が石にとどくようになって、村人におぶさってくることはなくなりました。

【参考図書】『多度町史民俗』多度教育委員会 多度町 二〇〇〇年

専光坊の大日石

71 金物を嫌った大蛇

郡上市

小駄良川に注ぐ河鹿坪谷に露洞という洞があって、露洞姫と呼ばれる大蛇が住んでいました。

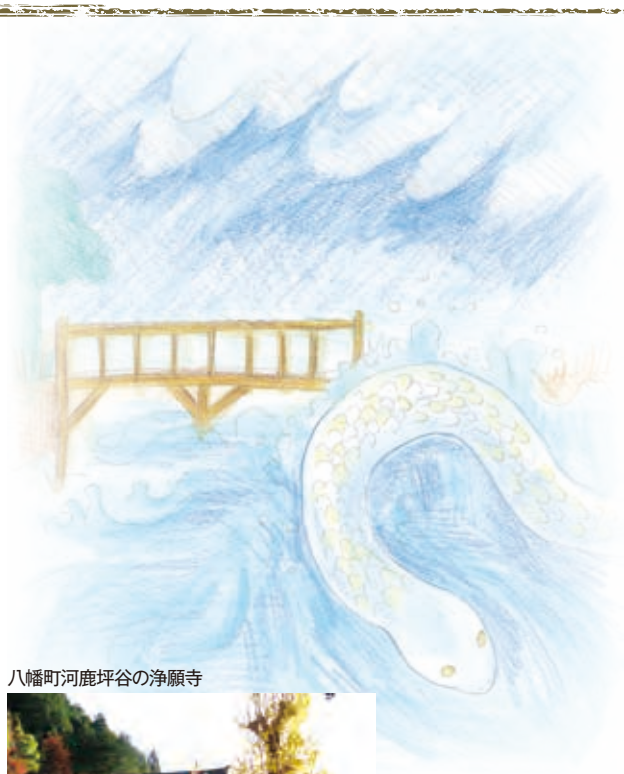
ここに住み着いて千年をこえた露洞姫は、いよいよこの地にも飽きたので、海に出ることにしました。

露洞姫が小駄良川を下ってゆくと、あたり一面が大暴風雨になり、川はたちまち洪水になりました。

横井橋までやってきた露洞姫は、橋の材料に大嫌いな金物が使ってあったため、橋をくぐることができません。そこで、露洞姫は、橋の上流で水をせきとめて、小駄良川を氾濫させ、川筋を原の西側の山麓を通るように変えて下っていきました。この氾濫で原一帯の耕地のほとんどが水に流されてしまったそうです。

原の南端に後瀬という地名があるのは、川が、氾濫した時の瀬尻であったといわれています。

【参考図書】『郡上八幡町史下巻』八幡町役場 一九六一年



八幡町河鹿坪谷の浄願寺

72 本洞のうわばみ

恵那市

昔、富田川の上流の本洞という谷に、大きな堤があって、うわばみが住んでいました。

うわばみは山津波による堤の決壊を予知して、岩村川の上流の谷に移り住みましたが、もとの谷川が恋しくて何十年もかよっていました。

ある日、本洞にきていたところ、突然の暴風雨にあって住処に帰ることができなくなってしまいます。

そして、年老いたうわばみは、そのまま本洞で死んでしまいました。

その後、うわばみの骨を見つけた村人が、庵を建てて骨を納め、弔ってやりました。

その庵主の夢枕にうわばみが現れて、

「岩村城内の清水が飲みたい。お城の井戸に連れていってくれたら、城に事ある時は、必ず城兵を守ってやろう」と言い残して消えました。

それからは、城が攻められた時、井戸の水面にその蛇骨を映すと、不思議な事にいままで晴れていた空がにわかに曇り、辺り一面深い霧におおわれて城が見えなくなり、寄せ手は城を攻めることができなくなったそうです。

この井戸は「霧ヶ井戸」と呼ばれ、今でも清水が湧き出ているそうです。

【参考図書】『いわむら昔ばなし余話』「いわむら昔ばなし余話」編集委員会　一九九六年

岩村城の「霧ヶ井戸」
岩村城は霧ヶ城と云われます。岩村城の伝説は、「第2章の3-7竜の祟り」を参照してください。

73 小島が気にいったお地蔵さま

弥富市

今の尾張大橋のたもとにあった小島村は、川をはさんで長島と向かいあっていました。

ある暑い夏の夕方、村の若者が二人、木曽川を渡って長島まであそびに出かけました。その帰り道、二人は、道端のお地蔵さまを見つけると、「小島には一つもお地蔵さまがない。この地蔵さまを川むこうまでもって帰ろう」というとになって、ムシロに巻いて舟に乗せて運び、堤の上にお地蔵さまを寝かせて帰りました。

翌朝、お地蔵さまをみつけた村の人々はたいそう有難がって、お堂を建ててお祀りしました。

一方、長島の方では、無くなったお地蔵さまを探して大騒ぎ。このお地蔵さまは昔々、織田信長が長島に攻め込んだ時、逃げてきた子供たちを、念力で助けてくれたと伝えられる大切なお地蔵さまでした。しばらく探して川向こうの小島にお地蔵さまが祀られているのを聞きつけた長島の人々は、事情を話して、お地蔵さまを送り返してもらいました。

ところが、長島の人たちの夢枕に、お地蔵さまが現れて「わたしは小島が気にいった。もう一度帰りたい。」としきりに頼まれたので、それほど申されるならばと、小島の筏川堤に祀られ、盆、正月には長島からお供物が届けられるようになりました。

【参考図書】『踏青夜話（やとみ昔ばなし）』彦坂登喜二、大島静雄　一九九一年

小島のお地蔵様

74 雨壺さん（関谷竜王）

関ケ原町

今須の関谷というところには「雨壺さん」と呼ばれている祠があります。

むかし、関谷の村人がひとり、養老郡多良の山奥に炭焼きに出かけた時のこと。炭俵を担いだ帰り道に、まるで材木と見まちがえるような大蛇に出会いました。

大蛇は、「わしを今須まで連れて行ってくれ」と村人に頼むと、小さなちいさな蛇になりました。村人が小さな蛇を炭俵の上に乗せて関谷まで来たところ、「ここでよい」と蛇が言いましたから、木陰の湿った場所に池を掘って放してやりました。

小蛇は「もし水が無くて困ったときには、ここへ来て頼むがよい」と言い残して、池に沈んでいきました。

関谷の村人たちは、池の主となった蛇を関谷竜王としてありがたく思い、祠を造って崇敬し、日照りが続いたときには、「雨壺さん」と呼んで雨乞いをしました。

それ以来、関谷の村は、水不足で困ることがなくなったそうです。

【参考図書】『関ケ原町史通史編別巻』関ケ原町　一九九三年

今須山中の神木周りが「関谷雨壺神社」

75 衣掛の三角石

木曽町

三岳地区の王滝川のなかほどに、どこから見ても三角に見える石がありました。

いつのころからか、ひとりの若い女が、王滝川で洗濯をしては、この石に衣を干していたので、石は「衣掛の三角石」と呼ばれるようになりました。

昔から、「三角石のところには河童が棲んでいるから、水遊びに行ってはいけない」と言い伝えられてきました。

それは、この若い女が子どもを水の中に引き込んでしまう、ということに結びつけていわれていたようです。

また、大雨がつづいて、衣掛の三角石が隠れるほど川の水が増えると、下流の水田が水に浸かって、その年は米ができないと伝えられています。

三角石の近くには、「盗人岩」と呼ばれる大きな岩があります。

山から切り出した材木を、王滝川に流して運んでいた頃、この岩に材木がはさまって、取れなくなったことから、こうした名前がついたそうです。

【参考図書】『三岳村誌上巻』三岳村誌編さん委員会　一九八八年

王滝川の三角石

76 おこひと寒八

白川町

昔、水が乏しい大利村で、働き者の寒八と嫁のおこひが、荒地を耕して田んぼの開発を試みました。一番の問題は、やはり水。

二人は、山持ちの大利長者様に「山の谷水を分けて欲しい」と頼みにいきました。しかし、願いは冷たく断られ、しかたなく二人は、あちこちの湧き水を使うことにし、三年がかりで水路を造り、やっと田植えができるまでにしました。

ところがこの夏は雨が降らず、困った村人が雨乞いを行うと、「乏しい水を自分の土地に引き入れて勝手気ままに使う不心得者がいる。その者が改心しない限り雨は降らさん」と言う神のお告げがありました。

「不心得者は、寒八に違いない」、怒った村人たちはこぞって寒八に田んぼを潰すように迫りました。事の次第を聞いたおこひは、その夜、寒八の枕元で、悲しげに「寒八さん、さようなら」と言ってそっと家を出ていきました。

寒八がおこひを探して、飛騨川まで来たところ、おこひの体が宙に舞い淵に吸い込まれていきました。

あわてて淵を覗くと、とても大きな鯉が水をたたいて水しぶきをあげています。

水しぶきはやがて水煙となって天に昇り、豪雨となって降り注ぎました。

恵みの雨に村人たちは、大喜び。雨はいよいよ激しく降り、谷川は滝のようになって、谷水を独り占めしていた大利長者の屋敷を飛騨川まで押し流したそうです。

【参考図書】『ふるさと白川第4号』白川町ふるさと研究会　一九八一年

「寒八」の地から見た飛騨川
「寒八」の地名は、「やけっ八」や「八ぶ」とかと八を使っているのと同義で、「寒くてどうしようもない土地」の意味で付いたと言われている。

77 神明さんと洪水

神戸町

いつのことだったか、大雨で揖斐川が、氾濫し、田村でも田畑が泥に浸かりました。村人が泥をかき出す作業をしていると、見知らぬ男たちがやってきて、

「自分たちは、津汲村の者ですが、村の大切な神明さんの社が流されたので、探しています。ようやくこの村の堤外の藪に流れついているのを見つけました。」

ところが、かついで帰ろうとしても、いっこうに社が動かないので、手伝って欲しいとのこと。

そこで田村の男たち五、六人が手伝って、藪の中の社を持ち上げようとしましたが、どうしたことか、社は全く動きません。

数日後、津汲村から一五、六人がやってきて、何度も持ち上げようとしましたが、社はさっぱり動かないので、津汲村の人たちは困ってしまいました。

この話を聞いた旅の修行僧が

「神明さんは、田村に居たいと仰っています。」

と言うので、そういうことならぜひ田村で祀ってもらいたいと津汲村がお願いしてきました。

引き受けた田村の人々が揖斐川へ迎えにいくと、不思議なことに社は軽々と持ち上がったそうです。

【参考図書】『美濃神戸ふるさと百話』神戸町民話友の会 神戸町教育委員会　一九七七年

神明さん
神明神社は大正９（1920）年に現在の白山神社の西へ移った。

78 庭田の阿伽井水

海津市

美濃国の国分寺（大垣市青墓）を建立していた行基上人は、毎夜南の空にかかる三つの虹の輪が気になって、庭田の地にやってきました。

道端で休んでいると、夢に翁が現れて

「この地は仏縁の深いところ。この地に寺を建てるがよい」と、言い置かれました。夢から覚めた行基上人が、村人に尋ねると、

「この奥の榧谷というところに、榧の大木があります。夜になると大蛇が現れ、木に巻きついて、朝になるとどこかへ消えていきます。」

村人に案内されて、谷に分け入ってみると、確かに榧の大木が堂々とした姿で立っています。しかも、根元より二メートルくらい上で五木の幹に分かれています。

これは霊木に違いない、と感じた上人は、五木の幹から五体の仏像を刻むことにしました。

暑い夏の日の最中に、榧の木の切れ出しに集められた大勢の人夫たちが、口々に喉の渇きを訴えたので、行基上人は、持っていた杖で地面を突きました。

すると、そこから清水が、湧き出し、人々は上人の神通力に合掌しました。

この清水は「阿伽井水」と呼ばれ、立派な七堂伽藍が建立された後も多くの人々の渇きをいやしました。お寺は三つの虹の輪から、三輪山一条院円満寺と名づけられましたが、兵火にあって焼失し、現在の場所に移されました。

【参考図書】『南濃町史通史編』岐阜県海津郡南濃町　一九八二年

庭田みわの井水と薬師観音

79 金原の蛇池

本巣市

昔、金原村にあった蛇池の近くに佐太郎という鉄砲うちの名人が住んでいました。

秋が深まり、柿が色づいてきたある日の夕方、佐太郎が戸口を見やると大きな猿が柿を食い荒していました

このままでは柿を全部食べられてしまうと思った佐太郎は、急いで鉄砲を猿に向けました。「ひとの柿を盗むな」佐太郎がどなると、猿はあわてる様子もなく、

「わしは、蛇池の主じゃ」とうそぶき、柿を食べつづけます。

あまりの乱暴ぶりに、怒った佐太郎は、ついに引き金を引いてしまいました。

すると、空がにわかに暗くなり、暗雲のなかから、

「佐太郎、なぜ、池の主を撃った」とどなり声が聞こえます

「わしは息たえるとも、この恨みは忘れんぞ。これよりのち、お前の家の作物は、きっと力マスにつめろ。カマスにつめないと、お前の家が滅びるぞ」

叫び声とともに、猿は蛇に姿を変えて、池に落ちていきました。

それから、佐太郎の家では、代々、田畑でとれた物は、必ずカマスにつめることにしました。このしきたりは、先代まで続いていましたが、今では農業を止めたので行われなくなったそうです。

蛇池は、昔より小さくなりましたが、不思議なことに、雨がどれだけ降っても溢れることがなく、日照りが長く続いても水が枯れることがないそうです。

【参考図書】『本巣町史通史編』本巣町　一九七五年

金原の蛇池

蛇池は断層線に沿って湧出した地下水が溜まった池で、濃尾地震以前からあった池が地震で拡大したと言われている。

80 大寺瞽女

御嵩町

昔の可児川は堤が無いので、大雨が降ると家も田畑も水びたしになって、悪い病気がはやりました。

病気に困っている村に、行智比丘尼が待女三人を伴って訪れました。行智様は、村人の苦しむのを見かねて、宿の薬師本尊に朝夕お経をあげ、侍女と共に薬草を摘んで病人の看病をしました。それでも病人は一向に良くならないので、疲れた行智様が、池の岸に座って念仏を唱えると無数の蟹が池の中からぞくぞくと這い上がってきました。

「何であろうか」と不思議に思って覗いてみると蟹の群の上に、小さな仏様がのっておられました。

「ああ、薬師如来様が助けにきてくれたに違いない」さっそく金の小さな薬師如来様を庵に設置して毎日勤行をつづけられました。そのうちに寝こんでいた大勢の病人が元気になり、洪水も起こらないようになって、もとの穏やかな村に戻っていました。

村の人の信心が深まり、行智様を心から慕うようになっていた或る日、行智様が隣村に出かけることになりました。三人の待女は、悪い病気を退散させた薬師如来様を一目拝んで見たいものと、仏様の安置された部屋の扉を開けてしまいました。

「あっ」余りのまぶしさに三人は目を閉じてしまいました。そして思わず閉じた三人の目はそれから開くことはありませんでした。

帰ってきた行智様は、三人の目がひらくように念仏を唱えられましたが、ついに叶いませんでした。そこで行智様は、薬師如来様を薬師本尊の胎内に収められました。

それから行智様は三人の待女に楽器の演奏を教え、盲目の三人は、楽器を弾き薬師様を讃える歌を歌いながら、近隣の村々の家を廻りました。

この辺りでは、明治の終わり頃まで、大寺瞽女と言って盲目の女が門づけをして歩いていました。

【参考図書】『御嵩町史』御嵩町史編纂委員会　一九五九年

本尊の蟹薬師を祀る願興寺

願興寺の本尊は薬師如来、通称蟹薬師である。弘仁6（815）年に最澄が薬師如来を祀ったのが起源とされる。正暦4（993）年に、一条天皇の皇女・行智尼が庵を結んだ近くの池から、数千の小蟹に乗った薬師如来像が現出した、と伝わっている。

81 よすけとカッパ

瑞浪市

釜戸の村はずれの川に、深い淵があり大きな岩がつき出ていました。昔、よすけという村人が岩に座って魚を釣っていました。その日にかぎって少しも魚がかかりません。よすけは、しかたがないのでキュウリを取り出してポリポリ食べ始めました。すると川の中から「よすけキュウリをくれ、よすけキュウリをくれ」とおかしな声がします。「だれだ、おれをよぶのは」よすけが問いかけると、水面が泡だってカッパが浮き上がってきました。「キュウリをやったら何をくれる」よすけが再び問いかけると、「魚をあげます」と答えます。試しにキュウリを一本放りこむとカッパはそれを拾って沈んでいきました。しばらくすると、つり糸がぐいぐいひっぱられ、鮒や鯉、鰻がどんどんかかり、またたく間にかごいっぱいになりました。

次の日からよすけはキュウリを持っていってカッパにくれてやり、かわりに魚をいっぱい釣って帰るようになります。ところが、ある日、よすけはキュウリを持ってくるのを忘れてしまいました。キュウリをとりに戻るのが面倒なよすけは、いつものように釣り糸を垂らすと、そばにあった石ころを川に投げこみました。すると、すごい勢いで糸がひっぱられます。釣り竿をとられまいと、ひっぱったよすけはとうとうどぼんと淵に引き込まれてしまいました。

気を失って川岸に流されたよすけは、それから二度と釣りにいかなくなりました。川の中で「このいたずらめ、うそつきめ、二度とここへ来るな」とカッパにいじめられ、おぼれてしまったということです。

【参考文献】『ふるさと瑞浪』足立利六　ふるさと瑞浪出版委員会　一九七七年

よすけが魚釣りをした岩

釜戸駅から北東約600m上流右岸によすけが毎日魚釣りをした岩がある。この岩の所が深い淵で、この淵を「よすけ」と呼んだ

82 流れてきたお薬師さま

愛西市

木曽川に面した八開村には上流から流れてきた仏さまの話がいくつも残っています。給父に祀られているお薬師さまの由来もその一つです。

昔、木曽川が大洪水になり、川の水がどんどん増えて、今にも堤防を超えそうな勢いでした。渦を巻くように下る濁流の中を、上流の山からたくさんの木が流されてきました。この様子を長念寺の老僧が堤防の上から見つめていたところ、流木の中に黄金色に光る木をみつけました。

不思議に思った僧が手招きすると、木は流れに逆らうように川を横切って僧の足元まで流れ着きました。この木でお薬師さまを彫って祀ったところ、おこり*が流行らなくなったそうです。

鵜多須のお薬師さまは、円空作とも言われています。

すっかり日が暮れ畑仕事から帰ろうとしたおじいさんが、佐屋川で道具を洗っていると、木片が流れてきて鍬にコツンとあたりました。おじいさんは木片を拾いましたが、あたりが暗かったので良く見ないまま家に持って帰りました。

翌朝、明るくなって見てみると木彫りの仏様であったので、家でお祀りすることにしました。

＊おこり 間欠的に発熱し、悪感（おかん）や震えを発する病気。主にマラリアの一種。

【参考図書】『八開村史民俗編』八開村史編さん委員会　一九九四年

鵜多須のお薬師さま

83 亀の宮

岐南町

大昔、まだ木曽川が今の境川筋を流れていた頃、三宅に大きな池がありました。

人々は水に浸かった田畑の前で、洪水から村を守るために何ができるか相談して、池の主さまを祀ってお願いすることにしました。

池のほとりにお宮を建てて毎日熱心にお祈りしたところ、洪水も少なくなったそうです。

喜んだ村人は、それからお宮の辺りを「亀の宮」と名付けて主さまを敬いました。

そのお宮は、天正一六（一五八八）年に建立されたと伝わる三宅八幡神社です。大亀の住んでいたという池は、いつしかなくなってしまいましたが、今でも亀の宮の地名が残っています。

【参考図書】『岐南東むかしものがたり』南谷茂樹　一九七七年

三宅の八幡神社

85 孫太郎狐と尾白狐

美濃加茂市

昔、馬串山に孫太郎という雄狐が住んでおり、米田山には尻尾の白い雌狐が住んでいました。

この二匹の狐は大変仲が良く、いつも一緒に山を駆け回っていて、狐仲間でも、評判の間柄でした。

ところが孫太郎は、福島村の飛騨川左岸にある大きな岩に祀られた弁財天の美しさに心を移してしまい、日夜この岩に現れるようになりました。

この様子を見た尾白狐の心は穏やかではいられません。

怒った尾白狐は、やつあたりで人を化かしたり、人に乗り移ったりして、村人を困らせるようになりました。

この話を聞いた弁財天は二匹の狐を呼んで、もとの仲に戻るようにやさしく言い聞かせました。

弁財天に諭された二匹は、再び仲良く山野を駆け回って遊ぶようになり、尾白狐のいたずらもなくなりました。

弁財天が祀られた大きな岩は、現在は川辺ダムの築造によって湖の底に沈んでいます。

【参考図書】『川辺町史通史編』川辺町史編さん室　一九九六年

川辺ダム上流の弁財天社
岩は沈んだが、弁財天社は川辺ダム上流約400m左岸の川岸に移転している。

86 井戸に落ちた雷さま

桑名市

昔々、すさまじい稲光とともに赤い体の雷さまが、赤須賀村の井戸に、まっさかさまに落ちてきました。

村人が恐るおそる井戸の中をのぞいて見ると、雷さまが「助けてくれ」と泣いていたので、村人は「人の家を散々焼いておいて、助けてくれとはむしのいい」と井戸にふたをしてしまいました。

なんとか井戸から出ようと試した雷さまも、どうにもならないので、「もうここには雷を落としませんから、どうかふたを開けてください」と懇願しました。

さすがにかわいそうになった村人が、「それならふたを開けてやるから、何か置いていけ」と言いますと、「背中に背負った太鼓を井戸に残していく」と返事があったので、ふたをとってやりました。

助けられた雷さまは、「いやになるくらい水を入れておくから、この井戸は年中枯れることはなくなるぞ」、と言って空に帰っていきました。

その井戸はいつまでも枯れることがなく、また年中、井戸の底から太鼓の音が響いてきたそうです。

【参考図書】『桑名の伝説・昔話』近藤杢、平岡潤　桑名市教育委員会　一九七六年

赤須賀神明社の雷が落ちた井戸

87 竜とサギソウ

大野町

昔むかし、野村に大きな池がありました。

この池には大きな竜が住んでいて、田畑の作物を荒らすので、村人を苦しめていました。

その野村に、力の強い武士が移り住んできました。村人が竜に苦しめられていることを知った武士は、ひそかに竜退治を考えていました。

ある日、釣りの用意をした武士は、船で池の中ほどまで行きましたが、どうしたことか魚が一匹もいません。しばらく待ってもなにも起こりそうにないので、「今日はこれくらいにして、出直そう」と舟を岸に向けました。

するとにわかに黒雲がたちこめ、大きな竜が現れ、武士を一呑みにしようと飛びかかってきました。「今だ」武士は隠し持った刀を抜くと、一気に斬りおろしました。

それから長い闘いの末に、とうとう武士は竜を退治したのでした。竜がいなくなった池には魚がすむようになり、村人はたいそう喜びました。

それからちょうど一年がたった日に、武士は久しぶりに池で釣りをしていました。

するとあの日と同じように、辺りが暗くなり、竜の魂が現れて襲ってきました。ふいをつかれた武士は、懸命に戦いましたが、とうとう討ち死にしました。

それ以来、池のほとりには白いサギソウが咲くようになりました。武士の家紋が「三つ折りサギ」だったことから、武士の魂がサギソウとなって、竜の魂が近寄れないように池を守っているのだそうです。

【参考図書】『大野町の民話と伝承百話』大野町文化財保護協会　一九九八年

大野町大字野の古墳と彼岸花

88 男岩・女岩

大桑村

昔むかし、須原村の松渕沢には、青く澄んだ水を湛えた渕があって、たくさんの魚がすんでいました。

渕の近くに「倉」という名前の漁師が住んでいて、もっぱら渕で魚をとってなりわいとしていました。

いつもの様に、倉が漁をしていると、山の方から何者かが大声で「倉やるぞ倉やるぞ」と呼ぶのが聞こえました。倉は不思議に思いながらも「オオよこさばよこせ」と返事をしてしまいました。

すると山の頂に黒雲が現れ、にいわかに辺りは真っ暗になって、雷をともなう激しい雨が降り出しました。驚いた倉は慌てて家に逃げ帰りましたが、雨はますます強くなり一晩中やむことが無く、夜半には地鳴りさえ起こりました。

生きた心地のしない一夜を明かした倉が外に出てみると、美しかった渕は埋まって石川原となり、下流の田原にも土石が流れ込んで一面を覆っていました。その中に一際大きな岩が二つ立っており、その姿はとても怪異なものでした。

村人はこれの上方を男岩、下方を女岩と呼ぶようになり、倉があまりに殺生したので水神様の祟りにあったという話とともに語りついできました。

この男岩・女岩は『信濃名所図会』にも載っていましたが、明治になって鉄道工事の石材として切り出されたそうです。

【参考図書】『大桑村の歴史と民話』志波秀夫　一九七八年

土砂流出の激しい松渕沢奥の百間滝
（杉村敏夫氏撮影）

89 どんぼり池の竜

多治見市

昔、多治見村に「どんぼり池」と呼ばれた広い沼地があって、いつの頃からか池には雌雄二匹と子竜一匹が棲んでいると言い伝えられてきました。そのどんぼり池を村人は山から土を運んで埋め立てて田畑をつくり始めました。広かった池は年ごとに周囲がうめられ少しずつせばめられていきました。

ある夏の昼下がり、激しい夕立の中、天を裂くような雷鳴きが響き、池から大きな水柱がそびえる様に立ち昇りました。山の上から見ていた村人の話では、二匹の竜が縄の様に絡んで天に昇っていく姿が見えたということです。

月日は流れ、どんぼり池はすっかり埋め立てられ竜の話を知る者もいなくなったある年の夏。この年は例年にもなく雨が少なく、田畑は乾き、作物が枯れるばかりか飲み水さえ不自由する大変な日照り続きでした。炎天下の中、一人の旅の僧がかつでのどんぼり池の真ん中あたりで、一心に祈っていました。しばらくして僧は古い草ぶきの屋根の家に入り、家人にむかって「日照りが続くのは子竜の祟り。池を埋め立てられた子竜が水を求めて苦しんでいる。」と告げ、土間の方隅を指さしました。

そこには墨の色もおぼろげな古びた竜の掛け軸がありました。「水を求める子竜のために、毎日掛け軸に水を供えてあげてください。水を供えれば、三日後の牛の刻に雨を降らせてくれるでしょう。」旅の僧侶は言い残して立ち去りました。不可解に思いながらも家人が掛け軸に水を捧げると、みるみるうちに墨の色も黒々と一匹の竜が浮かび上がってきました。驚いた家人はこれを村人達に知らせてまわりました。

はたして三日がたつと、昼飯の時間になると、辺り一面が急に暗くなり、たたきつける様な大粒の雨が降ってきました。久しぶりの雨に歓喜した村人達は、「子竜さまが雨を恵んでくださった」と語りあい、件の家に集まって掛け軸に手を合わせて拝みました。

ほどなくして村では小さな祠をつくり、掛け軸とともに子竜をていねいに祀りました。以後干ばつの被害は無くなったそうです。

【参考図書】『たじみの昔話』たじみ児童文学の会　一九七七年

土岐川左岸に隣接した朝日町（旧字頓堀）
明治21年に作成された字絵図（『多治見市史料絵図集1』）によると、「字頓堀」は「ドンボリ」とも発音されており、現在の新町・青木町・金山町の一部である。

90 源義朝楊枝柳

海津市

平治の乱（一一六〇）で、平清盛と戦って敗れた源義朝は、わずかな兵とともに、再起を図って東国へと落ちのびようとしました。途中、美濃国青墓から舟で杭瀬川を下った義朝一行は、西小島で昼食をとろうとしましたが、箸がありません。そこで従者の一人が、揖斐川堤に繁っていた柳の一枝を折って、義朝に差し出しました。

柳の箸で食事を終えた頼朝は、

「源氏と平家の勢いよ、逆さになれ。源氏がもう一度盛んになるなら、必ずこの柳も芽を出すだろう。」と、祈り、箸を逆さにして土に差しこんで立ち去りました。

頼朝は尾張国野間であえない最期を遂げましたが、その子・頼朝が関東で挙兵し、平家を滅ぼしました。

源氏の隆盛とともに、堤にさされた小枝も、芽吹き成木となって「楊枝柳」と呼ばれ、石碑がたてられました。

もともと西小島の集落は現在の揖斐川堤付近にありましたが、河川改修によって、現在の場所に移りました。「楊枝柳」も工事で取り払われましたが、「楊枝柳」の碑は今の集落に移され民家の庭先に残っています。

【参考図書】『海津のむかし話』海津郡教育振興『海津のむかし話』編集委員会　一九八七年

「頼朝公楊枝柳の碑」西小島水谷家の庭先
旧西小島の集落は現揖斐川の西堤防付近にあったが、河川改修で現在地に移り、当時の柳は取り払われ、「柳楊枝の碑」だけが西小島の水谷家に残っている。

91 お富・与十松の夫婦岩

坂祝町

むかし、坂祝町の取組には渡し場があって、栗栖(犬山市)との間を渡し舟が行き来していました。この辺りの木曽川は流れがはやく、景色が美しい場所で、向こう岸には大きな岩が二つ並んでいます。

この大きな岩の上で、お富という栗栖のお大尽の一人娘が琴を奏でていました。

ある日のこと、琴の音に誘われて岩にやってきた大工の与十松が、お富の美しさにすっかり夢中になってしまい、それからは、仕事もわすれて、お富に会いに行きました。お富も与十松を憎からず思い、毎日岩の上で琴をひき、与十松と楽しく語らうようになりました。

ひかれあう二人でしたが、お大尽の一人娘と大工職人では身分違いも甚だしく、親のゆるしがもらえるはずもなく、二人の思いがとげられることはありません。

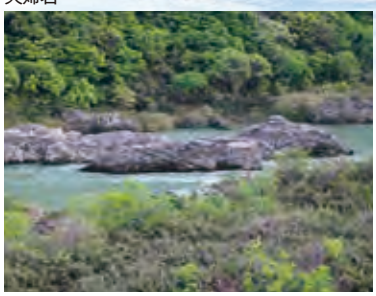
二人の行く末を悲観したお富は、木曽川の水がいつにもまして増えてきた日に、琴をひくのを突然やめて、急流に身を投げてしまいました。

それを知った与十松は、岩の上でお富の名前を呼び続けましたが、岩にぶつかる水の音が琴の音に聞こえるばかりです。こうしていく日かがすぎ、嘆き疲れた与十松も川に身を投げ、お富のあとを追いました。

それ以来、この岩にぶつかる水音が、美しい琴の音に聞こえるようになりました。その音色はとても悲しく、聞いた人はみな涙を流しました。

そこで寂光院の住職が、二人のためにお経を唱え供養したところ、琴の音は聞こえなくなりました。この二つの岩は、お富・与十松の夫婦岩と名付けられました。

【参考図書】『さかほぎのむかし話』坂祝町教育委員会　一九八二年



夫婦岩

92 雨池

東白川村

越原村の黒渕と大明神の境近くにある民家の庭に雨池と呼ばれる池がありました。

池といっても直径一メートル、深さも一メートルくらいの穴で、底に僅かな地下水が溜まっているだけでした。

しかし、昔からその穴をさらえると、大雨が降り、洪水を招くという伝承があり、人々は災いを恐れて、誰も底をさらえることはありませんでした。

時代は下って昭和一〇年三月の真夜中に、近くの製材工場で出火があり、おりからの強風にあおられて工場・倉庫二棟・民家一軒が全焼する大火事になりました。

雨池のある民家も風下になっていたので、火の粉が舞い落ち、類焼の危険が迫っていました。

この時、その家のお婆さんが、雨池の話を思い出し、鍬を手に庭におりて穴の水を掻き出しました。

しばらくすると、ものすごい雷鳴とともに、滝のような雨が降り出し、たちまち大火を消して、民家は類焼を免れました。

その後、この穴は持ち主によってすっかり埋められ、今ではこの伝承を知る人も少なくなりました。

【参考図書】『新修東白川村誌 通史編』東白川村誌編纂委員会　一九八二年

左側の民家奥に「池」
付近の人の話では、1m程の大きさの池に、冬は暖かく夏は冷たく美味しい水が出ていたが、家を建てる際に、埋めてしまい、池の上は蓋がしてある。

93 美女と惣左衛門

高山市

村はずれに惣左衛門という腕のいい猟師が住んでおりました。

ある朝、池のほとりで獲物を待ちかまえていると、霧の中から眼もさめんばかりの美女が姿を現しました。

美女は「私は村の人と初めてお会いしました。これも何かの縁でしょう。」といい、二人は夫婦となりました。この時、女は、自分のことは、誰にも話さないよう惣左衛門に約束させました。

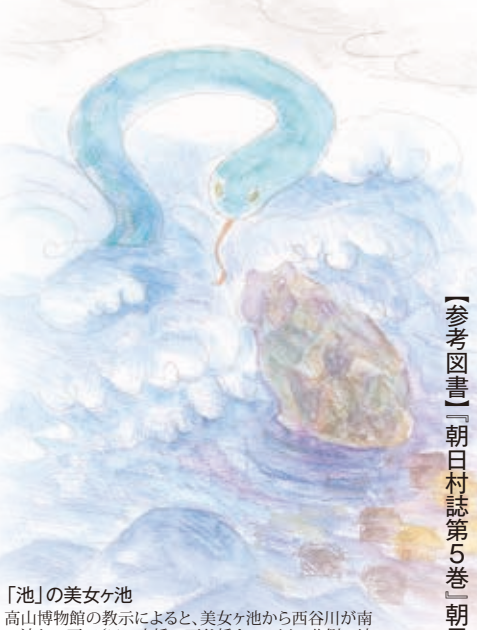
やがて、二人の間に子供が生まれ、年を重ねていきましたが、女はいっこうに老いることがなく、美しい容姿に変化がありません。いっぽう、惣左衛門は齢をとるほどに、これまでの出来事を人に知ってもらいたいと思うようになってきました。

日増しに膨らむ思いをこらえきれず、ある日とうとう、一部始終を村人に話してしまいました。その夜のこと、惣左衛門が家に戻ると、女は大蛇の姿になって子供とともに池に身を投じました。

すると、池の水がいっきに溢れて洪水となって村のほうへ流れだしました。惣左衛門が必死で水をくいとめようと思った瞬間、その姿は大きな蛙の形の岩に変じて濁流に呑まれていきました。

洪水が流れ込んだ川の底には、今も蛙の形をした大きな岩がどっしりと座っているそうです。

【参考図書】『朝日村誌第5巻』朝日村史編纂委員会　二〇〇五年



「池」の美女ヶ池

高山博物館の教示によると、美女ヶ池から西谷川が南へ流れて豆田（日の出橋～西谷橋までの川の北側の地域の小字名）を襲ったと考えられる。

94 西川の八幡さま

桑名市

木曽・長良・揖斐三川の河口にできた七つの島が、一つの輪中になった頃、平方村に西村孫左衛門というお百姓がいました。

ある日、木曽川へ川漁にきた孫左衛門が、投げ入れた網を引き上げたところ、魚は一匹もかかっておらず青紅色の美しい石だけが入っていました。石を川へ投げ捨てて、再び漁を始めましたが、今度も網には魚がかからず、石だけが、入っていました。何度、石を捨てて網を投げても、網には石だけが入っていました。

そこで、試しに石を堤に置いてから網を入れると、たくさんの魚がかかっていました。不思議なことがあるものだと思いながら、孫左衛門は家に帰りました。

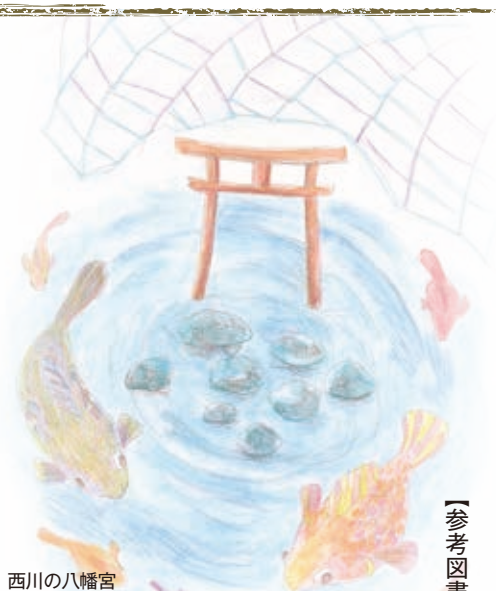
その夜、夢に石が現れ、「私を西川村の産土神に祀って、八幡宮として崇めなさい」とお告げがありました。早速、西川村で事情を話して、村の地蔵屋敷に神社をつくって、青紅色の石を祀って八幡宮としました。

また、川に囲まれた輪中では、幾度となく洪水がありました。天和の頃には、今までにない大洪水があり、多くの人が亡くなりました。

それ以来、八幡宮の氏子たちは、正月の一四日に社に集まり、豊作を祈って大釜でお粥を煮て食しました。

そのとき七・五センチほどに切った細い竹にお粥をいれて、中に入った米粒を数えて作物のできを占いました。この占いは明治四二年になくなましたが、青紅色の石は今も崇められているようです。

【参考図書】『長島風土記』金森勝　二〇〇〇年



西川の八幡宮

明治の1村1社の布達により、村内各社は上郷で最古と推測される西川八幡社に合祀され、楠神社となった。昔話に出てくる「青紅色の石」は、日本書紀の神話を青紅の石の伝説に結びつけたものである。なお、この社地からKISSO「川立ち地蔵の不思議な夢（3号）」を移した。

95 おわんふきがま

瑞穂市

むかしは、五六川のそばには、たくさんのがまがありました。村の人たちは、その水で米を作っていましたが、暮らしは貧しいものでした。

村はずれに住む老夫婦も、お祭りに使うおわんを買うお金がないので困っていました。おじいさんは、となりの村の知り合いの家まで、おわんを借りに行きましたが、そこにも貸すだけのおわんは揃っていません。

困ったおじいさんは、村ざかいのがまのほとりで座りこんでしまいました。

おじいさんは水に写った自分の影にむかって、「おわんがないとお祭りができん。誰かおわんを貸してくれれば助かるのだが」とひとりつぶやきました。

次の日も、おじいさんはあちこちの知り合いの家を頼んでまわりましたが、おわんを借りることはできませんでした。困ったおじいさんは、途方にくれて歩いているうちに、きのうと同じがまのほとりに来ました。その水面を見ていると、おわんがいくつも浮かんで流れてきました。おじいさんは、たいそう喜び、おわんを借りて帰りました。

お祭りが終わってから、おじいさんは、おわんをきれいに洗って、お礼を言ってがまに返しました。この話を聞いた村人のひとりが、おじいさんにならって、がまからおわんを借りました。ところが、返すときにいくつか自分のものにして、数が足りないまま返してしまいました。

それからは、がまに行っておわんを借りようとしても、おわんは出てこなくなりました。

【参考図書】『すなみ百話』すなみ百話編集実行委員会　一九九二年

水鳥が群れる重里の五六川

96 夕べが池伝説

北方町

岐阜市との境にある「夕べが池」は、池底から湧き出る水が水源となっています。この池には、池の主である白蛇が又八大龍王権現として祀られていて、伝説が残っています。

むかしは、この付近一帯が股まで埋まる沼地だったそうです。

田植えの時期になって、一人の作男がこの沼地にやってきて、「明日はこの沼の田植えだが、股まで泥につかってやりたくないな。田植えができないようにいっそ池になってしまえばいいのに。」と独りごとをつぶやいて、もってきた苗を畔に置いて帰っていきました。

翌朝、作男がやって来ると、驚いたことに、沼地だったところは、満々と水をたたえた波うち、はるかかなたの池田山まで一面が湖になっていました。

その後、水は減ってしだいに沼他に戻っていきましたが、深いところは池として残りました。近在の人々は、祟りだとして白蛇を又八大龍王権現として祀りました。また、一晩のうちに池になったことから「夕べのうちにできた池」として夕べが池と呼ぶようになりました。

この地方では、田植えの前日に苗を置いてきてはならないと言い伝えられてきました。

夕べが池には、このほかに、池の中から背中にありがたい経文六百巻を背負った黒い牛がとびだして、円鏡寺にかけこんだと言う伝承も残っています。現在の夕べが池は、公園として整備され、釣人にも人気のスポットになっています。

【出典】「夕べが池公園 解説看板」、「北方町ＨＰ」

夕べが池
池は岐阜市曽我屋4丁目と本巣郡北方町柱本池之頭に跨っている。

97 蛇ヶ谷の悲話

七宗町

第一二代景行天皇が、即位から四年目の春、美濃国を行幸された折、飛騨川に沿ってこの辺りを訪れました。

天皇は、皇子を伴って飛騨川に筏を浮かべていましたが、川に注ぐ一筋の清流を見つけて、その谷川を遡りました。

そこで皇子は、たぐいまれな美しい乙女と出会いました。皇子はたちまち乙女に心を奪われ、妻として、この地に住むことにしました。やがて、二人の間に子供が授かり、親子三人は幸せに暮らしていました。

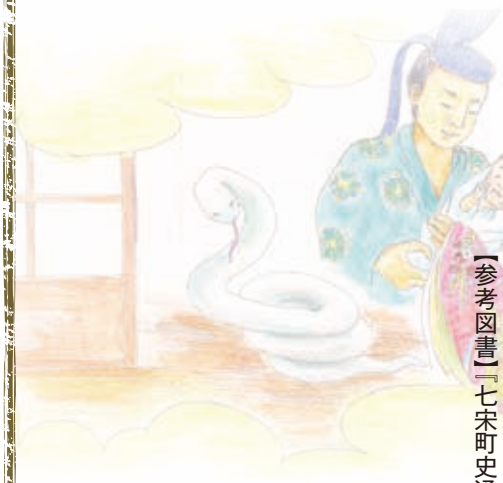
ところが、ある夜半に、ふと目を覚ました皇子が、傍らを見やると、そこに妻の姿はなく、一匹の蛇がとぐろを巻いて眠っていました。さては蛇の化身であったかと皇子が驚いていると、蛇も目を覚まし、するすると寝所を抜けていきました。

自分の正体を知られてしまったことを察した蛇は、谷川に身を投げ、それきり皇子の前には現れませんでした。

一方、皇子は妻が蛇の化身であったとわかっても、妻を憎む気にはなれず、悲しんでいましたが、しばらくして都に帰ることにしました。しかし、この地を離れていくらかも行かないうちに、連れていた子供が病にかかり亡くなってしまいました。

この後、二人が出会った清流は、「蛇ヶ谷」と呼ばれるようになり、悲しい恋の話が今も語り継がれています。

【参考図書】『七宋町史通史編』七宗町教育委員会　一九九三年



ウバ穴
蛇ヶ谷奥の左岸側に、伝説の大蛇が棲み、行者が修行したウバ穴や蛇穴がある。なお七宗町の佐伯紀行様、前島庚久様、七宗町議の林茂樹様にお世話になりました。

98 平瀬池の大金魚

愛西市

戦国時代に織田信長の弟信興が本願寺門徒に討ち取られたいう小江木城があった辺りは、古くから人が住みついたところで、そのためか怪談や伝承の多いところでもありました。

大蛇が棲むと言われたり、河童が岸に上がり通りがかりの人と相撲をとると言った話が伝わっています。その一つに平瀬池の金魚の話があります。

小江木城址の近くにある平瀬池は、面積が四〇町歩余（約〇・四㎢）、一番深いところの深度三〇尺（約九ｍ）で、昼間でも気味の悪い場所でした。

大正時代の半ば、船頭平に住む漁師の代サンはいつものように小舟で平瀬池に漕ぎ出し、夜網をうって魚を獲っていました。その日は、いつになく豊漁で、時間を忘れて夜明け前まで漁を続けていると、突然舟の真ん前に、小舟ほどもある巨大な赤い魚が浮かんできました。大魚は、水面で少し泳いでは池の中に消え、また浮いてきては潜るのを繰り返していましたが、やがて代サンの舟に向かって泳いできました。

その泳ぐ姿と濃い赤色は金魚そのものでしたが、とにかく大きさが尋常ではありません。代サンは恐怖のあまり尻もちをついて大声をあげ、ガタガタと震えながら、一晩で獲った大量の魚を池に投げ込み、必死に逃げだしました。

代サンは家に逃げ帰ってからも、食事をとらず布団を頭から被って震えていました。半月もしてやっと正気に戻ってからも、二度と平瀬池で漁をすることはなかったそうです。

その後、平瀬池は干拓工事によって埋め立てられ、大きな金魚の話だけが残りました。

【参考図書】『立田村史』海部郡立田村教育委員会　一九六五年

小江木城跡と鵜戸川
古木江城（小木江城、子消城とも記す）の直西の鵜戸川に接して「平瀬池」があった。
平瀬池の埋め立ては、遊水地として機能した池沼が排水機場の新設とともに不必要となったため、「立田地区補助干拓事業」として昭和26年10月～同35年3月終了予定で木曽川での浚渫・堆積土砂によって埋め立てられた。

99 池の鯉を助けた和尚さん

富加町

長良川鉄道の富加駅の近くにある大梅寺には、「身代わり観音」の伝承で有名な仏像が祀られています。

昔、今泉村に梅村一等という信心の心薄く、酒を飲むと乱暴する男がおりました。ある晩、泥酔した一等は、家僕の左肩を刀で切りつけました。家僕は血に染まりその場に倒れましたが、翌朝にはいつもと変わらず一等に挨拶をしました。一等が「昨夜、酒の席でお前の肩を切りつけた筈だが」と問うたところ、家僕は「私は日頃から大梅寺の観音さまに信心しております。昨夜は殺されると思い、一心に観音経を唱えておりましたら、観音さまが私に代わって助けて下さいました。」と答えました。

一等が大梅寺に走り、観音さまを見ると、その左肩がざっくり切られていました。驚いた一等は家僕に深く謝り、それからは、観音さまを信心して、一生信仰を怠らなかったそうです。人々は、この観音さまを身代わり観音と呼び、災難から守って下さる仏さまとして崇めてきました。

大梅寺には、次のような話も伝わっています。

江戸時代の文政の頃、大梅寺に梅岳さんという和尚さまがおられました。お寺の南に池があり大きな鯉が群れで泳いでいましたが、池の淵にお地蔵さまが祀られていて、誰も鯉を取ろうとはしませんでした。

ところが、お寺に集まった若者たちが、池お鯉を取って食べようと言い出しました。それを聞いた和尚さまは、そんな殺生は止めるように諭しましたが、若者たちは構わず池の方に走っていきました。

しばらくして、戻ってきた若者たちに、和尚さまが、「たくさん取れたか。」と聞くと、若者たちは「ふしぎなことにいつもたくさん泳いでいる鯉が一匹もおらんかった」と答えました。すると和尚さまは、「鯉がかわいそうだから、私が鯉を落ち葉に変えていっとき池の底に沈めておいた」言って笑いました。それから梅岳は徳の高い和尚さんだと評判になりました。

【参考図書】『富加の故時記』安藤剛　二〇〇七年

大梅寺
伝説を思い起こす大きな魚鼓が本堂右にある。

100 蛇の池

土岐市

土岐津の追沢に動物好きのやさしい男が住んでいました。ある日、男は、追沢川に沿って山道を歩いていました。いつも休憩する池のほとりに着いた男が、腰をおろそうと地面を見ると、大きな蛇がとぐろを巻いて休んでいました。驚いた男は、鉈を握って身構えましたが、大蛇はじっとして手向かう様子がありません。落ち着いた男は、大蛇に話しかけました。

「この辺りは、じきに大勢の人が住むようになる。そうしたらお前たちが安心して暮らせる場所では無くなってしまう。どこかへ立ち去ったほうがいい。」

大蛇は鎌首を持ち上げて、動こうとはしません。せっかく教えてあげたのに、蛇には人の心はわからないのかと思うと男は悲しくなって、涙をこぼしました。すると大蛇は男の悲しげな様子を見て、ゆっくりと池の中に消えていきました。

その日から男は不思議な夢を見るようになりました。男の胸にひんやりとした冷たいものが乗り、くぐもった声で話しかけます。

「わたしは池の主として、山野を守ってきました。この土地に自然をこわす人間が入らないように大蛇の姿になって池のほとりにいましたが、あなたはやさしい気持でわたしに呼びかけてくれました。あなたの涙を見て、わたしはあなたに会いたくなりました。」

冷たい感触が消えると、枕元に美しい娘の姿が浮かびあがり、やさしい声で、「わたしと一緒に池を守り、自然を守って欲しいのです。」とささやきました。

毎夜、夢は繰り返され、男の体力はだんだん衰えていきました。やがて男が「あなたと一緒に暮らしましょう。ただ人間をうらまず、人間のしあわせも守ると約束してください。」と言うと、「約束します」と娘が答えました。

翌朝、男の家を訪ねた里人は、男の姿が見えず、地面に二条の筋がついているのを見つけました。筋は、池のほとりまで続いていました。

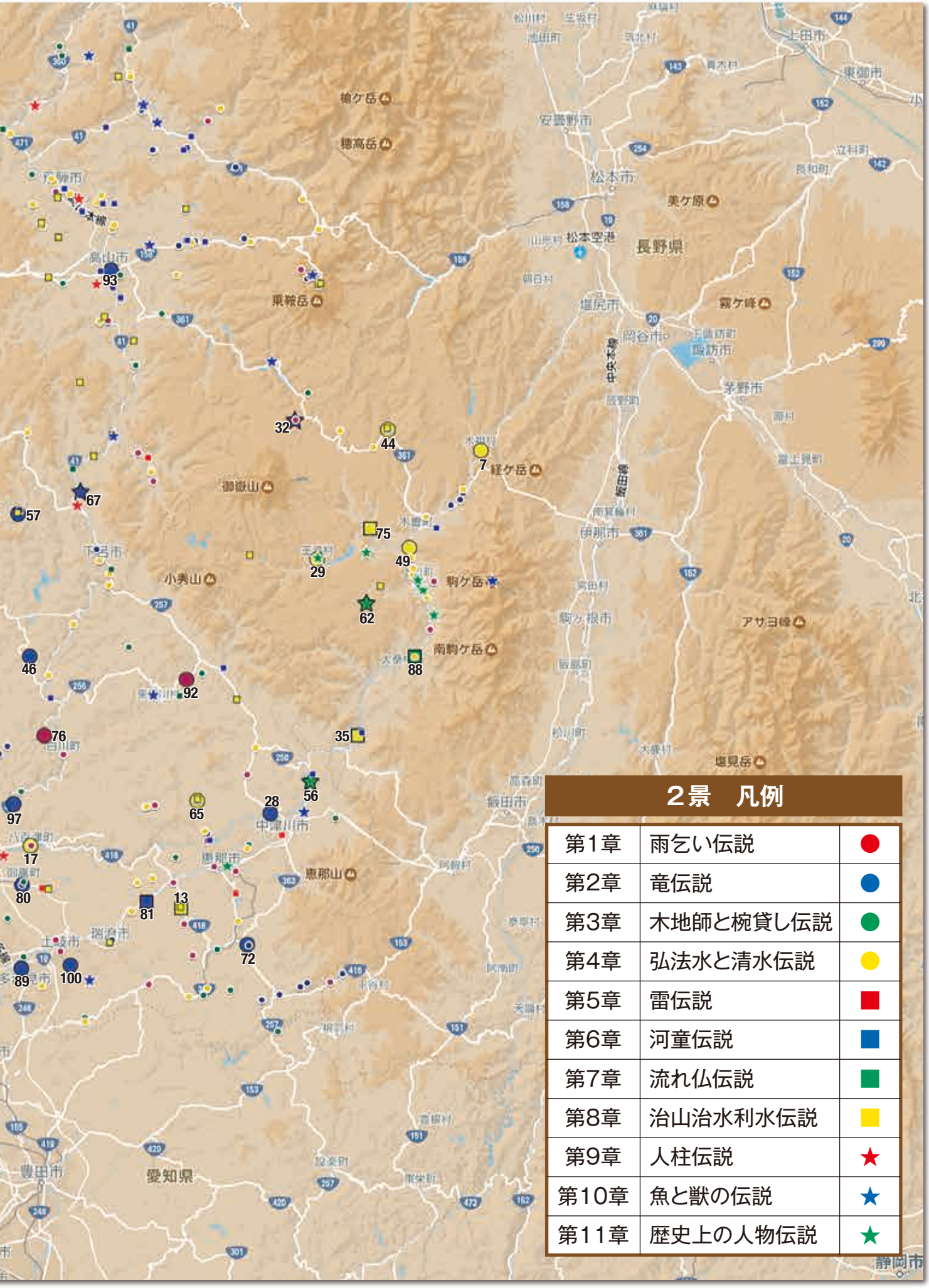
【参考図書】『土岐の昔ばなし』社団法人土岐青年会議所　一九七七年

陶史の森の池

第2景

川と水に関わる伝説

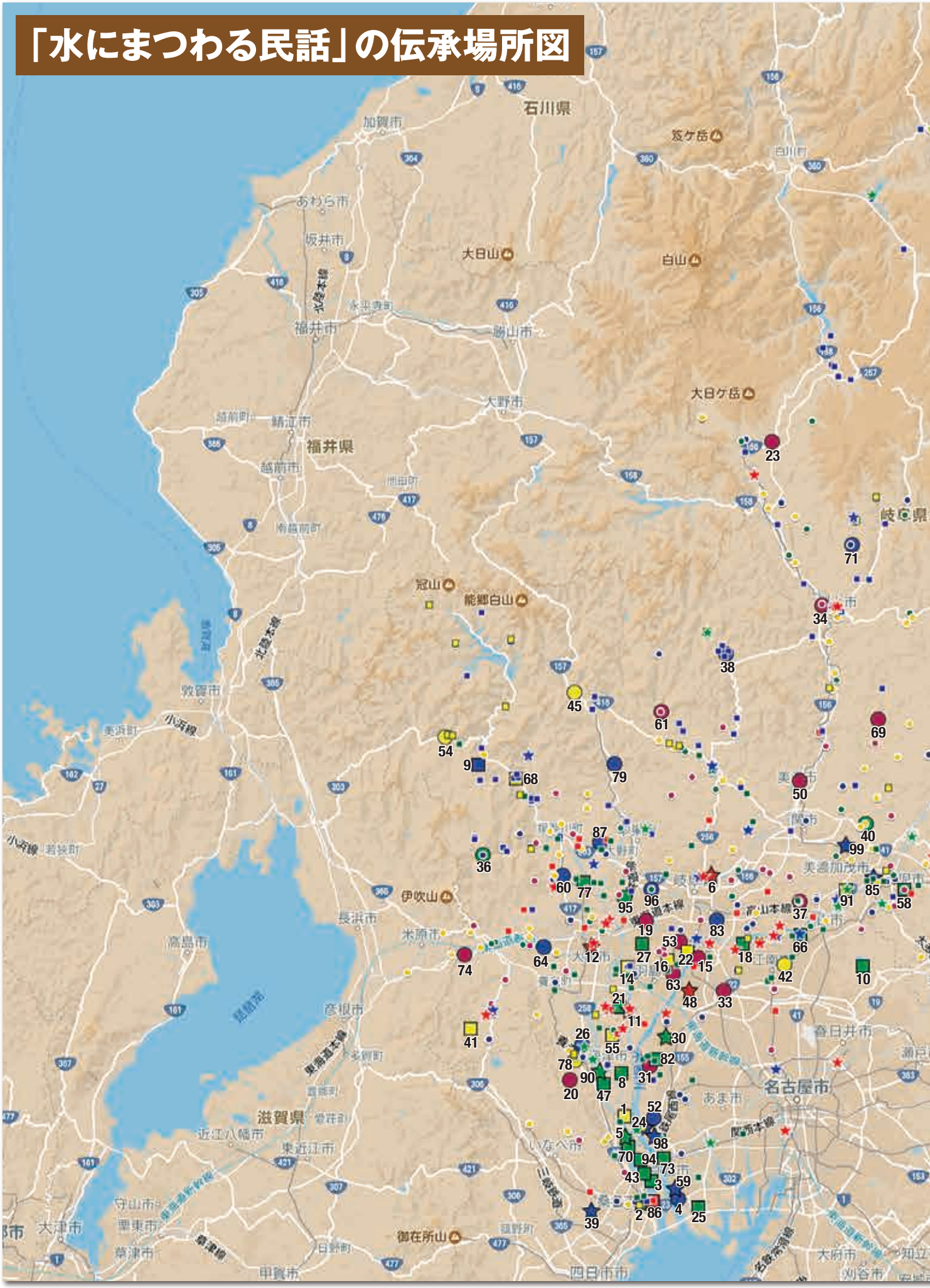
木曽川流域などを対象に



2景　凡例

第1章	雨乞い伝説	●
第2章	竜伝説	●
第3章	木地師と椀貸し伝説	●
第4章	弘法水と清水伝説	●
第5章	雷伝説	■
第6章	河童伝説	■
第7章	流れ仏伝説	■
第8章	治山治水利水伝説	■
第9章	人柱伝説	★
第10章	魚と獣の伝説	★
第11章	歴史上の人物伝説	★

「水にまつわる民話」の伝承場所図



CONTENTS

1．はじめに
2．雨乞いの回数
3．多度大社（桑名市多度町）の雨乞い
4．雨乞い行事の種類
4－1 龍神を怒らせて雨を降らせる
4－2 龍や蛇に願う雨乞い
4－3 神仏像への雨乞い祈願
4－4 石への雨乞い
4－5 神社から物を借りて雨乞い
4－6 願いが叶った礼に雨を降らす
4－7 雨乞い踊り
5．各地の雨乞い
5－1 美濃市美濃町
5－2 郡上市町
5－3 揖斐郡大野町
6．夜叉ヶ池伝説
7．KISSOの雨乞い伝説三編
8．雨壺伝説
9．KISSOの雨壺さん三編

1．はじめに

稲作には畑で栽培する陸稲耕作もあるが、陸稲は収穫率や食味が落ちる。そこで、水稲耕作が主に行われてきており、田植えとその後の稲の生育には、雨水が不可欠で、干天時には全国各地で「雨乞い」行事が行われ、歌人は雨を乞う歌を謡っている。

平安時代（七九四～一一八五）前期九世紀頃の歌人小野小町が詠んだ雨乞いの和歌の一つに、「ことわりや　日の本ならば　照りもせめ　さりとてはまた　天が下と」（道理であるなあ、この国を日の本と呼ぶならば、日が照りもするだろう、しかしそうは言っても、又、天（雨）が下とも言うではないか。だから、雨を降らせてください）と、雨を乞う歌（恐らくは江戸時代初期の作）が伝わっている。また、平安時代中期の僧侶・歌人の能因法師（九八八～一〇五〇頃）も和歌を詠んで雨乞いを祈願しており283、郡上市大和町牧の千代清水（長刀清水）は、嘉吉元（一四四一）年の大干ばつに、神職の娘・千代が社を作り雨乞いをして湧き出した泉である51。

千代清水（長刀清水）

多度大社の本宮（左）と別宮（右）の一目連神社。
欄干の下は落葉川

2．雨乞いの回数

雨乞いは、一集落で効果が無いと、周囲の村々が合同で何度も雨乞いを繰り返した。それでも効果が無いと、雨乞いで有名な神社（多度大社、熱田神宮、真清田・津島神社等）に遠方からも祈願したのである。なお、雨乞いの効果として、「江戸時代、西光寺（岐阜市向加野）の雨乞いが村総出で三日三晩行われ、雨の他に鯛までも降ってきた46」と伝わっている。

雨乞いを行った年間の回数や合同で祈願した村数は、例えば、松下78によると知多市東浦町の村では、文政九（一八二六）年～文久四（一八六四）年の二九年間で、年間の雨乞い回数は二回（三三％）が最も多く、次が三回（二〇％）と四回（一三％）で、その次が一回と七回の一〇％であった。また、合同で雨乞いを祈願した集落数は、八ヶ村、一〇ヶ村あるいは一七ヶ村に達している。

COLUMN

「雨乞いと絵馬」

京都市左京区の貴船神社では、平安時代、「祈雨の儀（雨乞い）」として本物の生馬・黒毛の馬を御神前に捧げて祈願し、一方、「雨止め」には晴天の象徴として白毛の馬、または太陽を示す赤毛の馬が奉られた。

しかし、時には生馬に換えて簡略化された「板立馬（板に馬の絵を描いたもの）」が奉納され、この「板立馬」が今日の「絵馬」の原形と言われる。

絵馬は鎌倉時代以降に一般に広まり、当初の馬の絵以外に、種々の願い事やそれが叶った感謝を表現する絵馬が社寺に掲げられるようになった。

3．多度大社（桑名市多度町）の雨乞い

雨乞い神事で、斎場で神霊が宿るものとして神に供えられた御幣は祈祷料と希望降水量の多少で金幣・銀幣・黒幣・白幣の四種類から選ばれた。金幣が最も高く、黒幣が昔から一番多く行われた。黒幣は明治三六（一九〇三）年に金七円五〇銭（米価で換算すると現在の約四万円）、白幣は黒幣の効力の半分で、祈祷料も半額であった。神事の後に神職から受け取った神札は、帰路の途中で手を放すとその地点で雨が降ると言われ、自村まで手から離さずに持ち帰った。

なお、片目が潰れた龍神の一目連（又はひとつめのむらじ）と同一視されている多度大社別宮の祭神・天目一箇命は、片目の鍛冶の神で、火で目が潰れる鍛冶職人を象徴している。一方、一目連は多度山に住む一目龍である。水神・龍

神である一目連は雨を呼ぶだけではなく、洪水を止める力をも兼ね備えている。

4・雨乞い行事の種類

雨乞い行事としては、①龍神を怒らせる（池・沼・淵の水をかき回す、汚物を洗う、鐘沈め、地蔵沈め等）、②雨乞い踊り・太鼓踊り、雨乞い大般若・念仏を唱える、③氏神に三日三晩籠る参籠、④山上で火を焚く千枚焚き、⑤聖地から神水を貰う水種貰い等多くの種類がある。さらに変わった行事として、秋田・福岡・佐賀県などでは「女が相撲をとると雨が降る」という言い伝えで、雨乞いのために女相撲が行われた記録が残っている。

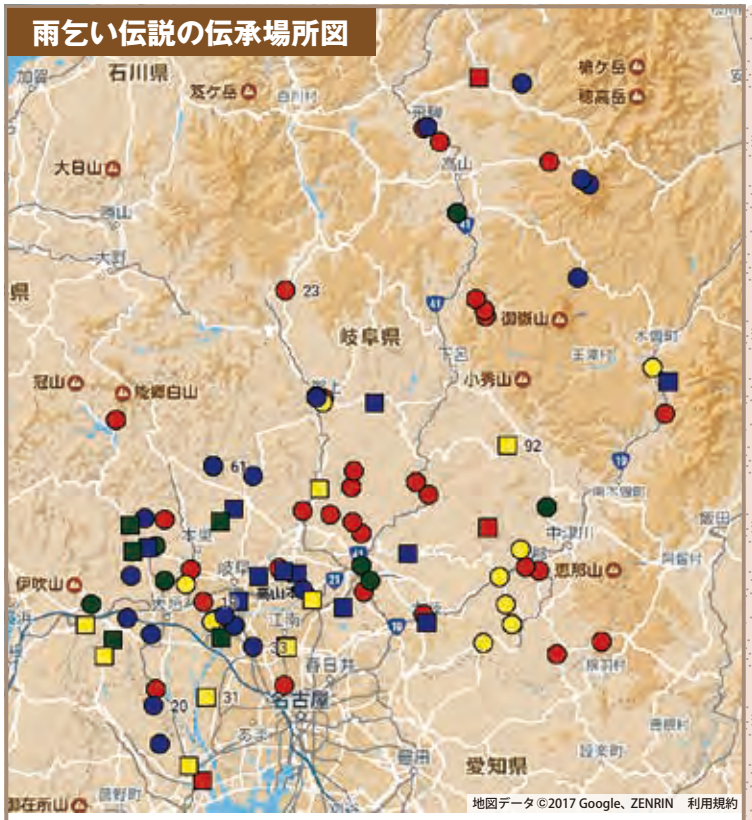
COLUMN

［図の説明］

各地に伝わる昔話は、他地域から伝わった昔話にその地域の特徴が重なり、その地域固有の話へと変質していったと思われる。つまり、話の粗筋は同じでも、地域毎に微細な変化・変更が加わって、類似の昔話の伝承空間が形成されて来たと考えられる。

そこで、まずは昔話の伝承空間を把握する試みとして、各ジャンル（章）毎に類似内容で区分した「民話群」の伝承場所（場所が特定できない場合はその地域の役所の位置とした）を記号と色を変えて図示した。なお、木曽三川の上・中・下流域区分は河川管理区間とし、木曽川では犬山を上・中流域の、羽島を中・下流域の分岐地とし、長良川は美濃と穂積を三区間の分岐地、揖斐川は揖斐川町と大垣を三区間の分岐地としている。また、図中の記号横の番号はKISSOの巻号です。次章以降参照されたい。

雨乞い伝説の伝承場所図



分　類	記号
龍神を怒らせる 4-1	●
龍や蛇に願う 4-2	●
神仏像へ 4-3	●
石へ 4-4	●
神社から借りる 4-5	■
お礼の雨 4-6	■
雨乞い踊り 4-7	■
雨壺伝説 8.	■

- ●は 6 種類に細分されて各種のサンプル数が少なく、分布傾向の検討は困難。
- ●は三川の中流域辺りに集中し、また高原川や宮川、さらに飛騨川の上流域に分布している。
- ●、■と■は、●とほぼ同様な分布である。
- ●は、サンプル数の半数が恵那市周辺に集中している。
- ■は、サンプル数が 3 例で検討困難。

4－1　龍神を怒らせて雨を降らせる

①「お姫の井戸五〇号」122では、「姫の井戸」を汚して龍神のお姫様を怒らせ、②恵那市武並町竹折上野の龍宮淵は汚すと祟りがあるので村人は普段近寄らず、雨乞いには名僧の衣を淵に投げ入れていた214。

以下に、龍神を怒らせる各種の雨乞い手法の話を述べる。

（1）「池や淵の水を浚える」

①白山比咩神社（恵那市山岡町下手向）境内の御手洗池を浚えて乾かす51、②虚空蔵岩（関市富之保）の基部にあるウナギ（虚空蔵菩薩の使い）が棲む小池を浚える51、③日龍峯寺（関市下之保）の裏の竜宮まで続いている「ナブラスの池」を浚える51、④水神神社（海津市南濃町徳田）境内の池を掃除する51、⑤源氏の落武者が兜を投げ入れたかぶと渕（美濃加茂市三和町川浦）を浚える288、⑥京河さまと呼ばれた小さな神社前の池（可児市姫ケ丘）の主が大蛇であり、雨乞いのために池をかえどり（川を堰き止めて、魚を捕まえること）した35。また、白鳥神社（養老郡養老町桜井）の池の水をかき出すと雨が降った302。

水を浚えた祟りとして、⑦日輪寺（岐阜市芥見）の池付近で大蛇を見た人が亡くなり、雨乞いのために池浚いをしたら、また死人が出た。そこで、大蛇の姿で現れた龍神を祀るために黒龍明神を建立した46。

（2）「釣り鐘を沈める」

①土岐市泉町久尻では、水神様の住む淵に鐘を投げ入

かぶと淵

日龍峯寺裏の「ナブラスの池」

れ83、②水無神社（高山市一之宮町）の弘安五（一二八二）年の銘のある鐘の竜頭に綱を付け、高山と宮村の境の宮川の「わんごの淵」に沈めた51（鐘は廃仏毀釈で破却された）、③宗久寺（岐阜県恵那市東野）の鐘（戦争で供出されて無くなった）を東野向島のオカダケ淵に沈める214。なお、④曼荼羅寺（江南市前飛保町寺町）の銅鐘（朝鮮鐘）は竜宮の乙姫様が献上したと言い伝えられ、これを本尊の前に据えて雨乞いをした241。

朝鮮鐘（『江南市史資料編四文化編』より）

(3)「御神体を沈める」

①岸剱神社（郡上市八幡町柳町）のご神体を川水で洗って祈る237、②雨乞いの滝（観音滝。下呂市小坂町大洞）に小坂町赤沼田の観音を滝壺に入れると大雨になる51、③恵那市長島町中野槙ケ根のお不動様（雨乞い不動）を永田川に架かる中野橋（長島町中野）下流を堰き止めて沈める214、④中廿屋（美濃加茂市三和町）の小川のほとりに祀られていた仏像・ベンズル（賓頭廬）さまを立岩の龍王淵に沈めて踊る288、⑤文明年間（一四六九～八六）、谷汲山華厳寺中興の祖・道破十穀上人が谷川の水で身を清め、顔に化粧をして祈願して雨が降ったことに因み、雨乞いの時は華厳寺本堂の回廊の奥に祀ってある上人の木像前で読経し、紅白粉でお化粧した後に谷川に投げ込み、飛び込んだ若者が木像に水を浴びせて沈めたりした後、再度化粧をして雨乞い祈願をした260。

雨乞いの滝（観音滝）
（「がんでんの館」より）

一方、沈めたら祟りが起きた話として、⑥広瀬観音（高山市国府町広瀬町）への信仰心のない殿様の時に日照りになり、観音様を川に沈めたら祟りがおきた。後に観音様を祀り直したら平和な村になった59。

雨乞いに使われた
道破十穀上人の木像

(4)「石を投げ入れる」

①雨乞い淵（雨乞い淵の滝。恵那市上矢作町漆原）に石を投げ込む99、②喉の滝（恵那市上矢作町漆原。平成二六年に崖の崩壊で湛水して水没したようである）に石を投げ込み99、③飛騨市古川町高野の米俵大の蛤型の模様がある「蛤石」を淵へ沈めて雨を願い51、④高山市丹生川町旗鉾では乗鞍山に登り、石を池に投げ込んだ51。

雨乞い淵の滝（「井沢渓谷の滝」より）

(5)「面を流す」

①白山神社（旧徳山村本郷）では、お面を川に流し川下で拾って洗って片付ける51、②物部神社（本巣市上真桑本郷）には、面流しの雨乞い神事に使われた「がくらの面」が今も祀られている51。なおこの面は、山伏が享保三（一五三〇）年の根尾川大洪水で拾いあげられたものである。

(6)「その他」

①昔大きな池があった釜が淵（下呂市小坂町赤沼田）の水が枯れた時に、池の近くに住んでいた姉弟が大事にしていた釜を投げ入れて村を去った後、雨が降った。釜はやがて石となり池底に残った218、②富士神社（下呂市小坂町湯屋）の蔵王権現は、雨乞いの効果のなかった氏神を川に流すと川を遡り、落合に流れ着き祀られ、雨乞いの神となった20。また、③加茂郡白川町切井地区では、村の山から伐り出した太い神木に御幣を付け、機織り淵に入れた神木が伊勢神宮まで流れるほどの大雨を願った123。また、釣鐘やご神体を沈めるのではなく、④雨乞いの時だけ、子供たちは木曽郡上松町荻原倉本の木曽川の中にある岩（雨乞い岩）で水遊びをし、雨乞い岩を怒らせて雨を降らせた202。

ところで、雨乞い祈願が行われた時代は神仏混淆で神社へも寺院へも願いに行ったが、一方、ある特定の神（龍神、龍王等）に祈願を掛ける場合もある。

白川町切井の機織り淵

4－2　龍や蛇に願う雨乞い

蛇と雨の話は極めて多く、①高山市丹生川町池之俣地区では、集落から一二km程奥の土樋池（烏帽子岳西の溶岩流による堰止湖）へ登り、池の付近に中畑市之助氏所有の竜の掛け軸を掲げて祈った269。②杣ケ池（高山市高根町日和田高原）の竜神に祈り、池の水を一升樽に汲み村を流れる野麦川に流すと雨が降る。お礼に川の水を同じ量、池に返す47。また双六谷の黒淵と大丹生川池（高山市丹生川町久手）が霊験灼かな雨乞い場所であり、③黒淵（高山市上宝町双六谷）に棲む淵の主・黒牛は烟を嫌うので、雪洞に蝋燭を灯して淵に流し、水の底から光が指せば雨乞いが聞き届けられ104、④鐘や太鼓で大丹生川池まで雨を祈り般若心経を唱えた104。

山県市では、⑤神通力のある蛇が棲んでいる長平山（山県市柿野）の岩から顔を出すと日照りでも雨が降った。こ

れ以降、雨占いをこの岩で行った124。⑥舟伏山（山県市神崎、一〇四〇m）山頂の大池に雄の、小池に雌の大蛇が棲んでいたが、雄雌の大蛇が海へ住まいを変えるために、雄は土石流と共に根尾の初鹿谷に滑り落ち、雌は神崎側の夏坂谷に落下る途中で穴（堅穴鍾乳洞）にしばらく留まった。神崎ではこの穴で八大竜王に雨乞いをした124。

⑦池田山（九二四m）の山頂近くの蛇が棲むという高さ六m余りの大石・焼石神社（揖斐郡池田町藤代）に雨乞い祈願をし、雨が降ると、長さ二m以上の松明数百本に火を点けて「感謝の火祭り」を行った12。⑧龍神が棲む乙女淵（揖斐川町谷汲木曽屋）で雨乞いが行われた76。

⑨南宮神社（不破郡垂井町宮代）の裏山の蛇池に棲む大蛇に雨を願う51。⑩養老郡養老町蛇持の蛇が棲む蛇池で雨乞いをする51。⑪八幡神社（岐阜市柳津町下佐波）に描かれた竜に雨乞いをする51。⑫禰宜の娘・きぬは青池（芒が渕。桑名市多度町古野）の主・竜で、青池に戻った。家族は祠を安置し、古野では雨乞い祈願に訪れている259（田代神社、青池神社、多度大社には同じ龍神が祀られ、何処の神社も雨乞いの効果は同じだと言われている）。

芒が渕と青池神社

4－3　神仏像への雨乞い祈願

①旅僧が水無神社（高山市一之宮町）奥の「せんのう（地名）」の弁財天様を水無神社の森に御迎えすれば雨が降ると告げた。迎えて祈願すると雨が降ったので、終戦前後までせんのうの神様を神社に迎え、鉦を打って御祭し、夜中川原で大焚火をして雨乞いを行い292、②広恵寺城（中津川市福岡町）が攻められて、滝壺・乙女淵（中津川市加子母町の乙女渓谷）に身を投げた姫の亡霊が旅人を悩ましたため、供養が行われ、その後は雨乞いが行われて不動様も祀られた64。

③井戸の中で光っていた仏像が引き上げられ、雨を頼んだら降ったので、雨乞い地蔵（美濃加茂市本郷町。大畑家の前）としてお堂を建てて祀られ288、④揖斐川町小野から粕川左岸側の揖斐川町市場にゆずり受けられたお不動さま（雨乞い不動。揖斐川町小野の山裾）が移動の途中で動かなくなり、元の場所に戻り、雨乞い不動として信仰された11。⑤住職が夫婦喧嘩してお不動さん（神戸町丈六道）の前で離婚を決めたら、外は晴天でもお堂の中に雨が降った。以来、雨乞い不動の霊験に参拝者が増えた119。

なお、神仏ではないが、⑥水神様の使いができる長老（岐阜県可児市）が雨乞いの儀式をしたら雨が降ったが、迷信だという人物がいて二度と行われなかった35。⑦播隆上人が行をした「目醒の滝」（不破郡関ケ原町玉）の主・白鰻に願をかけて雨乞いをする251。

乙女渓谷の乙女淵
（「大自然に憧れて岐阜遠征2」より）

4－4　石への雨乞い

①戦に負けた武士が丸草山（恵那市三郷町椋実）の頂上の岩で祈ると雨が降り、以降雨乞いが行われた214。②武並神社（恵那市武並町竹折）の大きな岩に登って雨乞いをした214。③木曽川に合流する和田川河口の竜神岩（恵那市笠置町毛呂窪の関西電力用地）の上で祈る214。④直径七mの舟形の大きな舟岩（恵那市山岡町下手向野田）の凹みに溜まっている水を掻き出すと急に雨が降ると言い伝えられている213。

⑤琵琶湖の近くの村が、阿遅加神社（羽島市足近町）の雨石を持ち帰ったが、雨が降り過ぎて返しに来た際、詫びに持ってきた近江縮緬は、大幟になり雨乞い行事の際に使われていた50。⑥高桑八幡社（柳津町高桑）にあった雨乞い石（今は善覚寺に在る）に水を掛けると雨が降った51。

⑦宝暦の頃、瑞浪市陶町水上の竜王さま（大岩）に雨乞いすると、白蛇が現れ雨が降った110。⑧素盞嗚神社（瑞穂市森）のお宮の鳥居の西側にある竜神の石は大水の時に流れてきた石で、転がしたら雨が降った。以来、石を裏返したり水を掛けたりして雨乞いが行われた70。

なお、対になった石として、⑨木曽の桟（木曽郡上松町）左岸の階段下にある男岩とその下流の女岩は、子宝石であり、雨乞い石でもあり202、⑩郡上市八幡町島谷のお天気岩・雨降り岩（男岩女岩）は、一方に登ると雨が降り、また一方では晴れる石であったが、今は片方だけとなった237。

4－5　神社から物を借りて雨乞い

神社から種々の物を借りて雨乞いに使用した。①貞享元（一六八四）年の日照りの時、八幡神社（飛騨市神岡町朝浦）の旗（雨乞い旗）を持ち出したら雨が降った。以来、雨乞いに旗を使用し51、②笠置山大権現（別名大御鎌様）を祀る山頂の笠置神社（恵那市中野方町）の鎌を借りて雨乞いを行い214、③北桑名神社（三重県桑名市堤原）に合祀された佐之富神社の宝物である硯を摺って雨乞いをしていた55。

4－6　願いが叶った礼に雨を降らす

取矢神社（山県市大桑）境内の池に烏蛇と白蛇が棲んでいた。歳を経て白蛇が昇天するのを烏蛇が蛇魔するため、ある人の夢に白蛇が現れ烏蛇を殺させた。この社は白蛇の効力で雨乞いに霊験がある299。②庄屋は雨乞いに権現山（各務原市と岐阜市にまたがる三一七m）へ行き、大き

二ッ岩

な岩（二ツ岩）の前で自分の身を捧げるので雨をと祈ると、雨が降ったが、雷と共に庄屋は消え、岩は二つに割れていた222。③印食の蛇池（羽島郡岐南町）の岸で若い娘が見知らぬ男から預かった手紙を返しに池に戻り居なくなった。翌朝その場所に父親宛ての手紙があり、「日照りの時は帯流せ。長雨降ったら紅投げよ」とあった118。④親孝行な若者が野良仕事で誤って大蛇を切ってしまった。大蛇は、お礼に雨を降らせるから、亡骸を舟伏山（二六二m、岐阜市日野）に葬ってほしいと頼む。以後この葬った蛇首塚で雨乞いを行った51。⑤揖斐郡揖斐川町徳山で、雷の子が落ちてきて一緒に暮していた。親と共に帰ったが、必要な時にはお礼に雨を降らせると言った50。

舟伏山頂上の蛇首塚

洗濯の水さえも貴重であった話として、⑥各務原市須衛町は田に水が留まりにくい土地だった。干ばつの折、大切な水を洗濯に使わなかったら雨が降った。それ以来、雨乞いの時は洗濯をしない25。⑦加茂郡八百津町のある妻は、洗濯しないならば雨を降らすとの神託を知らされずに洗濯をした。妻は命と引き換えに雨を願って池に身を投げて雨が降り、妻は大蛇になり天に昇ったと言い伝えられた47。

なお、雨乞い伝説でよく知られた「夜叉ヶ池伝説」に極めて類似した話として、⑧若者が土岐市土岐津町の庄屋の娘を貸してくれたら雨を降らせると言い、娘と若者は樫の木の穴に消えて、雨が降った。穴を覗かれた竜は怒って娘とともの天に昇った。樫の木のあった場所に社を建て、ここに願うと雨が降り83、また、⑨駒ヶ岳神社（木曽郡上松町小川）で雨乞いをした帰りに白蛇に遭い、雨を降らしたら娘をやると約束した。娘は白蛇と結婚し、親が池に行くと機の音が聞こえた202。

「椀貸し伝説」に類似した話として、⑩蛇穴鍾乳洞（郡上市和良町野尻）の清水の湧き出る穴に棲む乙姫は椀や鼓を貸したが、村人は借りた鼓を返さなかったので、竜は天に昇ってしまった。それ以来、日照りの際に穴に雨乞いをしても竜は居なく、願いが叶わなくなった47。

蛇穴鍾乳洞

さらに、「夜叉ヶ池伝説」と「椀貸し伝説」の合体型として、⑪犬山市今井喜八洞で、下の池から水の無い上の田に水を掛けると言う坊主に、出来たら七人娘の一人をあげる約束をした。水が掛り、嫁ぐことを了承した娘が居なくなってから二三日目に機織りを取りに来て、龍宮に棲んでいるので、欲しいものを紙に書いて池（竜宮池）に沈めれば何でも叶えると約束した。ある時お椀を借りたが一つ返さなかったので、以後貸して貰えなくなった208。

4-7　雨乞い踊り

①伊自良の雨乞い・「伊自良十六拍子」は約三〇〇年以上前から始まり、各地区で氏神様に願っても効が無いと、代表者が多度で御幣を頂く。これでダメなら、各地区の村人が釜ヶ谷山頂に集まって各地区毎に刈った柴での「千杷焼き（焚き）」を行い、最後には、長さ五間（九m）、胴回り四尺五寸（一・四m）の竹細工の雌雄二尾の龍を造り、伊自良川沿いに釜ヶ谷に登り、「龍廻し（地名）」で「雨乞いの龍廻し」を行った207。

龍神が棲むと伝わる古賀ヶ池（揖斐川町の小島山の尾根にある池）は三反歩（＝約三〇〇〇㎡、今は水溜り）あり、揖斐川町三倉の人々に大切な池で、多くの話が伝わっている。

②古賀ヶ池の大蛇に愛犬を食われた猟師が、仇討ちに大蛇に鉄砲玉を当てたが白樫村の氏神様に撃つのを諭され、大蛇にも良薬を渡した。龍神が雨を降らせたお礼に、白樫神社（揖斐川町白樫）で白樫踊り（敬老の日、九月の第三月曜）が奉納され224。③揖斐川町三倉の奥の落平に一本の「踊り松」が生えており、この地は遠くに古賀ヶ池を望み、雨乞い踊りを奉納する神聖な所であり54（池の畔の神社が崩れ果てていたため、昭和六〇年に龍神神社を建て再び祀っている。）、また、揖斐川町三倉では三倉の雨乞い踊り（県の重要無形民俗文化財）も行われている。

④白山神社（関市西本郷町）で雨乞い踊りを行い、満願に吉田踊りとして、洲原神社

伊自良十六拍子龍廻し
（山県市重要無形民俗文化財舞台公演会（H28.2.21）「山県市教育委員会生涯学習課」より）

白樫踊り（「揖斐川町HP」より）

三倉の雨乞い踊り（「揖斐川町HP」より）

（美濃市須原）まで礼踊りを行う289。⑤江戸末期から昭和初めまでは、常法寺（大垣市上石津町一之瀬）の庭で雨乞い踊りを奉納した後、笙ケ岳（九〇八m）の竜を怒らせるため髪の毛を燃やして、一之瀬と和田の境の尾根を登った先の三ツ岩へ願掛けに出かけた37。

5．各地の雨乞い

美濃市上有知、郡上市、揖斐郡大野町での雨乞いについて以下に触れよう。

5－1　美濃市美濃町

雨乞い行事は三段階で行われた。まずは⑴三社百燈奉献（八幡社、熊野社、神宮社に灯明を百燈献じる）、効果が無いと⑵七社千度参り（上記三社に四社を加え、一社について合計千度になるように参加者が拝む）、さらに効果が無いと雨に因んだ造り物を造り、⑶町騒ぎで街中を練り歩く。これでも雨が降らないと、再び四回目として⑴の三社百燈奉献から繰り返す。

嘉永六（一八五三）年には、六月八日～七月二三日までに計七回の雨乞い行事が行われ、七月二三日の三回目の町騒ぎでは、お姫井戸浚いも行われたが、雨は前日の夜一〇時頃から当日朝にかけて降った289。

5－2　郡上市美並町

雨乞い行事は集落毎に異なっているが、各集落は竜神を怒らせる手法をよく用いた。つまり、①美並村大矢元（現美並町白山）では天神様（天吹天神）境内の御手洗に石を投げ込み287、②美並村苅安（現美並町白山）では福の坂の下の「淡の倉の淵」で松明を持って泳ぎ287、③上苅安（現美並町白山）では羽佐古交差点下の乙姫滝の滝壺を浚え287、④大矢（美並町高砂）では粥川の星宮神社まで大神楽を打って行き、矢納ケ淵へ飛び込み287、⑤粥川地区では矢納が淵に鬼面を沈め237、⑥美並町の杉原と赤池の両地区は同日に熊野神社（美並町山田）で雨乞いを行い、雨が降らない場合は、裏山の御手洗池を浚った287。⑦鹿島神社（郡上市美並町三戸）では、お神輿に大鍬大明神を奉じて福野坂の下の「淡の倉の淵」まで行列し、この淵で若者が泳ぎ、行列は神社に戻り、雨が降るまで籠る。明治期末まで行われ、雨の降らなかったことはない237。

羽佐古交差点下の乙姫滝

矢納ケ淵

5－3　揖斐郡大野町

揖斐郡大野町は、東西約五・八km、南北約一一・七kmで、北部は山地で、西の揖斐川と東の根尾川が合流点する逆三角形で、揖斐川と根尾川の各扇状地が中央部へ進延し、中央部を流れる三水川沿いに氾濫盆地低地となっている。

北部の山沿いの来振・野・牛洞地区は、急斜面を落下した岩屑が半円錐状に堆積した崖錐上の集落であり、水は基盤との境を流れ、崖錐中には地下水が無い場合が多い。

崖錐上の集落での雨乞いは以下のように山と深く関わっている。①来振神社（揖斐郡大野町稲富）の雨乞いは、雨乞い踊りの後に、白山（石灰採取で消滅）の山腹に松明で「水」の文字を書いて火を点ける。降らないと来振寺の住職が祈祷したり、夜叉ヶ池や多度山などにも雨乞い参りをした131。②野八幡神社（揖斐郡大野町野）から区民が権現山（揖斐郡大野町牛洞）山頂まで松明を焚いて登り、山頂で祈願した131。③大野町牛洞地区では鐘や太鼓を打ち鳴らしながら、村内の神社にお参りし、権現山に集まる18。「牛洞の雨乞い踊り」は大野町の文化財である。

一方、いわゆる平地では、④大野町古川地区（来振の南）では神社境内や溜池の堤に持ち寄った枝の束を積み上げて燃やし131、⑤大野寺内地区（古川の西）では平成六年八月にも持ち寄った藁を墓地で燃やし131、⑥大野町大野地区（三水川沿い）では区長からの触れで家毎に柴を北野神社（揖斐郡大野町大野）に持ち寄り御祈祷の後に燃やし131、⑦大野町相羽地区（大野の南）では八幡神社（揖斐郡大野町相羽）で夕方から夜にかけて麦殻を燃やして雨乞い131をし、⑧大野町小衣斐地区（相羽の西）では村が主体となり春日神社（揖斐郡大野町小衣斐）で神主に祝詞を挙げて貰い131、⑨大野町下方地区では松明を焚いて根尾川右岸堤防上を日吉神社（根尾川左岸、下方字上池）東まで行き、河原で雨乞いをしていた131。

なお、大野町では雨乞いではなく日和乞い（お天気乞い）も行われていた。⑩大野町瀬古地区（小衣斐の西北）では、五〇年前まで、諏訪神社（揖斐郡大野町瀬古）拝殿で日和乞いを行い131、⑪隣の本庄より一～二m低い氾濫盆地低地の大野町下磯でも、雨降りが続くと、日和乞いを行

牛洞の雨乞い踊り

い、雨乞いはしなかった131。

大野町で少し変わった雨乞いとして、⑫揖斐郡大野町稲富（旧三田畑）の堤防に祀られた流れ地蔵に雨を頼んだら降った。これ以降「水くれ地蔵さん」とも呼ばれ、雨が欲しい時は、地蔵の頭から足まで水でよく洗ってお願いした18。

また、⑬揖斐郡大野町公郷の八木地区では、明治二九（一八九六）年の大水で唯一残った八木文楽（人形芝居）の蛇幕は、芝居でお宮の境内に張ると雨が降ると伝えられ、現在は大野町民俗資料館に保管されている131。

八木文楽の舞台に使われた幅2m、長さ12mを超える大きな幕で、現在は痛みが酷くて、広げて見ることはできない。（「大野町HP」より）

6・夜叉ヶ池伝説

夜叉ヶ池伝説は、①現安八郡神戸町の長者安八太夫が、雨を降らした約束に娘を蛇（龍神）に嫁がせ、龍神と娘は夜叉ヶ池に棲み、人々の雨乞いの願いを叶える伝説である119。なお、この話の他に、②安八太夫が日吉神社での雨乞い満願の日に現れた夜叉ヶ池の龍神に娘を嫁にする約束をし、龍に嫁ぐ夜叉姫のために子安地蔵菩薩を江戸末期の神戸町丈六道にあった宝蔵院に祀った話56もある。

大正二（一九一三）年に泉鏡花が福井県内の、同三年に大橋青波が美濃側の夜叉ヶ池伝説を基にそれぞれ戯曲「夜叉ヶ池」を発表し、広く世間に知られた。なお、安八太夫の娘でなく、③源義朝の側室延寿（大垣市青墓町の大炊長者の娘）が生んだ夜叉姫が、源氏一族の惨劇を嘆いて杭瀬川（今の揖斐川）に身を投げ、魂が川を遡り、姫の名が付いた夜叉ヶ池に棲みついた16、とも伝わる。

夜叉ヶ池（「揖斐川町HP」より）

また、夜叉ヶ池の龍神について、④池太沢（揖斐川町東杉原）という池に住んでいた大蛇が竜巻に乗って西杉原の赤池に舞い降りて休んだ後、再度嵐に乗って川尻まで行き、さらに川を遡って夜叉ヶ池に入ったから、池太沢と夜叉ヶ池の龍神は親戚であるとも言われている278。

近世初期頃から実録随筆の書に収載された夜叉ヶ池伝説は弘仁八（八一七）年あるいは承和・嘉祥の頃（八三四～八五〇）に発生した大旱魃を題材としており、⑤正保四（一六四七）年に大垣初代藩主戸田氏鉄は夜叉龍神社を西濃の水神として祀り、その守職を長昌寺（坂内川上）に委託した129。

揖斐川町坂内川上の夜叉龍神社

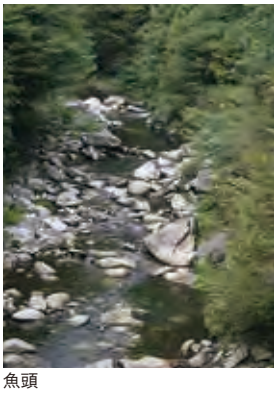
夜叉ヶ池伝説は、蛇婿入り説話（水乞い・嫁入り型）に分類されるものであり、飛騨にはよく似た「姥が池伝説」がある。例えば、⑥高山市上枝地区（川上郷）では、田に水を入れてくれたら娘をやると蛇と約束し、三人娘の末娘が瓢箪と針を持って大蛇と池に行き、蛇が瓢箪を沈めるのに疲れた時に針を打ち込んで退治していること51。同様の話が、大野郡清見村、大野郡丹生川村、郡上郡大和町上栗巣や郡上郡大和母袋にも伝わっている92。

八丈岩

夜叉ヶ池伝説の場所は川沿いに多くあるが、以下に数ヶ所を下流から順に列記すると、①夜叉ヶ池の大蛇に嫁いだ娘の父親を殺すために、その大蛇の本妻が八丈岩（揖斐川町長良）の下の穴に棲みついた。父もその子孫も夜叉ヶ池に雨乞いに行くときここを通らなかった11とか、②本妻が里帰りする娘を押しつぶそうと岩を転がしたが、岩は現在地にとどまり、それ以降、岩の下の穴に棲んでいる209と伝わる。③夜叉姫が夜叉ヶ池へ行く途中で機を織り上げた「はたご岩」（揖斐郡揖斐川町東横山）が横山ダム左岸下流側にあり、側に夜叉龍神が祀られている。岩の上に女性が上ると雨が降るといわれた278。なお、はたご岩はこの他に、坂内広瀬と坂内川上の二ヶ所もあるようだ。

④大草履（地名）の旧道深瀬橋上流の「魚頭」は、坂内川の魚たちが夜叉姫と龍神を歓迎した岩244で、⑤夜叉姫と龍神が佐中の家で泊まった翌日、前夜までなかった清水（佐中清水）が湧

横山ダム下流の「はたご岩」。右に夜叉龍神を祀る祠が見える。



魚頭

髪結い岩

き出ていた244。⑥揖斐川電工神ケ岳ダム下流数百mの坂内川左岸の割れた巨岩（髪結い岩）は、夜叉姫が池に登る途中、洗った髪を結い直した所と言い伝えられている244。なお、昔は岩に隙間はあったが二つに割れてなかったようである。

7・KISSOの雨乞い伝説三編

雨乞い伝説は、水を望む村人が湧き出る清水を見つけた「郡上谷（一三号）」111と水を浪費していた長者が豪雨で流された「おこひと寒八（七六号）」68の二話を「貴重な水を希求する」雨乞い伝説の一種として加えると、掲載された話は一三編である。

龍神を怒らせて雨を降らせる話は、龍神が住む井戸を汚して大雨に襲われた「お姫の井戸（五〇号）」122、穴に石を投げ込んで竜神を怒らせた「美山の雨乞い（六一号）」291、池の掃除をして雨が降る「城山の白狐（六九号）」125、さらに、淵でフンドシを洗ったため湧き出していた水源が逃げ出した「滝壺の柳の老木（一九号）」127の四編である。

龍神へ貢物をして雨を望む話は、池の龍神に娘を差し出す「田代池の竜神伝説（二〇号）」23と馬や牛を貢ぐ「おがせ池の宝刀（三七号）」24の二編である。

その他として、白髪の老人に姿を変えた氏神大明神が水争いを止めるように里人に諭した「明神のおいかり（一五号）」233、弘法大師か雨乞いの龍を造った「雨乞いの龍（三三号）」1、多度大社に詣でて雨が降る「庄屋様の雨乞い神事（五三号）」137、流れ着いた木製の竜の首に胴を付けて雨が降る「大浦の蛇（六三号）」98がある。

また、雨乞いをしない珍しい話「竜の怒りで大洪水（三四号）」53として、郡上市八幡町五町では諏訪神社（現神明神社に合祀）に雨乞いを祈願したが、豪雨が幾日も続き、田畑が水没の難にあったため、「子々孫々に至るまで雨乞いはしない」と神に約束し、以来、五町はどんなに日照りになっても、雨乞いはしないと伝わっている237。なお、飛騨地方には、「雷様に会いに天に行き雨を頼んだら、降り過ぎて家もみな流されてしまい、先祖の墓だけ残った」夢の話105も伝わっている。

8・雨壺伝説

「雨壺」は清い泉や井戸での竜王の棲みかといわれ、雨乞いの対象であった。

美濃市須原の洲原神社51の裏山に創建者泰澄が雨壺を掘っており、桑名市下深谷部の雨尾山飛鳥寺には古陶の壺の水を滴らせると雨が降ったと伝わる壺「雨壺」55が有ったが、信長の兵火に遭い今は無い。

須原神社の水が枯れた雨乞いの池

龍神社の雨壺池

さらに、江南市小折町の生駒氏の氏神龍神社241の「雨壺池」は八大龍王を祀っており、雨壺池を浚って般若心経を唱えると、雨が降る、と至徳年間（一三八四～八七）以来の伝承である。しかし、雨が降らないと次に、東南に約二〇〇mの久昌寺の住職に雨乞いを依頼する。方丈は寺宝「大蛇の鱗（龍鱗）」を奉持して祈願すると、忽ちに龍神社の空に雲龍があらわれて雨が降ると言い伝えられている241。明治二六（一八九三）年八月、明治四三年には村民一同が雨乞いを祈願して大雨が降り農作物がよみがえった報告がある。

織田信長の側室の法名から名付けられた久昌寺。

9・KISSOの雨壺さん三編

「アマツボさん（三一号）」273は「五輪塔の最上段の形」の石であり、木曽川にいれると雨が降り、降りすぎると石を拾い上げる。なお、五輪塔の頭部をご神体とした昔話に「おはちろさま」25がある。流れてきた「ピカピカ光るもの」を「雨神」として「八竜大王」と名付けて小さな社（各務原市鵜沼小伊木町）で祀った。その後の洪水でこの「八竜大王」が流失したので、石塔の五輪の頭をご神体として祀った、と伝わっている（雷伝説の1・雷との約束の⑥参照）。

「雨壺さん（七四号）」251に取り上げられている関ヶ原町今須の「雨壺神社」の祭神は竜王神で、今須山中に神木と水が溜まる穴「雨壺さん」が祀られている。なお、今須の商人が「犬の尾越」（現谷畑）で下多良の「雨が池」の大蛇に頼まれ、今須に連れていき、今須の雨壺に住まわせた。大蛇は雨壺と「雨が池」をたまに往復し、この二つは繋がっていると言われた37。

今須の「雨壺さん」へは米原市の大野木や柏原などから雨乞い祈願に行っているが、他の雨壺として、霊仙山（一〇九四m）の黒谷の源流部の岩の下からの湧水（雨壺）や柏原の水竜山にも八大竜王を祀る雨壺がある。

「雨池（九二号）」274は、東白川村の濃飛バス停「大明神口」側の民家の庭にある。付近の人の話では、直径一mほどの大きさの池で、冬は暖かく夏は冷たく美味しい水が出ていたが、家を建てる際に埋めてしまったようで、現在池の上は蓋がしてある。

この「雨池」も前述の「雨壺池」と同様、「池浚い」で池の神を怒らせると、雨が降ったようである。

CONTENTS

1．龍と蛇の融合
2．金物を嫌う龍
3．竜・大蛇伝説
3－1 金物を嫌う
3－2 竜の昇天
3－3 竜の退治
3－4 子に残した大蛇の目玉
3－5 蛇を祀る
3－6 夫婦竜
3－7 竜の祟り
3－8 秀逸な彫り物や絵の竜
3－9 工事と竜
3－10 その他
4．KISSOの竜や大蛇二〇編

文字を使用する以前の先史時代、中国ではすでに貝殻で作った龍形など、後代の龍の形象と共通項を持つ遺物が発見されている。殷代（BC一七世紀～BC一〇四六年）後期の甲骨文字には龍の文字が出現しており、この「龍」の文字を用いる族（龍族）が祀った神は降雨の有無を問う水神としての性格を備えていた。

龍の姿は、後漢時代（一五～二二〇年）の学者王府が、龍について「九似説」（頭はラクダ、目は鬼、角は鹿、首は蛇、腹は蛟［虯・螭・虬で、蛇に似た想像上の動物］、鱗は魚、爪は鷹、足は虎、耳は牛）を唱えたことに始まる。

1．龍と蛇の融合

雨乞い伝説などでは、蛇も龍も同じ霊験を現しており、蛇と龍の区別がつかない。なお、雨乞い専用の龍は玄宗皇帝（六八五～七六二）の唐代に登場している。

八木133は、仏教におけるコブラを神格化した蛇神（蛇の精霊、ナーガ）が中国の龍に影響を及ぼしたと述べている。中国の龍は①水との関連性、②水辺に棲み、財宝（珠）を守る、③魚などに自在に変化する特性を備えた超自然的な聖獣である。一方、インドの蛇神は①水との関連性、②龍宮に棲み、財宝（仏舎利等）を守る、③擬人化されて人語を解し、人と交わる特性を持ち、魏晋南北朝時代（一八四～五八九）以降、コブラのいない中国で隆盛した仏教の漢訳仏典を介してインドの蛇神が中国の龍の概念に影響を与え、唐代（六一八～九〇七）に小説の龍宮譚・「劉毅伝」以降、龍宮の記事が多く登場することとなったと述べている。

つまり八木は、インドの蛇神も中国の龍も共に雨を降らせる能力を有し、雨乞いの儀式に関する共通項が、仏典の蛇神が中国の龍と同一視された理由の一つと考えている。

なお、龍の爪の数については、漢代（BC二〇六～AD二二〇）皇帝のシンボルとなった龍の爪の数は三本で、宋代（九六〇～一二七九年）に四本、元代（一二七一～一三六八年）から五本に増えた。

2．金物を嫌う龍

水神が金物を嫌う理由を述べる前に、鋳物師を支配した真継家について述べておこう15。

鋳造の歴史は弥生時代（BC三世紀頃～AD三世紀中頃）に遡るが、造寺造仏技術が六世紀末に伝来して飛鳥寺の造営に活用されるなど、鋳造技術は大いに発達した。

律令時代（大化の改新後の七世紀後半～一〇世紀頃まで）の鋳銅技術は、貴族も鋳造技術者を確保しており、また鋳銅技術は民間にも広範に存在していたが、天皇家は需要の多い所に技術者を出向させて鋳銅製品を制作させており、飛鳥・奈良時代（五九二～七九四）には天皇家と鋳物師との結びつきも始まった。

天文八（一五三九）年、真継久直は天皇に仕える家の地位を乗っ取って地下官人真継家を成立させ、天皇家の偽文書を創作・配布し権威づけて、各地の鋳物師支配を開始した。

ここで偽文書は、天皇家から出された蔵人所牒（蔵人所はいわば天皇家の事務官の役所）の内容を踏まえて、真継家に都合の良い文書を書き加えたもので、鋳物師集団やその首領に対して諸国通行税の免除等、営業上の特権を保証する内容が多い。なお、偽文書には朝廷文書に捺印される正規のものと考えられる内印が捺してある。さらに真継珍弘（一六七二～七三三）は、鋳物を家業とすることを認める許可状「許状」を発給し、以後、鋳物師の代替りごとに更新され、鋳物師支配が拡大した。

この真継家と鋳物師との関係は、惟喬親王を祖と仰ぐ木地師との関係にきわめて類似している。

吉岡51は、鉄器の製造者（鋳物師）が鉄器の強靭性を言い募るために、鉄器は水神（龍神や河童など）さえ抑え込む威力を持ち、それゆえ水神は鉄器を嫌うと伝えた、と述べている。

水神は、池に入れられた嫌いな金物（鎌等）に怒り、その地に雨を降らせた。つまり、雨乞いの方法として水神が嫌う金物が用いられ、例えば恵那市の笠置山（一一二八m）の笠置神社の鎌を借りて雨乞いを行い、

真継珍弘が鋳物師を家職とすることを認めた「鋳物師職許状」
（『王権と社会』より）

また、恵那市の三森山（一一〇〇m）山頂の三森山社の鎌を麓の垂松瀑に投げ入れて雨乞いを行っていた。

3・竜・大蛇伝説

飛騨地方には、異類婚姻いわゆる蛇婿に分類される話が多く伝わり、その内容の多くは、針（蛇の嫌いな金物）を婿（蛇）の着物につけて退治（例えば104、105、270等）し、また、妊娠した娘に菖蒲酒や菊酒を飲ませて流産（例えば72）させる話であるが、本章では異類婚姻はページ数の関係で取り上げないこととした。

3－1　金物を嫌う主

①旧越中東街道の千貫桟（長三〇〇間余り、明治に県道を飛騨市神岡町横山から西街道に移し、高原川に千貫橋を架けた）下の深淵に棲む主は鉄を嫌い、淵に引きずり込むので、鉄を運ぶ時は山道を迂回した104。②飛騨市神岡町東雲西側の平坦部が開墾されたが、水が不足し、大蛇が棲むと伝わる池で鍋・釜を洗っていた。大蛇は堪らず池から逃げ出す際、恨みに大雨を降らせた。恨みを鎮めるために経塚を一三造り、一つの経塚が残っている104。③小八賀川（高山市丹生川町根方）の竜宮に通じると言われた琴淵には大蛇の主が棲み、主は金物を嫌い、釘を使った橋を琴淵に架けたら、一夜で橋は流された269。なお、④琴淵の主はガロオ（河童）とも言われていた。猟師がそれを狙い投網すると、大イワナ（九〇cm）が捕れ、見世物に出した269。

⑤坂山（蔵柱、小萱と吉田に連なる山）に棲む大蛇が、蔵柱村（高山市上宝町）や北側の小萱（飛騨市神岡町）の人々の夢枕で、子どもが多くなったので村に棲ませて欲しいと頼んだが断られ、小萱の谷に金物の剣八本が立った。忘れた頃に、小萱の西の吉田（神岡町）から鉄砲水となり蛇が抜けた39。

同じく大蛇の子供が増えた話として、⑥大蛇夫婦が苅安峠（高山市一之宮町）の大きな池に棲んでいて、子が増えたので、村人に相談した。村人は大蛇が里へ来ないように、池の北側の堤に金物を埋めた。すると、大蛇は怒り、洪水とともに無数河川から益田川（飛騨川）に移り住んだ292。

⑦村間ケ池（郡上市白鳥町前谷）には老大蛇が棲み、大蛇は金属が嫌いであった。番所の役人の子供がたわむれに鎌を池に投げ入れると大暴風雨になり、農夫が池から鎌を拾い上げたら静かになった237。

⑧井沢川（恵那市上矢作町漆原）の淵に棲む大蛇は人を引きずり込んだ。とぐろを巻いている大蛇に釜を被せて出られなくした99。

3－2　竜の昇天

海に千年、山に千年棲みついた蛇は天に昇って竜になるという言い伝えから、経験が豊かで抜け目がなく、しぶとく狡くなっていくことの例えとして「海千山千」と言う。

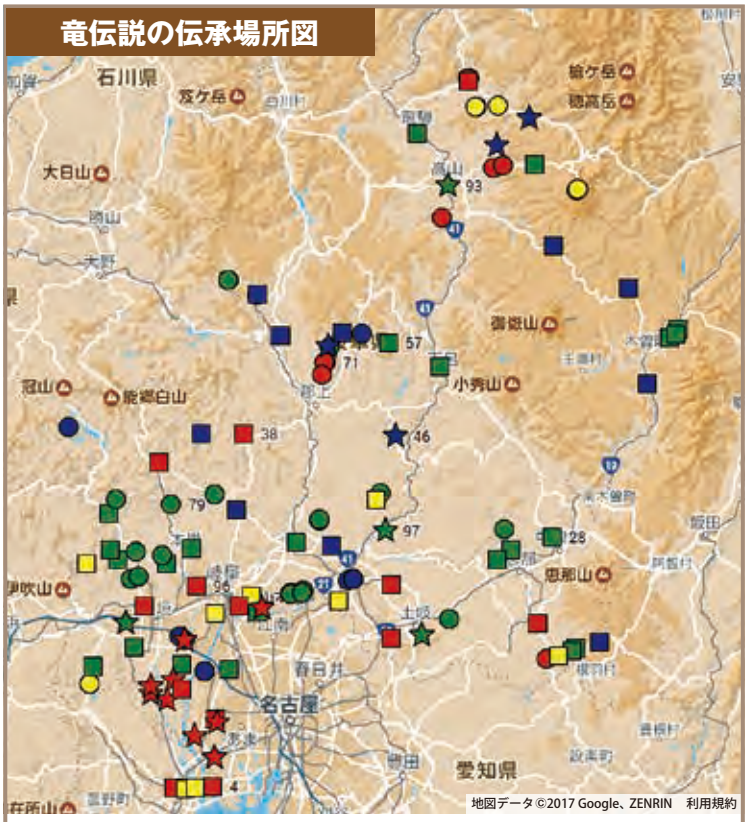
ここでは、竜が昇天する

千貫橋下の淵（右側斜めの岩は「横山楡原衝上断層」）

「ほえ橋」下の琴淵

村間ケ池

竜伝説の伝承場所図



分　類	記号
金物を嫌う主 3-1	●
竜の昇天 3-2	●
竜の退治 3-3	●
大蛇の目玉 3-4	●
蛇を祀る 3-5	■
夫婦竜 3-6	■
竜の祟り 3-4	■
彫り物や絵 3-8	■
工事と竜 3-9	★
その他 3-10	★
KISSO4.	★

- ●は、長良川と宮川の上流域に分布し、木曽川下流域で 1 例、揖斐川流域には全く見られず。
- ●は、揖斐川の上流域から下流域と長良川中流域から下流域に分布し、木曽川下流域には見られず。
- ●と■は、木曽川下流域以外の全域に分布。
- ●は、大垣市の 1 例以外ほとんどが高山市内に集中。
- ■は、主に三川の上流域に分布し、中流域では支川沿い。
- ■は、全対象流域に均等に分布。
- ■と★は、ほぼ全てが中流から下流域に集中。

話を集めた。なお、昇天する際に人に見られると神通力を失うようである。

①洞穴に棲む雄雌の龍が雨風を起こして地を荒らすので、各地を巡礼してきた和尚が祈って雄龍を天に昇らせ、雌龍を深い淵に閉じ込めた。和尚はこの地に龍洞寺（可児市今渡）を建て、龍の穴にあった「龍のまくら石」も本堂西に祀ってある35。またこの雌雄の夫婦龍について、②今渡ダム（可児市川合）の堰堤の下にあった「ほうろく淵」に雄雌の龍が棲んでおり、和尚の祈りで、淵の底の穴に封じ込められ、龍の住処には「龍のまくら石」が残っていたとも伝わる228。なお、③今渡ダム工事は難工事となった。周囲では「ほうろく淵」の龍のせいだと噂され、占い師の婆さんに観てもらうと、噂どおりだった。淵から立ち退いてもらうように祈願し、八王龍王の祠を鎮座したら、工事が無事完成した228。

今渡ダム

龍洞寺の「龍の枕石」

④堤を挟んで2つの池（安八郡安八町大森）があった。薬師の池が干上がり、大鯰が出てきた。捕まえようとしたら、雨を降らせながら下の池のほうへ飛んでいった。大鯰は龍神の化身で、姿を見られてうまく天に昇れなかったのかもしれない4。⑤正明寺（安八郡安八町東結）側の池を東の蛇池、お薬師が祀られている近くの池を西の蛇池と言い、東の蛇池の主が悪さをし、度々旅人が消えてしまった。巫女は鉦鼓を聞かすように言い、鉦鼓の音は蛇池から何か恐ろしい者を昇天させた。龍神となり村を守りに戻って来たのか、後に、大垣の浄勝寺から龍を彫り込んだ装飾板（破風）が移転してきた。なお、二つの池は今は無い4。この「蛇池」は、「蛇池と一本松（一四号）」205の池である。

正明寺

⑥池ン谷（揖斐郡揖斐川町山手）の古池から大蛇が昇天する際に人に見られ、大蛇は神通力を失いムシロとなった85。⑦芋ケ瀬池（各務原市各務おがせ町）の主の大蛇が天に昇ろうとするのを見た男が祟りで死んだ。大蛇は、海と山で二千年修行すると天に昇れるが、見られると神通力が無くなる45。⑧龍池（一宮市上祖父江竜池）の周囲に老松が茂っていたが、一夜で姿を消した。この松は龍の精が形を変えたもので、荒天を誘って昇天した1。なお、⑨蛇池（一宮市上祖父江）で乙姫が生まれたと言い、小祠を建てて乙姫様を祀った1。

3－3　竜の退治

①養老年間（七一七～七二三）、深谷（郡上市明宝寒水深谷）から見座（高山市上宝町見座）に棲む大蛇が人々を悩ませていたが、修行中の泰澄が岩（蛇岩）の上で苦しむ大蛇を供養すると、岩に蛇形が残った。この岩が明治に道路改修でカンナリドチに落ち、昭和にある人の夢枕で祀って欲しいと言い、現在地に祀られた295。②人を襲う大蛇を武士が退治して、淵（中津川市蛭川）に投げ込み、その淵は竜渕と呼ばれるようになった108。③猟師が細尾谷（加茂郡七宗町上麻生）に住む大蛇を撃ち殺した。その時大蛇の血が溜まったのが赤池（飛水峡ロックガーデンの上流）で、家に帰った猟師は高熱を出して亡くなった。その鉄砲は神淵神社（七宗町神渕）に奉納されている275。

蛇岩

赤池

神渕神社

④池（瑞浪市土岐町桜堂）に棲み悪さをする竜を、仏のお告げで日光菩薩と月光菩薩の跡取とされる侍二人が退治した。竜が居なくなった池は水が引き、肥沃な田圃になった118。

⑤月尾谷（揖斐郡揖斐川町小津）の畑でソバ・豆が何者かに食べられる。農民が鉄砲で畑に現れた大蛇を撃つと、もの凄い大雨となり、土橋も流され、家に帰った農民はまもなく亡くなった238。

各種の伝説が伝わる芋ケ瀬池（各務原市各務おがせ町）では、⑥山で山姥（友人の妻に化けた池の主の大蛇）を矢で射った男が血の後をたどると池（芋ケ瀬池）に辿り着き、おがせ（芋のつむぎの束）が浮いていた。男は後悔して、

大蛇のために池に魚を入れた118。さらに、⑦苧ヶ瀬池から約二・五km東の大安寺（各務原市鵜沼大安寺町）開山の和尚の所へ、娘に化けた大蛇が怪我の治療を頼んできた。治療の礼に寺に引く清水が湧き出て、寺へ水が引かれた222、また、⑧開山した和尚の徳を慕って苧ヶ瀬池から来る竜に水を頼むと、座禅していた石の間から湧き出した51、とも伝わっている。

大安寺

以下に、物語等で現れる人物に退治された蛇の話について触れよう。

①田畑を荒らす白蛇退治を弓の名人俵藤太（藤原秀郷）の異称で、百足退治などで知られる。）に頼み成功し、村人は大蛇の魂を「白蛇神社」（揖斐郡池田町山洞）に祀った47。

②両面宿儺が高沢山で悪さをしていた竜を退治し、山頂に日龍峯寺（関市下之保）を建てた125とも、また、③両面宿儀が日龍峯寺の山の池に棲み村を荒らす竜を刀で退治した。この時、谷川に流れ込んだ竜の血は田圃にも入り、寺の麓の田には、竜のお詫びか、ヒルが居なくなった47とも伝わっている。なお、両面宿儺は『日本書紀』では皇命に逆らう凶賊とされるが、岐阜県の在地伝承では毒龍退治や寺院の縁起（高山市の千光寺・日竜峰寺など）に関する逸話も残されている。

日龍峯寺

3－4　子に残した大蛇の目玉

①高山市上宝町蔵柱では、夫の許を去る時に、子に残した目玉を二回も眼病を患う殿に取られたので、津波の発生を親子には知らせて逃げさせた後、大津波で殿の家から里まで皆流された104。

②大丹生池（高山市丹生川町）の大蛇が娘に化けて女房になった。子供を産む姿を見られて池に帰る際、子に目玉を一つ残すが、盗まれたので、再度目玉を与えた（両目）。盲目になった蛇に時や方角を知らせるため、夫は寺に釣り鐘を寄進した104。なお、③亭主と子供に別れる際、おしゃぶり用に残した目玉を殿に取られ、再度目玉を与えてメクラになったので、寺の鐘を鳴らすように頼んだ話が、高山市上宝町本郷に伝わっている104。また、④子が十五歳になったら、二つ目の目玉を返す約束をしたが、村人の意見は返すか返さないかで分かれた。しかし、千光寺（高山市丹生川町下保）に滞在していた円空の意見で返した269。

⑤唯願寺（大垣市上石津町下山）の僧は、京の帰りについてきた女と夫婦になったが、大蛇であった。女は姿を見られたので子を残して本堂前の井戸に飛び込んだが、子のために「しぶなしのカヤ」と玉を残した。三年後、玉と引き換えに金の出る小俵をくれた118。なお、⑥この井戸は琵琶湖まで続いていると言われる229。カヤ（イチイ科カヤ属の常緑針葉樹）の実は食用になる。

丹生川支所前の両面宿儺

千光寺

3－5　蛇を祀る

①沼の大蛇（飛騨市神岡町朝浦）は、昔は村人と共存していたが、村人が沼の水を使うために棲み難くなり、恨みを残して越中の浜へ飛び去った。沼の跡地に住みだした人に蛇の祟りで、不幸が重なったため、供養のためにへび塚（蚖蛇等之霊）が祀られた39。②西板屋（本巣市根尾）と尾砂谷（根尾門脇）境の「いけざこ」に棲む大蛇は、東板屋の沼と尾開谷内の沼の三ヶ所を行き来していた。猿に化けて木にいる時に矢で射られ、雷とともに火の雨が降り、池は真っ赤に染まった。その大蛇は雷神社（本巣市根尾西板屋）に祀られている270。

③虚空蔵菩薩が修行でこの地（大垣市赤坂町）に着た時、立小便をしたら大蛇の頭で掛かってしまった。追い駆けられて金生山の頂上まで逃げ、許してもらうために、この地に蛇王権現にして祀る約束をする。金生山の頂上の明星輪寺に、虚空蔵菩薩と蛇王権現（蔵王権現）が祀られている47。

④愛西市持中町の氏神（神明神社）の境内の池に大蛇が棲んでいた。境内に「松水さま」と呼ばれる竜神が祀られている。毎年一月一五日に白おこわを炊いて供える祭りが行われる243。⑤西別所白山神社（桑名市大字蓮花寺）の神は白い龍である55。

へび塚（蚖蛇等之霊）

唯願寺の「しぶなしのカヤ」

山肌に祀られている雷神社

蛇王権現社

3－6　夫婦竜

①滝の沢（木曽町開田高原末川小野原）の二つの池（女池と男池）に竜がそれぞれ暮らし、山や田畑を荒らしていた。侍が二匹の竜を退治し、竜は乗鞍山へ逃げて行った220。

②男竜と女竜が棲む寝覚ノ床（木曽郡上松町上松）の池が小さくなり、男竜はこの池に、女竜は駒ヶ岳の縞池に分かれて棲んだ。村の娘たちは、美男子に化けて女竜に遭っていた男竜に恋をしたが、結婚できないので池に身投げした。旅僧（弘法大師）が池の呪いを解き、平らな土地にした202。

③池ヶ洞と塩蔵境の山頂（高山市高根町）の男池・女池に男女の大蛇が棲み、修行を積んで竜神になった。夫婦蛇はさらに海で修行するため、塩蔵谷を下った。この二池は竜神の住処で、道路開通のため池を一部埋めたため、祟りを恐れて龍神碑を建てた256。

④女池と男池（郡上市白鳥町那留）の二つの池が戦後に埋め立てられたが、性悪女大蛇が女池に住む女大蛇に化けて猟の下手な猟師をだまし、女池の女大蛇を退治させた。猟師は猟が上手くなったが、男池の男大蛇は妻を殺した罰として、猟師の眼を見えなくした52。

上記の異説として、⑤猟師が雄池で鴨と間違えて大蛇を撃ち殺し、祟りで死んだ。雌の蛇は村間ヶ池（郡上市白鳥町前谷）に移った。雄池の西の雌池は残ってる287。また、「3－1金物が嫌う主」で述べた村間ヶ池については、⑥千田野（白鳥町下田野）に棲んでいた大蛇は、洪水の後に一晩で干上がったので、村間ヶ池に移り住んだと伝わっている52。さらに、⑦大蛇が村間ヶ池へ下る時に山が崩れて、洞（割り洞。郡上市明宝気良）が出来た295、と伝わっている。

村間ヶ池

⑧恵那市上矢作町の「海」（達原渓谷にある地名）に青竜（雄）と黒竜（雌）の龍が住んでいたが、上から流れてきた白竜（雌）に元から居た黒竜がかみ殺された。黒竜は恨みで人に祟ったが、村人は弁天様を祀って鎮めた99。

⑨関市板取（蕪山の荒倉と上つ谷間）の尾根近くの2つの池に雄雌の大蛇が棲んでいた。猟師が池に浮かぶ2羽の鴨（雌雄の大蛇が変身していた）を撃とうとしたら、弾は当たらず、強風と大雨の嵐になり、家に帰った猟師は寝込んで亡くなった。干天時に雨を降らせようと、鳶の先で池を掻き混ぜると、金物に怒った大蛇が上流から大水を流し、伐採した木材や人が流された8。

⑩沼田（山県市富永の水品）に雄雌の竜がおとなしく暮らしていたが、雌の挑発で、雄は度胸試しに人を襲ってしまった。それを悔いた雄雌の竜は、天に豪雨とともに昇り、いまもその後が蛇道として残っている124。なお、兄弟の大蛇もいて、⑪仲越（山県市神崎。県道二〇〇号線の終点集落）の池に棲んでいた大蛇の兄弟が大洪水を起こして海へ下る途中、弟が死んでしまう。兄だけで海へ下るためには、三部経が必要で、伊住戸（仲越から下流約六km）のお寺へ取りに来た124。

3－7　竜の祟り

①高山市丹生川町曽手の集落に、池の形をした「水なし」と言う所がある。昔は池でおむつを洗っていると嵐になり、竜神が追い駆けて来て、気が付くと水が枯れていた269。②「池の浜」（下呂市萩原町西上田）の池で、石の上の小さい蛇を池に落とす度に蛇は大きくなり、ついに大蛇となって男衆二人を襲った。二人は大蛇をたたき殺したが、祟りにあい謎の病で死んだ97。

木曽駒森林公園（木曽郡木曽町日義）の「七尋石」については、③惣の島（木曽郡木曽町日義原野）の若者が大蛇に襲われ鎌で大蛇を切ったら、のたうって淵へ落ちて行った。淵は蛇切り淵と呼ばれた276。後日談として、④原野村のこの若者に嫁いだお濃は、大蛇の祟りで蛇に変身させられた姿を夫に見られて離縁され、さらに実家からも追い払われた。途方にくれたお濃が座っていた石（七尋石）に「うろこ」の跡と麻桶を置いた窪みが残っている276。また、⑤お濃は「濃ケ池」の竜に見初められて身ごもり、「七尋石」の所で出産したが、家に帰れないので「濃ケ池」に身投げしたとも伝わる。なお、「濃ケ池」は大原（木曽郡木曽町新開大原）奥の池、あるいは、駒ケ岳の麓の池とも言われている276。⑥明星岩（木曽郡木曽町日義原野）に住んでいた白カジカが「濃ケ池」の大蛇を負かしたら、大蛇は池から伊勢の海へ行った276と伝わっている。

⑦大船山（恵那市上矢作町）に棲んでいた悪魔が、蝮の頭によく似た石（マムシ岩）に封じ込められたと伝わる99。⑧男が魚釣りの後、石（中津川市蛭川奥渡区）の上で一服していると一匹の蛇が出てきた。悪戯で、煙草のヤニを魚の

七尋石

腸に混ぜて与えた。夜蛇の恨む声が聞こえ、翌日、蛇は死んだが、暫くして、男は祟りで川に引きずりこまれ、その石は「蛇石」と呼ばれた47。

岩村城（恵那市岩村町）の大蛇に関する話として、「本洞のうわばみ（七二号）」13の他に、⑨宝永五（一七〇八）年、猟師（恵那市長島町久須見）が魔物だと思い大蛇を撃ち殺し、馬の骨ほどもある蛇骨を岩村城に届けた。岩村の子供がこの蛇に飲まれて尻から出たが一生頭の毛が生えなかった212。⑩岩村城が敵陣の攻撃を受けた際に、秘蔵の蛇の骨を井戸に沈めると城を霧が覆い、勝って、霧ヶ城と名がついた13。なお、偶然蛇の骨が井戸に入った話として、⑪負け戦の兵士が躓いて、何かが井戸に落ち、霧が立ち込めて勝利した。井戸を調べると蛇の頭蓋骨で、城の宝になり、城は霧ヶ城と名付けられた47、と伝わっている。

⑫円光寺（飛騨市古川町殿町）の宝物「蛇骨」（約三m）は、越後の国で、本妻に殺された妾が大蛇に変身したが、親鸞による供養で、大蛇は菩薩になり昇天し、越後の寺から持って来られた物である102。

仏の教えを学んだ後に、寺に蛇骨を残した蛇もいる。⑬龍泰寺（関市下有知の守り神の竜は、死期が迫ったので、仏の教えを乞うて寺に来て、天に逝き、寺に竜骨が秘蔵され、竜神は境内の「竜ヶ池」にある島の祠に祭られている71。⑭葦池（各務原市下中屋町。春日神社境内に池は現在無い）の大蛇は旅人を食べたり田畑を荒らしたりしたが、若嫁に化けて河野西入坊（各務原市下中屋町）で

円光寺

岩村城址と「霧ヶ井戸」

の説教を熱心に聴き、住職に亡くなった後の始末を頼んで、大蛇となって亡くなり、寺には、現在も上顎と下顎の骨が残っている222。

崇りに戻ると、⑮大船神社（恵那市上矢作町）の石段で満願の日に大蛇を見た松助が亡くなり、その者の家の前に「松明霊神」の石碑が建てられ、祀られた。なお、大蛇を三つに切って、頭を大船神社、腹を中山神社（恵那市串原中沢）、尻尾を愛知県東加茂郡に奉納した伝説もあり、松助は大船神社のご神体を見た祟りで病死した99。

⑯伊勢山（本巣市法林寺）の中腹にある大岩は、神が宿る岩として崇拝されていた。山菜取りの村人が、「山で味噌を焼くと、匂いで大蛇が来る」との言い伝えを忘れ、大岩の上で味噌を焼いて昼食にしたら、大岩の下から出て来た大蛇に睨まれ、ついに亡くなってしまった128。

揖斐郡揖斐川町上野の小島山（八六四m）頂上にある古賀ヶ池には、小島山周辺の数村でよく似た話が伝わっている。

⑰天正年間（一五七三～九一）に、大蛇に愛犬を食われた猟師が、仇討ちに失敗し、瑞岩寺村（現揖斐川町瑞岩寺に該当）の氏神様に逃げ込み（一説には、瑞岩寺村の秋葉神社に隠れ、神様が大蛇を追い返すと）、ようやく大蛇は帰った28。⑱その時大蛇が壊した谷（じゃが谷、一説では城ヶ谷）は、大雨のたびに荒れ、不作が続いたので、大蛇の祟りを鎮めるために、池のほとりに祠を建てた11。また、⑲享保（一七一六～三五）年間、猟師（揖斐川町白樫）の犬が古川池（古賀ヶ池に該当）で大蛇に呑みこまれた。猟師と友人は、復讐に行くが、急

河野西入坊

龍泰寺の竜ヶ池

所がはずれて大蛇に追われ、揖斐郡大野町黒野の八幡社に逃げ込むと大蛇は息絶えた。大蛇は焼かれ、灰を埋めて供養した。黒野駅レールパーク東二〇〇m辺りに「へんび塚」が残っている217。

さらに、⑳揖斐郡揖斐川町東津汲（旧久瀬村）では、猟師の犬が古賀ヶ池で雄の大蛇に呑まれた。撃ち取ったら雌の大蛇に追われ、猟師はなんとか逃げ、猟師を見失った大蛇は別の谷に出て行った238。また一説では、㉑雄の大蛇の片目を撃ち抜いたが、雌の大蛇に追われた猟師は瑞岩寺村の北の宮に逃げ込み、大蛇が社殿を壊しながら村を水浸しにしようとしたので、宮の神が鯰になって飲み干した238と、伝わっている。

現大垣市上石津町にも犬と大蛇の話がある。㉒多良村（大垣市上石津町）の狩猟の上手い侍が、幾久里の山で犬に飛び掛かる大蛇（主）を刀で切りつけ、大蛇は淵へ逃げた。翌年、その淵で侍が投網をすると、主に引き込まれ、以来その淵を「へびが淵」と恐れた37。また、㉓上多良の豪士が幾久里の山へ狩りに行くと、小さなトカゲが豪士を幾久里川の淵へ引きずる。怒った豪士はトカゲを切り殺すと、トカゲは淵に落ち、赤黒い血に染まった淵から二つの大きな目が光っており、ここを「蛇ぶち」と言った37。さらに、㉔上多良の人（三輪佐太夫）は犬を連れて魚取りに行った。川で大蛇に遭遇し胴を二つに切った。翌日、川で魚の群れを見かけ、投網すると川底へ引き込まれた。実は群れは大蛇の頭だった。この淵を「蛇淵」（「佐太夫淵」229）と言う37、と伝わっている。

㉕猟師が鴨を打ちに沼に来たが、笠を残して姿を消した。それ以降、笠取池（一宮市萩原町西宮重）と呼ばれた。沼の主が大亀で、埋めたてると祟りがある1。なお、鹽道神社（一宮市千秋町塩尻居屋敷）周辺の湿地にも、笠を取りに行った巡礼がヨシの深みに嵌り、笠だけが残された笠取沼伝説がある。

へんび塚

㉖草刈りの最中に番頭さんは付近の蛇池で、水を飲みに来た蛇の頭を誤って切ってしまった。仕事の後、番頭さんは喉が渇いたので池の水を呑んだら死んでしまった。弔いのために地蔵（養老郡養老町直江の旧牧田川堤防のお地蔵様）を建てた132。

旧牧田川堤防のお地蔵様

3－8　秀逸な彫り物や絵の竜

①麦飯峠に棲む大龍が旅人に害を及ぼすので退治した。その後、龍の姿をムツの神に彫刻してもらい、龍門寺（加茂郡七宗町神渕）の山門に架けた。しかし龍の魂が夜な夜な悪さをするので、ムツの神に龍の目に穴をあけて栓をして鎮めてもらった275。

また一説には、②龍門寺を通りかかった男（左甚五郎と伝わる）が龍の彫り物を造り、大門に飾った。その龍が悪さをしたのでお教をあげ、池（山門の内側）を掘って祀ったとも伝わっている118。

龍門寺の龍

③村人が薬王寺（可児市東帷子）高梁に彫られた上り竜と下り竜に雨を頼んだら、降らせ過ぎたので、村人が天に矢を射ったら止んだ。晴れると下り竜の片目がつぶれていた35。

④手力雄神社（各務原市那加手力町）の拝殿の木彫りの龍（一対）が畑を荒らしたので、出歩けないようにお祓いして目に釘を打った24。実際は「目玉に釘は無いが、しかし、寄木を確実につなぐために隠して大きな釘で固定してあり」、「龍を釘で打ちつけた」状態と言える。

⑤殿様（揖斐郡揖斐川町春日川合）が左甚五郎と他の一人に大蛇の彫刻を命じた。甚五郎が観音菩薩に大蛇の姿を見せて欲しいと願うと、池から大蛇が姿を見せたので、その姿を彫りあげた。殿に見せると彫り物なのに、鎌首を持ち上げた224。

鵜田神社

⑥走井山勧学寺（桑名市矢田）の本堂天井に描かれた龍（水飲み竜）が井戸の水を飲みに来たので、竜の目に大きな釘を打ちつけた55。⑦桑名旧城（桑名市吉之丸）蟠龍櫓の胸瓦は蹲った龍の形をしており、瓦の下には恐れて魚が近かなかった55。

飛べないように尾を無くした竜として、⑧大天王（現鵜田神社。岐阜市東鵜）の彫り物の竜は、仲良くなった娘が役人のせいで死んだことを怒り、竜は大天王のお社から出た火で、役人の家を焼き払った。建て直された拝殿の右側の竜の彫り物は、飛べないように尾が無い50。また一説には、⑨一対の竜のうち、片方は火を吹くので、社の神様に尾を切り取られたと言う46。

餌を与えた絵の竜は、⑩円頂寺（恵那市上矢作町）の龍の天井絵（畳八畳分）は、元は岩村城にあったもので、どこからみても目が会うので「八方睨みの龍」と言う。ある時この龍が絵から抜け出て畑を荒らすので、麦の絵をかいて（餌を与えて）封じ込めた99。

円頂寺の「八方睨みの龍」天井絵
（「恵那市観光協会HP」より）

3－9　工事と竜

①境川からの放水路工事（昭和三年～五年）の際、三井池の竜神の怒りを鎮めるために、言われたとおり米を投げ込んだ。その後無事に完成し、祠（三井池水神神社。各務原市三井山町）が建てられた50。

昭和五一（一九七六）年の安八水害時の竜について、②薬師の池を埋め立てていくと、薬師堂の尼が「キッチリ閉めずに、竜の出れる穴を開けとかないといけない」と長良川決壊の三年前に言った。埋め立てられた池の隅っこに竜のために開けられた穴が残っている4。③安八水害の時、竜が下の池から長良川を越えた堀津の池に飛び立ち、堤防が切れた。下の池は後に埋立られ、殉職した冨田知太郎氏の冥福と治水祈願の碑が建った4。

三井池と龍神社

養老町釜段の下池伝説で、「釜段のさいかち（二六号）」132に関連して、④釜段の池が干拓で小さくなると、大雨が降って竜が昇天した23。

なお、サイカチについて、⑤婚約者ふりが奉公中に高須領主に身を汚されたことを怒った山伏の鉄盤は、ふりの好きなサイカチの花籠の底に恨みの言葉を書き、ふりと領主を祷り殺そうとしたが、討たれた。高須町新町から西小島への道路

治水観音尊像

のそばの小さな塚にはサイカチ以外は育たず、この塚の草を刈ると祟りがある221。

⑥村はずれにあった深い池（弥富市三百島）の埋立の時、占ってもらうと、竜神が「別の地に祀ってくれれば、永代村を守る」と言うので、土地改良の記念碑と並んで社を造り祀った245。⑦諸鍬神社境内（愛西市諸桑町）の塩田龍神社は、昭和五九（一九八四）年の夏、日光川と目比川が合流した湿地帯・塩田から池の主（体が黒っぽい龍）に移って頂いた243。⑧元和二（一六一六）年、横江川の洪水で大きな池（蛇池。海津市平田町蛇池）が出来た。昭和六～九年の埋立工事の時、池が浅くなり、荒天になり竜が昇天した107。

3-10　その他

①洞川（郡上市明宝寒水）で晒していた布が本流の大きな淵（布淵）まで流れた。渦の中の布は大蛇（長一六〇ｍ程）になって陸に上がり、頭の所が布頭、尾が布尻と名付けられ、大蛇は淵に戻って姿を見せなくなった19。②姫が淵（高山市丹生川町折敷地）に籾殻を入れると一週間後に丹生川町根方の大清水へ出て来る。七〇年程前、淵の上に自然石でできた堰堤状のものがあり、水はその堰堤を越して淵に落ちる。大正九（一九二〇）年の洪水で堰堤は崩れて流され、淵の御姫様もこの時出て行ったとか269。③淵（巻ケ淵）の主の大蛇が庄屋の家（高山市上宝町葛山）に機織りの道具を借りに来た。その淵は竜宮城に通じていると言われた。淵に悪いことすると祟りがあると言われ、養蚕がすむと屑繭や、ぼぼら（かぼちゃ）を乙姫様のために淵に入れた。また、葛山や下佐谷では、巻ケ淵に巻き込まれることを避けて、節分の笹巻きを造らない14。

4．KISSOの竜や大蛇二〇編

KISSOに掲載された竜や蛇に関する昔話の内、美人に化けた蛇と人との交流は、「業平寺の大蛇（六十四号）」77、「美女と惣左衛門（九三号）」204、「蛇ケ谷（九七号）」275、「蛇の池（一〇〇号）」83の四編で最も数が多い。

田畑を荒らす等悪さをする竜を懲らしめた話は、百足退治で知られた俵藤太が里を荒らす白竜を退治する「白竜退治（六〇号）」206、猿に化けた池の主を撃った祟りで、農作物を叺に詰めることになった「金原の蛇池（七九号）」275竜を退治した武士が、不意を突かれて竜に襲われて討ち死にし、その池の周りに武士の魂となったサギソウが咲いた「竜とサギソウ（八七号）」131、の三編である。

なお、叺については、①イン谷（月尾谷「揖斐郡揖斐川町小津」から分かれた小さな谷）の頂上の畑（蛇畑）が、叺（藁で編んだ莚を二つ折りにした袋）に化けた大蛇に荒らされた。これを退治してくれた猟師に感謝し、イン谷の宮平にお宮を建てた54と伝わり、「竜とサギソウ」のように、竜と花との話は、②和田山（郡上市白鳥町石徹白）に住んでいた笛吹きの名手の嫁になった娘は竜であり、子供を産む姿を見られたので、子を残して居なくなった118。なお、③この竜は和田の小池に帰り、子供の誕生日に赤い浮草の花が咲いたと伝わっている247。また、④柿野（山県市谷合）の西洞に美しい娘・お浪がいた。恋仲の男は破約して部屋を覗くとお浪は大蛇だった。翌日、娘は淵に消え、暫くすると大洪水となり、淵の辺りにいままで生えていなかった草（お浪草）が茂った291、と伝わっている。

残りは各一編で、「福崎の大池に棲む大蛇（四号）」259は恐ろしい大蛇の棲む池で、福崎の大池は昔からある「雁ケ地四ケ字社」の東側に広がっていたが、昭和三一（一九五六）年に木曽川の土砂で埋められ、小さくなった池が残っていた。その後、昭和三四年の伊勢湾台風で多数の犠牲者が出たため、池を埋め、木曽岬神社が建てられた。

「釜段のさいかち（二六号）」132は竜の祟りを鎮めて堤防工事を完成させた話である。

「赤壁城（二八号）」91は、竜が先祖の言い伝えを守らせ、「海水山権現（三八号）」8は、大蛇に化けた神が社を建てさせ、「沓部の乙姫さま（四十六号）」34は、都から来た乙姫が馬瀬川の河原を気に入り、都に戻る時この場所を汚さないように頼んだが、酒屋の若い衆が馬のわらじをそこに落としてしまうと、竜が昇り暴れ、酒屋は焼けてしまった。

「白竜の昇天（五二号）」257は、底なし池（竜池）の埋め立て工事を昭和十二年頃に行うが進まず、占い師（五二号では坊さん）に聞くと竜が住んでいるので白竜社を祀るように言われる。入神式で暴風雨が晴天になり（竜の昇天）、以後の工事は順調に進んだ。

「金物を嫌った大蛇）七一号）」237は、嫌いな金物のために川を下れない大蛇（露洞姫）が川を氾濫させて金物部分での通過を避けている。なお、⑤露洞姫が山を下っての氾濫に因んだ地名や逸話がある21。また、⑥奥明方村の水沢上の西池・東池（水沢上ケ池）が氾濫した時、この話のように大蛇が水を溜めて出て行ったと伝わっており、西池・東池は天正十三（一五八五）年十一月の天正地震でできたと伝えられている237。

「本洞のうわばみ（七二号）」13は、清水を貫った老蛇が恩返しに霧を発生させて岩村城を守り、「どんぼり池の竜（八九号）」75は、掛け軸に水を供えて雨に恵まれ、「夕べが池伝説（九六号）」136は、池の主白蛇が八大竜王権現として祀られる話である。

大蛇以外の池の主に関わる話は、流材を滝壺に引き込むほどの滝壺の主を想定した「小川の大滝の主（五七号）」293、蟹に乗って現れた薬師如来が村人の病を治した「大寺瞽女（八〇号）」285、池の主・大亀を祀って洪水が減った「亀の宮（八三号）」44の三編である。

なお、「大寺瞽女（八〇号）」285の異説として、⑦旅の尼がこの地に住み修行をしていると、池から大蛇の姿の薬師如来が現れ、祀るようにいわれて、願興寺（可児郡御嵩町御嵩）が建てられ、池を尼ケ池と言う47。また、⑧寺近くの池から現れた大蛇が尼僧の祈りで霊像となって蟹の背に乗って現れた。この像は寺の本尊の胎内仏となった96とも伝わっている。

第3章　木地師と椀貸し伝説

CONTENTS

1．木地師
1－1　木地師による長者屋敷伝説
2．椀貸し伝説
2－1　竜宮に通じた淵
2－2　郡上市内の椀貸しの淵
2－3　竜神からの椀貸し
2－4　古墳・塚などでの膳椀貸し
2－5　葬式と坊主の椀貸し
2－6　貸し主を見ようとした
2－7　恵那市周辺と山県市の椀貸し
3．KISSOの椀貸し伝説二編

1．木地師

轆轤を用いて椀や盆等の木工品を加工・製造する木地師は、惟喬親王（八四四～八九七）を祖と仰ぎ、近江国小椋庄（滋賀県東近江市）に住む木地師一門を本家とし、地方に散在する木地師すべてを分家とみる擬制的同族組織であった。

小椋庄には蛭ヶ谷と君ヶ畑の両集落があり、蛭ヶ谷には筒井神社と帰雲庵が、君ヶ畑には大皇器地祖神社と金竜寺があり、木地師はいずれかの管轄下に属していた。

彼らは、惟喬親王の家来、または惟喬親王の重臣小椋秀実の子孫を称し、諸国の山に入り山の七合目より上の木材を自由に伐採できる権利を保証されていると主張し、山中を移動して生活する集団だった。

東近江市蛭谷の惟喬親王御陵

君ヶ畑の大皇器地祖神社

1－1　木地師による長者屋敷伝説

金鶏伝説は、鶏の鳴き声は神霊の声とされ、それが一年の夜明けである元日に神聖視された場所で鳴くと考えられ、金鶏が鳴く主な場所は、大岩の上、古木の下、寺の址、古い墳、神社の境内、城址、長者屋敷の跡等である。

揖斐郡揖斐川町春日美束の「長者平の金鶏伝説（三六号）」224は、金鶏伝説と木地師（木地屋とも言う）による長者屋敷伝説から成っている。

ところで、春日美束の長者平に伝わる伝説では、壬申の乱（六七二年）で自害した弘文天皇（六四八～六七二）の后・満姫が生んだ小倉皇子がこの地を開拓して長者平と呼ばれるようになり、その末裔（一説に行基）が長国寺を建てた。後に伝説の盗賊熊坂長範を同寺に匿った疑いで義経が長者平に攻め入ったと伝わっている。

この伝説に出てくる「小倉皇子」は木地師の里・滋賀県東近江市の「小椋」に通じ、この伝説も木地師によるものであると推測される。

山奥に構えた木地師の住居は粗末であったが、木地師達は住居周辺に長者屋敷伝説を創り出した。

『郡上八幡町史（下巻）』は郡上市内での木地師の多くの住居跡を記しており、木地師との交流を伺わせる話として、①木地屋の娘が商いに回ってくる中年の鎌屋に恋をするが約束の時に会えず、池（現さらけがの池）に身を投げ、それを知った男も身を投げた。娘の葬儀は八幡町の慈恩寺で行われ、娘が大事にしたモミジの小盆も寺に寄進された254と伝わる。また、木地屋が椀を借りた話として、②木地屋が期限に間に合わず、乙女淵（郡上市八幡町）に頼むと椀が浮かび出たが、破損した椀を返してからは、貸してもらえなくなった21、と伝わっている。

平成12年に長者平の長国寺跡に建てられたお堂

2．椀貸し伝説

淵は渦を巻いており、水底の入口のごとくである。つまり淵は竜宮の入口と考えられた。

2－1　竜宮に通じた淵

竜宮に通じた淵で膳椀を借りる話が最も多く、椀を破損したり、数を誤魔化したり、くすねたりして、貸してくれなくなっている。

①寝覚ノ床（木曽郡上松町上松）で椀を貸してくれたが、壊して謝らなかったので貸してくれなくなった202。

②竜宮に通じた飛水峡のお姫淵（加茂郡七宗町上麻生、上麻生橋の上流）の付近に乙姫の侍女と噂される美女が住み、椀を貸してくれた。なお、昭和初期までは、日照りの年には夜松明を灯してお姫淵に祈願した275。③帯雲橋（益田郡下呂町小川）近くの椀貸せ淵は竜宮に通じていると言われ、碗を貸してくれた51。④竜宮の使いの美女が竜宮淵（中津川市加子母

帯雲橋の流れ（下流を望む）

角領)近くに住んでいて、椀を水中から取り出し貸してくれた51。

⑤木曽川へ坂本川が流れ込む所の竜宮に通じていたリュウゴ淵(中津川市千旦林坂本)に向かって頼むと貸してもらえた82。⑥中野方川の竜宮淵(恵那市中野方町)で椀を貸してもらえた214。⑦亀淵竜宮(美濃加茂市の新太田橋下流右岸)の淵に、浦島太郎を運んだ亀が住んでいたと言われ、竜宮神社に願えば膳椀を貸してくれた。一説には、この淵の水は兼山の戸立ての観音(大通寺)の井戸に通じていると伝えられている288。なお、美濃加茂市には椀ではなく機織り機を貸してくれた話も伝わっている。⑧

左:石橋龍神、中央:亀淵竜宮、右:水神

徳雲寺(美濃加茂市加茂野町市橋)前の今は埋められた池(ハタゴ池)は龍宮に繋がっていると言われ、機織り機を貸してもらえたが、返す約束を破ったら、織り掛けの布を付けた機は空を飛んで池に沈んだ288。

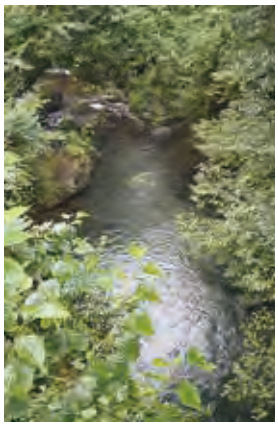
美濃加茂市下流の鵜沼では、⑨各務原市鵜沼字伊木山の淵が竜宮に通じており、借りに行く役が決まっていた51。なお、借り役が「代理人」の場合82や、必要な人が直接借りに行く場合もある24。⑩苧ヶ瀬の池(各務原市各務おがせ町)は竜宮に通じており、池の上に頼んだ膳椀が浮かんだ82。

岐阜市では、⑪夕部が池(岐阜市曽我屋)は竜宮に繋がっており、膳椀を貸したが、借り物を盗んだため、以後貸さなくなった82。

おがせの池(右側に八大竜王)

(1)「機織りの音が聞こえる」

①龍宮淵(郡上市明宝寒水)には龍宮に通じる穴があり、そこから機織り姫が現れて岩の上で機を織っていた13。②乙女淵(郡上市明宝畑佐。左岸から吉田川を二度渡河した左岸側)の四角い岩の上で乙姫様が機織りをしていた。この岩の向かいの穴は明宝気良の関上の淵に通じていると言われた13。③乙姫の機織りの音が龍宮の淵(下呂市門和佐)と呼ばれる淵の底から聞こえたが、馬鍬を投げ入れたら音が絶えた284。④岩村城主に乞われた機織りが池(萬勝寺境内に機子が池。恵那市山岡町馬場山田飯高)に身投げした。池の底から機織りの音が聞こえる51。⑤瑞穂市十八条東沼(現堀越紡績工場内)にあった最も大きい「がま」(自然に水の湧き出る所)の底から、ある正月に機織りの音が聞こえてきた。音は正月しか聞こえず、龍宮と通じていると言われ、汚さないように大切にされた70。

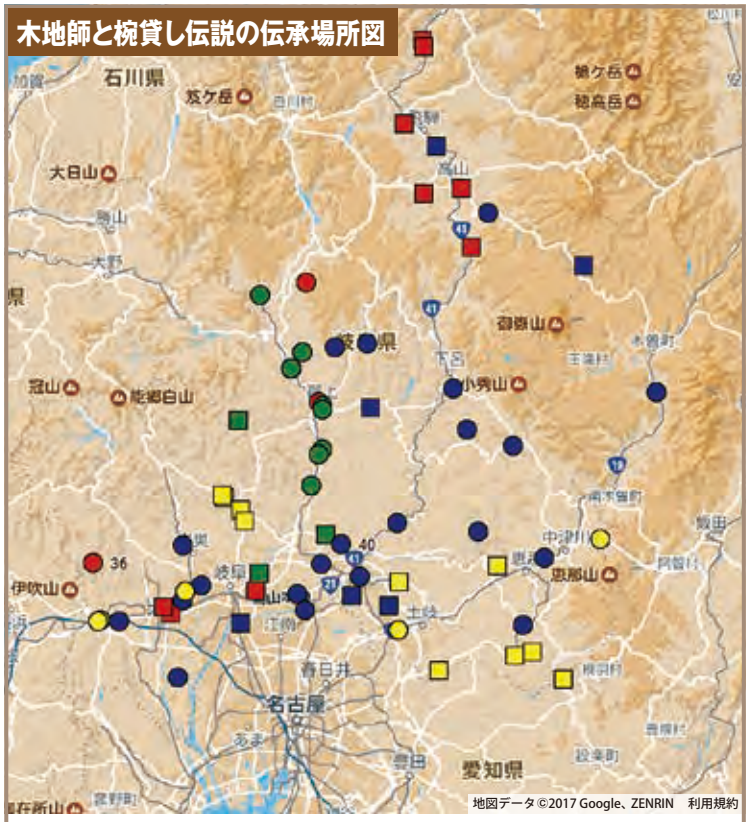


龍宮淵は龍宮橋(昭和29年竣工)直下

(2)「竜宮に通じた話」

①セバ岩(高山市朝日町小瀬ヶ洞)と称し秋神川の両岸に巨岩迫り、滝となり淵となる場所があった。ここの淵に籾殻等を入れると、小坂川が飛騨川に合流する手前の朝六橋下の淵(長谷寺の淵)に現れ、両方とも竜宮に通じていると云われていた203。②淵(灯明淵。海津市平田町三郷)に吸い込まれた漁師は、竜宮のような御殿で美しい女と再びここには来ないと約束して、地上に帰る事が出来た134。③来振寺(揖斐郡大野町稲富)門前の池は竜宮に通じていると言われ、池の真中に弁天様が祀られている。池から現れた乙姫が若者を池へ連れ去った。村人は二人が仲良く暮ら

木地師と椀貸し伝説の伝承場所図



分　類	記号
木地師伝説 1-1	●
竜宮に通じた淵 2-1	●
郡上市内の淵 2-2	●
竜神から 2-3	●
古墳・塚など 2-4	■
葬式と坊主 2-5	■
主を見る 2-6	■
恵那と山県 2-7	■

・●は３例と極めてサンプル数が少ない。
・●は、揖斐川上流域以外、ほぼ全域に分布。
・●は、郡上市の美並町から白鳥町の川筋に分布。
・●は、揖斐・長良川の中流域と木曽川の上流域に分布。
・■は、上流域（高山・飛騨市）と中流域（大垣・岐阜）に分布。
・■は、揖斐・長良川上流域と木曽川下流域を除いて分布。
・■は、３話のうち２話が関市に伝わる。
・■は、恵那市（3 話）と西隣の可児郡と土岐市に各１話、関市は武儀川沿いに分布。

せるように祈り、毎月一五日を縁日として弁天様や乙姫夫婦のお祭りをしている18。④真禅院（不破郡垂井町宮代）の梵鐘（国の重要文化財）は平安時代中期以前の物と言われ、垂井の小清水から出た竜宮からの鐘という伝承や、『続日本紀』に現れる宮処寺のもの、あるいは昔垂井宿の南にあった盆池から出たとも伝えられている281。

来振寺門前の池

2－2　郡上市内の椀貸しの淵

(1)「竜宮に通じている淵」

①小間見川（郡上市大和町小間見）の布淵の穴は竜宮に通じていて、頼むと椀を貸してくれた301。なお、②郡上市大和町剣の大野口では、年に一度、御膳に強飯を載せて与衛門淵に入れると、竜宮へ届くと言われた301。また、③ジョウゴ洞（郡上市明宝）は竜宮に通じていると言われた水源の岩穴で、岩穴に棲む水神が碗を貸した51。④郡上市白鳥町前谷の蒲田淵も竜宮に繋がっている237。なお、蒲田淵で借りた椀を一個保存している家があり、さらに、飛騨市宮川町塩屋の清水小太郎家にも返さなかった椀が残っているようである。

(2)「雨乞いと椀貸しの淵」

郡上市美並町では竜宮に通じている雨乞い場所での膳椀貸し伝説が多く伝わっている。⑤羽佐古交差点下の乙姫滝（美並町白山）は雨乞いの滝でもあったが、乙姫滝の乙姫様が膳椀を貸してくれた。一部を壊して返さなかったら、貸してもらえなくなった287。⑥美並町上田（旧木尾）の竜宮に通じていると言われる釜の口で、木尾の人々は雨乞いを行い、膳椀を借りた287。⑦雨乞い場所である福野坂の下の「淡の倉の淵」（美並町上田）には乙姫様か誰かが棲み、一年に一度、膳立て（膳を揃え並べる）して淵に入れると、底に沈んで再び浮いて来ないと伝わる287。

(3)「竜宮に通じていない椀貸し淵」

『郡上八幡町史下巻』によると、⑧八幡町入間の「持穴」に入り口が一mで、そこから数m奥は高さが二m、幅が数mで奥行きが深い横穴がある。この穴で膳椀が借りられたので「物持ち穴」と言われ、この付近の地名を「持穴」と言う。破損したりしたら貸してもらえなくなった。その他の椀貸し淵は、八幡町島谷の乙姫滝、八幡町亀尾島のセトや明宝気良のジョウケ洞、郡上市明宝小川の女滝、さらに、大和町大間見の大間見川、郡上市白鳥町中津屋のカリキド淵等である。なお、女滝は大滝（雄滝）と「家谷橋」の間にあり、昔「家谷橋」が落ちた時、女滝下流の狭窄部（「鹿の一足」）に板を渡して川を渡った。

女滝（「鹿の一足」の上流で、道路工事のために岩が滝に落ち、小さくなった）

2－3　竜神からの椀貸し

竜神等に貸してくれるように願った話として、①竜神様が永保寺（多治見市虎渓山町）の下の竜浮淵（土岐川）に棲んでいて、お椀等を貸してくれた75。②大池（中津川市神坂）の主の大蛇は椀を貸したが、椀が不足していることに大蛇が怒り、大雨を降らせて池の端を崩して流れる水と共に湯丹沢の方へ立ち去った300。その後、湯丹沢へ雨乞いに行く人が多くなった91。

また、人が大蛇に椀を貸した例として、③大池（十九女池。関ケ原町関ケ原）に大蛇が棲むと言われていた。年の頃一九位の娘が民家に椀を借りに来た。返しに来た椀は生臭かったので、蛇が嫌う縫い針を椀に隠して貸したら現れなくなった。その後、横笛を吹く若い娘が民家に横笛を形見として残していなくなり、貸した椀が池に浮いていた。この椀は法忍寺（関ケ原町大字関ケ原）に、笛は中町八幡神社に納められている118。なお、④千天の時はこの池で雨乞いが行われた251。

大池（十九女池）

2－4　古墳・塚などでの膳椀貸し

神秘的な趣を醸し出した古墳や塚などにも膳椀貸し伝説が生まれた。

①国府小学校（高山市国府町広瀬町塚腰）の敷地に位置していた亀塚（大塚）は竪穴式古墳で、朱塗りの膳椀を貸した101。②楢谷と麦島の間のオグナの養老塚（高山市清見町）では、破損があってから借りられなくなった51。なお、高山市内での他の椀貸し淵として、③弘穂橋（高山市久々野町引下）の少し下った所の釜淵236。④荏名の森（高山市江名子町）の椀貸せ岩101等がある。

塚にまつわる話は、⑤壬申の乱（六七二年）の時に天武天皇が一泊した跡のすぐ傍に「ゼンワン」を埋めたと伝わる小

釜淵

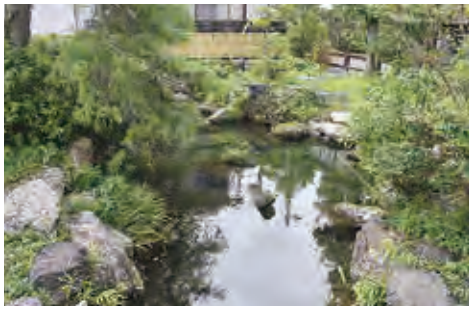
さな塚（井塚。大垣市貝曽根町）が膳椀を貸し出した51。なお、⑥清水が湧き出る「膳椀の池」（大垣市西之川町。今は「ハリヨの池広場」となっている）でも膳椀を貸してくれたが、池の畔に祀られた白竜（昇天したと伝わり、今は無い）は金気を嫌い、鎌を落とした子供に祟りがあった16。

⑦岐阜市の琴塚（琴塚古墳）に頼むと膳椀が貸してもらえたが、返さない者が居たために貸して貰えなくなった46。

穴に棲む狐が貸し出した話として、⑧飛騨市古川町下野の円墳は御椀塚とも呼ばれ、塚の穴に頼むと椀を貸してくれた。欲深い者がいたため、穴にすむ狐が怒って貸し出さなくなった101。さらに、⑨「長者の倉」（頂上に岩が露出した小山。飛騨市宮川町塩屋）の大岩窟に棲む狐狸が膳椀を貸してくれたが、返さない者がいて貸して貰えなくなった102。

また、⑩飛騨市の椀貸淵（宮川町桑野、旧坂下村）も椀を貸した101。

琴塚


「膳椀の池」（ハリヨの池広場）

2－5　葬式と坊主の椀貸し

貧しい村人が身内の葬式に膳椀を借りる話として、①葬式の椀膳が無くて困っている貧しい者に、神々しい翁が現れ、高山市国府町広瀬町の「青どんぶちの岩」で頼むと貸してくれると教えた105。②母を亡くした貧しい息子は、葬式の膳椀も無いので幕岩川の「一の滝」（高山市高根町日和田）に身を投げようとすると、膳椀が浮かんで流れ着き、葬式が出来た256。

また、坊主が膳椀を貸した話として、③可児市塩では、坊主が椀を貸してくれたが、村人が相撲で坊主を負かしたら貸してもらえなくなった228。④可児市柿下の淵（椀ヶ渕）に住むと伝わる坊さんに頼むと、膳椀を貸してくれた35。なお、⑤借りた膳椀を売った不心得者の首が数日後淵に浮いて以来、子供が悪さをすると「椀ヶ淵の坊主が連れに来る」と言う47。

妖怪が椀貸しをする話として、⑥青塚神社（一宮市北方町北方宮西）の北裏の妖怪が棲む姫取ヶ池で膳椀等が借りられたが、借りたまま返さない者が出て貸してもらえなくなった1。

一の滝（「滝を探して…」より）

2－6　貸し主を見ようとした

貸してくれる人物を見ようと企んで、膳椀を貸してくれなくなった話として、①美女が碗を八神山（関市西神野）の戸立岩の空洞で貸してくれたが、美女の姿を見てから、貸してもらえなくなった51。②網掛淵（関市板取）にお願いすると、膳椀を貸して貰えたが、誰が何処から運んでくるかを川原で見ようとしたら、膳椀も貸して貰えず、また膳椀を自分の物にしたら、家の什器が消えて無くなった89。③岐阜市長良古津の匿碗洞に棲む水神に椀を貸してくれるように頼んだが、水神の姿を見ると貸して貰えなくなった51。

2－7　恵那市周辺と山県市の椀貸し

恵那市周辺の椀貸しとしては、①恵那市明智町の椀ヶ渕201。②恵那市明智町東方の碗淵51。③恵那市上矢作町小田子の淵（お椀淵）も膳椀を貸してくれた99。

冠婚葬祭以外での椀貸しとして、④お椀を壊したお手伝いさんが、「ななひろ淵」（恵那市長島町久須見茂立）で「お椀を貸してくれ」と泣いていると浮いてきた214。また、土岐市鶴里町柿野には、⑤ネズミに椀を食い荒らされて困った若者が、池（腕貸池）にお願いすると、お椀類が出てきている83。なお、⑥可児郡御嵩町の「椀が渕」でもお椀を貸してくれるよう頼むと、椀が浮いてきた62。

また、山県市では、⑦柿野洞（山県市柿野）の落合から西洞へ通ずる入り口の「釜」（淵）に棲むお浪と言う乙姫は膳椀を村人に貸した291。⑧九合の岩穴（旧石器～古墳時代の遺跡、山県市谷合）にお願いするとお椀を貸してくれたが、一度お椀を返さない者がおり、それ以来貸して貰えなくなった124。⑨三光寺（山県市富永）の下の淵は竜宮城まで続いており、淵の門番の竜に頼むとお椀を貸してくれ124、⑩岩佐の大穴（淵。山県市岩佐）も膳椀を貸した291。

3．KISSOの椀貸し伝説二編

「龍宮さまの淵（四〇号）」288は、竜宮城まで続くと言われた淵（岐阜県美濃加茂市伊深町）で椀を貸してもらえたが、乙姫の姿を見た後は貸して貰えなくなった。なお、雨乞い伝説で知られた「お姫の井戸（五〇号）」118（美濃市曽代）は、竜宮のお姫さまが膳椀を貸したが、次第に欲を出しため、椀は二度と貸して貰えなくなった椀貸し伝説でも知られている。

「おわんふきがま（九五号）」70は、祭りに使う椀が無く、瑞穂市重里の「がま」で嘆くと翌日お椀が浮いており、欲深い人が一部返さないと貸して貰えなくなった話である。

弘法水と清水伝説

CONTENTS

1．弘法水伝説
1－1　弘法による湧水
1－2　弘法による湧水以外の礼
1－3　悪水などへの罰
1－4　大師の跡隠し雪
1－5　弘法の足跡
1－6　その他
1－7　KISSOの弘法水四編
2．弘法（旅僧）以外の清水伝説
2－1　効能のある清水
2－2　清水を湧出させた人物
3．KISSOの清水伝説六編

1．弘法水伝説

「大師は弘法に奪われ、美人は小町にさらわれ」と言われるように、清水や井戸に限らず、不思議な事や霊感灼たかな物の多くは弘法大師の仕業となっている。

柳田95は大師伝説に関して、神の子の意味で「大子」と呼んだが、後に「ダイシ」となり、高徳な僧に朝廷から勅賜の形で贈られる尊称「大師」に結びついたと推定しており、宮田73も弘法大師伝説の根底には、神の御子（＝ダイシ）が各地を巡行して時に奇蹟を行うという古くからの「ダイシ伝説」があると述べている。

河野58は、全国の弘法水伝説は一四八九編あり、平安時代の陰陽師・安倍晴明由来の晴明水七〇編、日蓮水四〇編と比べ、弘法水の多さを述べている。

弘法水伝説の主な内容は、

（1）水不足の村で、大師が杖を大地に打ち立て、清水を出す。

（2）大師に与えられた水が悪いので、憐れんで、大師が清水を出した。

（3）遠方から水を汲んで大師に与えた。

（4）大師に水を与えなかったため、悪水になったり水が出なくなった。

である。

これらの弘法水伝説は、江戸時代頃に高野聖が弘法大師由来の水として伝えたことによると共に、吉岡51は、村人が旅僧に喜捨を与えるように話を広げたのであろうと述べている。

1－1　弘法による湧水

弘法大師は親切にされた礼に錫杖などで大地を突いて水を湧き出させている。

飛騨市神岡町割石で、①水を求めて村人に親切にされた弘法大師は、親切な村人のイボを取る「イボとりの清水」を湧かせた39。なお、湧水ではなく、②弘法が割石で井戸を掘った「イボ取り水」の話もある82。さらに弘法が湧水をイボとり霊泉に代えた話として、③旅の僧侶を接待した働き者の家（関市中之保日根）の裏の山裾からの湧水が、働き者のイボを治し、湧水の側に弘法様「竈野のイボとり弘法」が祀られた125。

高山市では、④弘法大師が村人に大坂峠（高山市国府町荒原）まで送られ、水の無いこの峠で、錫杖を大地に突いて清水を湧き出させた51。また、⑤この大坂峠の手前の茶屋で弘法様が水を飲み、お礼に腰に付けていた瓢箪から清水を湧かせたとも伝わっている59。さらに、⑥大坂峠から南東に直線距離で約一七km離れた丹生川町根方に来た弘法大師が水を頼むと、下女が細々とした水をやっと汲んで来たので、大師はもっと水が出るように柳の杖を三度振って、水を湧き出させた104。

中之保のイボとり弘法

木曽郡では、⑦旅僧は一丁（約一一〇m）も離れた沢から水を汲んでくる木曽郡上松町上松木賊の親子を憐れみ、親子の家の近くで杖を突いて清水を沸かせた202。

弘法が寺を建てようとした地では、⑧弘法大師が山県市中洞の山洞で真言宗の総本山を建てようとしたが、八百八洞に一洞足りないので立ち去る際に、村人のために病気などの苦しみから救う清水を杖で地面を突いて湧かせた124。谷の数が一桁少ないが、⑨弘法が美濃加茂市三和町廿屋の地に高野山の分院を開こうとしたが、谷が八十八に二つ足りなく建てれなかったとも伝わっている288。

なお、弘法が寺の建設に失敗した話として、⑩弘法大師が寺を建てる木材を双六谷（高山市上宝町金木戸）に入って集めたが、最後の仕事の段取りで、これまで邪魔をして来た邪鬼に騙されて、集材は朽木になった12、と伝わる。

⑪関市武芸川町谷口で困っていた旅の坊様（弘法大師との噂があった）は、泊めてくれた家が谷川の水枯れで困っていることを知り、その原因の妖怪をお経で退治して湧き水を出し、そこを「水壺」（水壺弘法）と呼んだ126。また、武芸川町谷口と山県市中洞を結ぶ九頭師坂の洞戸菅谷では、⑫民家に泊めて貰った夜、百足に襲われた弘法を看護した村人に感謝して、九頭師坂に水を湧かせた136。

⑬水が無くて困っている中津川市茄子川坂本の人々が、旅の坊様（弘法大師）に言わ

水壺弘法（「ごっちゃんの山楽記、2013.5.4汾陽寺山」より）

れて堀ると、水が出た90。⑭不破郡垂井町府中の国府宮社近くの「南宮御饌井」は、大師が加持して掘った井戸で日照りにも枯れない。51。

大垣は多くの自噴井がある。天明二(一七八二)年頃、大垣岐阜町の蒟蒻屋文七が、先を尖らせた長竹を川岸近くで地中深く打ち込み、水を噴出させた。この文七による井戸掘削が「水の都」大垣の始まりと伝えられる。

大垣市では、⑮大垣市十六町で弘法大師が水を頼んだら、悪い水に恐縮しながら濁った水をくれた。大師はそれを不憫に思い清水を湧かせ、「弘法の井戸」と伝わっている16。なお、⑯この「弘法の井戸」は眼病に効果があり、また、大師の書道の達筆にあやかって、この水を習字に使った215。

九頭師坂の湧水

南宮御饌井

牛屋川に架かる平和橋側の掘り抜き井戸発祥の地

なお、上記の話に反して、⑰弘法大師が十六町で水を頼んだが、どの家も水を恵んでくれなかった。腹を立てた大師は杖で清水を湧かせたが、村の井戸水は濁り水になった16。

⑱弘化三(一八四六)年、大垣市北方町(旧三津屋北方)の旧家に泊めて貰った旅の僧侶は、お礼に弘法さまの尊像を描き、加持祈祷を伝授した。手足のひび、あかぎれ、しもやけ、疣などの皮膚病に加持の水が効き、参詣者で賑わった16。

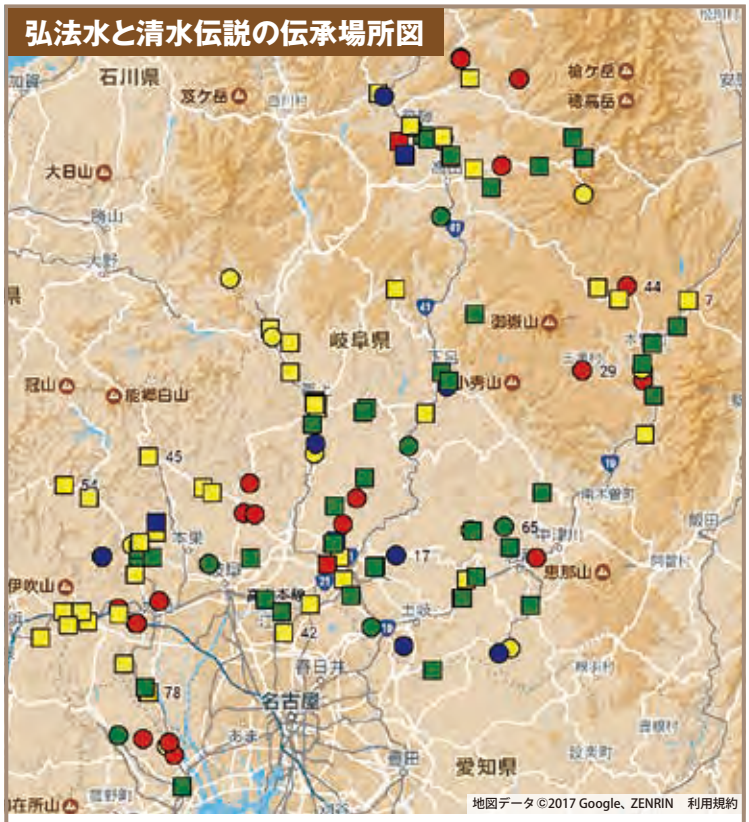
桑名市259では、⑲徳蓮寺(桑名市下野代)の南続きの線路沿いに、大淀の弘法井戸がある。この水を飲むと万病が癒え、長生きし、極楽浄土に行ける。⑳桑名市多度町美鹿では、よこづち(わらをうつ槌)を藁火で暖め、弘法井戸の水に浸し、その水で患部を洗うと治ると伝わり、㉑桑名市多度町柚井にも弘法大師の杖突き井戸がある。

弘法の井戸

大淀の弘法井戸

弘法井戸(美鹿の民家裏)

弘法水と清水伝説の伝承場所図



分　類	記号
弘法の湧水 1-1	●
弘法の礼 1-2	●
弘法からの罰 1-3	●
跡隠し雪 1-4	●
弘法の足跡 1-5	■
その他 1-6	■
効能のある湧水 2-1	■
湧出させた人物 2-2	■

・●●●●は、揖斐・長良川の上流域以外でほぼ均等に分布。
・■は、限られたサンプル数だが、上流域(飛騨・高山市)の石に残っている。
・■と■は、三川のほぼ全流域に均等に分布している。

1－2　弘法による湧水以外の礼

弘法大師が礼に茶の木を生やした話が、「下呂茶」や「春日茶」として知られる地に伝わっている。

①下呂市三原へ弘法大師が巡ってきて、茶が無いので水で歓待された礼に、山に茶の木を生やした51。また、②揖斐郡揖斐川町春日六合の家でお茶を頼むと「不味いお茶ですが」と恐縮して出してくれた。それ以降、その村は野生のお茶が何処にでもあるようになった224。なお、春日六合には心掛けの悪い人も居て、③弘法様にお茶を頼まれたが、家の前の木は黒い石だと嘘をついて出さなかったら、その木は石になってしまった224。

茶以外の食べ物での礼として、④角川駅（飛騨市河合町小無雁）から南西約八kmの檜が淵の岩の上で弘法大師が食事をし、この淵岸に檜の箸を投げたら、その箸から立派な檜が生え、捨てた茗荷も自生し、この茗荷は他と違い塩分がある102。⑤恵那市明智町大田の子供が快く栗を分けてくれたので、子供でも取れるように高さ三〇cm余りで実の付く柴栗を生やした51。

⑥弘法大師が馬子に鯖を貰うため、馬の腹痛を止める詩を詠んだ。郡上市美並町三戸の三日市地区ではこの詩を唱え大師に頼むと治ると伝わっている287。

なお余談であるが、弘法大師は清水以外に焼き物に最適な土をも善人に与えている。⑦笠原川側（多治見市滝呂町）の樫の木の下に祀られている弘法さんの屋根を造った善人は、焼き物に最適な土の場所を教えられ、裕福になった。この祀られていた弘法は、屋根を造った善人の祖先が最後を看取った巡礼の女が以前に稲沢で作ったものであり、死後稲沢からこの地に運び祀った26。

鯖大師

1－3　悪水などへの罰

水を乞う弘法大師に悪水などを与えた罰として、飛騨市では①古川町沼町では旅の僧侶にお茶の替わりに米のとぎ汁を与えたら、周辺の井戸は濁ってしまい102、②神岡町二ツ屋の家で水を乞うたが追い返され、以来この地の水は止まった39。

③高山市一之宮町（旧宮村）の洞で、乞食姿の旅人に家にある水を頼まれたが与えなかったら、家の水が出なくなり、旅人は弘法だったと噂された292。④下呂市金山町中切（旧中宮の地名）で、旱魃の時に、旅の坊主が水を乞うたが皆断った。数年後にお侍が来て、水を乞い、満足するまで飲んで良いというと谷川の水を飲み干してしまった34。⑤欲深かった村人が旅人に頼まれた飲み水を断ると、川の水が無くなり、普賢寺（多治見市大原町）付近で杖を突いて泉を造った。この泉に弘法様（水弘法、よだれ弘法とも呼ばれる）を祀った75。

⑥大師が紺屋に布を染めて欲しいと望んだが断られたので、近くの水（岐阜市黒野の洞の「弘法の水」）で布を染め、紺屋が使用する水は無くなった51。⑦みすぼらしい旅の僧侶（弘法大師）に宿（揖斐郡池田町沓井）を頼まれるが、むげに断り靴まで投げた。すると、僧侶は大雨の時に靴の形をした井戸が出来て大洪水になるだろうと言い残し、その通りとなった。新しい井戸を掘っても水が出なくなってしまった47。⑧いなべ市藤原町東禅寺（地名）では旅僧に蛆がわいた汚水を与えた罰が当たり、井戸からは蛆虫が出るので井戸を掘らずに川の水を飲んだ55。

1－4　大師の跡隠し雪

「跡隠し雪」は清水と無関係であるが、人々と大師との深い関わりの例として取り上げた。

話の大意は、巡歴の大師に捧げる食物を盗みに出た老婆の片足がスリコギのようですぐに身元が分かるので、大師が雪を降らせてその足跡を隠す話である。別説では大師自身が不具であったとも説いており、跡隠し雪（スリコギ隠しの雪）は陰暦十一月の大師講（注）の日に降る雪である

[注]大師講とは、冬至の頃に行われる民間の祭りで、家々で小豆粥や団子等を食べる」。

大師とは一般に弘法・智者・元三大師を指すと考えられているが、本来は、冬至に新しい年の始まりを感じた人々が、新しい神の子を意味する「ダイシ、大子」を迎え祀ったのである。

①木曽郡上松町沓掛の足の悪い親切な婆の家で、旅僧は婆に隣の家から小豆を取って来て夕食にするよう勧めたが、翌日の雪は婆の足跡を消していた202。

恵那市では、②明智町の婆さまは、空腹の旅僧のために、隣家の台所から食べ物を取って来たが、雪の上に残った足跡は消えていた118。③恵那市中野方町で弘法様のために食べ物（小豆）を盗みに行って付いた足跡を、雪を降らして隠した214。なお、④美濃加茂市伊深町では、小豆が大根に替わって、弘法様のために、食べ物（大根）を盗みに行って付いた足跡を雪を降らせて隠した288。

高山市では、⑤丹生川町岩井谷の足の悪い老婆は、弘法様のために団子の粉を盗んできて、寝言で後悔していた。弘法はそれを憐れみ、足跡を雪で隠した269。

郡上市では、⑥白鳥町大島の孫兵衛の家で実際にあった話として、小豆を取って来て粥で老僧をもてなし、降った雪が足跡を消した「弘法のスリコギ伝説」が伝わり、その時の礼に鏡と臼を貰っている。大師講の時には必ず雪が降る237。⑦白鳥町石徹白では小豆ではなく稲束になって

おり、必ず天気が荒れる237。⑧大和町の貧しい老婆は、大師に他人の米を盗んで小豆粥を食べさせた。大師は老婆をかばうために、雪を降らせて足跡を隠した287。

なお、郡上市美並町287では、⑨美並町上田の根村で、小豆粥が出来ないと嘆いていると、弘法大師から池に浮いている白い物をすくって炊くように言われる。炊きあがると小豆粥になった。腹の痛い子にこの粥を飲ませると治ると言われた。また、老婆が米を盗ってくると伝える所は、美並町大原(大矢)、美並町山田(赤池)、美並町梅原で、小豆を盗るのは美並町白山(苅谷)、美並町(高原)、美並町三戸(深戸)である。なお、大師を弘法大師としているのは赤池・苅谷・高原・深戸である。

跡隠し雪には多く老婆が出て来るが、桑名市では珍しくお爺さんで、⑩冬に貧しげな老人(弘法さまとの噂)が、三重県桑名市多度町の足の悪いお爺さんの家に宿を借りに来た。泊めるが食べ物が無いと言うと、老人は田んぼに稲があるという。見に行くと稲があり粥を差し上げた。翌日、お爺さんの足は治り、雪の上の足跡も消えていた259。

1－5　弘法の足跡

①飛騨市古川町畦畑へ行く峠を少し下った道脇に、「弘法様の足跡(弘法岩)」(この石の所へ行く道は現在無い)と伝わる石があり、その凹みの水をつけるとイボが治る102。②高山市国府町三川の下田(俗に羽根坂辺り)に、弘法様が通過した時に法力を示すために残した足跡(長さ十六cm、幅六cm余り)の付いた岩(仙足石)がある。また、この足跡は竜宮の乙姫の足跡とも伝わる102。③美濃加茂市加茂野町の森田茂一家の入り口に祀られている石の弘法様(ぬれ足地蔵)は、雨が降ると出かけるので足が濡れている288。

1－6　その他

①弘法大師が華厳寺(揖斐郡揖斐川町谷汲徳積)で写経して観音に献じたので、本堂下から流れている清水を「苔清水」あるいは「妙法水」と言う51。

②幻の多くの滝を見に行った高山市国府町宇津江の「よそ八」は、大蛇を滝近くの沼で見て寝込んだ。すると娘に化けた大蛇が看病に現れ、そのまま一緒に暮らす。看病で痩せた大蛇は海へ修行に行くために姿を消した。後にこの話を聞いた弘法大師が「よそ八は、滝の不動尊の化身で、四十八と書き、仏法四十八願を意味する」と言われて、「四十八滝」の名前となった。なお、滝は雨乞いでも知られている102。また、別の話では、③母親の好きな岩魚を捕りに入り込んだ沼で大蛇を見た「よそ八」は、大蛇に看護され、海に出る力の無くなった大蛇は行者の法力で土石流と共に姿を消し、後に大小四十八の滝が出来、嵐の前には梵音滝の辺りで行者の祈る声がする59、と伝わっている。

弘法が子供を助けた話として、④付近で溺れた子供が弘法堂(加茂郡富加町加治田。清水寺入り口)の前で無事に発見され、親が弘法堂の天井に額絵を寄付した88。平成六年に弘法堂が立て替えられ、外された天井額絵一〇〇枚の内、一〇枚が鴨居の上に取り付けてある。

美濃加茂市伊深町では、⑤伊深橋左岸のおかめ笹「七牛の涙笹」は、大師との別れを悲しんだ牛が流した涙が笹の葉に落ちて、葉の先が枯れていると伝えられていた(昭和四三年八月の集中豪雨の復旧工事で笹は消滅)288。

富加町の弘法堂

1－7　KISSOの弘法水4編

「星降る村のとうもろこし畑(一七号)」45は、加茂郡八百津町(星ヶ崎)では、旅の坊様(弘法か?)への米が無かったので、トウモロコシを与えた。坊さまがお経をあげると星が畑に降り注いだ。それから、星のように光ったトウモロコシが毎年取れるようになった。

「下島の弘法清水(二九号)」266は、御嶽山に登ろうとした僧は、木曽郡王滝村下条での農民の丁寧な道案内に感心し、「杖突き清水」を崩越の河岸に湧かせた。おかげで、用水の引けなかったこの地に田が開けた。

「水無八丁と弘法大師(四四号)」220は、末川の上流小野原(木曽郡木曽町開田高原末川)で、深い川向こうに馬が行ってしまい子供が困っていたので、弘法が杖をついて川の水を川底にしみこませて、対岸の馬を渡らせた。

「水のない谷(六五号)」108は、谷(中津川市蛭川)へ汲みに行くのが面倒なので、旅の坊さんに水を与えなかったら、その谷は水の無い谷になってしまった。

2．弘法(旅僧)以外の清水伝説

2－1　効能のある清水

昔は医療技術や製薬が未熟であったため、病に効能があると伝わった清水が多くある。

(1)「病に効く水」

《1》イボ

①巴御前が乗馬で川を飛び越える際、勢いが強く馬のひずめが石(貫き石)にめり込んだ。この窪みに溜まった水は「いぼ取り」に効能がある。巴淵の上にあったが、現在は徳音寺(木曽郡木曽町日義)の境内にある276。②高山市国府町上広瀬のバス停側にある「三つ岩」は、天正一四(一五八六)年に高山城主金森長近が宮川から掘り出すのに失敗し、明治二七(一八九四)年に堀上げられた。乗鞍・御嶽・白山の三霊峰を現し、窪みに溜まった水はイボに効能がある242。③鬼谷川の横野地区(郡上市和良町横野)の河原に直径一・五mほどで、真ん中に直径三〇cm深さ一五cmの穴の開いた平たい石がある。石の窪みの水は枯れなく、この穴に

貫き石

三つ岩

お金を入れて、その水を付けると、イボがとれた47。④下呂市少ケ野の藤ケ瀬という家の下の川に「いんぼ岩」がある。穴に溜まった水で洗って、穴にお賽銭を二厘入れると治る240。⑤窪んだ石に溜まった水をつけるとイボが治った「いぼ石」が中野方峠（恵那市中野方町）の道路沿いにある214。

⑥加茂郡七宗町神渕杉洞のにきびに悩んでいた男の夢枕に薬師如来が現れ、地蔵（いぼとり地蔵）の横の泉で洗うように言われて治った275。

⑦子供好きの栄福寺の住職は子供のイボを呪文を唱えてとった。住職が亡くなると、そのお墓（横市のいぼとり地蔵。可児市矢戸）に願った228。

⑧白髭神社（関市中之保温井）境内の一角から湧き出ており、冬でも暖かく感じられる井戸に因み地名が付けられたと言う。この清水にイボをよくつけて後ろを振り向かないで帰るとイボがとれると伝わっている294。⑨清水寺（加茂郡富加町）入り口のお地蔵様の下から湧いている

中野方峠の「いぼ石」

いぼとり地蔵

小野の滝

清水寺の二天門脇のいぼとり地蔵

横市のいぼとり地蔵（中央）

小野小町が使った霊水

法伝ノ滝

中之保の清水（白髭神社境内）

清水を姫がつけてイボがとれ、イボとり地蔵と呼ばれている。昭和四三年の集中豪雨で埋没したが、有志によって再建された88。

⑩法伝ノ滝の滝壺（八幡町吉野）の水は眼病に効き、イボもよく取れる。滝の横の洞窟には不動明王（円空作、現在は他の所で保管）も祀られ、真宗の行者が水垢離を行ったので法伝と名づけられた237。

絶世の美女として知られる平安時代（七九四～一一八五）前期の女流歌人・小野小町の伝説は、⑪小野小町が病気に罹ったので、滝（木曽郡上松町小野。旧中山道はJR橋脚側を通っていた）に打たれて祈ったらたちまち治ったので、「小野の滝」と呼ぶようになった202。⑫白山神社（中津川市下野）から五〇mほど離れた池の奥のくぼみから、旅人が喉を潤した清水（小町井戸）が湧き出ている。小野小町が木曽から飛騨へ行く途中、喉を潤した小町は水面に顔を写して化粧も直したので、この清水を飲むと美人になると伝わった。また、女の子供が欲しい時は、男性のシンボルに似た陽石を「小町井戸」に供える64。⑬小野小町が疱瘡にかかったので延算寺（岐阜市岩井）に七日籠ると、仏様が夢枕に現れ、延算寺東院の地で湧き出ている泉で体を清めて治った。そこで、薬師如来を石に刻み泉のほとりに祀った。この薬師は瘡神薬師と呼ばれ、お参りする人が多い46。

《2》その他

①木曽義仲は二本木（木曽町新開）を通るとき、口の周りの吹き出物を小川（安又川）の水で洗って治した220。

②初音橋（八幡町初音）の近くにある清水（ジェモサの清水）は病に効いた。また、正月一番に汲んだ手桶に小判が入ると言われた。この清水は宗祇水と同じ水源とも言われた21。③明治年間に京都からご神体を迎えて祀った神様は皮膚病の神で、薬師堂（八幡町有坂坪佐の薬師堂）の近くの湧水（笠神様の清水）を付けると早く治ると言わ

れた。乞食が子供の襁褓（むつき）を洗ったら水が出なくなった237。なお、東海北陸自動車道の建設で一回りも大きくなった新薬師堂が新設され、湧水が止まったので、古老は今も家の水を新薬師堂にお供えしてから家で肌などに付けている。

④兼山歴史民俗資料館（可児市兼山町）付近の私有地内にある「尾関の清水」（小関の清水・不老水・菊の水等とも言う）は飲むと不老の効果があると言われ、清水付近に住んでいた母娘の娘は清水を飲まなかったが、母は百歳を経ても二〇歳ほどの若さを保ち227、また、⑤兼山城主森忠正（一五七〇～一六三四）は秀吉の北野の茶の湯の会でこの水による茶を勧めている51。

坪佐の薬師堂

尾関の清水

⑥旅の巡礼が体調を崩した時（八月一日）、瑞浪市釜戸町の泉の水（巡礼水）を飲んだら治った。普段は水が枯れ気味だが、8月1日には大量に湧く214。

⑦揖斐川町志津山の麓の泉（「姫が井」の泉）から、竜宮の乙姫が出てきて菅原道真（八四五～九〇三）に水を届けた。この泉の水を飲むと、どんな病も治った11。特に⑧子供の汗かぶれに良い209。⑨夢窓国師（一二七五～一三五一）が、谷水が湧き出ていた場所にお堂（釣月院（ちょうげついん））。揖斐郡揖斐川町清水（きよみず））を建てた。この水（亀の井）を飲むと長生きすると言われた11が、今は枯れている。

⑩木曽川が濁っても、常に澄んでいる井戸（草の井）があった。井戸の水で諸病が癒えるので、長寿の水とされた。大善寺（江南市草井町宮西）の地蔵様は、この井戸から掘り出された1。

釣月院の裏に清水が出ていた。

乳飲み子を育てた清水として、⑪奥方とはぐれた乳母は、泣くばかりの赤子に途方にくれ、各務原市尾崎西町の三峰山裾の小さな谷川の水を赤子に飲ませて、無事に育てた（「乳母がふところ」）118。

⑫西別所駅（桑名市大字西別所）の北一〇〇m程にある白山神社（しろやま）の池の水は歯痛に効く（白山神社は平成二七年九月に希望が丘内の八幡神社に遷座されたが、水は元の所で出ている。）55。⑬千代姫（徳川家光の娘で高須藩初代松平義行の生母。一六三七～九九）は、若宮八幡宮（海津市海津町草場）の今は洪水で無くなった池の水で目を洗い、眼病が治った。この池の水は目の病気やタムシに効果あり、千代はお礼として、神鏡と剣をお供えした23。

乳母がふところ

(2)「化粧水」

女性にとって化粧水は大切である。

①高山市国府町鶴巣（つるす）で永禄・天正（一五五八～九一）の頃、領主二人が庄屋の美人娘を嫁にと争い、それを苦に娘は自害した。娘は成仏したら清水が湧くと書き置き、鶴巣村の山の麓に埋められた。この清水は美人清水と呼ばれている102。なお、②鶴巣の北隣の国府町山本にも全く同じ話が伝わっている105。

高山市国府町宮地（みやじ）では、③器量の悪い姉妹（姉「おりん」、妹「おらく」は「おくら」とも表記）が嫁の貰い手も無く嘆き、自殺しようとすると、奥の清水で顔を洗えとの声が聞こえた。その清水で顔を洗うと美人になった。それから、この水を化粧水と呼んだ102。

千代姫の若宮八幡宮

(3)「温泉の起源」

温泉は外科的治療（うちみ、くじき、骨折等）や痛み（神経痛、筋肉痛、関節痛等）さらに慢性消化器病等に効能があり、昔から利用されてきた。

多くの温泉や冷泉が動物などによって発見されたと伝わっている。なお、温泉の温度は二五度以上で、これ以下は冷泉または鉱泉である。

①美濃の孝行息子の夢枕に薬師如来が現れ、父の病を治癒する温泉を教えた。苦労の末に、指示された蒲田温泉（高山市奥飛騨温泉郷）を見つけた104。

②平湯温泉（高山市奥飛騨温泉郷）の起源は、飛騨に攻め入った武田信玄の士卒が疲れて動けなくなった時、白い老猿が泉（温泉）に入り元気になって出ていくのを見て、温泉に入り体を癒した。なお、薬師如来の由来に

美人清水

化粧水

関する言い伝えもある104。

③福地温泉（高山市奥飛騨温泉郷福地）にお忍びで療養中だった村上天皇が、村人を苦しめる毒蛇を見かねて笛や太鼓踊りで宥めるとピタリとおとなしくなった。獅子舞「へんべとり」は村の重要無形文化財として　毎年七月から八月にかけ毎晩夏祭りが行われる66。

④湯谷温泉（下呂市小坂町湯屋）は、天文年間（一五三二～五五）に濃州生まれの奥田孫左衛門が夢で薬師如来のお告げを受けて発見した48。

⑤下呂温泉は、延喜から天暦年間（九〇一～九五六）の頃、現温泉地東方の湯ヶ峰（一〇六七m）の山頂付近で湧出していたが、天文二（一二六五）年に湧出が突然止まった。その後、河原の水溜りに傷ついた白鷺（薬師如来の化身）が休んでいたことより、温泉を見つけた240。

⑥柿野温泉（鹿ノ湯。土岐市鶴里町柿野）は、樵が傷を負った鹿を温泉に浴びさせて傷を治し、山へ帰したと伝わっている。元禄年間（一六八八～一七〇四）、岩村藩の湯治場として陣屋もあったが、迷惑をした里人が湯口を閉じたこともある48。

⑦鹿之湯（恵那市笠置町毛呂窪）は、年々鹿が来て小鹿を育てては去るので調べてみたら冷泉（ラジウム泉）であった51。

平湯温泉（白猿伝説の神の湯）

下呂市湯之島の白鷺が化身した薬師如来を本尊とする温泉寺

⑧鹿之湯（恵那市岩村町飯羽間小沢の冷泉）は、病弱で子が無かった城主遠山氏夫人は、夢で冷泉が小沢の山中に湧出していることを知った。小沢川で二頭の矢傷を受けた鹿が渓流の水に浸し、治して去った51。

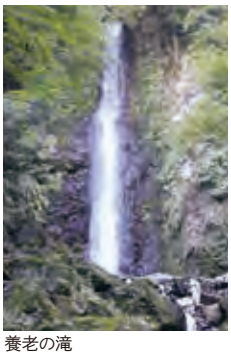
⑨釜戸温泉（白狐温泉。瑞浪市釜戸町）は宝永四（一七〇七）年に天猷寺（釜戸町）の僧が、岩間から流れ出る清水に傷ついた老猿が全身を浸していた後、元気に山へ帰ったことで発見した51。また、⑩老僧が彫った弁天像を見に来ていた白狐が亡くなったので丁寧に埋葬したら、夢に現れて、温泉の出る位置を教えた48とも伝わっている。

なお、⑪高山市の蟻鞍と言う地に住んでいた老婆は不思議な術に長けていて、蟻鞍の地に温泉が湧くと、若者のためにならないと馬の爪を投げ入れ、冷水に変え104、また、⑫多くのよそ者が、温泉が出ると分かると入り込むことを嫌い、丹生川町旗鉾では「白馬と白鶏の骨」を温泉に入れ祈り、丹生川町駄吉では「白鶏を埋め」て祈って冷泉にした284。

2－2　清水を湧出させた人物

(1)「孝行息子」

孝子伝説としてよく知られた養老孝子伝説は、伝説に登場する元正天皇（六八〇～七四八）から主人公源丞内が創作されたようで、①孝行息子の樵（源丞内）が、滝の水が父の好きな酒だったらと願うと、滝（養老の滝。養老郡養老町高林）の水は酒になった。天皇の耳に届き、樵は役人に取り立てられ、年号も養老となった302と述べており、このように孝行心や道徳心を高める話は各地に伝わっている。


養老の滝

養老伝説と全く同じ話として、②郡上市白鳥町の貧しい孝行息子が、酒好きな父親に酒を飲ませるのを楽しみにしていた。ある時谷川（長兵衛川）の水が酒に変わり、それからは毎日その酒を父に飲ませている247。

親が死に際に望む清水の話として、③病に伏した父親のために、父が望む「岩舟の滝」（高山市丹生川町柏原）の水を瓢箪に汲んできたが、間に合わず亡くなって、大坂峠で瓢箪の水をこぼすと、そこから清水（瓢箪水。高山市上宝町荒原）が湧いた14。なお、この湧水の他の説として、弘法大師による大坂峠の湧水伝説（「1－1弘法による湧水」の④と⑤参照）が伝わる。

同様に、④病気の父に清水を飲ませようと汲んで来たが、途中で父が亡くなったことを知り、道端に捨てた瓢箪からの水が湧水（瓢箪清水。飛騨市神岡町西）になった51。⑤飛騨の国の孝子が、重病の父の願いで近江（米原）の醒が井の水を汲みに行ったが、帰り道、父の死を聞き、汲んだ水をその地に捨てると、その場所から清水（下呂市金山町菅田貝洞字醒ヶ井）が湧き226、⑥母親が琵琶湖の水を飲みたがり、息子が汲んで来たが亡くなり、捨てた瓢箪からこぼれた水が池（孝子ヶ池公園。下呂市瀬戸）になり105、⑦娘のお菊は、父の病が治るように庚申洞（山県市葛原）の湧水を汲んで飲ませ、後に「往生の水」と呼ばれた124。

孝子ヶ池

お菊の水（「往生の水」、庚申寺横の稲荷神社）

(2)「歴史上の人物」

日本武尊は第一二代景行天皇の皇子で第一四代仲哀天皇の父と伝えられている。

東征を終えて都への帰途に、草薙の剣を妃の宮簀媛に預けて伊吹山の荒ぶる神を退治に行き、①荒ぶる神を討って毒気にあたった日本武尊は伊吹山を降りて不破郡関ヶ原町玉の「居醒の清水」（別名「玉倉部の清水」）を飲み、毒が消えた51。

「居醒の清水」（別名「玉倉部の清水」）

日本武尊の「居醒めの清水」の比定地はこの他に以下の三ヶ所がある251。②坂田郡伊吹町大字大清水の泉神社251。③米原市醒ヶ井の居醒泉、醒ヶ井駅の東北東六五〇mの位置にある加茂神社の境内に湧く湧水118。④米原市柏原（旧山東町）の玉ノ井（別名「白清水」）251。

泉神社

加茂神社の湧水

玉ノ井（別名「白清水」）

平安時代の陰陽師・安部晴明（九二一～一〇〇五）は揖斐川の地に来たようで、揖斐川町西横山（旧藤橋村）に架かる「藤橋」は、晴明が川の両岸に植えたと伝わる榎に、白口藤で造った藤の釣り橋が地名の由来となっており、⑤清明が喜八（揖斐郡揖斐川町東横山）の家に泊まって、家の前の湧き水（喜八河戸）を美味しく飲んだ。後にこの家には、蚊が居なくなったという言い伝えがある278。

東横山から直線で二〇kmほど南の揖斐郡池田町草深の地に晴明が来た時、⑥村人が水に困っていたので、指図して七つの井戸（晴明井戸、深さ一間）が掘られ、その後、水に困らなかった206。現在も民家に「清明の井戸」が残っていると言われている。

《1》宗教者による湧水

①行基（六六八～七四九）が彫った薬師如来（角川薬師。専勝寺、飛騨市河合町角川）によって、湧水は霊泉となり栄え、霊泉で治療する湯治客が多かった。しかし、湯屋の女中が忙しいのを嫌い、鶏を湯の湧き出口に押し込むと、止まってしまった102。

喜八河戸

②日照りで熱心に雨乞いをしていた村長の夢枕に金毘羅様が現れ、金毘羅平に清水を引いてやろうと言われた。その言葉通りに清水が湧き、祠を建て、毎年お祭りが行われたが、現在、祠は大歳神社（飛騨市古川町杉崎）に合祀された102。

③願成寺（美濃加茂市蜂屋町上蜂屋）の寺裏に「鏡の井戸」と呼ばれ「仁済和尚うぶ湯の井戸」と称する水が湧く所があり、どんな日照りでも水が枯れない288。

④春日井市牛山町出身で、御嶽山の黒沢口の開拓者である覚明行者（一七一八～八六）は、お世話をしてくれる家（上松町上松池島）で飲んだ水が遠くから汲んで来たことを知り、地面を杖で掘って水を出した202。なお、覚明伝説としては、水に関係しないが、⑤民家に伝わった覚明の下駄の削り屑が歯痛に効き220、⑥開田村では松の木が生えたら稲を植えるように言い202、⑦大桑村では安産祈願の社が「古宮の滝」の側に建てられている17。

願成寺の「鏡の井戸」

犬山市では、⑧応永年間（一三九四～一四二七）、高僧日峰は一宇建立予定の地（現瑞泉寺。犬山市犬山瑞泉寺）で、岩角を杖で叩くと、岩が避けて水がほとばしり、一匹の青い龍が天へ昇った。寺の客殿後ろの宿龍池から青い龍が昇天すると伝わっている208。

《2》貴人による湧水

①不破郡関ヶ原町藤下には壬申の乱（六七二年）で敗れた弘文天皇（大友皇子。六四八～六七二）が三本の矢で穴（矢尻の池）を掘ったとも、天皇の兵士が掘ったとも伝わっている51。

②花山法皇（九六八～一〇〇八）が谷汲山に詣でた帰り道、この地（揖斐郡揖斐川町谷汲名札）で念仏を唱えると水が湧いた。池（念仏池）に地蔵様を祀りお堂をたてた260。

③中濃大橋左岸側から上流へ約八〇〇mの所に、藤原定家（一一六二～一二四一）が「散れば浮き散らねば底に影見えて なお面白し 桜井の池」と詠んだ「桜井の泉」（可児市土田地内）がある228。

④建武年間（一三三四～三八）、足利尊氏の叔母の千代野禅尼が戦乱を避けて揖斐川町桂に庵を結び、使っていた清水を千代河戸と呼んだ11。

桜井の泉

矢尻の池

草に埋もれ、僅かに水が出ている千代河戸

念仏池

なお豪商で人徳者として、⑤羽島市出身の永田佐吉（一七〇一～八九）は、海津市南濃町庭田で大石を動かして湧水を出している23。

(3)「宗祇水」

観光客に人気のある郡上市八幡町本町の宗祇水（白雲水）は、郡上を去る連歌師飯尾宗祇（一四二一～五〇二）と領主東常縁（一四〇一～八四）との史実に結びついて親しまれている。

宗祇水の湧出について、①貧しい旅僧がはるばる乙姫滝（八幡町島谷）の上流から汲んで来た水（弘法清水、杖清水）をくれた老婆に感謝し、杖で岩の間を掘って清水（宗祇水）を湧き出させた、と伝わっている237。なお、②弘法清水（杖清水）は乙姫滝から約一km弱ほど登った所で、修行者（弘法だという人もある）が杖を突き、湧き出させた清水である237。

③乙姫滝は古今伝授の祖として知られる東常縁が名付けたと伝わり、滝には膳椀貸し伝説が伝わっている237。

宗祇水の他に、④山下直美家（郡上市大和町大間見）の裏山に宗祇が湧きださせた清水（宗祇清水）があり、どんな日照りでも枯れない301。さらに、宗祇水に勝るとも劣らない清水として、⑤日照りの時に、内ケ谷から来た猿が清水（猿ケ清水。郡上市大和町徳永、徳永駅付近）を掘った礼に娘を嫁にやることになったが、猿に臼や釜を背負わせ、とろ淵を渡る時に押して、猿が流れて沈んだ場所が釜淵である。ここの清水は、一五日変わりに二つの方向に出る。宗祇水よりここが良いと言われていた301。

乙姫滝

弘法清水（杖清水）

宗祇水

(4)「その他」

地名の基になった泉として、①玉泉寺（不破郡垂井町）の門前の「垂井の泉」は、相川扇状地の伏流水が湧出している泉で、垂井の地名の元になった51。なお、湧き出し口近くの大欅は平成二七年の二・三月頃の夜、大風も無いのに倒れた。

木の精による湧出として、②山県市葛原山戸にあった七色桂（七種の木が寄生）を切り倒そうとすると、木から血が噴き出し、樵は気を失った。湧き出し続けた血はいつしか色を失い、清水となった124。また、③水に困っていた村人達が、神明様（神明神社。瑞浪市大湫町）に願をかけると、白蛇に導かれ、杉の根本から泉が見つかった。大杉の側に泉がある110。

最後に、嫁と姑の争いで、④高山市丹生川町の姑が嫁を田植えでいびり、嫁は自害した。その田から水が湧いて池（嫁殺しの池）になり、枯れない104。なお、長野市信更町三水にもほとんど内容が同じの「嫁殺しの池」がある。

垂井の泉

3．KISSOの清水伝説六編

「神祇さまの霊水（七号）」235は、元禄一四（一七〇一）年頃、京の神祇様と呼ばれた人物が夢で住吉神に啓示された薮原のクズ沢の下流に来て、住吉神の指示通り柳の枝を差し、穴を開けてお経を唱えました。すると、飲めば素晴らしい味わいの水が湧き出した。

「清水のお菊（四二号）」241は、青年と良い仲だったお菊が、他の人に心変わりしてしまう。青年は、悪鬼となりお菊を殺め、清水（通称「前野の清水」「井出の清水」。江南市前野町西）に投げ込んだ。

「しゅうずと韋駄天走りの大男（四五号）」270は、岩の間からの湧水（本巣市根尾門脇）がごぜん様の米をとぐために使われていたが、洗濯に使ってしまい、水が枯れた

「覚明さまとどうがん岩（四九号）」43は、木曽郡木曽町福島神戸の御嶽遥拝所の上方に在るどうがん岩から御嶽山を拝し、石の窪みに溜まった水は眼病に効く。なお、神戸は神の戸（入口）の意味で使用されていると考えられる。

「百文池（五四号）」60は、揖斐川町坂内坂本地内の品又峠の手前は、険しくなるが辺りに水場が無い。丁度休んでいた石工にこの岩場に清水を受ける池作りを百文で頼み、岩肌に小さな受皿を彫った話である。是非、岩肌に残る「百文池」をご自分の目で見てください。

「庭田の阿伽井水（七八号）」267は、行基上人に寺を建てるように夢のお告げがあり、この円満寺が建てられた。その際に、霊木の榧から仏像を彫ったが、その切り出し作業の時、喉を渇した人夫のために、杖をつき清水を湧かせた（阿伽井水）。円満寺（海津市南濃町庭田）は、火事により現在地へ移転した。

CONTENTS

1．雷との約束
2．井戸に落ちた雷
3．雷となった人々
4．雷獣

多くの人は落雷を恐れて、雷が鳴りだすと、最近まで「クワバラ クワバラ」と唱えていた。この呪文の出所として、菅原道真は憤死して雷神となったが、道真の領地・桑原（京都市内説や福岡県説があり）には落雷が無かったので、雷に「ここはクワバラだ」と教える説。または、兵庫県三田市桑原の欣勝寺や和泉市桑原の西福寺の井戸に落ちた雷は、今後桑原に落ちないと約束して助けられ、それ以降、約束の地・クワバラを唱える説などがある。

1．雷との約束

恐ろしい落雷を避けるために、各地に雷との約束話が残っている。

①阿木川ダム（恵那市東野）に沈んだ「雷石」は、村の強力に捕まった雷が今後暴れない証拠に石に付けた手跡である90。②「くらがり八丁」（下呂市小坂町落合）辺りで農作業をしていた農民に雷が落ち、焼け死んだ農民の近くの岩壁に爪跡「雷の爪跡」が残っている218。

③揖斐郡久瀬村小津のお宮に落ちて捕まった雷は、今後小津に落ちないと約束してから放たれ238、④大垣市河間町の大石神社境内の松の木に落ちた雷は神社の神様に箒で叩き付けられ、それ以来、雷は二度と河間村に落ちなくなった。大垣の殿様もこの松の木の皮を雷除のお守りにしたが、明治二二（一八八八）年に娘が落雷で亡くなってから、御利益が無くなった16。⑤若い男（神）は、落ちてきた暴れ雷を大きな御釜に閉じ込めて、この地へ落ちない事を約束させて山へ帰った。村人は雷を哀れに思いお釜から出すと、「どうかかまわないで下さい」と帰った。その釜のあった辺りが加茂神社（瑞穂市横屋字村中）である70。

⑥木曽川の洪水の時に金の竜（雨神様）が見つかった。雨神様を祀ると村に雷が落ちないと伝わり、伊木山の裾のお社（各務原市鵜沼小伊木町。公民館横）で祀られ、いつしか「おはちろさま」と呼ばれた。雨神様は数年後の洪水で「羽島に行くが、村を守る」と言われた。ある年「おはちろさま」の祭りをしなかったら、怒りをかい雷が落ちた。それ以来、ちゃんとお祭りを行った25。

雷が落ちない呪いとして、⑦郡上市美並町上田の洞泉寺には、円空がヒル封じと雷封じをした竹の皮の包み（木版刷りに使うバレンのようなもの）が残っており287、⑧雷公神社（不破郡垂井町大滝）の守り札を祀ると雷が落ちないと言われた261。

大石神社

小伊木町の八大龍王

竹の皮で包んだ円空によるヒルと雷封じ
（美並ふるさと館）

2．井戸に落ちた雷

①各務原市蘇原古市場町の加佐美神社の井戸に落ち25、②海津市平田町蛇池の宝延寺の尼さんは雷が落ちた井戸に蓋をし118、また、③可児郡御嵩町中切のお宮の井戸に落ちた雷は煮て食べられた35。

④「井戸に落ちた雷さま（八六号）」55では、桑名市赤須賀の赤須賀神明社の井戸に落ちた雷は助けてもらったお礼に井戸に太鼓を残して井戸が枯れないようにし、また、⑤「へその佃煮」の製法を地元民に教え、地元で「しぐれ蛤」が盛んになった116、とも伝わっている。なお、ヘソの好き

雷が落ちた赤須賀神明社の井戸

加佐美神社の井戸

伊富岐神社前の弁天池

宝延寺

な雷へ、⑥不破郡垂井町の伊富岐神社前の弁天池に祀られている弁天様は、雷の一番歳下の子が食べたがる「子供のヘソ」の代わりに伊吹村のカエルのヘソをすべて雷に与え、伊吹村に雷が落ちないようにした[7]。

3・雷となった人々

①父の仇（箕形但馬守）に返り討ちになった武士（今峰源八）と家来六人を哀れと想い、揖斐郡揖斐川町清水にあった雲宝寺の住職が墓を建てて弔った。一方、仇らは、根尾へ行く途中、雷に打たれて死んでしまった。それ以来、源八らの墓は「雷公の墓」と呼ばれ、現在この墓は揖斐川町長良の月桂院西に移されている[11]。②揖斐郡池田町小牛の源左衛門は死んだら雷となってお産を助けると言い、葬式の時に雷鳴が起こり、小社「源左衛門の宮」が建てられており[2]10、今も妊婦はお米と水を供えた後、その米と水でご飯を炊いて健康な子の誕生を願っている。

雨を呼ぶ吉兆として雷になった人もいる。

③揖斐郡大野町寺内の道路（中之元古川線）脇の墓地には、「死んだら雷になる」と言っていた中村長蔵の「雷王」の碑がある。日照りの夏、村人は雨乞いの試しに長蔵の墓を参ったら雨が降った。以来、長蔵は「雷の主」として崇められ、村人が「雷王」の碑を建てた[11]8。さらに、④寺内から西南西に約四km離れた大野町牛洞の長念寺の裏山の竹林の中に、七〇cm程の自然石で無銘の「雷の墓」が建っている。牛洞は落雷による被害が多発していた。老人が「死んだら雷になる」と遺言して亡くなって以来、落雷がほとんど無くなり、お礼に雷の墓を建てた[2]17。

羽島市桑原町八神の八神城主・毛利氏の菩提寺・金宝寺には雷になった殿様の墓がある。⑤文化十二（一八一五）年、毛利義由の二男は尾張藩との交渉の責任を取って自刃の際、この地域が水に苦労していることを憂い、「死んだあとは雷になるから、水の欲しい時には自分の墓を動か

7人を祀った月桂院の「雷公の墓」

分　類	記号
雷との約束 1.	●
井戸に落ちた雷 2.	●
雷となった人々 3.	■
雷獣 4.	■

雷伝説は、恵那市と下呂市小坂町に伝わる話以外、ほぼ全て三川中流域から下流域に分布している。

長命寺裏の雷の墓

源左衛門の宮

八神城主の林立する墓群の中央の墓
（夢相院真躰淨容居士）

「雷王」の碑

せ」と遺言した。以来、雨乞いの際にはこの「雨乞いの墓」を傾けて雨を願った121。

なお、山県郡の孝行息子に代わって仇を取った雷として、⑥父の為に米俵を盗んだ孝行息子がその罪で首を刎ねられる時、「父とぼたもちを食たべる」最後の願いを果たして死んだ。その後、死を命じた者は雷に打たれて死に、孝行息子の祟りを鎮める地蔵を建て、ぼたもちを供えるようになった118。

最後に雷と仲良くなった人々の話として、⑦知らずに雷の家に泊まった三人は雷の手助けに、稲妻を発し、太鼓を叩き、水を撒き、雷による火事は不浄なものを掛けると消えるので、小便を掛けた45。

4・雷獣

雷鳴と共に大暴れし、落雷と共に空から落ちてきた雷獣のミイラが新潟県長岡市の西生寺や静岡県の旧家に保存されている。これら雷獣は飛膜を広げて滑空するモモンガに類したものから、両足四本に大きな鋏を持つ蟹や蜘蛛に似た生き物、さらに顔が虎で鋭い牙をもったタツノオトシゴ状の「雷龍」まで様々な姿をしている93。

「雷の手」も伝わっている。①各務原市那加新加納町の少林寺（臨済宗妙心寺派）には、寛文十一（一六七一）年の雨上がりに、住職が倒れた石灯籠の下に挟まった「雷神の手」を見つけた。住職はこの毛むくじゃらな手を毎日誦経していたら、ちょうど一年目に、誦経のお礼に雷が現れ、それ以来、この「雷神の手」を拝んだ人は雷からの禍に合わなくなった25。

静岡県の旧家の雷獣のミイラ（『日本幻獣図説』より）

ところで、この「雷の手」に同封された享保二〇（一七三五）年に書かれた「雷手記」は、「五・六〇年前に暴風雨の後に松の枝に架かっていた手が「雷手宮」に祀られたが、今回、ある家の使用人がにわか雨の後に田の畔で拾った手の表裏にも毛が生えており、前回の手と同じものである」と、述べている。なお、②可児市広見の中川寺（臨済宗妙心寺派）にも、臨済宗の高僧愚堂国師が雨乞いの祈祷を行っている最中、誤ってちぎってしまった「雷獣の手」が保管されている35。また、③雷除けのお札を授けていた賀茂神社（一宮市木曽川町玉ノ井）に落雷が起きたので、神前に苦情を言うと「取り締まろう」とのお告げがあった。やがて雷公の子どもがひれ伏していたので、腕を斬りその時の長い爪が残っており、以来落雷は無い233。

最後に大日如来像と雷との話を記しておこう。京田辺市大住岡村の法華寺の大日如来を始め、④岩倉市東町東市場屋敷の宝泉寺の伝教大師作と伝わる大日如来像も村人の間で、雷よけに霊験灼たかと尊敬されている211。また、⑤桑名市五反田の大日堂に安置されている高さ六〇cm余りの大日如来像は「雷よけの仏」として知られている55。

少林寺の「雷の手」と「雷手記」の一部

COLUMN

「大日如来像と野村増右衛門」

五反田地区で護持する寺号を持たない大日堂は、各家の法事を真宗で執り行っており、この大日如来像は桑名藩の公金横領で断罪された野村増右衛門の持仏であると伝わっている。

宝永七（一七一〇）年、増右衛門は公金横領の罪で、童子一三人と八〇歳前後の増右衛門の老母を含む親族四四人の死罪と関係者三七〇人（一説に五七〇人）の追放・罷免が行われ、藩主松平定重はこの事件で越後高田（現新潟県上越市）へ国替えとなった。なお、一二〇年程経た文政六（一八二三）年、定重の子孫定永が再び桑名に国替えとなり、また増右衛門らの罪も許された（『桑名市史本編』近藤杢、平岡潤、桑名市教育委員会　昭和六二年より）。

大日堂

CONTENTS

1．はじめに
2．河童の由来と姿
3．河童と胡瓜
4．河童伝説の分布
5．河童からのお礼い
5－1 伝授された治療法
5－2 魚でお礼
5－3 詫び証文と椀貸し
5－4 水害予報
6．引き込み
6－1 河童が人や家畜を引き込む
6－2 河童が蜘蛛に化けて木を川に引き込む
6－3 スッポンによる引き込み
7．その他類
7－1 住処
7－2 悪戯
7－3 生き肝
7－4 雨乞い
8．おわりに

1．はじめに

河童は沼や湖、川を住処（すみか）とする代表的な妖怪として知られ、その伝説や伝承はほぼ全国に分布している。

昔は、河童と人とは緊密な関わりを持っていたようである。例えば、家業との関係では、佐賀県伊万里市の清純な水を必要とする造り酒屋さんでは河伯（かはく）（中国神話の黄河の神）として河童のミイラを祀っており、大垣市の麩屋を営む民家は享保二（一七一七）年作と記された河童の神様を祀っている[215]。

「河童渡来の碑」
（八代市ホームページより）

2．河童の由来と姿

河童の由来説は、渡来説と人形化生（けしょう）説の二種類がある[30]。

熊本県八代市の球磨川河口の「河童渡来の碑」によると、仁徳天皇時代（三一三～三九九）に中国から九千匹の河童が揚子江（長江）を下り、黄海を経て八代に上陸したとある。

人形化生説でよく知られた藁（わら）人形説は熊本の天草島伝承で、左甚五郎が命を吹き込んだ藁人形の手伝いで工事がようやく竣工した。壊されて川に投げ入れられる藁は、「これからは何を食えばよいか」と甚五郎に尋ねると、「人の尻でも喰らえ」と答えた。そこで、藁人形は河童に化けて肛門にあると想像された尻子玉（しりこだま）を狙うという。青森県八戸市では甚五郎が寸法を間違えて、貫（ぬき）（柱と柱とを横に貫いて連ねる材）を通したまま川に捨て、この木屑が河童になった。したがって、河童の腕は引っ張られた腕が伸び、片方の腕が縮むのである。

河童の原型である水霊のイメージとなった想像上の動物と地方での呼び名を、大野31の分類から見ておこう。

総身水苔の様なもので覆われ、鰓は鰻の肌の様にぬねり、頭髪はぼうぼうで頂きが少しへこんでいると説明（部分74）。

（1）虬（みづち）（蛟竜）：古代は「みづち」で、水霊・水神の意。水中に棲み、蛇に似た形をし、角・四肢をもち、毒気を吐いて人を害するという想像上の動物。青森のメドチ・メドツ、岩手のメットウチ、能登・加賀のミズシ。

（2）水神（すいじん）：佐渡のシイジン、長野のセイジン、新潟のスジンコ、鹿児島のスジンドン・ミズシン・ミッツドン。

（3）水虎（すいこ）：中国の水虎は、三・四歳の児童のようで脛（すね）が長く、総身鱗甲に覆われ、普段は水中に潜り、虎の頭部に似た膝頭だけを水上に浮かべている。水虎が日本では河童のイメージとなった。津軽のシッコサマ・オシッコサマ。

（4）川の童から：関東・甲信・東海地方などのカワッパ、九州・種子島・屋久島のガラッパ、長野・岐阜・愛知のカワランベ等多くある。

（5）他に、（4）以外の人のイメージからの主な名前だけを列挙すると、「川の子」から生じた島根・兵庫・鳥取・大分のカワコ等、「川の小坊主・小僧・小法師」から生じた静岡・長野・三重野のカワ（ラ）コゾウ、三重のカワコボシヤ・カンコロボシ等、さらに「川の太郎」から生じた和歌山・近江・九州のカワタロウ、岐阜のカワヤロウ等がある。

また、実在動物で分類すると、（1）「亀・スッポン」から、岐阜のドチ・ドチガメ・ドチロベ、（2）「川獺（かわうそ）」から、佐渡・愛媛のカワエソ、島根・広島のカワソ、（3）猿から、静岡のカワザル、広島のフチザル、（4）鳥から、日向のヒョースベ等である。

つまり、水霊のイメージは、蛇・亀・川獺・人（少童）・猿・鳥とまちまちであり、一定の

水戸浦からあがった大河童で、約105cm、重さ約45kg。総体骨なき様で尻の穴が3つあり、臭気はなはだし。享和元（1802）年8月下旬写し（部分74）。

形をなさなかった。

石川74は、水霊の形状は徐々に幼児の形に収斂して、小童の形をしたものの呼び名カワッパ・カワランベ等から、河童に転じたと考え、さらに、河童がだんだん通用語になるにつれ、その形状も統一化され、上述した「水虎」の形状を取るようになった、と述べている。

さらに、石上117は水霊が河童に収斂した原因として、安定した江戸時代の楽しみとして、文人・画家による「怪談会」の催しや絵巻作成の隆盛が一役買ったと考えている。さらに現在、河童のイメージは清水昆や小島功らの漫画によって可愛らしいイメージへと変わっていった。

小島功による「キザクラカッパカントリー」の標章

3・河童と胡瓜

河童は祇園のお使いであり、河童の好物は胡瓜（きゅうり）だと言い伝えられている。まずは、京の祇園社（八坂神社）と胡瓜について触れておこう。

祇園の社紋は胡瓜の切り口に似ていると言われるが、これは間違いである。織田信長が天正年間（一五七三～九一）に、京都・感神院（現八坂神社）に寄進した御輿（みこし）の紋に由来するとされる祇園の神紋は「木瓜紋（もっこうもん）」であり、胡瓜とは異なる。しかし、この「木瓜」は「きうり」とも読めるから、「木瓜」が「胡瓜」に変じたのである30。

博多人は、祇園の神紋が、胡瓜の切り口に似て畏れ多いと、祭り期間中、胡瓜を口にせず、サラダに入っていてもつまみ出す、と言われている。似た話は海津市平田町土倉（つちくら）にもある。揖斐川堤防沿いにある氏神須賀神社の定紋が胡瓜の切り口に酷似しているため、土倉の人々は胡瓜を絶対口にしなかった107のである。同様に、大垣市静里町（徳光）の白髭神社に祀られている牛頭天王の模様も胡瓜の切り口に似ているので、昭和三〇（一九五五）年頃まで栽培も食べもしなかった16。なお、「よすけとカッパ（八一号）」110（瑞浪市釜戸町の土岐川）では、胡瓜を川に投げ入れて魚を大漁していたが、河童に与える胡瓜の替わりに石を投げいれ、河童にいじめられている。

木瓜紋

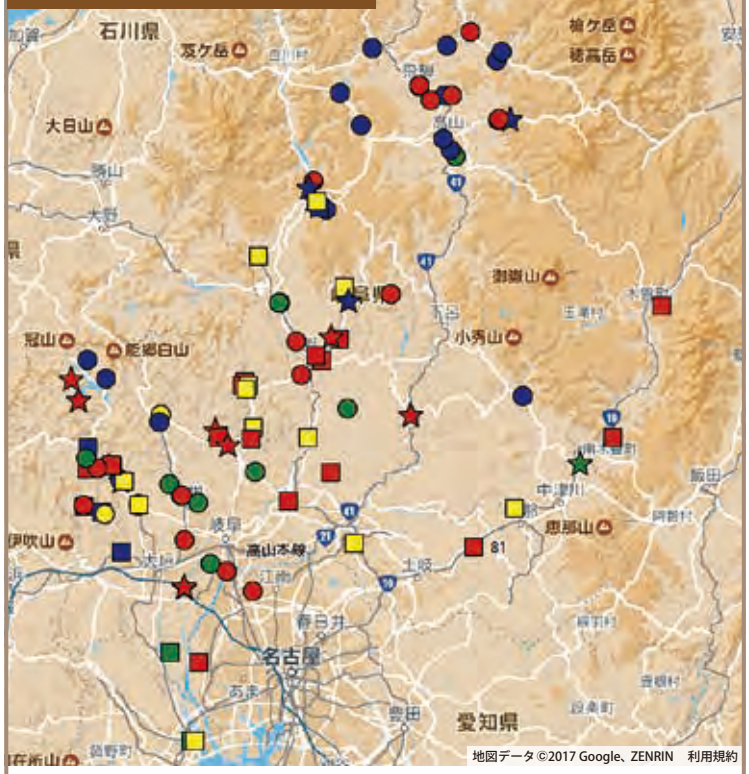
平成28年に新しくなった須賀神社

河童と胡瓜の関係を、中村32は、享保元（一七一六）年刊の書籍に河童が「瓜（うり）・茄（なすび）を盗る」記述が最初に見られるが「胡瓜」は記述されておらず、一七七〇年代になって「胡瓜や甜瓜（まくわうり）を盗み」と初めて「胡瓜」が記されている、と述べている。さらに、河童が胡瓜を好きだと明記したのは享和三（一八〇三）年刊辺りの書籍が古いほうであろう、と結論している。つまり、十八世紀末ごろから河童は胡瓜が好物になったようである。

4・河童伝説の分布

選定した河童伝説を、お礼、引き込み、その他にジャンル分けを行った。

河童伝説の伝承場所図



分　類	記号
治療法 5-1	●
魚でお礼 5-2	●
証文や椀貸し 5-3	●
水害予報 5-4	●
引き込み 6-1	■
蜘蛛化け 6-2	■
スッポン 6-3	■
住処 7-1	■
悪戯 7-2	★
生き肝 7-3	★
雨乞い 7-4	★

- ●は、揖斐・長良川の上流域から下流域、さらに宮川支川や高原川の上流域に分布。
- ●は、長良川筋では見られず、揖斐川上流域や庄川・宮川上流域に分布。
- ●は、揖斐・長良川筋のほぼ上流域から中流域に分布。
- ●は、限られたサンプル数だが、揖斐川筋で見られる。
- ■の上限は、揖斐川では揖斐川町東津久見、長良川では郡上市、木曽川では木曽町辺り。
- ■は、揖斐川右支川粕川の上流や高山市の庄川上流が舞台。
- ■は、スッポンの生息地の下流部や河口部が舞台。
- ■の上限は、木曽川では中津川市坂下、長良川では郡上市白鳥町、揖斐川では揖斐川町乙原辺りである。
- ★は、木曽川筋では見られず、揖斐川筋に多い。
- ★は、高山市の宮川や荘川上流、さらに郡上市明宝等の上流域が舞台。
- ★は、中津川市山口に伝わる。

5．河童からのお礼

5－1　伝授された治療法

「わるさ」に失敗した河童は、たいてい片腕を切り取られた。そこで河童は、片腕を返してもらう礼に、切られた腕を元通りにつなぐ秘術・秘法を、さらに、骨接ぎ以外に金創（刀・槍・鎌などでの怪我）の薬、軟膏などの医薬の製法を伝授している。

実在の人物が河童に骨接ぎの秘法を習ったと伝わる話もある。

織豊時代の鷹取秀次を実質上の始祖とする鷹取家は金創治療の名門である。延宝八（一六六〇）年項の書物は、「筑前医師鷹取養巴（一七世紀後半の人物）が切断された腕を継ぎ、元のように治した」と書いており32、この内容が「厠で奥方の尻を撫でて腕を切られた河童が、腕を返してもらった礼に、鷹取運松庵（養巴は世襲名）に骨接ぎの法を伝授した」とセクハラ伝説となっている。なお、厠で女性の尻を撫でて捕まった河童は、塩入63によると、新潟県から九州福岡県に至る日本海側に偏っておよそ一五話あり、特に新潟県に四話、長野県に五話が集中している。

天竜川での河童の妙薬は、川奉行三代目の中村道民（新六）に伝えられた痛風の薬（商品名「加減湯」）である。近年、昭和初期まで製造・販売されていた「加減湯」の実物が中村家で見つかった。薬は薬草成分を浸み込ませたキハダの枝を切り刻み、日本酒で煎じて痛風の患部に塗ったり飲んだりしたようであるが、薬の製法は門外不出である80。

痛風の薬のチラシ（おもしろかっぱ館蔵）

河童の妙薬アイス（阿伊寿）は各地で使用されている。例えば、新潟県内の妙薬アイス33は、無名異（酸化鉄を含有する赤土）・黄檗（キハダの樹皮）・揚梅皮（ヤマモモの樹皮）等で、これを酢と水を調合して使用されている。

猫山宮尾病院（新潟市中央区）では、近年まで河童から伝授された「打ち身・くじき」の良薬「猫山あいす」の湿布薬が処方されており、深緑色の粉末を水や酢で溶いて耳たぶぐらいの硬さになるまで練った後、和紙にのばして患部に張られていた。なお、打撲傷の場合は、「黄桜ギャラリー」によると、はこべ（朝しらげ）、草庭常（草接骨木）等で造る、と伝わっているようである。

（1）「成分がある程度分かる薬」

①悪さをして取られた腕を返してもらった揖斐郡徳山村本郷の河童は、十六ササギ（ササゲとも言う）・ネムの木の皮（合歓皮）・鹿の角・その他五種類を混ぜ合わせて黒焼きにして飲むと病気や怪我に効く妙薬を伝授し118、②郡上市の浄福寺（明宝小川）の住職は秘伝の七種の草にいわゆる百草を加えて炭状に煮詰め、この粉末に鹿の骨の粉と河童から貰った金の玉（イシサンゴ目の珊瑚）を削った粉を入れて作るアイスと苦楝皮（落葉高木センダンの樹皮）・海人草（海藻）・甘草等を調合する喘息湯とを伝授された295。なお、郡上市には骨接ぎ秘薬も伝えられており、③八幡町亀尾島ではアイス草と巻貝の蜷を調合して腕の接合に用い237、④大和町神路の「ごりん淵」（現在は流れが変わり淵が浅くなった）の河童は蜷の身を切れた腕に付けて接合する術を教えた301。また、⑤飛騨市神岡町の河童は南天の木とみこし花（ゲンノショウコ）やオオバコの根を混ぜて飲む風邪薬（河童丸）を伝授している39。

浄福寺のカッパから貰った金の玉（珊瑚）

（2）「各種の治療薬」

河童から伝授された薬で殿様や姫君を治療した話として、⑥河童は懲らしめを許してくれた医者（揖斐郡揖斐川町春日美束）に秘伝の薬を伝授し、大垣の殿様の病気が完治し118、また同様に、⑦粕川の上流部で河童から貰った本と薬で医者になり、近江の殿様の姫を治している224。

「キズ・虫下し薬」として、⑧竜宮に通じる鶉ケ池（本巣市十四条）の年老いた河童は水神様のように親しまれていたが、悪ふざけが過ぎた小河童は馬医者に懲らしめられて許され、母河童は馬医者へのお礼に傷薬の製法を伝授した。また、河童の家族が池から引っ越す時も「虫下し」の妙薬を伝授され、この薬は明治時代に官許虫下しの免許もあった69。

ごりん淵

高山市内には火傷の薬が伝わっている。⑨馬を宮川（高山市国府町）に引きづり込もうとした河童が許されたお礼に「がおろ薬（火傷の薬）」の製法を教え59、⑩高山市荘川町古川の井口家には、河童が伝授した火傷の薬がある252。

高山市には馬の肝などを盗ろうとして逆に馬に引っ張られて来た河童が許された礼として、⑪国府町宮地では、「すばこ」（手首の痛む病）の薬を伝授され59、⑫丹生川町瓜田では、歯痛の妙薬を教えた92。さらに、⑬同じ瓜田の倉屋家では、河童から針と「バヒフ」（ジフテリア）

に罹った人の喉を撫ぜると治る蛇の鱗一枚が入った袋を貰っている104。また、⑭荘川町赤谷の権四朗家伝として、河童がお礼にデキモノの薬を伝授しており、大正まで注文があった252。

骨接ぎ薬は、⑮一宮市浅井町の接骨医は河童相伝の秘薬を持ち、難しい患者が来た時にはその家の池を一巡すると河童が出てきて処方を伝授した29。⑯本巣市山口の豊先淵では、鎌（河童は金物を嫌う）を取り除いた馬医者の谷村家が馬の治療法を伝授され51、⑰同じ豊先淵で河童の住まいの入り口に引っかかった馬鍬を取り除いた小森家が、梅毒薬の製法を伝授されている51。

下流域では、⑱羽島郡笠松町の池（笠松駅の東北で、埋立られた）の主の祟り（見ると寝付く、糸や網を取られる）があり、主は河童かスッポンだろうと言われ、主に餅を供えると歯痛が止まる、と伝わった223。

5－2　魚でお礼

魚の名前は、岩魚やヤマメと記されている場合もあるが、多くは単に「魚」と記されている。

木曽川では、①恵那峡（中津川市付知町大起）で合流する右支川付知川のあしげ淵では、客の数だけヤマメを籠に入れていたが、籠を掛ける鍵を鹿の角に替えたら魚が届かなくなり81、②揖斐川の旧徳山村櫨原では瓢箪を貰った礼51に、③娘に化けた揖斐川町徳山の河童は悪戯をしない証文と共に魚を届け262、④揖斐峡の揖斐川町乙原では川木（流木）に化けていた河童が魚を届け54、⑤揖斐川左支川の根尾川の根尾板所では、猿に化けて撃たれた河童を弔う火を仲間の河童が貰った礼に、魚を届けると共に洪水災害に遭わないと予言している270。

あしげ淵

河童は金物が嫌いなので、⑥揖斐川町岡島の「山西のそこなし淵」（岡島橋側の淵）に棲む河童は沈んでいる馬鍬を若者に取ってもらった礼に悪さをしないと誓い、魚を届けている11。なお、後に述べる「5－4水害伝説」に⑤と類似の話が③に、⑥と同じ所の他の河童が①に取りあげられている。

一方、長良川流域内では魚でのお礼は一話も無く、飛騨市では、⑦飛騨市神岡町伏方では捕まった子河童の親が礼に魚を届け51、⑧古川町では魚を入れてくる桶を大きくしたら来なくなり109、また⑨同じく古川町で礼にアジカ（竹・藁や葦等で編んだ籠・ざるの類）に魚を持ってきた109。⑩河合町中沢上では秘伝を伝える代わりに魚を毎日木の枝に魚をぶら下げに来たが、木の枝を金物にしたら魚が来なくなり51、⑪河合町保の庄次郎淵（（梨ヶ瀬地区。現在は下小島ダムに沈む）で庄次郎の馬を引こうとして捕まった河童は、許されて礼に魚を運んだが、鉤を金属にしたら来なくなった102。

岡島橋上流の「山西のそこなし淵」

高山市では、⑫高山市国府町今の「蔵が渕」では、神岡町伏方での桶の代わりに魚を入れて来る桝を大きくしたら来なくなり59、⑬神岡町の「蛇の淵」（高原川）の瓜を盗って捕まった河童は、⑩の河合町と同様、秘伝を教える代わりに毎日魚を運んでいる51。⑭上宝町本郷の鳴滝では馬に取り付いて許された礼に「しょうけ（ザル）」に岩魚を入れて毎日届け14、⑮清見町池本では馬を川に引き入れようとした河童が来客の度にヤマメを届け51、⑯荘川町猿丸の滝ヶ淵（荘川中学側）に棲んでいた河童は、馬を川に引き入れ損ねて許され、河童が魚を持ってきていたが、包丁に驚いて来なくなった252。なお、⑰猿丸の河童の後日談として、河童が坊さんに化けて魚を届ける家で団子をごちそうになったが、若者が流した魚を捕る毒薬で死んでしまった252。また、⑱石浦町飯山地区の宮川の「青ドン渕」（「どん」は語意を強調する語である）に棲む親分河童・勘助は、馬に悪さをしないと証文も書いてアジカ（カゴ）に魚を入れて届けていたが、アジカの紐を新しい紐を取り換えたら魚が届かなくなった7。

林道を降りた橋の側の鳴滝

河童ではなく、竜神も礼をし、⑲旅人に親切な老夫婦のもとへ双六の淵（竜神淵。高山市上宝町双六）の竜神様が娘に化け機織りの手伝いに来たが、帰って行く化けた竜神を見たため、借りた礼にくれていた岩魚や鱒も無くなり、道具を借りに来なくなった。そこで、老夫婦は竜神が消えた双六の淵は山向こうの岩井戸（地名）の「へそ穴」に繋がっていると言われていたので、老夫婦は「へそ穴」へ供物（野菜や米が無いので種籾）を供えると、竜神は許して双六の淵に籾殻だけ浮いて来た14。

猿丸の滝ヶ淵

5－3　詫び証文と椀貸し

捕まった河童が詫び証文を書いている。

①郡上市八幡町小那比では今後津保川に来ないと証文を書き51、②関市武芸川町谷口の宇多院橋上の岩淵で

は水難除けの手形を岩に彫っている。なお、掘った手形はいつの間にか消え、今は水難供養の観音様が祀られている126。③岐阜市中鶉の了福寺では河童に娘用の綿帽子を与えたら、綿畑を荒らさない証文を届けた45。

また、証文には至らないが河童は「約束」もしており、④揖斐川町の鎌曽（西平ダム下流三〇〇ｍ左岸の「鎌曽バス停」）のすぐ上流の勘七ブチに棲む河童は、揖斐川町の「山西のそこなし淵」（岡島山の淵）の河童11と同じく、川底の馬鍬を拾い上げてもらった礼に、今後人間のノコを取らないと庄屋に約束をしている11。⑤揖斐郡揖斐川町谷汲長瀬（旧下長瀬）の人が捕まえた河童が命乞いしたので、元舟場近くの松が枯れるまで、下長瀬の子の「ノコ」を引かないように約束させて逃がした。明治中頃まで「松が枯れず」、子供達は水遊びをした260。⑥落合淵（岐阜市則松）の捕まった河童は田植えを手伝い、約束の印に松を植えている51。なお、⑦「たろべの滝（九号）」136では、空腹の河童がたろべの滝（揖斐川町西横山。道が荒れて今は行けない）の水を干上がらせない約束をして瓜を分けて貰っている。

たろべの滝（『藤橋村史上巻』より）

岐阜市則松の「からかさ松公園」

新桜橋左岸袂にある水難供養の観音様

河童による椀貸しは、①若宮八幡宮の森の淵（高山市石浦町八幡宮の奥の淵）では馬についてきた河童が許されて淵で椀を貸し101、②郡上市白鳥町中津屋では捕まって許された河童が来客時に椀を貸している51が、上記二話とも、最後の結末は「椀貸し伝説」と同様で、約束を破ったり壊したため、以後椀は貸されなくなった。さらに、③白鳥町中津屋の河童は、馬を引き込み損ねた河童が許されて以来、頼まれると農機具を用意した52。

若宮八幡宮の奥の淵

5－4　水害予報

①揖斐川町では岡島山の淵（岡島橋上流右岸側）で怪我をした子河童の手当てをしたら、河童の家族が洪水発生を知らせるようになり47、②揖斐川町春日六合（下ケ流）でも河童が大水の発生を知らせている224。また、③本巣市根尾西板谷（板所から北に約一・五km）では子河童の供養に火を貸した家がそれ以後に害を免れている270。

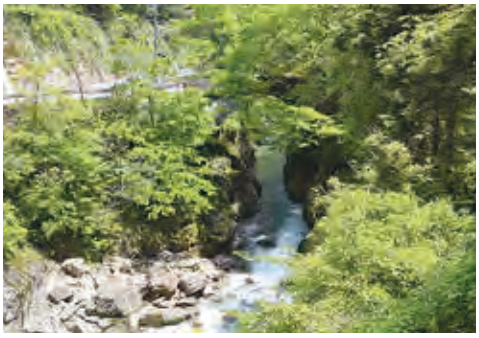
6．引き込み

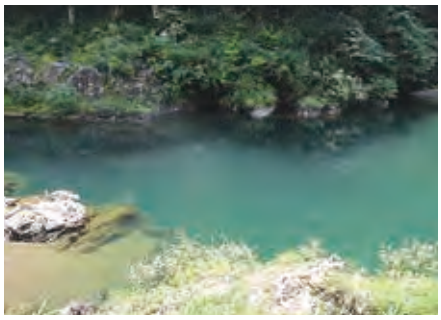
引き込みは、人や家畜の引き込み、蜘蛛による引き込み、すっぽんの三つである。

6－1　河童が人や家畜を引き込む

①木曽郡木曽町読書三留野で盆の一六日に川へ行くと引きずり込まれ266、②木曽町福島伊谷ではカワナンバ（河童）に引き込まれると伝わっている266。③山県市瀬見の瀬見峡に架かる瀬見橋（一九二八年以前は木橋で、初代瀬見橋は江戸中期）でオカッパ頭のお化けが橋から人を突き落したが、遭遇した村人が和歌を詠んでから出なくなった124。④小駄良の原（郡上市八幡町初音）で淵に引き込まれそうになった子どもが助かった21。

⑤関市板取杉原では夜に浅瀬を渡っていて川に引き込まれ89、また、⑥板取保木口の神明淵へ竜宮城の入り口を探しに潜った若者も引き込まれて、共に亡くなっている89。⑦関市下之保の清兵衛淵は夢で、淵（清兵衛淵）に住んでいるドチロンベが人間の食物を望んだので、毎朝に


神埼川に架かる瀬見橋を上流から望む


清兵衛淵

ぎりめしを川岸の草むらの上に置いた。その礼に、内緒で魚が取れる場所を教えてくれたが、ドチロンベとの約束を破って人にそのことを話すと、清兵衛は淵の中へ誘われて消えてしまった126。⑧大松の渕（関市洞戸市場の街道で通行人を引き込むので、お坊さんが犠牲者と同数の八八体の仏像を造り経を挙げたら治まった283。

⑨揖斐川町久瀬（現西津汲）では胡瓜を食べて泳ぎに行くと引き込まれると言い238、⑩久瀬のキヨジブチ（小津川沿い）では猿に化けた河童が引き込むと言われ238、⑪揖斐川町東津汲の小津川橋辺りの河原となった破堤地に河童に狙われた漁師が逃げ込んで助かった54。なお、⑫人ではなく小牛の「しりこだま（尻子玉）」が揖斐川町日坂の岩屋坂脇の川の淵で河童兄弟に抜かれている54。

⑬郡上市の源田では、杭に化けた河童が馬を引きずり込み52、⑭郡上市八幡町市島では河童と力比べをした釣り人が負けて川に引き込まれ53、⑮関市小瀬では仏飯を食べると河童の災難を除けられると言われているが、仏飯を食べずに川へ行き引きずり込まれた71。

下流部の愛西市赤目町では⑯河童が娘に化けていることを明かさない約束を破った村人は、佐屋川で足を逆さにして死んでいた273。

小津川橋（高知川）下流の揖斐川との合流部

大松の淵

6－2　河童が蜘蛛に化けて木を川に引き込む

蜘蛛が朝に巣を張ると天気が良くなると信じられていたように、蜘蛛には霊力があると信じられていた。

①ホオノキ淵（高山市荘川町猿丸）で、蜘蛛に化けた河童がホオノキ（朴の木）に糸を巻きつけて木を川に引きずり込み252、②揖斐川町春日六合（上ケ流）では柳の木が引きずり込まれている224。なお、③揖斐川町春日美束では蜘蛛に化けて悪い事ばかりしていた河童が許され、以後、悪河童が来たら教えると約束した28。

④揖斐川町では釣り人の足についた糸を付け替えた柳が278、さらに⑤椿ヶ渕（不破郡垂井町梅谷）では足についた糸を付け替えた椿の木47が川に引きずり込まれている。

6－3　スッポンによる引き込み

下流部になると、河童の姿は下流部でよく見かけるスッポンに替わってくる。

①海津市海津町では高須藩主松平義行の馬が池に引きずり込まれてスッポンに食べられ221、②桑名市では津島祭りが近づくと、ドチ（スッポン）が子供をさらって津島さんに人身御供する55、と言われていた。

7・その他

その他は、住処、悪戯、生き肝、雨乞いの四つである。

7－1　住処

河童が見つかった場所や住処は、①揖斐川町乙原の「とどろきの滝」は河童が住んでいると伝わり、村人は滝に近づかなかった54。②科洞（揖斐郡揖斐川町）の科池近くで声を掛けて来た子供の足跡に水かきが付いていた。以来、科池の「のし（主）」がおると言われた209。③関市板取の大谷に棲む河童と出会い逃げ帰って来た89。また、④大洪水の時に、板取のはかり岩の上に河童を見かけたが、あるいは川獺だったかもしれない89。

なお、子供の形ではなくスッポン（ドチ）の形をした河童が、⑤「水神様の淵」（可児市下恵土）から若者に化けて酒を買いに来たが、跡をつけた男は熱を出し、化けたドチは、悪さをするようになった。兼山城主の家臣森武蔵がドチを退治したので、男の熱も下がり、その淵を武蔵ヶ淵と呼ぶようになった35。なお、『可児町史通史編』では怪物退治と酒を買いに来る話は別々になっている。

大井ダム（中津川市蛭川）が出来る以前、⑥池島（ダム湖に沈んだ奥渡渡船場下流の中州）と呼ばれる地の大きな池に河童が棲み、この池は中津川市坂下の旗巻渕（竜宮の姫の機織り伝説の淵）と繋がっていると言われた108。

高山市荘川町では、⑦十王堂の淵・新淵には多くの河童が棲んでいた252。郡上市明宝気良の奥の青木の川で、⑧河童と相撲をした人もおり、河童が岩の上に寝ていた295。⑨郡上市白鳥町歩岐島の今は埋め立てられた池（北濃駅の西端千田野上がり口横の山側の池）に浮いた布を拾い上げようとした与太郎が池に沈んだ。池の淵には河童が棲むと恐れられた247。

なお、泉鏡花の「歌行燈」に、⑩桑名市紺屋町辺りで外堀の水を打つバアンという音が聞こえた。これを「カワウソの釣瓶落とし」と言ったと、載っている55。

また、淵が深淵や竜宮と繋がっている話として、⑪郡上市美並町の坂山の森の淵には人を引き込む河童が棲んでおり、淵に南蛮黍（トウモロコシ）を流すと勝原の淵に浮かんだ287。一方、⑫関市洞戸尾倉の「ガワイロ渕」の

中津川市坂下の旗巻渕（弁天橋の下流）

乙女岩（河童が乙女に化けて座っていた岩）に、旧暦六月二六日に竜宮の乙姫が遊びに来るので河童が集まるから、川遊びはしない283。

上流から望む「ガワイロ渕」（右岸側の河原の大きな乙姫岩から昔は川に飛び込んだ、と古老は言った。）

7－2　悪戯

①悪戯河童は高山市荘川町猿丸の号嶋岩の淵に馬を取り込もうとしたが、逆に馬に淵から引き出され51、②山県市片原の厚谷に架かる橋から子供に化けた河童に川に落とされそうになり124、③山県市日永（ひなが）では子どもに化けて大人を引きずり込み損ない刀で切られている51。

④揖斐川町西津汲では川木（かわぎ）（流木）に化け54、⑤揖斐川町三倉では飛鳥川で遊んでいるうちに河童が混じっていた54。⑥揖斐川町戸入（とにゅう）（旧徳山村）では相撲を取り84、⑦揖斐川町塚（旧徳山村）では、悪さをする河童が突然脇差で切付けられたが、脇差は草鞋の紐を切って穢れていたので、河童は切られずに逃げ延びた84。

⑧郡上市八幡町市島では力自慢の男が大洞川の悪戯河童を退治し53、⑨下呂市金山町の高橋では悪戯河童を弁財天が封じ込めている34。さらに、⑩安八郡安八町今ケ（いまが）渕（ふち）の中須川の河童は草刈りの手伝いに来て草を散らかしたり4、⑪安八町南今ケ淵では、女の子に化けて遊びを誘いに来た河童4もいる。

河童にも、悪さをするもの、仲良くしたがるもの、何も関わりを持たずにそっとしているなど、いろいろ居たようである。

7－3　生き肝

高山市では、①丹生川町小野の小野橋下で、乙姫の病を治す猿の生き肝を取ろうと猿を騙したが、失敗してアケビを投げつけられた269。②荘川町新淵（あらぶち）では乙姫のために河童ではなく亀が猿の生き肝を取ろうとして失敗し72、③荘川町牛丸では、乙姫様へは猿の生き肝ではなく馬の生き肝を取り損ねた河童が毎日アジメ泥鰌（どじょう）を三升ずつ持ってきたが、「気を遣わなくても良い」と言うと、届かなくなった67。

④郡上市明宝の井尻洞でも、乙姫のために猿の生き肝を取ろうとしたが、皿の水が無くなり捕まっている295。

7－4　雨乞い

中津川市山口の川原田では、①悪戯河童が行者によって石にされ、石河童の頭の水が無くなると、水を欲しがって雨が降ると伝わっている300。

8．おわりに

『遠野物語』によって、河童は岩手県遠野市が有名であるが、岐阜県と木曽三川流域にも河童伝説が多数あり、今回調査不足である木曽川上流域（長野県側）の分を加えると、河童伝説は軽く一〇〇話を超えると考えられる。

本章では個々の河童伝説については触れていませんが、各種の河童伝説を通して、川への畏敬と愛着を持っていただければ幸いです。

なおこの原稿は、KISSO九八号「河童伝説」（水にまつわる民話から）を修正・加筆いたしました（福島晃子記）。

第7章 流れ仏伝説

CONTENTS

1．各地に漂着した神仏
1－1　木曽川
1－2　長良川
1－3　揖斐川
1－4　KISSOの流れ仏三編
2．ヤロカの大水伝説
2－1　「ヤロカの大水」の洪水
2－2　「ヤロカの大水」で流れてきた仏像
2－3　廃仏毀釈による仏
3．川立ち地蔵と三体の橋杭笑地蔵
3－1　明台寺の地蔵
3－2　一乗寺と慈恩寺の地蔵
3－3　谷汲山の地蔵

堤防が整備される以前、人々は洪水の脅威におびえ、家族や田畑を濁流から守る果てしない努力がなされて来た。ここでは、洪水によって流されて来た各地の神仏を概観しよう。

1．各地に漂着した神仏

1－1　木曽川

①慶応三（一八六七）年の洪水で十王堂に祀られていた地蔵が流されたが、七五年後に川下の石の間から見つかり、十王橋（木曽郡上松町上町）袂に祀られた202。

十王橋袂の地蔵さま

（1）「飛騨川筋」

②下呂市萩原町尾崎の赤坂谷に祀られていたお地蔵（十一面観音）が洪水で流されたが、長い年月後に川原で見つかり、盛大に祀られた。今も山之口街道の道脇に残っている97。③戦で黒焦げになった玉龍寺（下呂市金山町中切）の仁王様が、自ら飛騨川を三〇km以上も遡り、小坂村の長谷寺（下呂市小坂町小坂）前の淵に着き、小太郎によって寺に祀られた97。④安永四（一七七五）年の夏の洪水で、下呂町上小川から地蔵が「武儀郡のおうりのまき」迄流された。小川と武儀の両方の村人の夢枕に現れ、地蔵は上小川に連れ戻され、観音堂に安置された。なお、この地蔵は加子母小郷のお地蔵様と同じ作者が同じ木から造った兄妹地蔵である240。

飛騨川左支川の白川筋で、⑤寛文五（一六六五）年八月に大洪水が発生した。その翌日、岩（社岩。通称弥次郎岩）の上にあった座像に似た石（高一尺、幅五・六寸）を持ち帰り、井戸神として祀った。数年後夢枕で、この石は天照大神で、しかるべき地に祀るように言われ、神明神社（加茂郡東白川村神土上親田）に合祀した274。

長谷寺。楼門の左右に一対の焦げた仁王像が祀られている。

東白川村神土上親田の神明神社

（2）「本流筋」

美濃加茂市では、⑥木曽川の大水が右岸側の村を襲うのを憐れんだ地蔵が閉じていた目を見開き、左岸の可児市土田側をにらみ、洪水から美濃加茂市深田側が救われた。この「にらみ地蔵」は芳春寺（深田町）の門前に立っている288。⑦観音様が夢枕に現れ、木曽川の松が瀬の川底にいることを告げた。川底から見つかった観音様（滝場観音）を祐泉寺（美濃加茂市太田本町）の境内に祀った。一説には、寺の下のマキ（渦が巻いている所）に沈んで光を放っていたとも言う288。⑧観音様を祀った観音堂（美濃加茂市蜂屋町上蜂屋）が大水で流されたが、土の中から輝く観音様が見つかり、お堂が再建された。その時小豆御飯を焚いて供えたので、今もお堂前の小豆のような小石の入った岩はその名残である288。⑨大池（芋ヶ瀬池。各務原市各務おがせ町）の底が見える程減った時、子供の夢枕で仏が池浚いをするように言う。すると、池の水は戻り、池の泥から仏像（観音菩薩）が出てきた222。

観音様（滝場観音）

芳春寺の「にらみ地蔵」

(3)「左支川可児川」

⑩普済寺（可児市石森）の仏像は、可児川の洪水で光ながら流れてきた流木で造った薬師如来（高さ八一cm）である228。⑪大水の後に川底で光っていた石地蔵（神明の弘法様）を引き上げ、現在、弘法堂（可児市今渡）に祀られている228。⑫可児川岸の湯の沸いている場所（可児市塩）の観音様は、大水で伊勢の白子（鈴鹿

普済寺

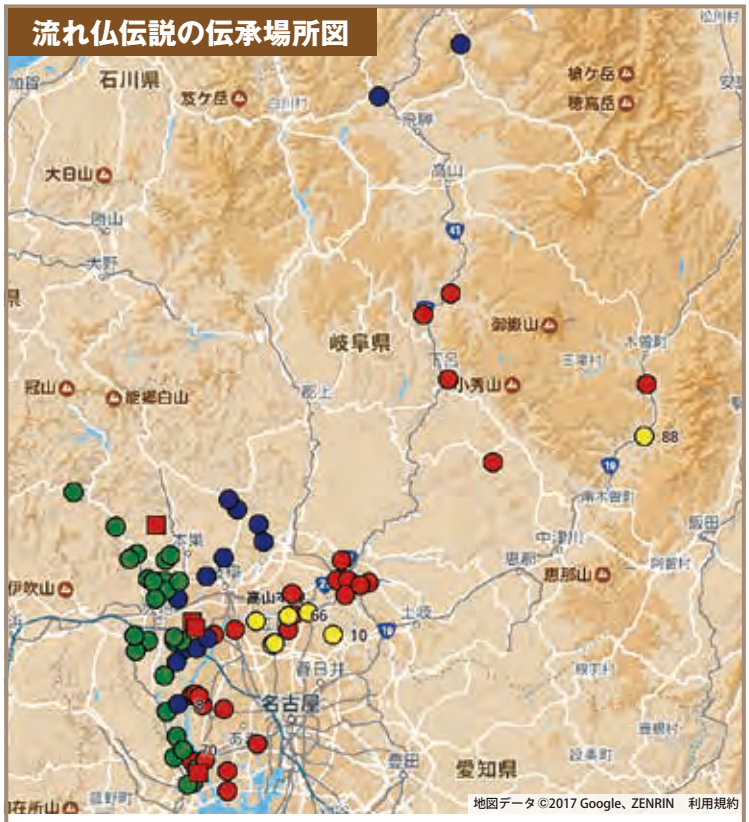
神明の弘法様（錦江閣）

(4)「本川沿い」

⑬柏森神社（丹羽郡扶桑町柏森）の拝殿右に祀られている津島様は、ツシ橋（場所不明だが、木曽川の分流川一の枝川の分流に架けられた橋）に津島の社祠が流れ着いた、あるいはツシ橋にもともと津島様が祀られていたとの伝承がある279。⑭木曽川が八叉に流れている頃の洪水で、妙見菩薩が法蓮寺（一宮市木曽川町黒田勘治西）から東の地に流れ着き、祀られた233。ご開帳は年に二回である。

柏森神社の津島様

流れ仏伝説の伝承場所図



分　類	記号
木曽川 1-1	●
長良川 1-2	●
揖斐川 1-3	●
ヤロカの大水 2-2	●
橋杭笑地蔵 3.	■

・●は、本川沿いよりも飛騨川沿いに多い。
・●は、上流域では本川沿いよりも支川に多い。なお、飛騨市の宮川と高原川も同じ記号を使用。
・●は、見事に川沿いに分布している。
・●は、大桑村須原（88号）以外、木曽川と長良川の中流域に集中。

⑮毎年二月一七日にその年の作物の出来栄えを占う「かゆつけ祭り」で知られる森地区の貴船神社（羽島市正木町森）は、昔は正木町曲利に祀られていたが、毎年の大洪水で森地区まで流され、ある年から森の神社となった115。

旧八開村（現愛西市）は、明治改修以前は長良川を併呑した木曽川に西側を、廃川となった佐屋川に東側を挟まれた地であり、木曽川と佐屋川の洪水によって神様や仏様が多く漂着している。

⑯愛西市二子町新田の地蔵さんは佐屋川の大洪水の際に流れ着いたと伝わり273、⑰享保二（一七一七）年の木曽川の洪水では、流れてきた木彫りの薬師（横流れした薬師）を給父町北部の長念寺の住職が拾い祀った273。

⑱愛西市鵜多須の「ムクリ宮」は下神明とも言われており、貞享三（一六八六）年佐屋川の出水時に流れてきた神霊を祀ったと伝えられている273。また、⑲愛西市川北町の川北神社は、慶安年間（一六四八～五一）の洪水で佐屋川用水の東堤防上で恵比須ヶ森から北東に位置する中島郡祖父江町中

法蓮寺の妙見堂に祀られている妙見菩薩

正木町の貴船神社

長念寺

牧へ流され、中牧で祀られていた伝承がある273。

日光川では、⑳愛西市勝幡町大御堂に昔あった観音堂は洪水で流され、仏像は蟹江に漂着したと伝わっている243。

庄内川では、㉑大洪水時に、鎮座した薬師如来は流出し不明になったが、円盛寺（名古屋市中川区前田西町：旧富田村前田）側に池が出来、ある主が棲むようになり、池の水は決して枯れない1。

河口部では、㉒堤が切れて出来た澪で釣りをしていると不思議な音が聞こえた。潜ると平鍬の先があった。持ち帰り、大宝神社（海部郡飛島村大宝）境内に御鍬社として祀られた263。

1－2　長良川

天正一四（一五八六）年の洪水以前、長良川は墨俣付近で木曽川に合流していたためか、木曽三川の中では一番に流れ仏が少ない。

（1）「飛騨市の宮川と高原川」

①久安年間（一一四五～五〇）に宮川の淵（掛の淵）に光る物があり、村人（飛騨市河合町角川）に「淵に沈んでいる私を救って欲しい」と夢のお告げがあった。網に金色の仏像と半鐘や乙姫の髪等が入った小箱が掛った。仏像は村に祀られていたが、いつしか忘れられ夢のお告げにより越中の寺に移り、半鐘も、日光のどこかへ移った102。

②高原川の淵で網に掛った菩薩様は、飛騨の代官の奥様が大原騒動（一七七一～八八）に巻き込まれないように袖を引いて高山への旅立ちを止めた。この「袖引き地蔵」は正眼寺（飛騨市神岡町西漆山）のお堂に祀られている39。この地蔵様は三〇年に一回の御開帳である。

現在は無住の正眼寺

（2）「本川沿い」

天正一四（一五八六）年八月に発生した木曽川の天正洪水は、古木曽川河道を現河道に大きく変えた洪水であり、天正洪水で流れ着いた以下の二つの神様は、元の村へは帰らず、漂着地で祀られている。③天正一四年の洪水で、羽島市福寿町間島からこの地に神社が流れ着いた。元々の地の人々が釣って帰ろうとしたが、動かなくて神明神社（羽島市江吉良町）で祀られる事になった121。また、④同洪水で、神社が愛知県稲沢市からこの地に流れ着いた。元の地の人々が釣って帰ろうとしたが、動かなくて神明神社（羽島市堀津町須賀中屋敷）で祀られる事になった121。

羽島市では、⑤医師であった不破家（羽島市不破一色）の者に、仏様から迎えを願う夢のお告げがあった。その仏様（薬師様）を長良川の河原で相撲に興じている子供たちの中で見つけ、薬師堂に祀った。戦前までは、毎年旧暦の一〇月一四日に、相撲大会が行われた115。

犀川沿いで、⑥犀川の洪水が引いた後に、川底に沈んでいた地蔵に犀川沿い（現在は柿畑）にお堂（瑞穂市十八条）を造り、今も地域の人が祀っている70。

掘津町の神明社

柿畑の中の流れ地蔵

（3）「右支川武儀川」

⑦洪水の後、川底でお不動さまを見つけて、網を入れて引き上げ（地名「網掛」の由来）、道端に祀った。大日大聖不動明王（山県市富永）がその時のお不動様と言われている124。⑧山県市青波の大桑城の裏にあった集落は、城と共に焼き討ちに遭った。その後川原で子どもが石仏で遊んでいるのを見つけて神社に安置したが、浮き袋代わりにしていた木仏像も御堂を建てて安置した124。

⑨河原で子供が流れて来た木像を見つけた。川上で流れた村がないか探すが分からず、祟りを恐れて一度は川に流すが戻って来た。子供と遊ぶのが好きな仏像なので広場に大日堂（関市武芸川町小知野）を建てて祀った126。なお、大日堂は平成八（一九九六）年一一月の真夜中の火災で焼失し、焼け焦げた仏像はお堂に向かって左側に祀ってある。⑩岐阜市三輪の真長寺の南側を流れる武儀川で、天文三（一五三五）年九月の洪水（中屋切れ）で流されている約四ｍの木の仏像が救い出された。この仏像は「釈迦如来坐像」と呼ばれ、真長寺の正面に祀られている46。

富永の大日大聖不動明王

関市武芸川町の大日堂

真長寺の「釈迦如来坐像」

（4）「伊自良川の左支川鳥羽川」

⑪岐阜市椿洞の上山の子安堂から流れて来た「首のない子安地蔵様」（夜泣き地蔵）が橋の土台の石垣に使われていた。橋の下の地蔵に気づく前から、この橋に来ると子供の夜泣きが止んだり、川に落ちた子が助かったりし

た。昭和五一（一九七六）年の洪水で橋もろ共流失したが、五〇m程下流で見つかり、橋（戸石川に架かる団地とつなぐ小橋）の下に祀り直された46。

長良川の右支川伊自良川で、⑫貴船神社（岐阜市木田）の社とご本尊が洪水で流された。氏子総代の夢枕にご本尊が現れ、竹薮から石のご本尊を掘り出し、祀りなおされた46。

橋の下に祀られた
「首の無い子安地蔵」

岐阜市木田の貴船神社

1－3　揖斐川

(1)「右支川の坂内川」

①七軒より数が増えると火事が発生して軒数の増える事の無い村（今は無い）で、神様が村を守ってくれないと川に流した。その神様は坂本の岩（神ケ岩）まで流れ着いたので、坂本の五社神社（揖斐郡揖斐川町坂内坂本）に祀られた60。

(2)「本流筋」

②揖斐郡揖斐川町東津汲樒平で古老が流木の中から見つけた仏像を井戸の横に祀った（他の井戸は枯れてもこの「ハマの井戸」は枯れない）。その後、村の氏神さま（津島神社）に移して安置し54、③揖斐川の川底で首から上の無いお地蔵さまを見つけ、揖斐郡揖斐川町上岡島の渡船場に祀ったが、いつの間にか、首から上も立派になり祀られている11。

(3)「右支川粕川と左支川根尾川」

④長者平（揖斐川町春日美束）の神様が揖斐郡揖斐川町黒田の河原に埋まった。黒田の人々は木彫りのご神体を掘り出して黒田のお宮に祀った12。

揖斐郡大野町は西を揖斐川に、東を根尾川に挟まれており、多くの仏が流れ着いている。⑤根尾川の川原（揖斐郡大野町稲富、旧三田畑）で石のお地蔵を見つけて、堤防の上にお堂を建てた。この地蔵は子供のよだれに効いたので「よだれ止め地蔵」、また雨も降らしてくれるので「水くれ地蔵」とも呼ばれた18。⑥大野町本庄の尼寺（智量院）の薬師堂に祀られている大きさ約七cm前後の薬師如来は、本庄の超安寺付近の水田で約四〇〇年前に見つかったものである131。また、⑦大野町には二つの白山権現が享禄三（一五三〇）年の藪川（現根尾川）洪水で流れ着いており217、一つは稲富更地の「姫宮神社」に祀られ、

智量院

大野町下磯の八幡神社に合祀された白山神社

姫宮神社

下座倉の神明神社

他の一体は、⑧白山権現様（通称「権現さん」）が昭和二七（一九五二）年に八幡神社（揖斐郡大野町下磯）に合祀されている131。⑨本巣市政田のお堂の地蔵は天保一四（一八四三）年の洪水で流され、明治の用水路改修工事（政田川）の時に掘り出された。和尚の夢枕に立ち、探してくれたら夜泣きや病気を救うと言った69。さらに、⑩根尾川が揖斐川に合流する下座倉坂口の神明神社の境内社の八幡神社は、大水で社殿が下流の村に漂着したが、元の場所に帰りたいとのお告げで戻ってきた217。

(4)「本川筋」

西を揖斐川に東を長良川に挟まれた岐阜県安八郡は、神様や仏様、さらに釣鐘も流されてきている。

⑪揖斐川左岸側に位置する安八町牧の伊富神社は四社が合祀されており、その内の一社は現瑞穂市から流れ着いている4。また、⑫安八町の牧小学校（安八郡安八町）玄関脇に祀られている金毘羅さんは、小学校の西を流れる揖斐川上流から現小学校近くの淵に流れ着いた。川上の村から探しに来て戻ったが、夢枕で牧に戻して欲しいと言われ、牧に祀られた4。

⑬洪水で寺の地蔵さまと金のちゃぼが流され、大池（昭和七年埋立）が出来た。ある時、池で網に地蔵が掛かり、祀り直された。地蔵（安八

伊富神社

牧小学校玄関側の金毘羅さん

郡安八町善光）は病が治る不思議な力があった4。⑭安八郡神戸町横井の地蔵堂の地蔵さんは、享禄三（一五三〇）年の洪水で、横井地区の北側の池田村から横井地区に流され、現在のお堂は昭和四九（一九七四）年に再建された119。

さらに流れてきた釣鐘もある。⑮今から二七〇年以上前の享保年間（一七一六～三五）、揖斐川の洪水で、釣鐘が安八郡神戸町加納の地に流れ着いた。流れ着いた鐘は戦時の供出で無くなり、村社諏訪神社東南隅の釣鐘は昭和三〇（一九五五）年に浄財で新たに作られた二代目である119。

流れ着いた二代目釣り鐘

⑯西海松（現輪之内町松内）の揖斐川堤防上にあった八幡神社が洪水で流されて、輪之内町本郷（正八幡宮）に祀られた。源義朝は野間に向かう途中、源家再興を祈願した304。（11章の1．源義朝の三川下流域での行程を参照）⑰池（北野の石仏池。養老郡養老町）を浚えたら石仏で出てきて、その石仏を細工しようとした人に熱が出た。以来子供の病気の際に地蔵を拝む132。

⑱徳蓮寺（桑名市下野代）が洪水で流された後、ある田が光っており、そこから本尊の虚空蔵菩薩が現れ、田（光田と呼ばれた）には本尊を守るように鰻（虚空蔵菩薩の使い）や鯰が沢山いた259。⑲古敷村（桑名市多度町平古古敷）の茶木原の池（今は池は無いが、大正一三年に碑を建立）が光っていたので、網を入れると蓮如聖人の画像が上がった。祀ろうとすると、上流の永寿寺を望まれたのでそちらで祀られた259。⑳天和元（一六八一）年、漁師の舟に流宮が流れ着き、桑名市太一丸の人々は堤の上に祀った。これが太一丸神明社の縁起であり、明治四一（一九〇八）年に他の神社と共に北桑名総社（三重県桑名市堤原）に合祀された55。

㉑大福田寺（桑名市大字東方）の本尊は、建仁年間（一二〇一～〇三）、桑名赤須賀の浜辺で網に掛かった香木から彫った長さ四尺七寸（一四〇㎝）の阿弥陀仏である55。

支川で、㉒南宮神社（不破郡垂井町）に祀られていた小栗栖の神が、養老郡養老町室原に流れ着いた。戻そうとしたが神の希望でこの地で小栗栖神社として祀った302。なお、㉓小栗栖神社に神様を祀った際、境内の池に棲んでいた守り神の大蛇が昇天して、小栗栖の神様と入れ替わった302。

支川の杭瀬川で、㉔杭瀬川左岸の大外羽神社（大垣市上笠字村前）鎮座の由来は種々伝えられ、「洪水の時他より流れ来り給ひて此処に神意に依り永久に留まり給ふこととなれり」等の説もある16。

大外羽神社

小栗栖神社

1-4 KISSOの流れ仏三編

海津市海津町札野一色の「山の神（八号）」23は、お宮さんが流れ着き、一度は戻すも同じ神様が二度も漂着したので、村人は「山の神」として豊作を祈願し、「遠浅神明神社と大蛇（四三号）」265の遠浅神明神社（長島町西外面、小田江神崎神社を指す）は、天文一三（一五四四）年の揖斐川の洪水で漂着した流れ宮を村人が勧進したと伝わっている。

「鎮守さまの竹やぶと清水（四七号）」23は、揖斐川右岸側の南濃町庭田村の鎮守さまが何度も流された末に左岸側の梶屋に着いている。

「光明寺流れ（六六号）」279は、山那切れの時に、山那神社（扶桑町山那）のお社が一宮の光明寺に流れ着いた話であり。多須代官所跡付近の鵜多須町上中山の薬師堂では「流れてきたお薬師さま（八二号）」273が鵜多須の中山二七軒で祭祀されている。

木曽川の左支川可児川では、舟で流されて可児市広見に流れ着いた「船着き観音（五八号）」35が祀られ、揖斐川の洪水で漂着した大日堂の大石が祀られていたが、河川改修で残された大石「大日石（七〇号）」259が祟りを起こすため、桑名市多度町南之郷のお寺に移動された。

「神明さんと洪水（七七号）」119は、揖斐川町外津汲から流れ着いた神様を外津汲の人々が迎えに来たが、「ここが良い」と動かなかったので祀られ、大正九（一九二〇）年に白山神社（安八郡神戸町田字中島）の西に移った。

河口近くでは、弥富市小島町の「小島が気に入ったお地蔵さま（七三号）」130は、漂着したお地蔵様ではないが、対岸から盗まれた地蔵が元の村へ帰らない話で、漂着した仏が元の村へ帰らない話と類似している。

網にかかった仏様二編は、長島町の「西川の八幡さま（九四号）」264は、漁師の網にかかった青紅色の石を祀って八幡宮とし、鍋田干拓地の「八穂地蔵（二五号）」297は、安政の大地震の翌安政二（一八五五）年に発生した暴風雨と高潮で流失したお地蔵さんが、明治八（一八七五）年漁師の網にかかり、地蔵堂を建立して祀った。

なお、明治改修で廃川となった大榑川沿いの旧輪中堤上に永正二（一五〇五）年創建された神明神社（輪之内町上大榑四郷）で、「増水」を連想させる「ぞうすい祭（二一号）」134が七月の海の記念日に行われており、高さ約五mの神社境内は、破堤時に村人が避難する助命壇の役割を果たしていた。

2．ヤロカの大水伝説

「ヤロカの大水」は、豪雨の中「ヤロカ、ヤロカ」と何処からか聞こえる声に、水防作業をしている村人がその声に苛立って「よこさばよこせ！」と言った途端、濁流がその地に押し寄せてくる話で、美濃加茂市太田町288や丹羽郡扶桑町など木曽川沿いの各地に伝わっている。

しかし、各地に伝わる「ヤロカの大水」伝説は、その地域を襲った多くの洪水の恐怖が語り継がれたものであり、特定の洪水を指したものではない。

2－1　「ヤロカの大水」の洪水

(1)「慶安三(一六五〇)年九月二日の洪水」

「寅年の洪水」、「枝広の洪水」と呼称されるこの洪水の記録に、「去朔日伊勢、尾張、美濃洪水大垣水退三日、流死千七百人、桑名五万石余流失、死人二百三人、内四十人余助命、尾州損毛二十万石、凡六十年来未曽有之洪水也」とある。

なお、寛政一〇(一七九八)年四月八日の洪水は、「枝広の洪水」よりも水位が六尺(一・八m)高い前代未聞の洪水であったが、「ヤロカの大水」とは呼称されていない231。

(2)「貞享四(一六八七)年八月二六日の洪水」

貞享四(一六八七)年六月と八月には加茂郡取組村(坂祝町)の中山道にまで木曽川の水が溢れる洪水が発生した49。この内、八月二六日の洪水で、木曽川で家屋一九四戸流失、死者一七人を出し、この洪水を扶桑町小淵に伝わる「ヤロカの大水」と言い伝えている231。

(3)「明治元(一八六八)年の入鹿切れ」

愛知県犬山町(犬山市)の入鹿池は香川県の満濃池の規模に次ぐわが国二番目の溜池である。

入鹿池は、村の世話役・六人衆が入鹿村から流れ出る川を堰き止める溜池築造、灌漑開発を尾張藩に願い、尾張藩の直営で着工一年後の寛永一〇(一六三三)年に完成した。川の締め切り(銚子の口)は、頑丈な底面の基礎の上に長さ一七五m、高さ二六mの大堤防(百間堤、河内堤)である。

明治元(慶応四＝一八六八)年四月終わり頃からの大雨に堤は耐えられなかった。五月一三日百間堤が切れ、入鹿池一杯に貯まった水は下流に溢れ、多大な被害を出したのである。これを明治元年の「入鹿切れ」と呼び、「ヤロカヤロカ」と声が聞こえたと伝わっている。

被害は、死者九四一人、負傷者一四七一人、被害にあった村一二三村、建物への被害は流失家屋八〇七戸、浸水家屋一一七〇九戸であった。

「入鹿切れ～天に昇った二頭の馬(一〇号)」10は、入鹿池の堤が切れた時を物語っている。

2－2　「ヤロカの大水」で流れてきた仏像

①右岸側の伊木山に激突した木曽川の濁流は左岸側丹羽郡扶桑町の山那や小淵の堤防を幾度となく破壊した。「ヤロカの大水」伝説が扶桑町小淵や江南市般若町辺りに伝わっており、上般若村や岩手村(小渕字中島)がいつの洪水か不明だが、流されて無くなった280。②貞享四(一六八七)年八月二六日の「ヤロカの大水」で、木曽川を流れてきた「やろか大神」が吉野神社(犬山市犬山西古券に祀られており208、「ヤロカの大水(一八号)」231はこの時の状況を述べている。

③道音寺(どうおんじ)(江南市大字五明)の高さ八〇cmの木造聖観音菩薩像(江南市指定文化財)は、室町風の木造で、彩色もほとんど落ち、頭部の破損や腰下での虫食いが多い241。④地蔵山公園(江南市布袋町)の弘法堂に祀られていた地蔵菩薩は「ヤロカの大水」の時に流れ着いたと伝えられていたが、大正五(一九一六)年の火災で焼けたので、土管に入れて埋め、大正八年にその上に新たに地蔵堂(小折の松岩寺が管理)を建て、石の地蔵菩薩が祀られている282。なお、⑤「男岩・女岩(八八号)」17は、川漁師の殺生を止めるため、ヤロカ仕立てで、水神が谷川の淵を土石流で埋めた話である。

やろか大神の三神を祀る吉野神社

江南市大字五明道音寺

地蔵山公園の地蔵堂のお地蔵さん

2－3　廃仏毀釈(はいぶつきしゃく)による仏

木曽川右岸の笠松町中野のお堂に石造の六地蔵尊が祀られている。この六地蔵は明治初期に発生した洪水後、河原で見つけられ、昭和一二(一九三七)年にお堂を建てて祀られた。この地蔵は、天保六(一八三五)年加茂郡東白川村越原(おつばら)の人達が祀っていたことが台座に刻まれ

た文字より判明し、明治の神仏分離・廃仏毀釈の時、舟か筏に乗せて、こっそりと川へ流されたのではないかと言い伝えられている。

なお、東白川村役場正面に建っている「四つ割の南無阿弥陀仏碑」（東白川村指定史跡）は、六地蔵尊と同様に、明治三（一八七〇）年の苗木藩による廃仏毀釈の凄まじさを今に伝えている。

天保六（一八三五）年に現上伊那郡高遠町の石工伝蔵が彫ったこの名号碑は、後の時代での復元を期したのか、伝蔵の手によって節理に従い四つに割られ、昭和一〇（一九三五）年に四つの石片が集められて再建された。

村役場正面の「四つ割の南無阿弥陀仏碑」

笠松町中野の六地蔵尊のお堂

3．川立ち地蔵と三体の橋杭笑地蔵

「川立ち地蔵の不思議な夢（三号）」137は、地蔵が常に水に浸かる地に祀られて、洪水で溺死した人々の後生を願っている話である。

橋杭から造られた橋杭笑地蔵は、墨俣町の明台寺（「橋杭笑地蔵（二七号）」250）、羽島市小熊町の一乗寺さらに揖斐川町谷汲徳積の谷汲山華厳寺の三ヶ所にある。それぞれのお地蔵さんについて述べよう。

なお、よく似た話として京都府八幡市橋本平野山の講田寺には、淀川の架橋時に人柱となった父親の菩提を弔うため、尼となった娘が朽ちた橋の杭で彫って供養した地蔵尊が「笑地蔵」として信仰されている。

橋杭笑地蔵（『橋杭笑地蔵尊を訪ねて』墨俣町郷土史研究会より）

3－1　明台寺の地蔵

①大垣市墨俣町の明台寺に安置されている地蔵の名前の由来については250、京都から関東へ下向の勅使が、村人から橋杭から作った地蔵の霊験を聞き、「朽残る真砂の下の橋はしら　又道かえて人わたすなり」と歌を謡った。これを聞いた地蔵が微笑んだので、以来橋杭笑地蔵と言われていると述べている。この橋杭笑地蔵は四〇年に一回の御開帳である。

墨俣川合戦の絵（部分、一乗寺蔵）

3－2　一乗寺と慈恩寺の地蔵

②羽島市小熊町の一乗寺は弘仁一〇（八一九）年弘法大師（空海）の開基で、大師自ら橋杭で延命地蔵菩薩を彫り、大垣市墨俣町の明台寺と同じ和歌を詠んでいる。

養和元（一一八一）年の源平墨俣川の合戦で、右岸墨俣側の平氏と対岸一乗寺付近の源氏が戦った。この戦いの最中、僧が橋杭笑地蔵を持って逃げる姿が絵（一乗寺蔵）に描かれている。

時を経て、この菩薩を信仰した源頼朝は二度にわたって一乗寺本堂を建築し、信長は永禄一一（一五六八）年にこの地蔵を慈恩寺（岐阜市大門町）に移し、地名を羽島と同じ小熊町とした。

なお、一時衰えた一乗寺を万治元（一六五八）年に江西和尚が臨済宗妙心寺派の寺として開山し、慈覚大師が彫った地蔵菩薩を祀っている。

慈恩寺の橋杭笑地蔵

3－3　谷汲山の地蔵

③西国第三十三満願霊場の谷汲山華厳寺（揖斐川町谷汲）の客殿内仏の本尊が「笑地蔵尊」である。以前に発行された「谷汲山のしおり」に「笑地蔵尊」が載っていたが、しおりは現在発行されていない。

谷汲の笑地蔵
（『橋杭笑地蔵尊を訪ねて』より）

治山治水利水伝説

CONTENTS

1．蛇抜け
1－1　与川渡しのお地蔵様伝説
1－2　伊勢小屋沢の蛇抜け
1－3　蛇抜け伝説
2．堤防
2－1　堤防伝説
2－2　KISSOの堤防の伝説七編
3．用水路
3－1　慣行慣例水利権
3－2　水利権にまつわる「神の審判」
3－3　用水路の伝説
3－4　KISSOの用水路二編

大蛇は山に千年、海に千年（海山千年）修行すると、昇天して竜になると信じられており、山から海へ大蛇が移動する際に発生する土石流を「蛇抜け」と名付けたようである。

本章の第一節で蛇抜けについて述べた後、第二節で人々の暮らしを守った堤防、第三節で用水路に関する伝説に触れよう。

1．蛇抜け

木曽郡南木曽町は花崗岩地帯である。表層部の花崗岩は、温度変化や地下水の浸透など物理的・科学的な作用で風化が進行し、砂状になりやすい。こうして砂状となった風化花崗岩は「真砂土」と呼ばれ、粘着力が弱く、水分を含んで飽和状態になると斜面の崩壊が発生しやすい。

南木曽町には七ヶ所に「蛇抜け」の名がついた沢があり、多くの蛇抜け（土石流）が発生したことを現している。

南木曽の土石流の例として、与川渡しのお地蔵様伝説と悲しめる乙女の像について触れる。

南木曽で7ヶ所の「蛇抜け」名の沢

1－1　与川渡しのお地蔵様伝説

国道一九号で南木曽商店街を通り抜け、木曽川左岸の支川・与川に沿って急坂を登るとすぐの与川発電所の側に「与川渡しのお地蔵様」が祀ってある。

弘化元（一八四四）年五月二七日、尾張藩の用材を伐採中だった与川中野沢で大蛇抜け（山津波、土石流）が発生した。杣小屋三棟、日庸小屋四棟、会所一棟が一瞬にして山津波に呑み込まれ、杣や日傭九五人（一一四人、一〇六人とも伝わる）が流された。

この犠牲者たちは、おもに近郷の出身者であった。尾張藩は約四〇両で石地蔵を建て、弘化二年二月二六・二七日に供養費として約三〇両を費やしている。

与川渡しのお地蔵様

この災害は、尾張藩の強引な木材伐採が山の保水力と耐浸食性を低下させた結果、豪雨によって土石流が発生したことを今に伝えるものである。

この災害も「ヤロカの大水」として木曽川流域で語り継がれているが、「ヤロカの大水」仕立ての他に、「白蛇のお告げ（三五号）」38のように「白蛇」やあるいは「白髭の老人」が土石流発生を告げる話、さらに、与川から木材を伐り出していると、夜中に大水が出ると声が聞こえたが、無視していたら大水が出た。これは、イケジキの沼の蛇が抜けたからで、杣人が大勢死んだので、地蔵が祀られた266、とも伝わっている。

（1）「与川の地蔵以前」

笹本86によると、勘定吟味役で旗本の川路聖謨は、天保九（一八三八）年四月、焼失した江戸城西の丸の再建のため、尾張領の裏木曽の井出小路山（一八〇六m）で尾張藩が献納する木材の伐採指揮を執った。ところが、伐採地で蛇抜けや火災など各種の異変が生じたため、天保一一年に川路は自費一〇両を費やして高さ八〇cm程の地蔵を建立している。

さらに将軍家慶の命を受け、天保一〇年三月に亡くなった第一一代尾張藩主徳川斉温の跡を継いだ斉荘も山の神に崇られていると考えていた尾張藩は、同一四年に中津川市に護山神社を創建している。

つまり、弘化元年の与川の蛇抜けに際し、尾張藩は藩主らに井出小路山での伐採時のような異変が及ばないことを願い、

護山神社

地蔵を建立したのであろう。

1-2 伊勢小屋沢の蛇抜け

昭和二八（一九五三）年七月、読書中学校（南木曽町）の上の伊勢小屋沢から発生した土石流は、職員住宅にいた同校長の幼い長男・長女と他の教諭の妻の命を奪った65。

この災害で亡くなった幼い兄弟を慰める「悲しめる乙女の像-蛇抜けの碑-」の台座には、土石流発生についての言い伝え（俚諺）が刻みこまれている。

悲しめる乙女の像 - 蛇抜けの碑 -

「白い雨が降るとぬける／尾先　谷口　宮の前／雨に風が加わると危ない／長雨後　谷の水が急に止まったらぬける／蛇ぬけの水は黒い／蛇ぬけの前にはきな臭い匂いがする」

これらの意味は次のようである。

「白い雨」は水しぶきで辺り一面白っぽくなり、視界が悪くなる五〇～八〇㎜の雨である。「尾先　谷口」つまり尾根の先や谷の出口は、古くから土石流が襲いやすいところ。「宮の前」は土石流には関係なく、お宮の前に家を建てると、お祭などの際に多くの知り合いが家に寄るので費用が掛かると洒落て述べている。「谷の水が急に止まったらぬける」は、土石や流木が渓流や沢を塞いで一時的に水が止まるが、止められた水が増加すると土石や流木による堰が破壊され、土石流が発生する。「蛇ぬけの水は黒い」は、多量の土砂が流水とともに流下するから黒くなる。「きな臭い匂いがする」は、岩石と一緒に流木が流出する際、摩擦で生じる発熱現象を表している。

1-3 蛇抜け伝説

各地の蛇抜けにまつわる話を見ていこう。

①大蛇は海に千年、山に千年修行すると、昇天して竜になる。駒ケ岳（木曽郡上松町荻原）の雄雌二匹の大蛇が昇天するため、駒ケ岳の一角を蛇抜けして滑川を下り、さらに木曽川を下って天に昇天した202。②大蛇が木曽川を下って海での修行を望むが、蛙が邪魔をするので、洪水にして蛙（蛙石。木曽郡上松町正島町）の目を晦ましてから海へ出た202。

③柏原の釜ケ洞（飛騨市神岡町柏原）の頂上辺りの池に棲む大蛇が、池の堰を切って柏原に洪水を起して山を下り、富山の海へ出ようとしていた。これを察知した水月庵（柏原）の千手観音が村の男を使い大蛇を退治した。その時焼き殺したので、そこの石は焦げている39。④池が原（洞谷川の源）に住む大蛇は、蛇淵（飛騨市宮川町塩屋地内）と行き来して暮らしていたが、地震で通路が塞がったので、場所を移すことにした。大蛇は、洞村（宮川町洞）では娘の姿で通り過ぎようとしたが、大蛇の姿

COLUMN

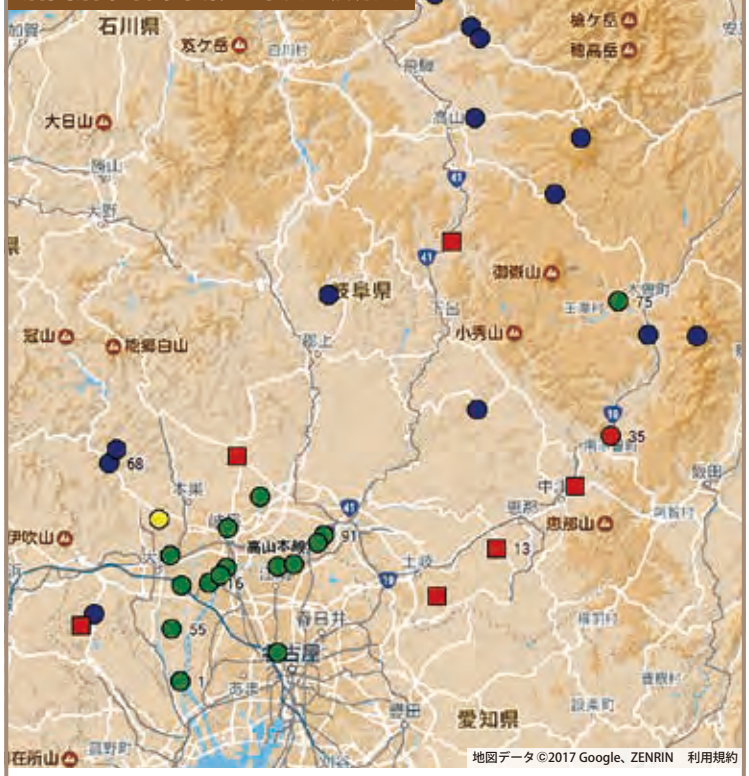
［かわず石］

かわず石は出水規模を予測する水計石であった。

大雨が降ると、増水する川面と水に浸かるかわず石を見比べ、これからやって来る洪水の規模を予測した。堤防が不備な頃、かわず石が水中に没すると、正島一帯も水没した。

蛙岩

治山治水利水伝説の伝承場所図



分　類	記号
与川渡し 1-1	●
蛇抜け 1-2	●
堤防 2-1	●
水利権 3-2	●
用水路 3-3	■

・●は、地点を明示。
・●は、高山・飛騨市に集中し、揖斐川筋では蛇ではなく「ホラ貝」が抜けている。
・●は、揖斐・長良川沿いよりも木曽川本川沿いに多い。
・●地点を明示。
・■は、三川の支川や谷川沿いに造られている。

を見た宿の亭主に、宮川から海へ行く予定を話した。翌朝、宮川の氾濫とともに大蛇は消えた。蛇淵は大正三（一九一四）年八月の洪水で面影は無くなった102。

⑤黒ぶち（高山市上宝村町双六）に棲む雌の大蛇が恋をして、雄のいる池ノ尾山（上宝町金木戸）へ蛇抜け（移動）したがっていたが、両全寺（飛騨市神岡町麻生野）に来た高僧が娘に化けた蛇に蛇抜けを止めるように説得した。翌日、大蛇の死体が川に浮いていた39。

両全寺

⑥日和田集落（高山市高根町）中央の湿地帯に竜神の化身の白蛇が棲んでいた。ある大雨の時、土抜け（蛇抜け）した。次の雨の時、修行を積んだ行者が、「抜けない」ように災い除けの逆杭を打ったので、以来、抜けなくなった256。⑦蛇抜谷（高山市丹生川町坊方）の大きな池に鴨がいた。殿さまが百姓に捕まえるように命じたが、うるさいので堤を切り、蛇が抜けて水が無くなったと言った269。⑧大丹生池（高山市丹生川町久手）の主の大蛇に子が増え、海に下る必要が生じた。日本海側なら、高原川が大洪水で本郷平（高山市上宝町本郷）まで水に浸かり、八賀方面だと、丹生川が洪水となり、千光寺（高山市丹生川町下保）まで水に浸かる、と噂して恐れた104。

⑨海・川・山で各千年修行した竜が平沢山（郡上市明宝寒水）のヌケドから昇天（蛇抜け）する時に、姿を見せる代わりに鱗を一枚置いていった295。

⑩神土西洞（加茂郡東白川村）の本洞の「池ガ尾」という尾根に昔池があり蛇が棲んでいた。ある時、山で娘が蛇に呑まれたので、親が鉄砲の名人に助けを求め、名人は鉄砲で大蛇を撃った。尾根からの水は数日赤く染まり、数日後に大蛇は大雨を降らせて木曽山方面に逃げ、地名が蛇抜けとなった274。

⑪小屋ケ谷（大垣市上石津町住鹿）奥の池に、山に千年、里に千年、海に千年棲むと天に昇ると言われる「ホラ貝」注）が住んでいて、ある時、池を破り、濁流に乗って海に出た37。

注）『久瀬村史』は、「ホラ貝は、全国的に伝説に現れるが、何を意味するかよく分からない。あるいは、村内各地の石灰岩に含まれる古生代の化石で、現在のホラ貝に似た生物・ベレロフォンがこの伝説を支えているのかもしれない」と述べている。

大ほら貝が三田倉山の谷を下った「大ほら貝と白抜け（六八号）」54と全く同じ話として、揖斐川右岸側の三田倉から左岸側へ約四km離れた小津（揖斐郡揖斐川町小津）のホラン谷でも、⑫大きなホラ貝が住んでいた。ある日、山崩れが起きてホラ貝は海に帰った238、と伝えている。

2・堤防

田畑や生命財産を守る堤防や貴重な灌漑用水を供給する用水路は、人々の暮らしを支える大切な施設である。

2－1　堤防伝説

①盗んだ物を貧乏な人に分け与える義賊（巳之助）が阿木川の榎（恵那市大井町）に縛られて死んだが、祟りで川が荒れるので社を造り祀った。堤防の工事でも榎を切られず残した118。②小田井村（名古屋市西区小田井）の人々は、しばしば庄内川左岸側の名古屋城を守るために、右岸側の自村の堤防を切るように命ぜられた。そこで、自村を害しないように「仕事をしている振りをした」ので、サボタージュする人を小田井人足と言う248。③木曽川が江南市草井で切れた時に出来た池（江南市小杁町鴨ケ池）に尾の切れた大蛇が棲んでいると言われていた。この池（鴨ケ池）の蛙が老婆の身なりを馬鹿にした241。④主（河

巳之助の社

COLUMN

［中屋切れ］

天文三（一五三四）年九月の大洪水は「天文の洪水」と呼ばれている。濁流は山県郡中屋村（現岐阜市三輪中屋）から陸地を押し切り（中屋切れ）、関市の戸田村や保戸島を貫流して、岐阜市芥見で津保川と合流。その後、岐阜市長良を流れ、早田馬場の取水口を破壊して岐阜市木田に流れ込む「新川」となり、伊自良川と合流したのである。このときできた新川が、「井川」と呼ばれた今の長良川本流で、この新川出現以前に、現長良橋から西流していた川が「古川」で、この洪水で長良川は北の古川と南の井川の二本になった。

［山那切れ］

南西方向に流れてきた木曽川が犬山西部付近から西向きに流れを変えるため、湾曲部の外側にあたる扶桑町山那や小淵一帯は流れが強くあたり堤防が決壊しやすい場所で、宝亀六（七七五）年、木曽川の河道が変わった天正一四（一五八五）年の洪水、慶長元（一五九六）年、お囲堤の築造の要因と言われる慶長一二（一六〇七）年の洪水などがある。

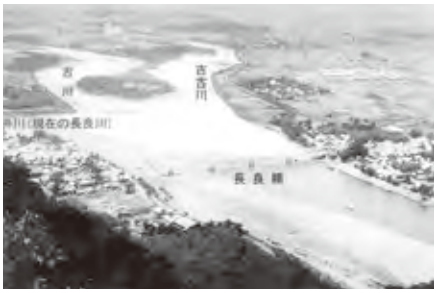
扶桑町山那地区には「山那切れ」と呼ばれる堤防決壊にまつわる伝承が多く残っている。

童かすっぽん）が住む笠松駅（羽島郡笠松町西金池町）の東北の埋め立てられた池は、一三〇〇年前の洪水で出来たが、慶応三（一八六七）年五月の洪水で切れて大池（三一〇〇㎡）となった223。

⑤昔、武儀川と長良が岐阜市三輪で合流し西へ流れていたが、天文三（一五三四）年に中屋の堤防が切れ流路変わった。この時、死者一二〇〇人で牛馬二〇〇〇頭が流された46。⑥御囲い堤の出来る前、山那（扶桑町山那地区）の堤防は度々切れた（山那切れ）280。

長良橋下流右岸堤防沿いに祀られている岐阜市早田東町の水難厄除けの「除水延命地蔵尊」は、⑦川底で光る石を拾い上げ、馬場堤（現在地）に安置した。明治二六（一八九三）年の大洪水で、壊れようとする堤をこの石が防ぎ、破堤しなった118、と伝わっている。

除水延命地蔵尊



3本の長良川。（「長良川デジタル百科事典」より）

2－2　KISSOの堤防の伝説七編

「燈明さん祭り（一号）」23は、燈明が切れかけた堤防の隙間に落ちて破堤を免れた話で、破堤を村人に予告した「蛇池と一本松（一四号）」205は、「入方のお墓から一五〇m北に堤防があり、そのそばの大きな松にツツジの葉がいっぱい出ていたので、不思議に思って通ったら、九月に堤防が切れ、松の木は池の中に入った。それから蛇池と呼んでお祭りがあった」との『安八町史』からの創作であろう。

水争いを記した「かき上げ堤と半兵衛どん（一六号）」121のかき上げ堤は、羽島市正木町曲利の交差点付近であり、交差点側の堤外神社とも呼ばれる貴船神社の南約一〇〇mに貴布禰神社（堤内神社）がある。なお、正木町の輪中堤は昭和三〇（一九五五）年代初頭に取り壊され、現在は残っていない。

「猿尾のつつみ（一二号）」27は、岡田将監善同が笠松の木曽川右岸に設けた将監猿尾の謂れを述べており、「観音寺の和尚の祈祷（五五号）」277は、大きく流路を変えた天正一四（一五八六）年以前の古木曽川が勝村（現海津市平田町勝賀）地点で洪水を頻発しており、大博荘勝村観音寺が何時頃廃絶したか不明で、その寺跡らしきものも皆無であるが、「僧宥恵が堤に入眼したので堤防がようやく完成した」と記す『平田町史』を昔話風に書き改めたものである。

なお、以下の二編は堤防と余り関係ないが、「川繋がり」でここに入れた。

「衣掛の三角石（七五号）」286は、岩が点在する王滝川の三角形の岩について述べており、例えば関ヶ原町青坂神社にある家康の腰掛石や八百津町大仙寺にある宮本武蔵の座禅石のように各地に各種の岩が散在している。

「お富・与十松の夫婦松（九一号）」61は、今は運休になった木曽川ライン下りの奇岩に付けられた名の由来である。なお、お富と与十松のよく似た話として、「お富岩」－に、落魄した栗栖村の名主の娘お富は、恋人の与曽松に助けられて嫌な侍から逃げる途中、二人とも木曽川で亡くなった。その後、ローレライの伝説のようにお富の声に魅せられて船が難破するため、寂光上人が供養して唱声も無くなったと伝えている。

3・用水路

3－1　慣行慣例水利権

水利権は公水、とくに河川からの水を潅漑・発電・上水道などのために継続的、独占的に使用する権利で、行政官庁に申請して許可を得る水利権と、慣行として昔から潅漑用水等に使用してきた慣行水利権とがある。

慣行水利権は「優先劣後」と言われ、先に沢や谷から取水した人や村に権利が発生し、後発の人や村は先の権利を侵さない範囲内で権利が認められる。

用水路の水には、集落の単位で開発した村人が無償で使える用水と、個人が開発した用水に使用者が水代金を支払う用水とがあった。元々水利権は領主に帰属しており、個人の開削費用を回収するために無制限でない水代金の徴収が認められたが、永遠にその権利が保障されるものではなく、年と共に、村人全員が所有する水利権へと移行していった例も多々ある。

門扉が6対4に開いている席田・真桑用水の山口の取水池

3－2　水利権にまつわる「神の審判」

本巣市山口で根尾川を水源とする席田と真桑の両用水路は室町時代頃から水利権でもめてきて、寛永一八（一六四一）年に席田六対真桑四に決定された。この決定に対して次のように言い伝えられている。

国の重要無形民俗文化財の真桑人形浄瑠璃は、江戸表へ私財を費やして出向いた庄屋福田源七郎に感謝して、村人が上演した操り人形芝居「義農源七郎」に始

まると伝わる。一方、席田側では、水争いに悩んだ幕府は両代表者のどちらかが早く火柱に抱き付いた方が用水六割の権利を得るとし、席田の小右衛門がいち早く火柱に抱き付き、席田が六割となった、と伝わっている。

争い事を神の意志によって判定する手段に盟神探湯が行われた。当事者が神に宣誓（盟神）した後、熱湯の入った釜の中の石を探って（探湯）、火傷をせずに石を取り出した者を正しいとした。

忠蔵を祀る井神様

①江戸時代、揖斐川左岸の衣斐用水路が右岸側の池田側の取水路と取水量でもめた際、衣斐用水側の名主三間忠蔵が盟神探湯を行い、熱湯から一振りの斧を取り出し、この時以来、「取水量は折半」の約束は守られた。この時の火傷で死んだ忠蔵は、井神様（揖斐郡大野町南領家の実相院西側）に祀られたが、一説には責任をとって切腹した217とも伝わる。

3－3　用水路の伝説

用水路は各地に数多く設置されているが、用水路建設に関する伝説は少ないようである。

①下呂市小坂町大島の五右衛門は洞谷の水を利用して用水路（五右衛門用水路）を造ったが、吝嗇なために年貢を納めず役人に捕まり、家も絶えたが、今も屋敷跡は五右衛門屋敷の名を残し、用水路は多くの田を養っている218。②日照りや洪水に苦しむ村（土岐市駄知町南山）のために、今井金兵衛が三つの溜池築造を計画した。村人と三つの池を完成させ、現在も「三の池」が残っている83。③鎌倉時代（一一八五～一三三三）に、兄弟は釜沢川（中津川市落合釜沢）の取水口から中津川市落合の集落まで二本の用水路を掘り、兄は過労で斃れ、弟は水路完成時に地頭によってどこかへ連れ去られた。その用水は兄の井・弟の井（中用水の基礎）と呼ばれた219。④山県市の相原で開墾を始めた一族のために、修行者が灌漑用水（野久尾用水）を通す隧道工事を指揮し、難工事の末に約四〇間（七五ｍ）の隧道が完成した124。

3－4　KISSOの用水路二編

「深瀬用水と水争い（一三号）」214は、深瀬（恵那市三郷町佐々良木）とその上流の上平の集落間発生した水争いで、「弥太郎用水（四一号）」37は、弥太郎（大垣市上石津西山）が用水を築き水不足を解消したが、猪害による三年の無年貢金を横領し、村を追い出されたが、死後許され裏山に葬られた話である。

第9章 人柱伝説

CONTENTS

1．人柱
1－1　築城での人柱
1－2　架橋の人柱
1－3　築堤での人柱
2．生贄
3．KISSOの人柱伝説四編

1．人柱

河神に人身を捧げた伝説は古くから伝わっている。

『日本書紀』の茨田堤伝説では、仁徳天皇は工事難所の二ケ所を完成させるために、夢に現れた「河神に祀る生贄」として河内の人・茨田連衫子と武蔵の人・強頸の二人を選んだ。衫子は機智によって死を免れ、強頸は泣き悲しみながら入水して堤防工事が完成した。

現在の寝屋川市太間が「衫子の断間（切れ所）」、大阪市旭区千林が「強頸の断間」に当たるとする伝承がある。京阪電車大和田駅の東北にある堤根神社の本殿の裏には、茨田堤の跡と推定される堤防の一部が現存している。

日本最古の築堤「茨田堤」（堤根神社HPより）

六車106は上記の茨田堤伝説など「記紀」の編纂された時代には、人を川に埋める行為は河神の祟りを鎮めるための供養であり、「人柱」という語彙は用いられなかったと述べている。

笹本79は古代から中世にかけて、災害は神がもたらすものであるから、その神の意に従って神を祀り鎮めるという供応に、神に選ばれた人間（稚児・娘や宗教者、横継ぎが当った着物を着ているなど特別な印を持つ者）が人柱になったと述べている。なお、六車は中世以降の伝説では川を支配している神の存在が薄くなり、普請の責任者や庄屋、言い出した人物が進んで人柱になることは、神に選ばれたものと言う意識ではなく、主体的な自己犠牲であり、構造物の土台として埋められた「人柱」が構造物の守り神として祀られるようになったと述べている。

1－1　築城での人柱

①遠藤常友（一六二八～七六）の時代、郡上八幡城（郡上市八幡町柳町）の天守台の石垣に神路村（郡上市大和町神路）のおよしが人柱にされ、娘の泣き声が聞こえた118。また一説には、常友は籠だけ埋め、娘を和良方面に逃がしたとも言われている。およしは善光寺（八幡町柳町）と秋葉三尺坊（八幡町柳町）に祀られている。

郡上八幡城

なお、人柱ではないが、八幡城の修理の際、②九〇貫（約三四〇kg）余りの石を背負って城山の坂を登る赤髭作兵衛（大和町剣の力持ち）を立たせたまま、奉行が石に褒辞を書き、作兵衛は力尽き倒れた。その石は今も城山にある301。

善光寺のおよし観音堂
（守城院釋芳證大姉位）

③応永年間（一三九四～一四二七）、篠脇城城主が郡上市白鳥町二日町下田に山城を築く際、城下の清らかな娘と立派な男を人柱にした。二人の生まれ変わりの桧が城跡に茂っている247。④天正七（一五七二）年の松倉城（高山市西之一色町）の築城時、農家の一二・三歳の娘小糸が人柱にされた102。⑤大垣城（大垣市郭町）の天守閣築造の際、年老いた山伏（あるいは旅の六部）を土壁の中に生埋めにした16。

1－2　架橋の人柱

①木曽郡王滝村崩越の貧しい娘が小豆を盗んだ罰に人柱として、大岩橋（王滝村下条）の工事前にあった大岩の穴に埋められた266。②堀川に架かる七つの橋の中で最も海に近い尾頭橋（名古屋市中川区）が頻繁に水害被害に遭うため、旅僧が水神様の祟りを鎮めるために自ら人柱になっている。金山駅南の畑中地蔵（熱田区花町一丁目）の敷地内に、「七橋供養碑」が保存されている113。

畑中地蔵敷地内の「七橋供養碑」

1－3　築堤での人柱

①荒城川（高山市国府町鶴巣）の取水口（井の口の堰）の修築は難工事で、村の重役六人の内一人が人柱になることに決まるが、一七歳の若者（藤十郎）が替わって人柱になり、取水口が完成した100。②各務原市前渡は木曽川の洪水に悩まされていると、川の主が庄屋に三人の娘を人柱に差し出せと言った。泣く泣く人柱をたてると堤防が切れな

くなった25。③慶長一五（一六一〇）年決壊した加賀野井村の堤防からの濁流を止めるため、定七が石を満載した舟と共に濁流に沈み、被害を小さくした「定七の宮」。なお一宮市立朝日西小学校付近（一宮市上祖父江字高須賀）はこの破堤で長さ一km程の砂山・高須賀（たかすか）山が出来上がった5。④宮田の神明裏の二重堤防（江南市宮田神明町）の修築の時、六部（巡礼僧、修験者、托鉢僧）を捕えて人柱にした。進んでの身代りかもしれない241。⑤忠兵衛が私財を投げ打って猿尾（忠兵衛猿尾。江南市鹿子島町（かのこじまちょう））を構築したが、濁流に破壊されるので、忠兵衛が人柱になると、破壊されなくなった1。⑥一宮市浅井町極楽寺（地名）では六助が人柱になり、今の八幡神社（極楽寺郷内）を祀るもととなった231。⑦一宮市北方大日の弥八大明神も人柱伝説を伝えている231。

人柱藤十郎の碑

⑧慶安三（一六五〇）年の美濃大洪水（寅の洪水。ヤロカの大水）で決壊した霞間ヶ谷（かまがたに）（揖斐郡池田町藤代）の右岸側の復旧工事の際、若者（市助）が現れ、承応二（一六五三）年に谷の破堤地に石堤を完成させた。しかし大垣藩は対岸の尾張藩に気がねして注意を行い、若者は皆に申し訳ないと滝壺に身を投げた。石堤は村を守り、市助宮という祠を建てた206。

朝日西小学校前の緩い坂道

また、破堤に関して、⑨盲目の男を呂久の渡（小簾紅園、瑞穂市呂久）に立たせ　増水を知らせる太鼓を敲かせた。村人は助かったがその男は太鼓を抱いた遺体で上がった118。⑩村人の役に立ちたいと思ったお婆さんが、太鼓で洪水の見張りをした。太鼓の激しい音で、破堤を知った村人は逃げ、お婆さんの家の跡に大きな池（大垣市大島町）が出来た。その後、雨が降りそうになると、池の水が濁り太鼓の音がしたが、埋め立てられた16。

⑪庄内川の氾濫に苦しめられていた村は、明応三（一四九四）年に一五歳の少女を人柱として、箱に入れて川底に沈めた。少女のために、薬師如来を現地に安置し、江戸時代中頃に観音寺（春日井市松河戸町）に移した225。

宝暦治水に関する築堤伝説として、⑫大藪洗堰工事（安八郡輪之内町大藪）に際して籠作り名人徳兵衛が籠作りを引き受けたが、薩摩に手助けした罪に問われ、父は自害し、娘お房も大榑川に飛び込んで死んだ303。⑬円楽寺（輪之内町大藪）に祀られている舛屋伊兵衛は大榑川の難工事が進捗するように自ら大榑川の人柱となった112。⑭舛屋伊兵衛の娘お里は、父が人柱になったことを知って、お里は言葉が出なくなった。ある日、雉の声で

市助宮

人柱伝説の伝承場所図

分　類	記号
築城 1-1	●
架橋 1-2	●
築堤 1-3	●
生贄 2.	●

・●は、木曽川筋では見られない。
・●は、サンプル数が２例と極めて少ない。
・●は、三川中流域から下流域に集中し、木曽川筋に多い。
・●は、飛騨市宮川町の類話（４例）が重なっている。

我に返えり、「口ゆえに父は長良の人柱　雉も鳴かずば撃たれまい」と言った42。本堂寺（大垣市上石津町馬瀬）に舛屋伊兵衛顕彰碑がある。

「雉も鳴かずば撃たれまい」と言う喩は、南北朝（一三三六～九一）中期に成立した『神道集』に、淀川に架ける長柄橋に苦労している時、人柱に適した人物の特徴を述べた男がまさにその服装をしており、人柱にされた。悲しんだ妻は「物言へば父は長柄の橋柱　鳴かずば雉も捉えざらまし」という歌を残して淀川に身を投じた」と書かれている。

内容は同じで、長柄橋が長良橋（岐阜市長良）に代わり、⑮物を言わないお嫁さんに訳を尋ねると「長良橋のために人柱を」と言った父が人柱となり、父が「雉も鳴かずば撃たれまい。余分なことは喋らないように」と言われたと話した60。

2．生贄

追われて逃げる際、女の恨みが帯にのり移り、ついに生贄を求めるようになった。

①西忍（飛騨市宮川町）の城主の妻は、年貢の厳しい取り立てに怒った村人に危険を察し、帯に呪いを架けて埋めて逃げたが殺された（一説では、帯が解けて大蛇となり「あわらの池」に飛び込み、池は年々大きく（約一〇ha）なった102）。埋まっていた呪いの帯は大蛇となり、毎年生贄を望んだ。針を蒟蒻に仕込んだ娘は大蛇に食べられたが、針が大蛇に刺さって死んだ47。②大きな池の大蛇は毎年一六歳の娘を生贄に望んだ。娘は針を仕込んだ蒟蒻を大蛇に食わせて退治した。それまでの人身御供にされた娘たちの冥福を祈って観音寺（宮川町西忍。現在無住）で一年おきに春の彼岸に犠牲者の供養をしている290。さらに後日談として、③ある人が観音寺に泊まったとき、白衣妙齢の夫人が部屋（現在本堂の一部に改築）に入ってきて、無言・無表情にその人の顔を眺めた後、静かに立ち去った。犠牲になった娘たちの霊が集まると噂し合った290。また、④西忍に伝わる「おとめ供養」の一説として、観音寺の開祖の高僧がこの地で加持祈祷すると、大蛇が堤を壊し、神通川へ抜けた。その跡が今も池から川まで一条の凹地として残っている102とも言う。

昭和11年に建てられた元「あわらの池」前の「人身御供池遺跡」の碑

他の生贄伝説として、⑤毎年一人の娘が池に住む大蛇の生贄にされた。日本武尊が伊吹山からの帰りにこの事を知り、大蛇を退治したら村が崇られたので、神霊神社（御霊神社、海津市平田町者結）に祀った。なお、海津町松之木、同瀬古、同成戸にも同じ蛇に崇られたため、同一祭神で同名神社がある96。

生贄ではないが、帯に女性の恨みが籠り大蛇となった話もある。

⑥武者の一団の奥方が、恨みをもって帯を投げると大蛇になり、一帯が大きな池となった（帯が平。下呂市萩原町古関）。日照りの際に、この池の水を引く工事をしたところ、大蛇は怒り池底より益田川（現飛騨川）の淵（蛇魔が渕、今はちゃがま渕）まで抜けていった97。⑦烏峰城（金山城。可児市兼山字古城山）城主が謀殺され、寵愛の女が城の井戸に黒い帯を締めて身投げした。その後、黒蛇が現れたので、天守のあった場所に烏竜神社を祀った227が、現在は芝生広場トイレ西側に移っている。

烏龍神社

3．KISSOの人柱伝説四編

「おくわ様伝説（六号）」46は、岐阜市長良雄総の娘おくわが、村人に望まれて長良川堤防の人柱となった話で、長良雄総地区の桜堤に祠が祀られている。

「大池の人柱（一一号）」23は、文化一二（一八一五）年六月二八日に破堤した長良川の大榑川への分流点勝村（平田町勝賀）の修復工事は容易ではなく、ついに伊藤佐平次は自ら人柱になり、その後工事は完成した。村人は伊藤を祀る小祠若宮神社を建て崇めた。昭和になって伊藤に関する資料が見つかり、昭和一四（一九三九）年一〇月に遺徳碑を神明神社に建てた。

なお、大池については、①子供が行方不明となり、短刀を持って大池（海津市平田町勝賀）に潜り、短刀を振り回すと、竜は刀を嫌うので、池の底に埋まった子供は水面に持ち上げられた。この刀は白竜神社に祀られた47。

今から四〇年ほど前に大池の埋立の話をしていると、②夢枕に竜神が現れ、「三代の主が棲んでいるので、狭くなったのでこれ以上狭くするな」と言い、埋め立ては中止になった47。

また、③大池を埋め立てようとすると嵐が起るので、怒りを鎮めるために畔に社を建てた。後に、国から村の社をまとめるように指示され、合祀したが、大池の神白蛇が元の場所に戻りたいと村人に崇ったので、元に戻すと収まった107。なお、昭和五一（一九七六）年の安八水害の後、国の事業で大池は半分埋め立てられた。

「与三の火（四八号）」22は、お囲堤建設に際しての小信川築止難工事を見た念仏行者与三兵衛が慶長一六（一六一一）年盆の最中に起の濁流に人柱として沈んだ話である。

なお、「石引神社と大垣城の長刀石（一二号）」16は、人柱伝説ではないが「城の築造」に関わるので本章に入れた。内容は、赤坂で切り出した巨石で大垣城の石垣を造る際、大垣城藩主松平定綱が長刀の鞘を払って叱咤激励し、無事「長刀岩」を大垣城に運んでいる。

CONTENTS

1．岩魚
1－1 岩魚と団子
1－2 毒汁（「ね」）流し
2．他の魚
2－1 大きな魚
2－2 片目と神の使いの魚
2－3 その他
2－4 KISSOの魚伝説五編
3．獣の話
3－1 キツネについて
3－2 獣が化けた話
3－3 KISSOの狐三編

本章第一、二節では、谷川の魚（主に岩魚）や主に下流部で伝わった片目の魚などの伝説に触れ、第三節で、狐等の獣に関する伝説を取り上げている。

1．岩魚

サケ目サケ科イワナ属のイワナ（岩魚）は、年間を通じて水温一五度以下の深山幽谷に棲み、総じて獰猛かつ雑食性で、山椒魚や鼠さらに蛇すら飲み込む事もある。そのため、イワナは、「谷の精霊」とか「渓流の王者」「幻の怪魚」「神秘の美魚」といった様々な形容詞で飾られることが多く、全国各地に神秘と幻に包まれた伝説が数多く残されている。なお、高山市丹生川町では大型のイワナがいたため、イワナを一本、二本と数えた269。

『斐太後風土記』の笹魚の説明。
（ネットから）

飛騨では、魚に似た笹（笹魚）が稀に生じ、三月～四月に動き出して川に落ち、イワナになると伝えられていた。

延享二（一七四五）年に『飛州志』を編集した高山第七代代官長谷川忠崇は、笹魚がイワナになるのか焼いて匂いを嗅ぎ、笹魚は、蠅（笹魚玉蠅）が笹の側芽に卵を産んで発生する笹の病気であると述べている。イワナになる笹魚は高山市丹生川町の十二ヶ岳（一三二六m）や平湯方面に沢山ある269。

1－1 岩魚と団子

中津川市付知町や下呂市辺りではヤマト岩魚を「ソウタケ」と呼び、大イワナが旅僧に化けて団子や粥等を振舞われる伝説に因み、大イワナをソウタケ坊主とも呼んでいる。以下に、旅僧に化けたイワナについて述べよう。

①木曽郡王滝村滝越の一軒家に宿を乞うた旅僧は麦粥でもてなされた。翌朝、氷瀬の淵で死んだ大イワナが見つかり、腹からの麦粥で旅僧だと分かった51。②高山市国府町瓜巣で、お婆さんに化けた大イワナが御飯を何度かもらいに来たので、毒入り団子を持たせると、翌日淵に大イワナが浮いていた59。③高山市久々野町久須母の集落に、お坊の姿で養蚕の神様にお供えする初午の団子を食べたイワナが棲む淵（団子淵）があった101。④横尾集落（高山市丹生川町折敷地）の人々が滝壺（同心滝）の大イワナを捕る相談をしていると、同心和尚と名乗る僧がイワナを捕らないように諌めた。翌日大岩魚が捕れ、腹から昨日ふるまった粟飯が出てきた269。⑤旅僧に化けたイワナに岩魚の干物をもらって出汁にして団子汁食べた。翌日、淵（化淵。郡上市明宝小川）で大きな岩魚を釣ったら腹から団子が出てきた295。⑥下呂市小坂町大島で、旅僧に初午団子を振舞った後、あとをつけると谷下の淵で見失う。翌日淵に大イワナが浮かんでいて、腹から団子が出て来た218。

場所は不明だが、飛騨の伝え話として、⑦お坊が飛騨の山深い地の宿に現れ、宿泊客にイワナ釣りを止めるように言った。しかし、翌日大きな岩魚が釣り上げると、腹からお坊が食べた五平餅が出てきた108。⑧関市板取三洞で、旅僧に小麦の団子を振舞い、さらに、川で大きなイワナを捕ったので振舞おうとしたら、旅僧はいなくなり、イワナの腹から先ほどの団子が出てきた8。

1－2 毒汁（「ね」）流し

植物から作る毒汁（「ね」）を流す漁法を旅僧に化けたイワナが諌めている。

①木曽郡上松町小川焼笹の淵で、毒汁で魚を捕る計画をしていると、旅僧が止めたが言うことを聞かず、捕まえたイワナが僧だと分かる202。②笹魚がイワナになったと伝わる釜ヶ淵（高山市丹生川町岩井谷）の大イワナを「ね」で捕る相談を諌めた僧が団子を貰った。忠告を聞かずに漁をして捕った大イワナの腹から、昨日ふるまった団子が出てきた269。また、③岩井谷（高山市丹生川町の奥丹生川）では、五月五日の端午の節句の笹餅を食べた旅僧がイワナであったから、端午の節句に笹餅を作らない51。④虚無僧に団子を振舞った後、山椒の葉とクルミを混ぜて練った毒薬を布淵（郡上市明宝寒水）に流して大イワナを捕ると、腹から振舞った団子が出て来た53。なお、⑤布淵の岩魚を食べた人々に祟りがあったとも言う295。⑥伊妙谷の釜淵（郡上市明宝気良）の主のイワナが旅僧に化けて来て、山椒

伊妙・見座林道開始点から約800m上流の比較的大きな淵
（釜淵ではない）

の皮の毒団子でイワナを捕まえるのを止めるように諌めたが、止めずに漁に行ったら、大きなイワナの腹から振舞った団子が出てきた295。⑦漁師が青どん淵（ダンゴ淵または入道淵。下呂市萩原町山之口カジヤ谷）での漁（毒液「ね」流し）の準備をしていると坊主が現れ、漁を止めるように諌めたが、漁に出た。すると大イワナが捕れ、その腹からは坊主にやった団子が出てきた97。

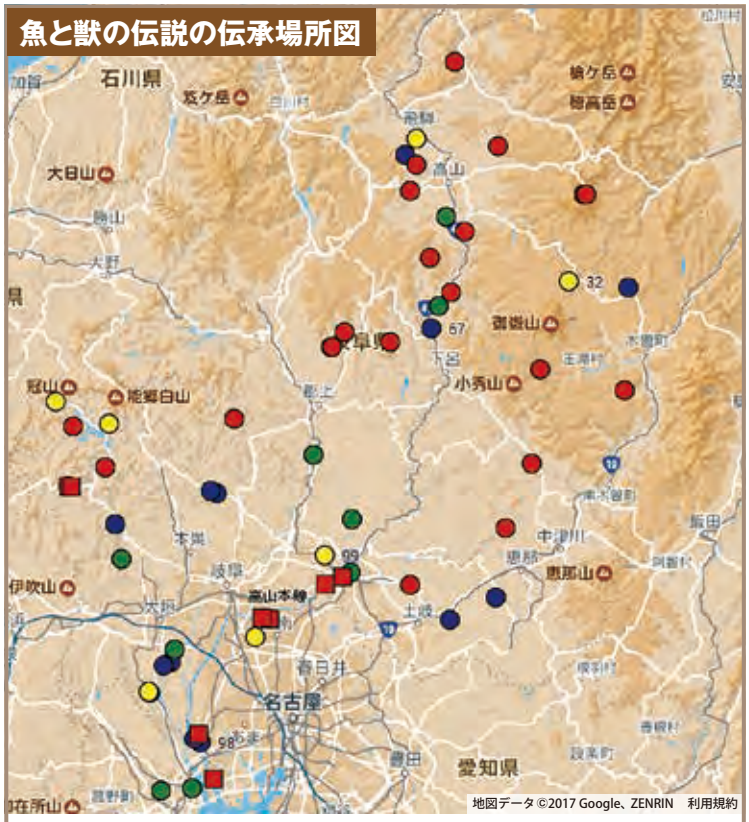
⑧付知峡（中津川市付知町）の奥で馬酔木（あしび）（葉は有毒で春すずらんに似た花を開く）を流して魚を捕っていると、お坊が現れ、止めるように言われ約束した。しかし約束を破ると大イワナが捕れ、お腹にお坊が食べた飯が入っていた81。⑨「ね」（山椒と灰のアク汁でつくった毒薬）流しの相談をしていると、坊主に化けたイワナが現れて止めた。翌日、磯ン谷（揖斐郡揖斐川町徳山山手）の奥の淵（坊主淵（ぼうずぶち））で捕れた大イワナの腹から前日の食事が出てきた262。⑩小曽谷（揖斐郡揖斐川町東杉原）の淵で大イワナをとる「ね」流しの相談をしていると、僧が現れて諌めた。しかし行うと、大イワナが捕れ、腹から昨日振舞った小豆飯が出てきた。この淵は災害の度に崖崩れする278。

ダンゴ淵（入道淵）

イワナではなくウナギの場合もあり、⑪揖斐郡揖斐川町坂内広瀬（旧北村）で「ね」を流す前夜、武士が酒と赤飯を御馳走になりながら、「ね」を淵に流さないその下の瀬から流すように諌めた。聞かずに「ね」を淵から入れて捕れた大ウナギの腹から昨日のお赤飯が出てきた。それ以降、淵からの用水は使えなくなった244。

なお、イワナや住職、さらに神様が魚取りを諌める話もある。⑫身重の妻との殺生しない約束を妻の留守中に破り、大洞山（一三四九m）から飛騨市神岡町割石（わりいし）に注ぐ霧茂谷（きりもだに）でイワナを沢山捕ってきて食べた。するとイワナが妻に化けてやって来て、そのことを責めたので残りのイワナを逃がした104。⑬御嵩町小和沢（こわさわ）にあった西宝寺（現在正願寺［可児郡御嵩町中切］に引っ越し）の小僧は魚採り（殺生）が好きで、困った和尚は小和沢の川に魚が棲まないように呪文を唱えたので、小和沢の川には魚がいなくなった62。⑭鹿が池（高山市清見町牧ケ洞（まきがほら））の小魚を摂らないように神様が鹿に言い聞かせ、それ以降、神様の小魚を取る人もいなくなった96。

魚と獣の伝説の伝承場所図



分　類	記号
岩魚と団子 1-1	●
大きな魚 2-1	●
片目の魚 2-2	●
その他 2-3	●
獣の話 3.	■

・●は、支川上流部に分布。
・●は、上流域は岩魚、下流域は鯉や鰻が分布。
・●は、木曽川筋では見られず、揖斐・長良川筋に分布。
・■は、木曽川下流部本川沿いや河口部付近に分布。

2．他の魚

2－1　大きな魚

①大イワナを捕った吉兵衛（木曽郡木曽町開田高原末（すえ））は家に着くと、持ってきたイワナは姿が無く、吉兵衛は熱を出して死んだ。この淵を吉兵衛淵と名付けた220。②山県市葛原の庄屋の家に将棋の腕の立つ若者が来るようになった。「なりやの淵」の川干し（川を堰き止めて魚を捕る）を若者が反対したが行うと、大アマゴが見つかり、祟りを恐れて山に埋めた。それ以来若者の姿が見られなくなった124。

③土岐川の「ワンゴのセトガ淵」（瑞浪市和合町（わごうちょう））と呼ばれる場所に、大鯉の主が棲んでいた。大鯉は淵に落ちた子どもを乗せて現れ、子どもは助かった110。④下池（海津市南濃町）の干拓第三工事の際に、池を浚うと大きな鯉（約一五kg）が出たので、ある家の池に放したが翌日には消えてしまった。池の主だと囁かれた267。⑤下大榑新田の江川が大榑川に流れ込む辺り（安八郡輪之内町）で、漁師が投網をすると、大榑川の主の「赤じじ」（年を経

た大緋鯉）に、この淵で投網をしないように言われる。嫌だと反抗すると祟りで死んだ304。

さらに、捕まった大きな魚が仲間に呼び戻されている。

⑥愛西市立田町（下立田村）の池で漁師が大鯰を釣り上げると、池から「おこま」と呼ぶ声が聞こえ、釣り上げた鯰がオーイと返事をした。ビクを開けると返事をしながら他の鯰のいる池に戻っていった。その池をおこまが池と呼ぶようになった。他の話では、立田村戸倉の鵜戸川沿いの鯰渕に「おこま鯰」がいたとも言う257。

さらに、鯰ではなくアマゴも返事に応えている。

⑦山県市谷合の奥瀬見を流れる神崎川の淵で大アマゴを捕まえ、食べようと焼いていると、「九郎こーい」と呼ぶ声に応じて大アマゴは神崎川へ戻って行き、その家は祟りで途絶え、その後も恐ろしい思いをした目撃者などにより、その淵（九朗淵）に近づく事を禁じられた124。

⑧揖斐川町外津汲の内谷の大岩（筏はりだし岩）の淵に大山椒魚が棲んでいた。それを漁師が捕まえたが、また川に戻した。三年程後に子どもが溺れたのは、淵の主の大山椒魚のせいか河童のせいか分からない54。⑨安八郡輪之内町本戸の「大正池」で大鯰を取った村人は「大正池の主」（「片目の魚」の⑤参照）であったと気づき、漁師を止めた134。

返事だけではなく、化ける魚もいる。⑩四十八滝（高山市国府町宇津江）のイワナは、釣り人が来ると木の葉に化け101、⑪恵那市三郷町佐々良木の和尚様が話相手がいなく寂しがっていると、不動淵の鯉がじっさまに化けて毎晩やってきて談笑していた。ある日、食事で味噌を食べた翌日、淵に口に味噌が付いた鯉が浮いていたので、和尚が供養した214。

宇津江四十八滝（魚返滝）

2－2　片目と神の使いの魚

片目の伝説は全国的に極めて多く、片目の神（例えば多度神社の天目一箇神）、地蔵観音、牛・蛇・守宮・鴨・鶉・蛙・河鹿などの他、魚では鮭・泥鰌・鰻・鮒などがある。また、①古井神社（美濃加茂市古井町）の神様が泣いている赤ん坊を見ようとして笹の葉で目を突き、以来、笹が茂っている家で生まれる赤子の片目を小さくした288と伝わるように、人間も片目の多い村があって、それぞれ由緒をもっている。

柳田は「片目の魚」94で、目の悪い人が東京都杉並区のお寺の池に放した魚が片目になり、甲府の武田家城跡の堀の泥鰌は山本勘助に似て片目で、群馬県富岡市の神社の泉から流れ出る水に棲む鰻も片目である、等と多くの片目に関する話を紹介している。

さらに柳田は、行基や徳のある僧が無理強いされて魚を少し口にした後、吐き出した一片ずつが片目の魚となり、また、片目を矢で討たれて戦った豪傑が目を洗った池の魚やイモリが片目になっていると述べている。

柳田は片目と神との関係について、「当り前に二つ目を持った者よりも、片目になった者の方が、一段と神に親しく仕えることができ、神にお供えする魚と普通のものとを区別する為に、片目の魚にした」と考えた。

②下呂市萩原町大ケ洞の谷川の淵（ヨキ淵）にあった松の大木を切り倒そうとした片目の杣が、淵にヨキを落とし、拾おうとしたが上がってこなかった。その淵で目撃された大イワナは、片目だった97。③古賀ヶ池（小島山の頂上。揖斐郡揖斐川町上野）付近（サル谷）のアマゴは、猟師が犬を飲み込んだ大蛇の片目を撃ち抜いた血が飛び散り、片目になった238。④桑名市江場の若宮神社内の鏡ヶ池に、片目の魚が住む55。⑤安八郡輪之内町本戸の吉野神社の東側の池（大正池）付近の寺の隻眼の住職は囲碁が好きで、洪水で中村川の堤が「切れた」知らせを、碁相手をもてなす「うどんが切れた」と間違え、洪水に飲み込まれて出来た池の主となり、この池に棲むフナは全て片目だった304。

お釜に群がる粥川の鰻
（「美並ふるさと館」蔵）

神の使いとして、稲荷神社の狐、春日神社の鹿、八幡神社の鳩さらには毘沙門天の百足等が知られているが、鰻も神の使いとして崇められている。

⑥三十六歌仙の一人・藤原高光（九四〇？～九九四？）が、虚空蔵菩薩の使いである鰻の道案内で、粥川（郡上市美並町）源流部の瓢ヶ岳（一一六三m）に住む牛に似た姿の鬼を退治した。鬼退治後、高光は都に帰るとき、鰻は虚空蔵菩薩のお使いだから大切にしなさいと村人に言い聞かせた237。

また、アジメドジョウも神の使いをしている。⑦座禅修行中の僧侶が宮川の音に煩わされるので、一宮水無神社（高山市一之宮町）の神様が川の音を静かにするようにアジメドジョウに命じた。アジメドジョウは水無神社前の川の流れを砂の下に潜らせ、河原のようにした。この土地の人は神の使いとしてアジメドジョ

「小川宏ショー」に出演した瓢ヶ岳の鬼の首（念興寺蔵）

ウは食べない120。

乙姫様の召使いの大蛇もいた。⑧加賀の白山からお姫様が二匹の大蛇をお伴に飛来して、御殿山（美濃加茂市三和町と七宗町神渕の境）で里人を守られた。山の西の高野洞を流れる谷川の口蛇淵・奥蛇淵の二つの滝に、お伴の二匹の大蛇が棲む。また、姫は山の西裏側（関市下之保）の乙女滝で身を清めたと言う288。

2－3　その他

①徳山ダム上流の揖斐郡揖斐川町塚で、ヤマメやイワナを大量に釣ったら、「まあ、よいかァ！」と岩下から声がした85。②揖斐郡揖斐川町（旧徳山村塚）で、道の端を歩いていると蓑に何かが喰いつき、切りはらうと大イワナだった262。③一宮市浅井町東浅井の池が埋め立てられる時、村人の夢枕に鯉が現れ、池が埋め立てられるのでそちらの池に置いて欲しいと頼んだ。しばらくすると、見知らぬ男が火の玉になって池に飛び込んだ。浅井の池には主がいる1。④小さなお社の前の清水の湧く池が養老線路沿い（海津市南濃町徳田）の田んぼの中の小さな森にある。そこの魚を取ることは禁じられていたが、ある者が掟を破り、捕った魚は蛇に変わってしまった23。

なお、「水よぶコイ（六七巻）」97と極めて類似した話として、⑤古河城主が飛騨匠（甚兵衛）に命じて造らせた火災防止の鯉の彫刻を五社明神（飛騨市古川町高野）の社殿に奉納したが、鯉が宮川の水を呼び寄せ、次第に川が五社明神に接近するため、甚兵衛を探したが、甚兵衛は次の仕事で越後へ旅立ち、出羽で亡くなっていることが判明した102。

五社明神

2－4　KISSOの魚伝説五編

①「杣ケ池の恋物語（三二号）」220は、娘が恋しい樵に合うためイワナに化けた話であるが、娘が蛇体の寝姿を見られたので、主人から池を貰って身を隠した51とも伝わっている。

「平群池の不思議な伝説（三九号）」55は、捕ってはいけない池で大鯰を捕ったが、漁師は池からの呼びかけに返事をした大鯰に驚き、池に鯰を返したが、漁師は死亡した。

「水よぶコイ（六七巻）」97は、神社のひさしに掘った鯉の出来栄えが良くて川を呼び寄せるため、彫った矢を鯉に向けて、川が神社に近づかなくした。

「平瀬池の大金魚（九八号）」257は、平瀬池（愛西市森川）で夜漁をしていると、大きな金魚が出た。見た者はしばらく寝込んだ。なお、平瀬池の埋め立ては、遊水地として機能した池沼が排水機場の新設とともに不必要となったため、「立田地区補助干拓事業」として昭和二六（一九五一）年一〇月～同三五年三月終了予定で木曽川での浚渫・堆積土砂によって埋め立てられた。

「池の鯉を助けた和尚さん（九九号）」87は、酒癖の悪い主人が下僕の肩を酔って切ったが、観音様が身代わりになった「身代わり観音」と、若者が寺付近の池の鯉を捕って食べようとしたので、住職が鯉を落ち葉に代えて助けた話からなっている。

3．獣の話

3－1　キツネについて

キツネの語源について、『日本霊異記』は欽明天皇（五〇九？～五七一）の時代、美濃国大野郡のキツネが「異類婚姻」で子を産んだが、犬に吠えられて狐と分かってからも、夫の所へ「…いつでも来つ寝…」たので、岐都禰となったと述べている。

なお、平安時代の陰陽師阿部晴明（九二一～一〇〇五）は、信太の森（現大阪府和泉市）の白狐が葛の葉姫に化けて安部保名ともうけた一子で、白狐は正体を知られて古巣に帰った、と伝わっている。

ところで狐と稲荷神との関係は、当て字による結果である。つまり、素戔嗚尊の子供で穀物の神である宇迦之御魂神の別名・御饌津神は稲荷神社の祭神であり、キツネの古名「ケツ」から、「みけつ」に「三狐神」と当て字を行い、やがて狐は稲荷神の使い、又は眷属に収まったようである。実際、狐は穀物を食い荒らす鼠を捕食し、さらに体色や尻尾の形が実った稲穂に似ており、「三狐神」は上手い当て字である。

3－2　獣が化けた話

①舟から投網で漁をする漁師は毎夜、みぞ川と呼ばれる五色岩付近の入江（加茂郡坂祝町）に繋がれた舟の舳先に座る黒ん坊と言葉を交わすようになった。冬に狸の死骸を見つけた後、黒ん坊と会うことはなく、狸を弔ってやった61。②尾張での「ご馳走よばれ」で小杁（江南市小杁町）から小綱（川島小綱町）へ小杁の渡しで帰る際、小綱の水神様の茂みのキツネに料理を置いてくる習わしであった。ある時、キツネは船頭に化けて小杁に迎えに来てくれたりもした。堤防沿いにあった水神様は、神明神社南から岐阜県消防学校の南端の堤防側に山の神と共に移されている40。③牛子渡し（別名松倉渡し。各務原市川島松倉町）の船頭が夜中に、若い娘を舟に乗せた。その後娘は、夜毎来ては船頭の小屋で寝るようになった。「来て寝る」から「きつね」という名が付いたともいわれる40。④夜中に橋を渡ると意識

木曽川ライン下りの五色岩付近
（「東北芸術工科大学・東北文化研究センター、アーカイブス」より）

が違い道に迷った。夜明けに北村（揖斐郡揖斐川町坂内）のお寺の奥で、川獺（かわうそ）に化かされたと気がついた60。⑤上ケ瀬（じょうがせ）から狐塚辺りは、寂しい所。籠一杯の鰯を買い込んで広瀬（揖斐郡揖斐川町坂内）に戻る途中、上ケ瀬で大勢の人夫に鰯を売り、札をもらう。夜明けに札は椿の葉に変わってしまっていた。川獺にやられた60。

神明神社から移動した水神

法面に残る牛子渡しの常夜灯

3-3　KISSOの狐三編

「いたずらきつねのお話（二四号）」257は、小茂井（こもい）（愛西市小茂井町）の女ぎつねと葛木（愛西市葛木町）の渡しに住む腹ペコぎつねの二話である。

「キツネのひっこし（五九号）」234は、木曽岬町の船頭の所に、綺麗な女が舟を頼みに来た。引き受けて言われた場所に着くと、大勢の狐が舟から飛び降りた。着いた先は「ツタゴウリ」（今の知多半島のどこか）で、舟賃は木の葉であった。お金が木の葉であった話は各地に多くある。

「孫太郎狐と尾白狐（八五号）」232は、雌雄の狐が仲良く暮らしていた。雄が弁財天に心を移して不仲になったが、弁財天に諭され仲良くなった。なお、「岩は沈んだ」が、弁財天社は川辺ダム上流約四〇〇m左岸の川岸に移転している。

COLUMN

三本の長良川

天文三（一五三四）年九月の「天文の洪水」によって、現長良川本流（岐阜の古名「井ノ口」に做ったのか井川と呼称）の新川が現長良橋下流で、西流していた古川の南側に出現した。

なお、天文三年以前の長良川（古川）の河道については、「岐阜市中屋から西流して山県市高富、梅原を経て伊自良川へ流下していた」と伝わる。しかし、山県市梅原は小分水嶺をなし、長良川本流が流下していたとは考えられず、多少の変遷があったにしても、天文三年以前の長良川は、関市千疋・岐阜市上芥見・長良を結ぶ現長良川流路を取っていたと推測される。

「天文の洪水」から約八〇年後の慶長一六（一六一一）年の洪水で、長良橋右岸側の崇福寺（岐阜市長良福光。快川和尚が住職を務め、信長の菩提寺）前に流れ込み、古古川が出現した。これで、長良橋下流で長良川は、一番北に古古川、次に古川、二番南に井川（現長良川）の三本に分かれた。

絵図からの流れの状況

①元禄五（一六九二）年の絵図：崇福寺前の古古川は七・八割の水が流れる川幅で、井川は二・三割の水が流れる川幅。通常、古川は流水が無かったようである。

②享和三（一八〇三）年の絵図：井川を絵図で「今の大川」と記している。

つまり長良川の本流は、天文三（一五三四）年以前は古川、その後は現長良川の井川で、慶長一六（一六一一）年からは古古川が本流となった。なお、享和三（一八〇三）年頃には古古川は本流の役目を終え、現長良川の井川が本流に返り咲いたようである。

古い堤防と新しい堤防（『わたしたちの岐阜市』より）

古川と古古川の締切

長良橋下流右岸側は、古古川と古川が流れ、北東から鳥羽川と伊自良川が南西に、板谷川が南に流れている通称「川北」と呼ばれる輪中地帯であった。

川北地域は、江戸時代中頃から毎年のように水害に襲われ、その元凶である古古川と古川の締切を幕府に願い出ていたが、明治の時代を迎えた。

大正一〇（一九二一）年から木曽川上流改修工事が開始し、昭和八（一八三三）年から長良川改修工事が開始した。

長良川改修工事の項目	改修期間
長良川・古川合流点（寺田へ）付け替え	昭和九年～一五年八月
長良川右岸堤の引堤	昭和九年～一四年
長良川左岸特殊堤	昭和一一年～一五年
長良古川・古古川の分派口締切	昭和一四年～一八年
長良古川・古古川・古川吐口変更と締切	昭和二六年

（『木曽三川に生きる』より）

長良川上流改修記念碑

長良橋下流右岸堤防上の長良川上流改修記念碑には、長良川古川・古古川分派口締切りに関する略記が記されており、記念碑頂上の直径1.2m、厚さ60cmの御影石は、人柱の古例に代わる鎮石をこの地に沈めたものの模型である。

第11章 歴史上の人物伝説

CONTENTS

1．源義朝の三川下流域での行程
2．伝説で彩られた小川の姫様
3．浦島太郎伝説
4．桃太郎伝説
5．KISSOの三編

1．源義朝の三川下流域での行程

平治元（一一五九）年一二月二七日、京都六条河原での戦に敗れた義朝主従八騎は東国を目指して落ちて行った。途中、三男頼朝一三歳は一行にはぐれ、次男朝長一六歳は矢傷を受けていた。

到着した美濃国青墓宿（大垣市青墓町）の長者・大炊の娘延寿と義朝は夜叉姫をもうけていた。

義朝の長男義平一九歳は味方を集めるため北国に向かい、怪我をしていた次男朝長は捕らわれるのを嫌い義朝に討たれ、兼遠の弟で鷲巣村（養老群養老町鷲巣）にいた鷲巣玄光が案内役となり、義朝主従は尾張国内海の長田忠宗（忠致）の家に向かうため、赤坂湊から舟で下った。

①養老町飯ノ木に着いた義朝は、農夫清吉に頼んで昼食を摂った。そのとき義朝は側に生えていたヨシを切って箸として使用し、食べ終わってヨシを逆さまにして土に挿した132。このヨシは繁茂し、飯ノ木集落の東方に「葦塚」があったが、その後、現養老郡養老町明徳の源氏橋の近くに移され、今は無くなった。なお、農夫清吉は義朝から「伊藤」の姓と短刀一振りを受け取った。

「笹りんどう紋」が彫られた源氏橋

その後、義朝主従は源氏橋の袂で大きい舟に乗り換え、柴の中に隠れて津屋川を下った。

②「頼朝公楊枝柳の碑（九〇号）」23は、義朝が尾張の野間へ落ち行く途中の現海津町西小島で、朝食の箸に用いた揖斐川の柳の枝が根付いたと伝わる「義朝楊枝柳」が明治改修で取り払われ、改修工事で移転した海津市西小島の水谷家庭先に「義朝公楊枝柳」の碑が建っている。また、根付いた「義朝楊枝柳」が明治改修後に西小島から南へ一km弱下った稲山（柳港）の「村社八幡神社」に移されたが枯渇し、「義朝公楊枝柳」の碑が建っている。さらに、③海津橋東から南東に約一kmの海津町沼新田では、昼食時に食べた梅干しを植え、大きな梅の木となった。この古木は惜しくも水害で枯れ死したが、代わりの梅が老樹となり、安立家の庭には「源頼朝実割梅の碑」が建っている221。

夜明けに上立田（現在は木曽川の川底）辺りに来た時258、④頼朝一行に粥をご馳走した藤右衛門と三右衛門は、礼として御粥藤右衛門、小粥三右衛門と苗字をもらい、御粥家は幕末に絶えたが、小粥家は現在も続いている。この故事は「ねじ柳の故事」として尾張名所図会に描かれている。なお、⑤義朝が箸として使用した柳の枝は、枝先を下に挿されたのでねじれて根付き、大木となったが、明治改修時に川底に沈んだ。⑥立田大橋下流木曽川右岸の東海広場南端に「故事ねじ柳跡の碑」がある。

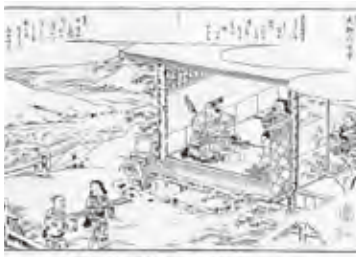
「源頼朝実割梅の碑」

八幡神社の「楊枝柳の碑」

「頼朝公楊枝柳の碑」

義朝達は以上のように昼食あるいは朝食を摂った後、⑦現弥富市荷之上町柴ケ森の荷之上八幡神社で、身を隠してきた芝（荷）を舟から岸に上げて休憩したため、「荷之上」と付いたようである3。

その後、⑧島（陸路）伝いに進み海の見える所に出た。ここが現蟹江町大字西之森であり源氏と小字名が付き、現海部郡蟹江町学戸七丁目に源氏塚がある3。


「ねじ柳の故事」（『新編立田村史』より）

「故事ねじ柳跡の碑」

2．伝説で彩られた小川の姫様

赤沢美林（木曽郡上松町小川入国有林）内の姫宮神社は木曽谷御料林内で唯一の神社である。帝室林野局から祭祀料が下賜され、一〇月一五日の祭礼の日には、全山の労働者が神社に集まり、草相撲大会など盛大な祭りが催された。今は営林関係の人びとが中心になって祈願しているとのことである。

この神社は、姫淵の真上に架けられた橋を渡り二〇〇

mほど入った地点で、桧づくりの鳥居の後ろに二m四方の祠がある。

明治一三（一八八〇）年六月二七日、明治天皇巡行の際、御料林当時に木曽郡上松町の高倉神社にあった姫宮神社に、勅使が訪れて参詣したと記録にある。現在の神社は、帝室林野局が大正一〇（一九二一）年一〇月にこの麝香沢の地に遷宮したものだという。

姫宮神社

姫宮神社に祀られている姫は、治承四（一一八〇）年に平氏追討の令旨を全国の源氏に発した以仁王（一一五〇～八〇。後白河天皇の皇子）の娘であると伝わり、①「小川入の姫淵悲話（六二号）」202は、美濃国に逃れた父を追って、弟と共に美濃国へ向かっていた道中での出来事である。

姫淵で身を投じる前の出来事として、②小川を目指して逃げてきた源氏の姫が上松町荻原大字立町のある家で余りにも喉が渇き、仏様の器の中の水を呑み、小川へ逃げる手助けをしてもらった。以後、この家は「仏器」の苗字となったと伝わっている202。

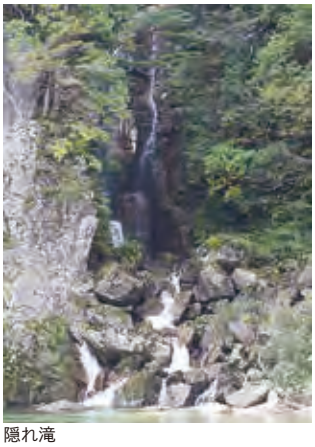
なお、姫宮に祀られた人物として、③天正一二（一五八四）年五月、木曽義昌（一五四〇～九五）に殺された上松に住む家臣萩原主水の一五歳の娘は高倉へ逃げたが、その地の村人は娘を匿わず、敵に見つかった娘は淵に身を投げた。この淵が後に姫淵と呼ばれ、村人は祠を建てた202と伝わっている。

また、④武田側の秋山信友（一五二九～七五）に嫁いだ信長の叔母が、信長に敗れたため夫と共に処刑された。信友の生き残った姫は美人に成長したが、強引に結婚を迫る人物から逃れて淵に飛び込み亡くなった202と、他の言い伝えでは、⑤信長から逃げて木曽駒ヶ根村で隠れ住み年頃となった姫は、村の金持ちの息子に結婚を迫られ、川の淵に身を投げた。この地には小さな社が建てられ、姫淵と名付けられた13と、伝わっている。

さらに、⑥織田信長の息子の一人が姫君を伴って逃げ延びて来た。息子は傷がひどくてついに亡くなったが、姫は村人の助けを借りて、上松小川の上流の姫淵まで逃げた。しかし、ついに逃げ切れずに、その淵に身を投じたので、姫を偲んで二の宮大権現として二子持（木曽郡王滝村二子持）の淵に祀った266、と伝っている。

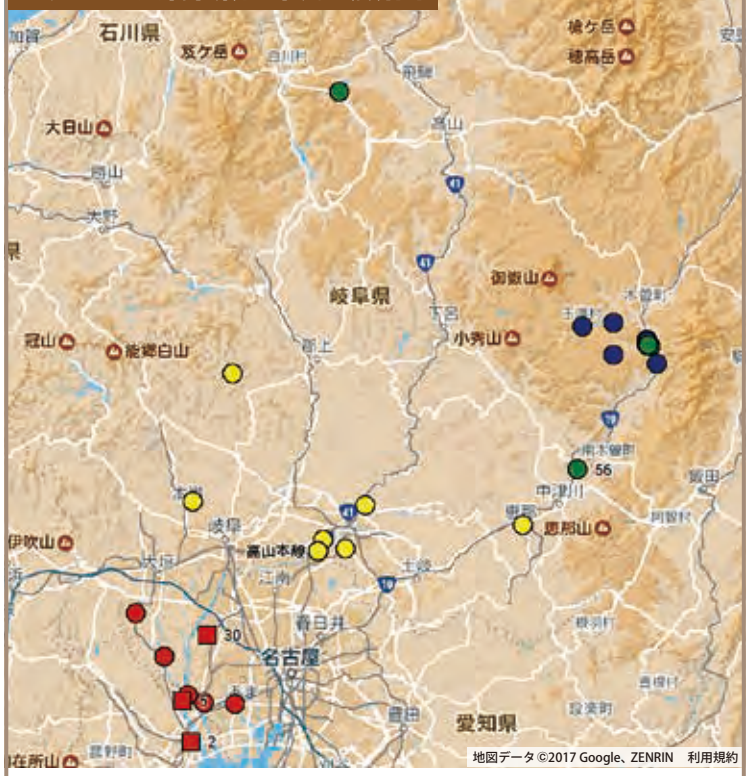
なお、「姫宮伝説」に類似した別の姫君の伝説として、⑦萩原の人は、後難を恐れて追手に追われているお姫様が助けず小判だけ取り上げ、追手に姫の逃げた方向を教えた。姫は隠れていた滝（隠れ滝。上松町萩原）に身を投げ、それ以来悪い病気が流行するので、滝の上に姫の宮神社を祀った202。

一方、「一つ灯伝説」が姫宮神社に祀られている姫の弟若


隠れ滝

遠く中央アルプスを望む高倉神社

歴史上の人物伝説の伝承場所図



分　類	記号
源義朝 1.	●
小川の姫様 2.	●
浦島太郎 3.	●
桃太郎 4.	●
KISSO5.	■

・●は、義朝らの行程が分かる。
・●は、８話の内４話が上松で重なっている。
・●は、飛騨市河合町以外は木曽川筋である。
・●は、関市の瓜姫以外は、東西方向に分布。

宮に伝わっている。

⑧若宮は父以仁王が木曽郡木曽町福島御室へ移った後にも西小川の高倉に住み、亡くなって高倉で塚に葬られ、その近くに若宮大明神（高倉神社）が祀られた。どんな風雨の夜でも西小川の谷では一点の灯が煌々と輝いていたが、明治二〇年頃にこの塚を掘り起こしてから、一つ灯は光らなくなった202。

3・浦島太郎伝説

全国に広く流布している浦島太郎伝説は、奈良時代（七一〇～七九四）の終わり頃に成立した『万葉集』にその原型とも言える話が載っており、室町時代（一三三六～一五七三）に成立した『御伽草子』には、「報恩」を構成要素とした現在の内容が記述されている。

中世以前、浦島太郎は水江浦嶋子（男性）を略して浦島子と呼ばれており、浦島太郎は、横浜市の慶雲寺、京都府伊根町の浦島（宇良）神社や丹後市網野町の網野神社、香川県三豊市詫間町の紫雲出山をはじめ、福島県から鹿児島・沖縄県まで各地に祀られている。

中部地区では、知多半島の知多郡武豊町大字富貴の知里付神社の社宝が乙姫から贈られた「あけずの箱」で境内に浦島神社があり、付近には浦之嶋や竜宮の地名も残っている。また、木曽川右岸の岐阜県各務原市前渡の市杵島神社が、浦島太郎が開けた玉手箱の伝説の発祥地であると伝えられている。

長野県木曽郡上松町の寝覚ノ床では、①竜宮城から帰った浦島太郎が魚釣りで日々を送っていたが、玉手箱を開けて老人となり、釣り竿や硯を残して行方知れずとなり、臨川寺（木曽郡上松町上松）は太郎が竜宮からもらってきた弁財天の像を祀っている202。また、②寝覚ノ床の側の見帰（上松町小川見帰）の村人が讃岐で、大きな川の縁に祀ってある「浦島大明神」神社の禰宜たちを木曽の寝覚ノ床に連れて来たら、「これこそ本当の浦島太郎の跡」だと感激した。

市杵島神社

寝覚ノ床

なお、一人の禰宜は寝覚ノ床の大岩に座り込んでいたので、浦島太郎の亡霊が古郷を懐かしみに来たと云われた202。

③「竜宮乙姫岩の伝説（五六号）」300は、中津川山口の辺りが竜宮の入り口で、乙姫が寝覚ノ床から鉄砲水で流されて来た浦島太郎を助け、二人は仲良く暮らしたが、太郎が寝覚ノ床に帰るとき、お土産に玉手箱を受け取り、この玉手箱を開けて太郎は白髪の老人になった。

乙姫大橋の欄干のブロンズ像

浦島太郎の魚釣りに酷似した話として、④寛正（一四六〇～六五）の頃、明で医学を学んだ現埼玉県川越の河越三喜という人が木曽の地に来て、寝覚ノ床で魚釣りを毎日していた。三度家に帰ろうとするが三度戻って来たので、三帰翁と呼ばれたのが見帰となった202。

また飛騨市では、⑤河童伝説の「5-2魚でお礼」の⑪で、河童から魚の礼を受け取った庄次郎は、深い淵（庄次郎淵、飛騨市河合町保の淵で下小鳥ダムに沈んだ）に入り込み、竜宮で乙姫様に遭ったが、浦島太郎の二の舞にならぬように、竜宮で造った草履の片方だけを持って家に帰って来た。また、この淵は雨乞い淵としても有名であった102。

4・桃太郎伝説

桃は邪気を祓い不老不死の力を与える霊薬である果実とされ、黄泉の国の伊耶那美命を見て逃げ出した伊耶那岐命が追っ手に桃の実を投げて逃げ延び、伊耶那岐命は桃に大神実命と名付けている。

桃太郎の名は、この「桃」に元気な長男の意味を持つ「太郎」が結びついたと考えられ、各地に桃太郎伝説が伝わっている。

岡山県の桃太郎のモデルは第七代孝霊天皇の第三皇子吉備津彦命で、鬼城山（総社市奥坂）に棲む朝鮮半島の百済から来た鬼（温羅）を退治し、香川県の桃太郎のモデルは吉備津彦命の弟雅武彦命で、高松港の沖約三kmの瀬戸内海に浮かぶ女木島に棲む鬼（海賊）を退治した。

なお、奈良県磯城郡田原本町は孝霊天皇の宮黒田庵戸宮が在った地で、吉備津彦命はこの地で成長したと推測されるため、この地を桃太郎発祥の地と伝えている。さらに、中津川市加子母万賀の桃太郎神社は平成二（一九九〇）年に創建された神社で、境内の案内板に、五二八年に祀られたと伝わる「大鹿童子神」は子供の守り神で、桃太郎の由来であると述べている。

犬山の桃太郎は、①犬山市栗栖の桃山に子供神社があり、霊験灼かであったので、昭和五（一九三〇）年五月に約一km下流の現在地に遷座し、桃太郎神社（栗栖古屋敷）とした208。②犬山市栗栖古屋敷（桃太郎神社の場所）

加子母の桃太郎神社

桃太郎神社

に爺様と婆様が住んでいた。川で洗濯をしていると、桃の実を握った男の子が流れて来た。桃太郎は大きくなり、可児川の鬼が島の藤六という盗賊の頭を退治した25。③木曽川の中州（一志岐島）に住みつく鬼を、対岸の犬山栗栖の桃太郎が退治した。鬼と戦った取組（坂祝町）、勝った所を勝山、戦勝を祝う酒倉（坂祝町）、祝杯を挙げた酒（坂）祝、宝を積んだ宝積寺（加茂郡坂祝町取組）など地名が多くある61。

可児川の鬼ヶ島

木曽川左支川の可児川に、④岩礁の岩が沢山あり、鬼が棲んだ鬼ケ島（可児市塩字中島）があった。旅人の生き血を吸ったので赤い石や、鬼の足跡、鬼ケ洞、古井戸も残っていたという228。なお、桃太郎神社から約一八km程上流の飛騨川の、⑤加茂郡川辺町の至る所に、洗濯岩（桃を拾った場所）、鬼門、犬塚、猿ケ鼻、夜泣き坂等の、桃太郎伝説ゆかりの地名が残っている232。

また、揖斐川左支川の根尾川沿いでも、⑥川で河童を助けた恩返しに、年寄り夫婦は桃の古株と子宝石を貰い、子ども（桃太郎）を授かった。桃太郎は、地獄谷に住みついた鬼（大蛇）を退治した。子宝石は、薬師堂（本巣市文殊）に祀られている128と、伝わっている。

鬼退治から帰ってきた桃太郎はお爺さんとお婆さんと暮らし、二人が天寿を全うすると桃山（栗栖）に入って行き、姿を隠したと伝わっているが、⑦鬼退治から帰った桃太郎は親類の婆様を訪ねて鬼ヶ島の話をしていると、婆様が鬼に変わり、桃太郎は逃げて武並神社（恵那市大井町）の杉の木に登りコブとなった。その木は伊勢湾台風で倒れてしまった214。

最後に、ウリから生まれたウリ姫の話を紹介しよう。⑧関市板取で、川で拾ったウリから生まれた女の子（ウリ姫小女郎）を老夫婦は大切に育てた。天の邪鬼はウリ姫に化けたが殿さまへの輿入れの時に見つかり、ウリ姫はお殿様の御嫁になった8

5・KISSOの三編

「七里の渡しに咲いた千姫ロマン（2号）」55は、徳川二代将軍秀忠の長女千姫と本多忠勝の孫・忠刻のロマンに触れており、「千姫折鶴行列」が毎年一〇月に行われている。

「葦原で命を救われた願証寺の幼子（五号）」264は、長島城陥落の日に討死した願証寺五世の顕忍の弟准恵（顕恵）二歳が川から救い出された話である。なお、准恵は後に近江国日野に願證寺を興した

「祖父江の竿鷹（三〇号）」303は、棹で鷹を操る術「横井家の棹鷹」を考案した尾張藩鷹匠頭・横井家の祖の話であり10、『竿鷹は　空にあがれり　廣口の　川のう（浮）き鴨　こゝろゆるすな』（『尾張名所図会』）とある広口池（広口川）一帯は横井家のお鷹場であった。

一般書籍文献番号

038 私たちが調べた木曾の伝説
長野県木曽西高地歴部　1980
039 神岡のむかし話　吉城郡神岡町　1980
040 かわしまの民話　川島町ふるさと史料館　1994
041 木曽歴史と民俗を訪ねて」
木曽教育会郷土館委員会　1968
042 木曽三川治水秘史 - 薩摩義士報恩記　伊藤光好　1996
043 木曽のでんせつ　生駒勘七　1989
044 岐南東むかしものがたり　南谷茂樹　1977
045 読みがたり岐阜のむかし話
岐阜児童文学研究会　2004
046 岐阜のつたえ話Ⅰ～Ⅵ
岐阜教育文化振興事業団　1995 ～ 02
047 わたしたちの岐阜の伝説　後藤時男　1990
048 岐阜県の温泉の分布と特徴
温泉科学第 52 巻　寺尾宏　2002
049 岐阜県災異誌　岐阜県地方気象台編　1965
050 岐阜県の民話　今村廣　1981
051 岐阜県の傳説　吉岡勲　1955
052 郡上のむかしむかし　木島泉　1975
053 郡上の昔話・昔の話　高田明美　1991
054 久瀬のむかし話上・下
揖斐郡久瀬村教育委員会　1998
055 桑名の伝説・昔話　近藤杢、平岡潤　1976
056 美濃神戸ふるさと百話第３集　神戸教育委員会　1996
057 広報各務原　2009 年 10 月 15 日
058 弘法水の水文科学的研究
立正大学博士論文　河野忠　2002
059 国府のむかし話　町教育委員会　1984
060 坂内のむかし語り　坂内村　2004
061 さかぼぎのむかし話　町教育委員会　1982
062 じっさまから聞いた話　岐阜県御嵩町　1995
063 信濃の河童
上田女子短期大学紀要 19 巻　塩入秀敏　1966
064 下野のむかし話　土岐安信　1985
065 じゃぬけ―伊勢小屋沢その後の 45 年　南木曽町　1999
066 十二支の話題辞典　加藤迪男　1996
067 荘川村の民話世間話編　荘川村教育委員会　1993
068 ふるさと白川第４号　白川町中央公民館　1981
069 真正のむかしの話　真正読書会　1992
070 すなみ百話　巣南町役場　1992
071 関のむかし話３　旭小ＰＴＡ図書委員会　1988
072 荘川村の民話昔話編　荘川村教育委員会　1993
001 愛知県伝説集　郷土研究社　1937
002 穴馬とおくみののいろりの夜はなし　三島とよ子　1971
003 これでわかる海部の歴史　黒田剛司　2011
004 安八のつたえ話　安八町教育委員会　2014
005 生き贄 - 歴史の礎となった犠牲哀話 -　立松弘　1994
006 池辺のむかし話　池辺小学校ＰＴＡ　1991
007 石浦の民話　八反長兵衛　1996
008 板取むかし話 (第一・二集)
板取村教育委員会　1982・84
009 稲沢のむかしばなし (追録２)
むかしばなし編集委員会　2009
010 犬山こぼれ話　市橋鐸　1967
011 いび川のむかし話　揖斐川町教育委員会　1986
012 揖斐川　揖斐郡教育会　1979
013 いわむら昔ばなし余談
いわむら街まちづくり実行委員会 1996
014 かみたからの昔ばなし　吉城郡上宝村　1983
015 王権と社会 - 朝廷官人・真継家文書の世界 -
名大付属図書館　2007
016 大垣のむかし話 100 話　大垣市文化財協会　1983
017 大桑村の歴史と民話　志波秀夫 1978
018 大野のむかし話　大野町教育委員会 1998
019 奥美濃よもやま話 (1 ～ 5 巻)　金子貞二　1976
020 小坂のむかし話　益田郡小坂町 1980
021 小駄良の民話　八幡町立川合小学校 1973
022 尾張の民話　小島勝彦　1981
023 海津のむかし話　編集委員会 1987
024 かかみがはらのむかし話
各務原市小学校国語同好会　1978
025 続かかみがはらのむかし話
かかみがはら民話同好会　1983
026 かさはらの昔話　町誌編纂委員会　1983
027 かさまつの「昔むかし」　町文化財保護協会　1979
028 春日のむかし話　村教育委員会　1991
029 河童の世界　石川純一郎　1985
030 河童考　飯田道夫　1993
031 河童の研究　大野桂　1994
032 河童の日本史　宮田登　1966
033 河童の手と秘伝の妙薬　新潟文化物語　HP
034 金山町のむかしの話　編集委員会 1987
035 可児のむかし話　町教育委員会　1980
036 ものがたり可児の百年　町教育委員会　1982
037 上石津ふる里噺　町教育委員会　1983

一般書籍文献番号

114 まいばら水文化　米原市編　2012
115 続正木の民話　羽島市立正木小学校　1984
116 ふるさとの届けもの―伝えたい三重のおはなし―
三重県生活部　2002
117 水の伝承　石上七鞘　1979
118 美濃の民話 (第一・二集)　赤座憲久 1973・77
119 美濃神戸ふるさと百話　町教育委員会　1977
120 美濃と飛騨のむかし話続　岐阜県小中学校長会　1970
121 美濃国羽島市の伝説と史談 (前編)　並河晴夫　1977
122 美濃市のむかし話　美濃市読書サークル協議会　1977
123 美濃白川に於ける雨乞いの習俗
美濃民俗 99 号　高井健　1975
124 美山の民話 (第一・二集)　町教育委員会　1991・94
125 武儀町のむかし話　町読書サークル協議会　2003
126 武芸川のむかし話　町むかし話編集委員会　1994
127 本巣郡昔ばなし―ふるさとの伝記―
本巣郡文化財審議会　1984
128 文殊のむかし話　松村秋男　2003
129 夜叉が池 - その伝承と恵沢　村教育委員会　1987
130 踏青夜話 (やとみ昔ばなし)　彦坂・大島　1991
131 大野町の民話と伝承百話　町教育委員会　1998
132 のびゆく養老町　町教育委員会　1984
133 龍の研究　龍谷大学文学紀要　八木あゆ美　2005
134 ふるさと輪之内　片野知二　1989
135 椀貸し伝説再考　京大人文学報 80 号　川村清志　1997
136 現地の看板
137 KISSO53 号（創作話）
073 大師信仰と日本人
和歌森編『弘法大師空海』　宮田登　1984
074 別冊太陽日本の妖怪　石川純一郎　1987
075 たじみの昔話　たじみ児童文学の会　1977
076 谷汲村の昔ばなし横蔵編　仲井正夫　1988
077 垂井のむかし話　町教育委員会　1984
078 近世知多地方の雨乞い
知多半島の歴史と現在 17 号　松下孜　2013
079 中世的世界から近世的世界へ　笹本正治　1993
080 中日新聞　新信濃の国第 2 部　中日新聞　2014
081 付知の民話　付知町教育委員会　1986
082 東海の伝説　田中重弥　1973
083 土岐の昔ばなし　土岐青年会議所　1977
084 とく山のむかし話　徳山小学校　1970
085 続とくやま　徳山小学校　1972
086 土石流災害と伝承　笹本正治　2007
087 富加の故事記　安藤剛　2007
088 とみかのむかしむかし　富加町教育委員会　2005
089 虎杖夜話　武儀郡板取村教育委員会　1976
090 なかつがわのむかしばなし弐～四 恵峰学園　2004 ～ 06
091 中津川のむかし話　中津川青年会議所　1984
092 日本昔話通観巻 13 巻　稲田・小沢　1980
093 日本幻獣図説　湯本豪一　2005
094 日本神話伝説集　柳田国男　1998
095 日本の伝説 - 大師講の由来 -　柳田国男　1977
096 濃飛史譚　平塚正雄　1967
097 萩原のむかし話　益田郡萩原町　1978
098 はしま市のむかし話　羽島市子ども会育成協議会　1981
099 東美濃の民話・唄・遊びと年中行事　坪井善治　2004
100 飛騨の伝説　小島千代蔵　1986
101 飛騨口碑伝説　小鷹ふさ　1986
102 飛騨の史話と伝説　土田吉左衛門　1962
103 飛騨乃清美　大野郡福与小学校　1940
104 ひだびと　第１～１０巻　飛騨考古土俗学会　1979
105 飛騨の民話　江馬三枝子　1958
106 人柱と祟り　科研報告書　六車由美　2007
107 ひらたのむかし話と文化財　平田町教育委員会　2000
108 蛭川村の伝説　蛭川村教育委員会　1977
109 古川のむかしの話　吉城郡古川町　1987
110 ふるさと瑞浪　足立利六　1977
111 ふる里高鷲 辛夷の記　上村彰隆編　1999
112 宝暦治水濁流の人柱　広報わのうち　1984
113 堀川沿革誌　愛知県郷土資料刊行会　2000

市町村史文献番号

253 ぎふ早田郷土誌　早田郷土誌編纂委員会　1970
254 高鷲村史　高鷲村役場　1982
255 高富町史通史編　高富町　1980
256 高根村史　高根村　1984
257 立田村史　立田村　1965
258 新編立田村誌通史編　立田村　1996
259 多度町史　民俗　多度町　2000
260 谷汲村史　谷汲村　1977
261 垂井町史通史編　垂井町　1969
262 徳山村史　徳山村　1986
263 飛島村史通史編　飛島村　2000
264 長島風土記　金森勝　2000
265 長島町誌上巻　長島町　1978
266 長野県史民俗編第３巻　長野県　1990
267 南濃町史通史編　海津郡南濃町　1982
268 西春町史民俗編２　西春町役場　1984
269 丹生川村史民俗編　丹生川村　1998
270 根尾村史　根尾村　1980
271 萩原町史　萩原町　1962
272 羽島市史第三巻　羽島市　1971
273 八開村史民俗編　八開村　1994
274 新修東白川村誌通史編　加茂郡東白川村　1982
275 七宝町史通史編　七宝町　1993
276 日義村誌民俗編　日義村　1998
277 平田町史上巻　平田町　1964
278 藤橋村史下巻　藤橋村　1982
279 扶桑町史　扶桑町　1976
280 扶桑町史下巻　扶桑町　1998
281 不破郡史下巻　不破郡教育會　1927
282 町史布袋町大観　村瀬鼎五郎　1934
283 洞戸村史上巻　洞戸村　1988
284 岐阜県益田郡　益田郡役所　1916
285 御嵩町史　可児郡御嵩町　1959
286 三岳村誌上巻　三岳村　1987
287 美並村史通史編下巻　美並村　1984
288 美濃加茂市史民俗編　美濃加茂市　1978
289 美濃市史通史編上巻　美濃市　1979
290 宮川村誌通史編下巻　宮川村　1981
291 美山町史通史編　美山町　1975
292 宮村史　通史編二　宮村　2004
293 明方村史通史編下巻　明方村　1993
294 武儀町史　武儀町　1992
295 明宝村史通史編下巻　明宝村　1993
296 本巣町史通史編　本巣町　1975
297 弥富町誌　弥富町　1994
298 柳津町史　佐波編　柳津町 1972
299 山県郡志　山縣教育會　1918
300 山口村誌下巻　山口村　1995
301 大和町史通史編下巻　大和町　1988
302 養老町史通史編下巻　養老町　1978
303 輪之内町史　輪之内町　1981

201 明智町誌　明智町役場　1975
202 上松町誌民俗編　町誌編纂委員会　2000
203 朝日村誌　村誌編纂委員会　1956
204 朝日村誌第５巻　村史編纂委員会　2005
205 安八町史通史編　安八町　1975
206 池田町史通史編　池田町　1978
207 伊自良誌　伊自良村教育委員会　1973
208 犬山市史別巻　犬山市教育委員会　1985
209 揖斐川町史通史編　揖斐川町　1971
210 揖斐郡志　揖斐郡教育曾　1924
211 岩倉町史下巻　岩倉市　1985
212 岩村町史　岩村町役場　1982
213 恵那郡志　恵那郡教育会　1926
214 恵那市史　恵那の昔ばなしとうた　恵那市　1974
215 大垣市史　民俗編　大垣市　2008
216 大口町史　丹羽郡大口町役場　1982
217 大野町史通史編　揖斐郡大野町　1985
218 岐阜県小坂町誌　小坂町　1965
219 落合郷土誌　郷土誌編集員会　1970
220 開田村誌上巻　開田村　1980
221 海津町史民俗編　海津町　1972
222 各務原史考古・民俗編　各務原市　1985
223 笠松町史下巻　笠松町　1957
224 春日村史下巻　春日村　1983
225 春日井市史　春日井市　1973
226 金山町誌　益田郡金山町　1976
227 兼山町史　兼山町　1972
228 可児町史通史編　可児町　1980
229 新修上石津町史　上石津町　2004
230 神岡町史通史編Ⅰ　飛騨市　2009
231 川島町史通史編　羽島郡川島町　1982
232 川辺町史通史編　加茂郡川辺町　1996
233 木曽川町史　木曽川町　1981
234 木曽岬村史改訂版　木曽岬町役場　1998
235 木祖村誌民俗編　木祖村　1998
236 大野郡九々野村史　九々野村役場　1957
237 郡上八幡町史下巻　郡上八幡役場　1961
238 久瀬村誌　揖斐郡久瀬村　1973
239 桑原町誌　桑原町　1994
240 下呂町誌　下呂町　1974
241 江南市史　資料一・四　江南市　1975・83
242 国府町史民俗編　国府町　2010
243 佐織町史通史編　佐織町役場　1989
244 坂内村誌民俗編　坂内村　1988
245 十四山村史民俗編　十四山村　1999
246 白川町誌　加茂郡白川村　1968
247 白鳥町史通史編下巻　白鳥町 1977
248 新川町史　新川町　1955
249 真正町史　真正町　1975
250 墨俣町史　墨俣町　1984
251 関ヶ原町史通史編別巻　関ヶ原町　1993
252 荘川村史下巻　荘川村　1975

おわりに

今回、多くの昔話を新たな気持ちで読む機会を持ち、子供の頃、夕食後のちゃぶ台を兄と囲みつつ、母から「お茶壺道中」の歌を習ったり、地域の昔話に興奮したことを思い出した。

日常生活にテレビが入り込み、さらに、多くのパソコンゲーム等が氾濫する現在、多くの日々新たな情報に取り囲まれ、古くから言い伝えられてきた昔話等を家族で話し合う穏やかな団らんの時間も少なくなったように感じられる。

父母に言われた「ヘソを取りに来る雷さん」や餓鬼大将に言い聞かされた「カッパに気をつけろ」との忠告も遠い彼方に去ったような気がしていた。しかし、各地で「雷やカッパ」伝説等の地を探していると、地元の人が「俺の車の後に付いて来い」と連れて行って下さった。

案内して頂いた川や淵で、地元の人が「今は土砂が溜まり浅くなった」と、残念そうに話をしてくれたが、それらの川や淵は幼い日の水遊びを鮮明に思い起こさせる力をまだ持っており、さらに、多くの人々の心に「雷さん」や「カッパ」が生き続けていることを知った。

昔話は決して荒唐無稽な話ではなく、地域の人々の素朴な生活の一端を「雷やカッパ」さらに「弘法大師や竜」等を介して今に伝えてくれるものであろう。

語り継がれてきた昔話の地が河川整備等によって大きくその状況を変えた場合もあったが、例えば、「主(ぬし)伝説」や「椀貸し伝説」が語られる滝の岩が阿弥陀さんに似ているので、集落の若者が「阿弥陀の滝」と新たに名付けているように、新たな伝説も生まれつつあるようにも感じた。

この冊子は、「水にまつわる昔話」を中心に整理した。この冊子によって、川と水への先人の関わり方の一端でも皆様に伝わることを、また、今後も川や水にまつわる昔話が次世代の子供たちに伝わることを願っています。

大同大学名誉教授
久保田　稔

KISSO 創刊一〇〇号 記念特別号

水にまつわる民話集

平成二九年四月発行

［編集］ 木曽三川歴史文化資料編集検討会
（桑名市、木曽岬町、海津市、愛西市、弥富市ほか）

［発行］ 国土交通省中部地方整備局
木曽川下流河川事務所調査課
〒511-0002
三重県桑名市大字福島465
TEL.（0594）24-5715

国土交通省中部地方整備局
木曽川下流河川事務所